

東京外国語大学 2023（令和 5）年度

修士論文

ラバーヌス・マウルス『聖十字架礼讃』再考
—カロリング・ルネサンス第二世代論から見た作品制作の意義—

Reconstructing Hrabanus Maurus's "*De Laudibus Sanctae Crucis*"
Significance of the production of the work from the perspective of the second generation
theory of the Carolingian Renaissance.

大学院総合国際学研究院
総合国際学研究科（博士前期課程）
世界言語社会専攻 国際社会コース

田邊 涼
(学籍番号：5122030)

目次

序論	1
(1) カール大帝治世におけるフランク王国の文教政策とラバーヌス	
(2) ラバーヌス・マウルス研究史	
(3) 『聖十字架礼讃』とその研究史	
(4) 本邦での研究状況	
(5) 本稿の課題	
(6) 本論文の構成	
第1章 ラバーヌス・マウルスー「ゲルマニアの教師」	11
第1節 修道院長就任までの道のり：780年～822年	
(1) 出生年・出身地域・家門について	
(2) フルダ修道院への奉献	
(3) アルクインのもとでの教育	
(4) 執筆活動の本格化	
第2節 フルダ修道院成立の経緯とそのネットワーク	
(1) フルダ修道院の成立	
(2) カロリング期におけるフルダ修道院のネットワーク	
第3節 修道院長退任まで：823年～842年	
第4節 ペテルスベルクでの隠居とマインツ大司教就任、そして死：842年～856年	
表：ラバーヌス・マウルスの生涯	
第2章 『聖十字架礼讃』分析（1）—作品の構成	31
第1節 現存する写本	
第2節 図像・テキスト分析	
第3節 形象詩の系譜におけるラバーヌス	
1. プブリウス・オプタティアヌス・ポルフィリウス	
2. ウェナンティウス・フォルトゥナートゥス	
3. ボニファティウス	
4. アルクイン、ヨセフス・スコトゥス	
第3章 『聖十字架礼讃』の分析（2）—聖十字架崇敬の展開	73
第1節 ビザンツとの聖画像論争—『カールの書』とパリ教会会議の間で	
第2節 カロリング朝における十字架崇敬	
(1) 聖十字架崇敬の起源と聖十字架片の広まり	

(2) 聖十字架に関する典礼・祝祭日	
(3) カール大帝期の聖十字架崇敬	
(4) ルイ敬虔帝下での聖十字架崇敬	
第4章 カロリング・ルネサンス第二世代とその仕事	91
第1節 カロリング・ルネサンス第二世代の各員とその機能	
第2節 カロリング・ルネサンス第二世代の共通項とその仕事	
付表：カロリング・ルネサンス第二世代・第一世代一覧	
結論	109
付録（系図・写本一覧・写本系統図・地図）	113
図版（図1～80）	121
参考文献目録	155

序論

見よ、救世主の像が、その四肢の位置によって吾々に聖別するのは、もっとも健全で、香しく、愛情の籠った聖十字架のかたちである。その名を信じる者たちとその命令に従う吾らが、かの御方の受難によって永遠の生の希望を手にするようにと。吾らが十字架をじっと見つめるときは何時でも、吾らのために十字架上で受難された御方を思い出すよう、吾らを闇の権力から救い、吾らが永遠の生の相続人になれるよう、死を飲み込まれた御方、「天に昇られて御使いも権力も勢力も自身に服従させた御方」が。そして吾らが良く考えるよう、父祖から伝わる空しい生活から、朽ちてしまう銀や金ではなく、汚れなき羊のごとき高貴なる血によって贖われることを、吾らが愛においてかの御方の眼に汚れなき存在であるよう、これらにより吾らが神の性質を分かち合う仲間となり、この地上にある者の強い欲望の誘惑から逃れるよう。

Ecce imago Salvatoris membrorum suorum positione consecrat nobis saluberrimam, dulcissimam et amantissimam sanctae crucis formam, ut in eius nomine credentes et eius mandatis oboedientes, per eius passionem spem uitae aeternae habeamus; ut quotiescumque crucem aspiciamus, ipsius recordemur, qui pro nobis in ea passus est, ut eriperet nos de potestate tenebrarum, deglutiens quidem mortem, ut uitae aeternae heredes efficeremur, profectus in caelum subiectis sibi angelis et potestatibus et uirtutibus; utque recogitemus, quod non corruptibilis argento argentum vel auro aurum redempti sumus de vana nostra conversatione paternae traditionis, sed pretioso sanguine quasi agni incontaminati et immaculati Christi, ut simus sancti immaculati in conspectu eius, in caritate, ut per haec efficiamur divinae consortes naturae, fugientes eius quae in mundo est concupiscentiae corruptionem.¹

（ラバーヌス・マウルス『聖十字架礼讃 *De laudibus sanctae crucis*』）

フルダ修道院の修道士ラバーヌス・マウルスは、810年頃、キリストを讃えるため、聖十字架を題材とした個性豊かな詩を、彼自身の第一作目として執筆した。28点の形象詩とその解説から成る第1巻と、第1巻を散文体でより詳細に説明する第2巻の2巻構成である。形象詩とは、文字で特定の形を描くか、あるいは特定の形の中に有意の文を書き込むという、高度に技巧的な詩のことである。

ラバーヌス・マウルスは、カロリング朝フランク王国に生き、修道院長や大司教にまで上りつめたこの時代を代表する教会知識人である。幼少期に出生地近郊に所在し、8世紀前半には王立修道院となったフルダ修道院に預けられたのち、トゥールのサン・マルタン修道院にてカール大帝の宮廷顧問アルクインの薫陶を受けた。その後、出身修道院であるフルダ修道院の院長、マインツ大司教を務め、王国の政治、とくに文化政策と教育の拡充に大きな影響を及ぼした。ラバーヌスのこうした経歴と、処女作『聖十字架礼讃』が書かれた背景を理解するには、当時のフランク王国が置かれた政治情勢やカール大帝が推し進めた包括的な文化政策、いわゆるカロリング・ルネサンスについて知らなければならない。

（1）カール大帝治世におけるフランク王国の文教政策とラバーヌス

789年、カール大帝は国としての方針を示す文書『一般訓令』（*Admonitio generalis*）を発した。国王即位後、対ランゴバルド戦争（773-774年）や対ザクセン戦争（772-785年頃）に掛かり切りであったカール大帝が、平和が実現されたこの時期に本腰を入れて内政に取り組むという姿勢の転換を象徴する文書である。この文書の72条には、カール大帝が国内の学問的水準を引き上げるために司教座や修道院

¹ Perrin, Michel Jean-Louis, Rabani Mauri in honorem Sanctae Crucis. Turnhout 1997, p.29.; Ernst, Ulrich, Visuelle Poesie: Historische Dokumentation theoretischer Zeugnisse, Bd. 1: Von der Antike bis zum Barock. Berlin/Boston 2012, pp.158-159.

に要求した内容が記されている。すなわち、学校の設立と統一的なカリキュラムの導入、正しい写本の制作、またそれを担当できる人材の用意である。以下にこの箇所を引用する。

聖職者は、自分の身の回りに非自由身分の子どもたちばかりではなく、自由身分の子どもたちを集めるように努めるべきである。子どもたちに、読み書きを学ばせるための学校を開かなければならない。すべての修道院および司教座聖堂において、詩編、文字、歌唱、歴算法、文法を教えること。また典礼書を正しく校訂すること。というのは、神に対してふさわしく祈ろうと思う人がいても、書物が不完全で誤りがあるために、それが出来ないということが生じるからである。読むにつけても、書くにつけても、貴下たちの生徒が誤った解釈に陥ることがあってはならない。もし福音書、詩編集、ミサ典書の写本が必要となった場合には、正確な写本を作ることでできる熟達した者がこれにあたるべきである。

Sacerdotibus...non solum servilis conditionis infantes, sed etiam ingenuorum filios adgrement sibi que scient. Et ut scholae legentium puerorum fiant. Psalmos, notas, cantus, computum, grammaticam per singula monasteria vel episcopia et libros catholicos bene emendate; quia saepe, dum bene aliqui Deum rogare cupiunt, sed per inemendatos libros male rogant. Et pueros vestros non sinite eos vel legendo vel scribendo corrumpere; et si opus est euangelium, psalterium et missale scribere, perfectae aetatis homines scribant cum omni diligentia.

【『一般訓令』（*Admonitio generalis*）、第 72 条²】

この頃宮廷では、元ヨーク司教アルクインを筆頭に、カール大帝が各地から招聘してきた優れた知性を持つ外国人達が活躍していた。彼らの下、自由七科に関する古代の著作の写本制作や、正しい聖書註解書・教義に関する著作の作成、宮廷学校におけるフランク王国の各地から集められた学問の才ある若者たちへの自由七科や筆記術の教授が推し進められ³、カール大帝下の教育システム確立が進められた。いわゆる「カロリング・ルネサンス」である。宮廷学校は既にカール・マルテルやカールの父ピピン³世といったメロヴィング王の時代から教育的機能を担っていたが、カール大帝とその宮廷顧問の下で教授科目が統一され、教授の順序も体系化されたのであった⁴。宮廷学校には才能を見出された貴族家門の子息や宮廷で働く役人の息子、幼少期から修道院で教育を受けてきた修道士が集った。カール・マルテルの庇護下でゲルマニアにおけるキリスト教伝道活動を担ったボニファティウスが創建した、フルダ修道院出身の修道士も数名派遣されていた。

カール大帝下のカロリング・ルネサンスでは、フルダ修道院のように国王宮廷と密接な関係を持つ王立修道院が重要な役割を果たした。例えばフルダにはカール大帝から修道院長バウグルフ期（在位 779-802 年）に文字や言葉の教育に関する回状『文字の学習について』（*De litteris colendis*）が送付された。この書簡には以下の内容が記されている。過去数年間のうちにカール大帝は修道士から何通かの書簡を受け取ったが、彼らが勉強を怠っていたがために正しい考えと無礼な表現の両方が見られた。それをきっかけに、カールは聖典を理解するための知恵が、本来あるべき水準よりも劣っているのではないかと心配し始めたという⁵。書簡の最後では、この書簡の写しを同僚の聖職者と他の修道院に送付することが

² Hubert Mordek, Klaus Zechiel-Eckes, Michael Glatthaar(eds.), *Die Admonitio generalis Karls des Großen* (MGH Fontes iuris Germanici antiqui in usum scholarum separatim editi. vol. 16). Hahn, Hannover 2012; MGH, Capitula Bd.1, p.59. 五十嵐修『王国・教会・帝国—カール大帝期の王権と国家』知泉書館、2010年、158~159頁。

³ 佐藤彰一『贖罪のヨーロッパ—中止修道院の祈りと書物』中公新書、2016年、177頁。

⁴ 佐藤彰一『贖罪のヨーロッパ—中止修道院の祈りと書物』中公新書、2016年、175頁。

⁵ “Charlemagne: Letter to Baugaulf of Fulda, c. 780-800”. Fordham University: Medieval Sourcebook. Retrieved 28. Dec. 2023. の英訳より執筆者訳。以下に英文と、ラテン語原文を載せる。“For when in the years just passed letters were often written to

指示されている。このことから、フルダ修道院には既に十分な書写能力を備えた修道士がおり、同修道院に周辺修道院を統率する役割が期待されていたことがわかる。正しい読み書き能力をもつ若者の育成、正しい聖書関連写本の制作が急務であった時代に、既にそれを備えていた王立修道院は、モデル修道院として周囲に範を示す役割を任された。

カール大帝の宮廷学校に集まった外国人達は、晩年になると祖国に帰還するなどして宮廷近辺から立ち去った。しかし、アルクインはトゥールのサン・マルタン修道院長として王国内に留まり、同地の写本処の整備や蔵書の拡充、そして引き続き次の世代を担う若者たちとの学問研究に勤しんだ。宮廷学校やトゥールのアルクインの許で学んだ若者たちは司教、大司教、修道院長、伯といった帝国の重要なポストに就き、カール大帝の息子ルートヴィヒ敬虔帝の治世を支えることとなる。本論考の研究対象である『聖十字架礼讃』の著者ラバーヌス・マウルスは、そのうちの一人である。

ラバーヌスは 780 年頃にマインガウ地域の貴族家門に生まれ、8 歳頃にフルダ修道院に預けられた。そして、宮廷やトゥールのアルクインの許で教育を受け、822 年にはフルダ修道院長、842 年にはマインツ大司教とそのキャリアを積み上げていった。ラバーヌスは 810 年以降、その死に至るまで数多くの著作や祭壇碑文・墓碑銘を残し、特に旧約聖書・新約聖書の全文書に対する註解書を著した。その多くは、ラバーヌスの知人—そこには国王や王家に属する者も含まれていた⁶—からの依頼で制作され、執筆を依頼した人々がフルダ修道院がある東フランク地域だけではなく、西フランク地域やイタリアにも分布していたことから⁷、ラバーヌスのフランク王国全体に占める役割、国王との近さ、そして彼が第一級の知識人であったことが理解される。

そのラバーヌスが、サン・マルタン修道院長アルクインの許から帰還したのち、第一作目として執筆した作品が『聖十字架礼讃』である。28 点にも及ぶ形象詩は見た目に鮮やかなだけでなく、各形象詩は知識の高度な集成となっており、形象詩の図案と内容は密接に結びついている。ラバーヌス以前にも形象詩というジャンルは存在したが、『聖十字架礼讃』ほどに完成度の高い作品は他に類を見ない。本論文では、ラバーヌスが著した『聖十字架礼讃』の内容と形式を詳しく検討し、その制作意図と意義を、当時のフランク王国の文化政策の枠組みの中で再検討することを課題とする。

再検討にあたり、まず、ラバーヌス・マウルスと『聖十字架礼讃』をめぐるこれまでの研究史を見ておきたい。

us from several monasteries in -which it was stated that the brethren who dwelt there offered up in our behalf sacred and pious prayers, we have recognized in most of these letters both correct thoughts and uncouth expressions; because what pious devotion dictated faithfully to the mind, the tongue, uneducated on account of the neglect of study, was not able to express in the letter without error. Whence it happened that we began to fear lest perchance, as the skill in writing was less, so also the wisdom for understanding the Holy Scriptures might be much less than it rightly ought to be.”

(以下ラテン語原文) “Nam cum nobis in his annis a nonnullis monasteriis saepius scripta diriguntur, in quibus, quod pro nobis fratres ibidem commorantes in sacris et et piis orationibus decertarent, significaretur, cognovimus in plerisque praefatis conscriptionibus eorum et sensus rectos et sermones incultos; qui aquod piadevotio interius fideliter dictabat, hoc exterius propter negligentiam discendi lingua inerudita exprimere sine reprehensione non valebat. Unde factum est, ut timere inciperemus, ne forte, sicut minor erat in scribendo prudential, ita quoque et multo minor esset quam recte esse debuisset in sanctorum scripturam ad intelligendum sapiential.” Karoli Epistola de litteris colendis, 780-800, in: MGH Leges, Capitularia Bd. 1, ed. Alfred Boretius, p.79.

⁶ ルートヴィヒ敬虔帝（書簡 15,16,18）、ロタール 1 世（書簡 28, 38, 49, 50）、ルートヴィヒドイツ人王（書簡 33, 34, 35, 37）、ロタール 2 世（書簡 52,57）の間での書簡あるいは著作の献呈文が残っている。Hrabani Mauri Epistolae, in: MGH Epistolae, Bd.5, pp.379-533.

⁷ リジュー司教フレクルフやフリウリ伯エベルハルト、ヴェローナとプレスキアの司教を歴任したノティンクス、ユトレヒト司教フリードリヒなども書簡のやり取りがあった。Hrabani Mauri Epistolae, Nr. 7-12, 13, 22,42, in: MGH Epistolae, Bd.5, pp.379-533.

(2) ラバーヌス・マウルス研究史

ラバーヌス・マウルスとその著作群の研究は、今日までその写本が現存するヨーロッパにおいて主に発展してきた。ここではその研究史を、ヨーロッパにおけるラバーヌスの個人誌や著作の全般的な研究、『聖十字架礼讃』（特にヴァティカン本）研究、本邦におけるラバーヌス・マウルスと『聖十字架礼讃』研究、の3つに分けて検討していく。

1900年代前半では、ラバーヌスの著作は初期キリスト教神学者や教父著作に大きく依存しており、独自性に欠けるとして厳しく評価された。例えば、著名なラテン文献学者 E・R・クルツィウスはラバーヌスのことを「退屈な文献編集者」と呼び⁸、M・マニティウスも彼の作品を「盗作 Plagiat」と評価している⁹。一方で、聖書講読に不可欠の知識を、先人の教父や神学者の著作からの引用を通じて過不足なくまとめあげたラバーヌスの編集力に注目し、これを高く評価する研究者たちもあった。例えば、P・ヴァプネウスキは、その著作はあらゆる分野の知識を網羅し、影響力において非常に卓越しており、「ゲルマニアの教師」と呼ばれるにふさわしい人物である¹⁰と評価し、M・L・W・ライストナーはラバーヌスの著作について、注目に値すべきもので、「ゲルマニアの教師」という名誉ある称号は正当だと述べた¹¹。ラバーヌスの評価が分かれるなか、彼をより実状に即した形で評価しようと試みたのが P・レーマン¹²と T・シーファー¹³である。両者とも、「ラバーヌスが教師としてもフルダの修道院長としても、当時のドイツにおける教育の大家であり、初期中世のドイツは彼に多くを負っている。そして数多くの教え子と豊富な著作を通じて、彼以降の時代にも広く影響を与えた」との見解で一致している¹⁴。そのようななか、R・コッティエは1975年の論考¹⁵でラバーヌスの著作が含まれる写本の制作地、制作点数、制作年代を検討したうえで、「確かにラバーヌスは生前もその後も影響力のある教師であった。とりわけ聖書註釈や教会での生活における問題に関しては権威として認められていた。しかし、彼の存在意義は、アウグスティヌスやヒエロニムス、イシドルスやベータのような古代の権威を上回ることはなかった。このことを、蔵書目録や写本の伝播状況が明らかにしている。ラバーヌスを無条件に『ゲルマニアの教師』と呼ぶことは、これまで検討されてきた史料以上に、彼の作品の伝播状況を踏まえば適切ではないことが明らかである」と中立的な評価を下した。

1980年にはラバーヌスの生誕1200年を祝した展覧会が、マインツで開催された。この機会にコッティエと H・ツインマーマンによって刊行された記念論集¹⁶では、ラバーヌスの出自に関する問題や教義論争における彼の思想、彼が修道院長を務めたフルダ修道院の写字室の状況等、ラバーヌスに関する事

⁸ Curtius, Ernst Robert, *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*. Tübingen und Basel 1948, p. 95.

⁹ Manitius, Max, *Geschichte der lateinischen Literatur des Mittelalters. Erster Band: Von Justinian bis zur Mitte des zehnten Jahrhunderts* (Handbuch der Altertumswissenschaft IX. Abt., II.1). München 1911, p. 296.

¹⁰ Wapnewski, Peter, *Deutsche Literatur des Mittelalters. Ein Abriß von den Anfängen bis zum Ende der Blütezeit*. Göttingen 1990, p.12.

¹¹ Laistner, Max Ludwig Wolfram, *Thought and letters in Western Europe A. D. 500 to 900*. London 1957, p.308.

¹² Lehmann, Paul, *Erforschung des Mittelalters, Bd.3*. Stuttgart 1960, p.212.

¹³ Schieffer, Theodor, Hrabanus Maurus. Zum 1100. Todestag am 4. Februar 1956, in: *Archiv für mittelrheinische Kirchengeschichte* Bd. 8, Mainz 1956, p.11, 16,19.

¹⁴ Kottje, Raymund, Hrabanus Maurus - "Praeceptor Germaniae"?, in: *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* Bd. 31, 1975, pp.534-545.

¹⁵ Kottje, R., Die Handschriftliche Überlieferung der Bibelkommentare des Hrabanus Maurus, in: *Raban Maur et son temps. Collection Haut Moyen Âge*, t.9. Turnhout 2010, pp.259-274.

¹⁶ Kottje, Raymund und Zimmerman, Harald, *Hrabanus Maurus. Lehrer, Abt und Bischof*. Wiesbaden 1982.

柄が包括的に研究された。更に 2006 年には、ラバーヌスの死後 1150 年を記念する展覧会が再びマインツで開催され、それを機に記念論集と S・ハーレンダーによる一部のラバーヌス関連文書のドイツ語訳が出版された¹⁷。この記念論集では、フルダ修道院の蔵書形成におけるラバーヌスの役割、ラバーヌスにとっての詩作行為の意味、ラバーヌスにおける俗語とラテン語の使い分け、ラバーヌスの著作を通じた当時の教会秩序や教会での暮らしの復元、ラバーヌスの予定説論争や児童奉獻問題における見解など、司牧者として、修道院長として、学者としてのラバーヌスの多様な側面が論じられた。2010 年には、フランスのルールとアミアンで 2006 年に開催されたラバーヌス・マウルスに関するコロキウム成果である論文集¹⁸が刊行され、2012 年にはコッティエが、ラバーヌス著作が含まれる現存する写本の目録を MGH から刊行¹⁹、U・エルンストが『聖十字架礼讃』の一部の形象詩の本文と解説文 (*Declaratio*) のドイツ語訳を公刊する²⁰など、2000 年代以降もラバーヌス研究は着実な進展を見せている。近年では、ラバーヌスが執筆した膨大な聖書註解書に注目が集まり、例えば 2021 年には C・ジュルスレフがラバーヌスの『マカバイ書註解』におけるアレクサンダー大王の表象について論じている²¹。

(3) 『聖十字架礼讃』とその研究史

続いて、本稿で主に論じる作品『聖十字架礼讃』の研究史を見ていく²²。

『聖十字架礼讃』の最初の包括的研究が発表されたのは 1973 年、H・G・ミュラーの博士号請求論文によってであった²³。彼は論文の第一部において、現存する『聖十字架礼讃』写本のテキストの比較を通じて系統関係を整理し、その結果を系統図 (*Stemma*) にまとめた。彼によればヴァティカン版『聖十字架礼讃』(ローマ、ヴァティカン図書館、Reg.lat.124) はフルダ修道院で制作・保管された版 (*Hausexemplar*) であり、原本 (*Urhandschrift*) はまた別にあると想定した。またミュラーは『聖十字架礼讃』テキストに加筆修正が行われたことも明らかにし、合計で 4 つのテキスト発展段階があるとした。更に第 2 部にて、ミュラーは思想史上の『聖十字架礼讃』の位置について議論する。そのなかで彼は同著をビザンツとの聖画像論争の文脈に照らして検討し、ラバーヌスが形象詩の図案に図像を慎重に取り入れたと主張した。彼はその証拠を描かれた図像の平面性に求め、ラバーヌスは図像が持つリアリティを排除し、図像の明証的な機能のみを利用しようとして試みたのだと述べた。ただし彼は個々の詩の図像・内容分析には立ち入っていない。それでも、ミュラーの研究は『聖十字架礼讃』の最初の包括的研究を発表した点で重要であり、『聖十字架礼讃』のテキストだけでなく、それを取り巻く環境まで視野に入れた先駆的な研究であると言える。同じ 1973 年、K・ホルターがウィーン本『聖十字架礼讃』の

¹⁷ Haaländer, Stephanie, *Rabanus Maurus zum Kennenlernen: ein Lesebuch mit einer Einführung in sein Leben und Werk*. Mainz 2006.

¹⁸ Depreux, Philippe, Lebecq, S., Perrin, M., Syerwiniack, O., *Raban Maur et son Temps*. Turnhout 2011.

¹⁹ Kottje, R., *Verzeichnis der Handschriften mit Werken des Hrabanus Maurus*. Hannover 2012.

²⁰ Ernst, Ulrich, *Visuelle Poesie: Historische Dokumentation theoretischer Zeugnisse, Bd. 1: Von der Antike bis zum Barock*. Berlin/Boston 2012, pp.117-233.

²¹ Djurslev, Christian Thru, *Hrabanus Maurus Post-Patristic Renovation of 1 Maccabees 11–8*, in: *Open Theology*, Vol.7, 2021, pp.271-288.

²² 『聖十字架礼讃』研究の動向について、M・フェラーリが 1996 年の論考で詳細にまとめているため、2000 年代以前については同論考を参照する。Ferrari, Michele Camillo, *Hrabanica. Hrabanus De laudibus sanctae crucis im Spiegel der neueren Forschung*, in: *Kloster Fulda in der Welt der Karolinger und Ottonen*. Frankfurt a. M., 1996, pp.493-526.

²³ Müller, Hans Georg, *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis. Studien zur Überlieferung und Geistesgeschichte mit dem Faksimile Textabdruck aus Codex Reg. Lat. 124 der Vatikanischen Bibliothek*. Ratingen, 1973.

注釈付きのファクシミリを公刊した²⁴。彼もミュラーと同様、ヴァティカン本が9世紀のフルダ制作の写本の1つであると考えた。後に『聖十字架礼讃』のフランス語全訳を公刊するM・ペランはヴァティカン版『聖十字架礼讃』と現存する他の写本との間の字句の異同を精確に検討し、『聖十字架礼讃』には別に原本（*Urfassung*）が存在するが、現存する写本にそれと同定できるものはないと結論付けた²⁵。これらの研究は『聖十字架礼讃』制作初期の系統関係の更なる分析と新たな批判校訂版公刊の下地を作ったと言える。

H・シュピリングはミュラーやペランの研究に基づき、現存する『聖十字架礼讃』写本の献呈先の同定を試みた²⁶。彼女によれば、ヴァティカン本はマインツ大司教オトガルスに献呈された版であったという。この見解は、今日においても採用されている。1997年、ペランによってベルギーのブレポルス社のプロジェクト「キリスト教著作全集（*Corpus Christianorum*）」の第100巻として、ラバーヌスの『聖十字架礼讃』が公刊された²⁷。この版にはラテン語本文の他に、初めて現代語（フランス語）による全訳が掲載され、2000年代以降のラバーヌス研究の基礎を成すこととなった。90年代の研究で最後に指摘しておくべきは、エルンストによる古代から後期中世に至るまでの形象詩の展開を歴史的観点から辿った単著²⁸である。彼は同著において、ラバーヌスに1章分を割いて、『聖十字架礼讃』の全28詩について、「簡素な線的な十字架」「幾何学図形から構成される十字架」「文字から構成される十字架」「数字から構成される十字架」「図像で構成される十字架」の5つに分けて内容を分析し、ラバーヌスの形象詩における後期古代からの影響、アングロ・サクソンからの影響、教父著作に端を発する聖書註釈学的要素を指摘した²⁹。エルンストはラバーヌス自身による証言（書簡や祭壇碑文など）を用いながら、ラバーヌスの図像や十字架に対する見方、すなわち図像はテキストに従属し、十字架は供物として、また聖十字架片の存在の故に重要であるとの立場を明らかにした。最後に、エルンストは『聖十字架礼讃』に対する評価として、「世界の文学の中で、ラバーヌスの十字架讃歌のサイクルほど、文字と図像、文字と数字、色彩とテキスト内の配置がこれほどまでの構造形成機能を示し、また神学的な意味のボリュームを備えた詩は他に見当たらない」と述べ、クルツイウスが述べた「退屈な編集者」との評価を正面から退け、ラバーヌスの高い創造性を再評価した³⁰。

2000年代の研究では、①で述べた論文集や訳本の他にC・シャゼルとK・G・ボイカースの研究が重要である。シャゼルはカロリング朝の視覚芸術における磔刑図・十字架像を包括的に研究した2001年の単著³¹のなかで、『聖十字架礼讃』を取り上げた。彼女は『聖十字架礼讃』の第1詩、第4詩、第15詩、第23詩、第28詩の内容に言及した後、図像とテキストが十字架というモチーフの下で密接に結びつく『聖十字架礼讃』の形式が、人性と神性という2つの矛盾する要素を両立させる三位一体の第二

²⁴ Holter, Kurt, *Liber de laudibus sanctae crucis: Vollständige Faksimile-Ausgabe im Originalformat des Codex Vindobonensis 652 der Österreichischen Nationalbibliothek*. Graz, 1973.

²⁵ Perrin, M., *Le De laudibus sanctae crucis de Raban Maur et sa tradition manuscrite au IXe siècle*, in : *Revue d'histoire des textes* Bd. 19, 1989, pp. 191-251.

²⁶ Spilling, Herrad, *Opus Magnentii Hrabani Mauri in honorem sanctae crucis conditum. Hrabans Beziehung zu seinem Werk*. Frankfurt, a.M., 1992.

²⁷ Perrin, M., *Rabani Mauri in honorem Sanctae Crucis*. Turnhout 1997.

²⁸ Ernst, U. *Carmen Figuratum. Geschichte des Figurengedichts von den antiken Ursprüngen bis zum Ausgang des Mittelalters*. Köln 1991.

²⁹ Ernst, U. *Carmen Figuratum*, pp.323-332.

³⁰ Ernst, U. *Carmen Figuratum*, pp.330-332.

³¹ Chazelle, Celia Martin, *The Crucified God in the Carolingian Era. Theology and Art of Christ's Passion*. Cambridge, 2001.

位格たるキリストとパラレルになっているとの興味深い指摘を行なった³²。またミュラーのようにシャゼルも、『聖十字架礼讃』と作品制作期に巻き起こった聖画像論争やカロリング朝における聖十字架崇敬との関連性を検討し、『聖十字架礼讃』が一定程度国王宮廷の見解・態度と同じ方向性を持っていたことを示した。そして、ボイカースは、2019年にヴァティカン本『聖十字架礼讃』のファクシミリ版と、それに対する美術史の観点からの注釈書を出版した³³。彼はヴァティカン本を中心に据えながらも、現存する他の『聖十字架礼讃』写本との色使いの異同も指摘しながら、全28詩+献呈図の図像学的・内容的分析を行なった。エルンストも全28詩を分析したが、ボイカースは彼の研究成果と自身の美術史的分析を組み合わせている点で、エルンストのそれと差別化を図っている。全ての詩で形象詩の持つ多層性が存分に生かされていること、詩と詩が連続性を持った一つのサイクルとして構成されていることが、ボイカースの研究を通じて明らかにされた。近年では『聖十字架礼讃』は特に図像・テキスト関係学の観点から注目されていて、ドイツでは例えばM・シュルツが、十字架というモチーフを通じて図像とテキストが密接な関係を結ぶ様を描き出している³⁴。

(4) 本邦での研究状況

こうした欧米における多様な切り口からの研究の存在とは裏腹に、③本邦でのラバーヌス研究は特定の観点に限られている。岩村清太氏は、5世紀からカロリング期にわたる自由七科教育の変遷を辿る2007年の著書において、アルクインとラバーヌスの自由学芸観を、アルクイン『文法学』、ラバーヌス・マウルス『聖職者の教育について』の叙述内容の分析を通じて浮き彫りにした³⁵。岩村氏によれば、アルクインが先人の著作から継承してきた自由学芸の古典的、体系的学習をラバーヌスはさほど重視せず、実践的、実用的な要素の学習を強調しているという³⁶。また、西脇純氏は、グレゴリオ聖歌の研究の一環として、ラバーヌスの『聖職者の教育について』の分析を通じてその聖歌観を検討し³⁷、類似の文脈では、大須賀沙織氏がガリア聖歌研究の一環としてラバーヌスが作詞した讚美歌『来たれ、創造主なる聖霊よ』(*Veni creator spiritus*)に論及している³⁸。更に、長澤咲耶氏は、ラバーヌスが書いた2つの説教集に焦点を当て、異なる立場の人物に対し異なる典拠、構成、主題を意図的に選択して説教集を制作していた点を明らかにした³⁹。なお、ラバーヌスの著作の邦語訳については、上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成6 カロリング・ルネサンス』にてその一部が翻訳されている⁴⁰。

³² Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.113.

³³ Beuckers, Klaus Gereon, *Kreuzeslob. Frühmittelalterliche Bildgedichte von Hrabanus Maurus. Kunsthistorischer Kommentar zur Faksimile-Edition der Handschrift aus der Bibliotheca Apostolica Vaticana Reginensis latinus 124*. Stuttgart 2014.

³⁴ Schulz, Mathias, *Der codierte Christus Figuration als Bild Text Dynamik im De laudibus sanctae crucis des Hrabanus Maurus*, in: *Zeitschrift für Kunstgeschichte*, Bd.79, H. 1, München, 2016, pp. 10-43.

³⁵ 岩村清太著『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』知泉書館、2007年。

³⁶ 岩村『自由学芸と教育』、223頁。

³⁷ 西脇純「グレゴリオ聖歌研究(4)」『南山神学』35号、2012年、111-133頁。

³⁸ 大須賀沙織「ガリア聖歌—フランスで生まれた聖歌の源流を求めて」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第2分冊、2015年、21-37頁。

³⁹ 長澤咲耶「カロリング期の説教—ラバーヌス・マウルスの説教集の分析を通して」『クリオ』35・36号、2020-2021年、83-97頁。

⁴⁰ 上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成6 カロリング・ルネサンス』平凡社、1992年。

自由学芸観、聖歌、説教集という3つの分野からの研究は存在するものの、多くの場合、ラバーヌスはカロリング期に活躍した知識人の一人として言及されるに留まり⁴¹、ラバーヌスを中心に据えた研究は岩村氏と長澤氏の研究に限られる。また『聖十字架礼讃』についても本邦の西欧中世史研究ではほとんど取り上げられず、前掲の岩村や註に挙げた佐藤の論考のように、かろうじて作品名とその内容の簡潔な説明が記されているだけである。美術史の側からは、鼓みどり氏がカロリング期彩色写本における十字架形と菱形を扱う2007年の論考⁴²で、一例として『聖十字架礼讃』について簡単に説明した後、第4詩と第28詩に言及している。鼓氏は2006年のC・エック⁴³による論考を踏まえ、ラバーヌスの形象詩はインテキストが形成する十字架形を介して受難と贖罪、終末論、人類の救済を求める祈りへと読者の意識を高度な次元に方向づけると述べているが、あくまでカロリング期彩色写本の図式の一例としての扱いであった。以上のように、わが国ではラバーヌス自身についても『聖十字架礼讃』についても、その重要性が歴史学・美術史学の両領域から認められていながら、本格的な研究はいまだなされていないと言えよう。

(5) 本稿の課題

上で見た先行研究によって、ラバーヌスの個人誌、当時の神学論争における見解や立場、各著作の内容やその個別的意義については、十分な検討が蓄積されてきている。また、『聖十字架礼讃』についても、エルンストやボイカースらの研究によって、その基本的な内容分析は概ね果たされたと言えよう。そのうえで、次のような課題が浮かび上がってくる。それは、カロリング・ルネサンスを数世代にわたる事業の連続として捉える「世代論」の立場からの検討である。ラバーヌスは一時はカール大帝宮廷で、またその後はトゥールのサン・マルタン修道院長となったカール大帝宮廷顧問アルクインの許で学んでいる。師であるアルクインと弟子であるラバーヌスとの間には共有する観点がある一方で、特定の問題に関する見解には違いがあったことが指摘されている⁴⁴。こうした個人的な知的継受をめぐる問題だけでなく、カロリング・ルネサンスを世代論（群像）として再考することで、第一世代が築いた文化資産（教育制度、法の整備、蔵書の拡充など）が全体としてどのようなものであり、その教育を通してどのような人材が育成されえたのか、その効果を検証することが可能になる。また、ラバーヌスを含む第二世代についても、第一世代から何を継承し、彼らとしてカロリング・ルネサンスに何を付け加ええたのか、その全体像を明らかにすることができる。ラバーヌスという稀有な知識人とその稀有な著作である『聖十字架礼讃』を、こうした全体の構造とその変動の中に位置づけることで、新たな解釈の可能性が開けてくるものと期待できるのである。

⁴¹ 例えば、以下の文献ではラバーヌスの名前が挙げられるが、簡単な紹介に留まっている。佐藤彰一『贖罪のヨーロッパ』中公新書、2016年／オイゲン・エーヴィヒ著『カロリング帝国とキリスト教会』瀬原義生訳、文理閣、2017年。

⁴² 鼓みどり「カロリング朝写本彩色における観念的図式について」『美学美術史研究論集』第22号、2007年、1-13頁。

⁴³ クリスチャン・エック「見る、それとも読む？—中世写本彩色における画中テキスト」『宗教美術におけるイメージとテキスト』（21世紀COEプログラム「総合テキスト科学の構築」第5回国際研究集会報告書）、名古屋大学大学院文学研究科、2005年、87-104頁。

⁴⁴ 例えば、以下の文献である。Dreyer, Mechthild, Alkuin und Hrabanus Maurus. Wozu Wissen?, in: *Hrabanus Maurus: Gelehrter, Abt von Fulda und Erzbischof von Mainz*. Mainz, 2006, pp.35-49; Newman, Barbara, God and the Goddesses: Vision, Poetry, and Belief in the Middle Ages, in: *Poetry and Philosophy in the Middle Ages: A Festschrift for Peter Dronke*. Leiden, 2001, pp.173-196.

（6）本論文の構成

以上の課題を踏まえ、本稿ではラバーヌス・マウルスをカロリング・ルネサンス第二世代の知識人集団に置き直し、『聖十字架礼讃』を第一世代の著作群との比較、第二世代の著作群のなかに位置づけることによって、ラバーヌスの編纂・執筆した形象詩『聖十字架礼賛』の制作意図と意義を再考したい。そのためには、ラバーヌス個人の人生段階、立場の変化、人的ネットワーク、学問交流を明らかにし、『聖十字架礼讃』の内容分析と形象詩の枠組み、形象詩の伝統や他の作品群との関係について検討し、さらには聖画像論争をはじめとする時代状況や思潮、カロリング朝における聖十字架崇敬の実態を解明したうえで、これらをカロリング・ルネサンス世代論の観点と結びつける必要がある。

まず第1章では、ラバーヌス・マウルスの生涯について、史料と先行研究の成果をもとに検討していく。ラバーヌスが育った環境、受けた教育、交流し得た人々や手にした書籍、社会的地位の上昇などに着目しつつ、カール大帝期カロリング・ルネサンスで整備されていった教育システムで育成された人物が、どのような形で次代の君主ルートヴィヒ敬虔帝の統治に関わったのか、という点を明らかにする。この分析は本論文第4章と接続される。また、ラバーヌスが預けられたフルダ修道院の創設の経緯とその後の展開についても、第1章で論及する。

第2章では、『聖十字架礼讃』の内容分析を詳細に行ったうえで、形象詩の歴史から『聖十字架礼讃』が何を継承したか、またなぜラバーヌスが同著を形象詩の形で制作したのかという2点を明らかにする。

つづく第3章では、聖画像論争や十字架崇敬の拡大という文脈のなかで、なぜ聖十字架を主題に選択したのかを分析し、第2章の議論と合わせて『聖十字架礼讃』の制作動機・意図、その機能と目的について考察を行なう。

第4章では、第1章でのラバーヌスの社会的地位の上昇とルートヴィヒ敬虔帝の統治体制への組み込みの過程をめぐる考察を踏まえ、ラバーヌス以外のカロリング・ルネサンス第二世代に属すると考えられる14人について、その出自や著作、担った役割を検討する。

最後に、第1章から第4章の分析結果を整理したうえでカロリング・ルネサンス第二世代におけるラバーヌス・マウルスの役割と『聖十字架礼讃』の意義を検討し、結論とする。

第1章 ラバーヌス・マウルスー「ゲルマニアの教師」

本章では、ラバーヌス・マウルスの生涯を段階に分けて通観する¹。ラバーヌス・マウルスはカロリング・ルネサンス第二世代の一員であり、彼が受けた教育、アクセスし得た書物や人々を見ていくことで、第一世代の許で育った第二世代の社会的身分上昇のパターンの一つを知ることができる。本章での議論は、ラバーヌスを同世代の知識人集団の中に位置づける第4章に繋がる。

彼の生涯を復元するために用いられる史料としては、以下の3点が挙げられる。まず、彼のフルダ修道院での活動に関しては、フルダの修道士ルドルフの手による『フルダ年代記』(*Annales Fuldenses*) や、フルダへの様々な聖遺物の奉遷についての報告である『フルダ教会に奉遷された聖人たちの奇蹟』(*Miracula sanctorum in Fuldenses ecclesias translatorum*) がある。また、より後代の1515年に、マインツ大司教区内のスポンハイム修道院長とヴェルツブルクの聖ヤコブ修道院長を歴任したヨハネネス・トリテミウスにより執筆された『ラバーヌス・マウルス伝』(*Vita Beati Rabani Mauri*) も、後代の著作であるが、これまでの研究でよく参照されている史料の一つである²。その他、ラバーヌスの交友関係については、彼がやり取りした書簡が MGH *Epsistolae* として公刊されており、彼を取り巻く人的ネットワークを知る上で重要である。ラバーヌス・マウルスの親族に関してはフルダ修道院宛の証書の文面やその証人リスト³がある。これについては、1982年にシュタープ⁴が詳細に論じている。

これらの史料に基づき、以下ではラバーヌスの聖職者としての自己形成過程を丹念に考察していきたい。その際、彼の立場上の変化が執筆活動にも変化をもたらすと考えられるため、彼の生涯を①修道院長就任まで、②修道院長退任まで、③司教就任・死まで、の3つの段階に分けて検討する。また、ラバーヌスが預けられたフルダ修道院の成立経緯についても、本章の1節を割いて概観しておく。

第1節 修道院長就任までの道のり：780年～822年

(1) 出生年・出身地域・家門について

ラバーヌスの生年について、これまで複数の研究者がそれぞれの見解を提示してきた⁵。先に挙げたトリテミウスによる『聖ラバーヌス・マウルス伝』第一巻冒頭の記述では、彼が788年2月2日に生ま

¹ 本稿では、以下に挙げる史料の記述も参照するが、主にはこれらの史料に基づきラバーヌスの生涯を説明した U・エルンストの論考や、2006年に開催されたラバーヌス・マウルスの展覧会カタログに掲載された生涯年表に依拠して、彼の生涯を辿る。Ernst, U., *Die Kreuzgedichte des Hrabanus Maurus als multimediales Kunstwerk. Textualität-Ikonizität-Numeralität*, in: Schmitz, U. (publ.), *Wissen und Neue Medien. Bilder und Zeichen von 800 bis 2000*. Berlin 2003, pp.13-37; Wilhelmy, W.(ed.), Kotzur, H.J.(publ.), *Hrabanus Maurus. Auf den Spuren eines Karolingischen Gelehrten. Katalog zur Ausstellung im Bischöflichen Dom- und Diözesanmuseum Mainz 2006*. Mainz 2006, p.13.

² この史料が頻繁に参照されるのは、1841年に刊行された F・クンストマンによるラバーヌスの生涯に関する唯一の詳細な研究が、トリテミウスの伝記に依拠しているためである。しかし、既に J・マビヨンがトリテミウスによる伝記の内容の信憑性の低さを証明しており、F・シュタープも同史料について「真実と詩的創作の混合物」であるとしているため、根拠として用いるには注意が必要である。本稿では、研究史の流れを確認する上で同史料に言及する。

³ Historische Kommission für Hessen, *Urkundenbuch des Klosters Fulda : 1, Die Zeit der Äbte Sturm und Baugulf ; 2, Die Zeit des Abtes Baugulf*, bearb. von Edmund E. Stengel (Veröffentlichungen der Historischen Kommission für Hessen und Waldeck; 10,1,2), Marburg 1956.

⁴ Staab, F., *Wann wurde Hrabanus Maurus Mönch in Fulda? - Beobachtungen zur Anteilnahme seiner Familie an den Anfängen seiner Laufbahn*, in: Kottje, R. und Zimmerman, H.(publ.), *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*. Wiesbaden 1982, pp.76-101.

⁵ 彼の出生年に関する研究動向については、1980年のラバーヌス・マウルス生誕1200年記念カタログに寄せられた F・シュタープによる論考が詳しく、本節でも参照する。Staab, F., *Rabanus Maurus und Mainz*, p.9.

れたと書かれている (①788年説)⁶。しかし、フランスのベネディクト会修道士かつ『古文書学』著者であるマビオンはこの記述が虚偽であるとし、ラバーヌスの助祭叙階の年(801年)から当時教会法で定められていた助祭の叙階年齢(25歳)を引いた776年が誕生年であるとする見解を示した(②776年説)⁷。更に1828年、ダールは『聖十字架礼讃』の最初のバージョンが810年に完成され、その時ラバーヌスが30歳であったと同著作の序文にて本人が記述していること⁸から、ラバーヌスは780年に生まれたと主張した(③780年説)⁹。しかし、クンストマンは1841年の論考¹⁰で、デュムムラーは1884年の論考¹¹でマビオンの776年説を支持した。なお、デュムムラーは1898年に784年直前をラバーヌスの生年とする新たな見解を示している(④784年直前説)¹²。ダールの780年説はクンストマンに反論された後長らく言及されることが無かった。しかし、1925年にレーマンがこの説を補強する重要な根拠を発見する。彼は現在オーストリア国立図書館に所蔵されている『フルダ年代記』の写本(*Annales Fuldenses antiquissimi*, Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod.460)の記述から、ラバーヌスの出生年が780年であることを突き止めた¹³。シャラー(1971年)もこの説を、オルレアンのテオドゥルフスの詩の分析を通じて支持した¹⁴が、1982年フライゼはこの説を改めて検証し、783年頃とする見解を発表した(⑤783年説)¹⁵。このように、彼の出生年に関しては未だに複数の見解が提示されているが、研究者の多くは生年を780年とするレーマン説を採用している¹⁶。近年の研究の多くが780年説を採って

⁶ Migne, PL 107 Sp.71: “Rabanus, cognomento Maurus, … nascitur, quarto Nonas Februarii, anno Dominicae nativitatis septingentesimo octogesimo octavo, indictione Romanorum undecima…”.

⁷ Migne, PL 107 Sp.42.

⁸ 『聖十字架礼讃』冒頭、聖マルティヌスに対する献呈詩において、ラバーヌスは以下のように書いている:「しかし、(ラバーヌスが)書くことを試みながら6つの5年間を満たしたとき(=30年が経過したとき)、キリストのその栄誉について(キリストを礼讃すべく)、この本を一生懸命に書き上げた。」(Ast ubi sex lustra implevit, iam scribere tentans, Ad Christi laudem hunc edidit arte librum)。

⁹ Dahl, K., *Rabanus Maurus. Erst Abt zu Fulda, dann Erzbischof zu Mainz*. Darmstadt 1828, p. 3. なお、この論考では『聖十字架礼讃』の献呈時期を810年とするものの根拠は挙げられていない。

¹⁰ Kunstmann, F., *Rabanus Magnentius Maurus. Eine Historische Monographie*. Mainz 1841. クンストマンはこの論考で、ダールの780年説はマビオンが挙げた根拠と矛盾すること、また『聖十字架礼讃』の完成時期が明確には判明していないことから、ダールの説に反論している。

¹¹ Dümmler, E., *Prooemium zu Rabani Mauri Carmina*. MGH, Poetae II. Berlin 1884, p.154.

¹² Dümmler, E., *Rabanusstudien. Sitzungsberichte d. Berliner Akademie*. 1898, pp.24-42.

¹³ P・レーマンは同著で、ウィーン版『フルダ年代記』(*Annales Fuldenses antiquissimi*)の復活祭日付表(Ostertafel)の紙葉に書き込まれた年代記的記述を丹念に解説し、780年の箇所ほとんど消えかけの島嶼風の文字で「ラバーヌスが生まれる…」(*nascitur hraban*…)と書かれているのを発見した。Lehmann, P., *Fuldaer Studien*. München 1925, pp.24-25.

¹⁴ D・シャラーは、カール大帝宮廷で活躍したオルレアンのテオドゥルフスの第27詩に登場する「カラス」という単語はラバーヌスのことを示すという見解を示した。Schaller, D. *Der junge “Rabe” am Hof Karls des Großen*(Theodulf. carm. 27), in: Authenticht, J., Brunhölzl, F.(hrsg.), *Festschrift Bernhard Bischoff. Zu seinem 65. Geburtstag dargebracht von Freunden, Kollegen und Schülern*. Stuttgart 1971.

¹⁵ フライゼは『聖十字架礼讃』の献呈詩中のラバーヌスの記述から、司祭に叙階された頃(814年12月)には彼は既に30歳を超えていたとし、そこから彼の出生年が784年12月より前であると主張した。また、ラバーヌスの修道院入り前最後に彼の名前が登場する公的文書が791年のものであること(780年の誕生と仮定するとこの時既に11歳)、当時奉獻児童(*puer oblat*)として修道院に預けられていたのは7歳ごろであったことを踏まえ、780年またはそれ以前の出生年は適さず、780年~784年の間の中でも後半(783年/784年)が尤もらしいと主張している。Freise, E., *Zum Geburtsjahr des Hrabanus Maurus*, in: *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*, pp.18-80.

¹⁶ この説は、F・シュタープが指摘した、『聖十字架礼讃』第28詩における810という数字の示唆からも、信頼性が担保される。第28詩には十字架の下に跪くラバーヌスが描かれているが、ラバーヌスの身体は図全体の右半分を越えないよう構成されており、そこには45字から成る詩が書き込まれている。そして、十字架の中心から右端(図の端まで)までを数えると18字となっている。この45と18を掛け合わせると810という数字が得られるため、『聖十字架礼讃』初版の完成は810年であり、聖マルティヌスへの献呈文の内容から、彼の生年は780年であったと考えられるという。

いること、またウィーンにある『フルダ年代記』写本の記述という決定的な証拠の存在から、本稿もレーマン説を採用する。

一方、彼の家族構成については研究者の間で比較的見解が一致している。再びトリテミウスの伝記第一巻冒頭部分のラバーヌスの出自に関する箇所を参照すると、ラバーヌスは父 Ruthardus、母 Aldegunde の間の子であると記されている¹⁷。これに対し、既に 1729 年にはエックハルトが異議を唱え、フルダ修道院に様々な土地や従物を寄進した Uualuramn と Uualtrat という人物がラバーヌスの両親であると主張し、加えてラバーヌスには兄 Gunthram がおり、彼は Otthrud なる人物と結婚していたことも示した¹⁸。その後 1957 年にビュットナーがフルダ修道院周辺の証書の分析を通じてラバーヌスの親戚関係の解明に取り組み、エックハルトの見解の正当性を裏付けると¹⁹、多くの研究者がこれを支持し、見解の一致を見た。その後の 1982 年、シュタープの手により再びフルダとその周辺地域の現存する証書の分析がなされた。シュタープはまずエルヴァンゲンのエルマンリクスの著書『ゾルンホーフエンの聖ソラ²⁰伝』(MGH, SS 15/1 p.154-155) の記述から、ラバーヌスには Gundhramn という甥がいたことを指摘する。更に、ラバーヌスが別の Gundramn という人物とその妻 Otdrud のために墓碑銘を制作したこと、そして名前に見られる親戚関係から、Gundhramn が Gundramn と Otdrud の息子である可能性を指摘した。また 802 年 5 月 22 日のフルダ修道院への寄進を記録する証書²¹では、Uualuram によってホーフハイムのとある教会が、全ての従物（聖遺物、聖遺物箱、十字架、農場、建物、草地、16 人の農奴、16 頭の雌馬と 1 頭の雄馬がいる馬飼育場、オッペンハイムのブドウ畑、マインツの農場、ディーンハイム近郊のルデルスハイムとディーンハイムそのもの）と共に寄進されている。この寄進の第一証人は、この地域を担当する伯ハットーに続いて Gundram という人物であった。後に寄進を通じてフルダと密接な関係を築く Gunthramn という人物が、Uualuram と同様ホーフハイム、マインツ、ディーンハイム、オッペンハイムの修道院をフルダに寄進していることから、この Gundram と Gunthramn は同一人物であると考えられる。また、所有する土地の範囲が Uualuram とほぼ同一であることから両者はかなり近い親戚であったに違いなく、Gundram は Uualuram の長男であったとするのが尤もらしいとシュタープは結論付けた。この事を踏まえて 788 年 5 月 25 日に Uualuram と Uualtrat が発給させた寄進証書²²を確認すると、証人として伯ハットーより先に、ラバーヌスと Gundram の名が記されている他、Meginrata という名も伯ハットーより先に書かれている。これらを踏まえて、Gundram とラバーヌスが Uualuram と Uualtrat の息子

ある 2 つの数字の積によって、意味のある数字を暗示するという技術は、『聖十字架礼讃』第 6-11 詩、13 詩、14 詩、18-21 詩、23 詩、24 詩にも見られるという。Staab, F., Wann wurde Hrabanus Maurus Mönch in Fulda? - Beobachtungen zur Anteilnahme seiner Familie an den Anfängen seiner Laufbahn, in: *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*, p.100, Anm.16.

¹⁷ Migne, PL 107, Sp.71: "Cujus pater nomine Ruthardus Magnentiana familia satus, vir dives et potens, multo tempore sub Francorum principibus in Germania strenue militat. Mater vero dicebatur Aldegundis, honestissimae conversationis mulier, quae ipsum filium suum ab infantia Deum timere docuit, litteris imbuit, et non minus exemplo quam verbo docilem ejus animum ad omne opus bonum diligentissime erudit."

¹⁸ Staab, F., Wann wurde Hrabanus Maurus Mönch in Fulda?, pp.76-101; Eckhart, J. G., *Commentarii de rebus Franciae orientalis et episcopatus Wirceburgensis I.* Würzburg 1729, pp. 729-731.

¹⁹ Büttner, H., Herkunft und Familie von Hrabanus Maurus, in: *Mainzer Almnach*. Mainz 1957, pp.51-56.

²⁰ ゾルンホーフエンの聖ソラは、8 世紀半ば以前にポニファティウスの呼びかけで大陸にやってきたアングロ・サクソン人。彼はフルダの修道士となって司祭を務め、781 年にパウゲルフ下の修道院のメンバーであったことが史料から判明している。754 年以前にアルトミュールタールに隠居した。Padberg, L. E., Sola (Sualo, Suolo)v. Solnhofen, in: *LexMA*, Bd.7, col.2028-2029.

²¹ *Urkundenbuch des Klosters Fulda*, Nr.283.

²² *Urkundenbuch des Klosters Fulda*, Nr.177,178.

たちであり、Meginrata は恐らく第三子であると推測してエックハルトの見解を補強した²³。総合すると、ラバーヌスの両親は Uualuram と Uualtrat であり、兄 Gundram、弟ラバーヌス、妹 Meginrata の3兄弟で、兄には妻 Otdrud との間に Gundhrann という息子がいた、とするのが、研究者間の一致した見解である。この見解は史料的証拠も十分に揃っているため、本稿でもこの見解に依拠する。

また、ラバーヌスがラインフランケン地方（マインツ周辺）の貴族家門出身であったということも、研究者の間で合意されている²⁴。というのも、フルダ修道院に伝わるカルチュレールからマインツ周辺の広範な土地とそれに付随する人や物²⁵が、かの Uualuram と Uualtrat によって幾度も同修道院に寄進された事実が確認されるためである²⁶。加えて、同じ証書の証人欄には、先にも登場したヴォルムスガウの伯ハットー（Hatto）、伯メギンゴツ（Megingoz）、伯ブルニコ（Brunicho）らが複数回記載されており、Uualuram がヴォルムスガウの重要人物と繋がりがあったことがわかる²⁷。そのことから、Uualuram が当時彼らと近いあるいは同程度の高い地位に就いていたことが推測される²⁸。

更に、Uualuram と Uualtrat によるフルダ修道院への寄進証書は、フランク王国の他の地域同様このラインフランケン地方においても、土地等の寄進を通じた在地貴族と在地の修道院との関係形成の実践が存在したことを示唆する。また、彼らの次男だと考えられるラバーヌスがフルダ修道院に預けられたことから、貴族家門において家督を継がない子息に聖職者としての道を歩ませるという当時多くの地域で見られた慣習が、フルダ周辺でも実践されていたことがわかる。

(2) フルダ修道院への奉獻

ラバーヌスは、10歳になる頃にはフルダ修道院に、恐らく奉獻児童（*puer oblatus*）²⁹として預けられた。彼が奉獻児童であったという明確な記述は史料中には確認できない。しかし、F.シュタープは先に挙げた788年の証書の内容や聖ベネディクトの会則で規定された児童奉獻の手順を根拠に、きわめて説得力をもってラバーヌスが奉獻児童であった可能性を示した³⁰。

²³ Staab, F., Wann wurde Hrabanus Maurus Mönch in Fulda?, pp.76-101.

²⁴ 例えば以下の論考で、ラバーヌスは貴族家門の出身であるとされている。Staab, F., Rabanus Maurus und Mainz, pp.9-17; Haarländer, S., *Rabanus Maurus zum Kennenlernen- Ein Lesebuch mit tiner Einführung in sein Leben und Werk*. Mainz 2006, p.17; Wilhelmy, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren eines karolingischen Gelehrten*. Mainz 2006, p.15.

²⁵ ラバーヌスの出身家門はライン川とその支流沿いに多くの土地を所有した。土地所有の分布については Staab, F., *Rabanus Maurus und Mainz*, p.88 の地図を参照。

²⁶ *Urkundenbuch des Klosters Fulda*, Nr.177,178, 283.

²⁷ *Urkundenbuch des Klosters Fulda*, Nr.177,178, 283.

²⁸ Alter, W., Mutterstadt und Muther in Karolingischer Zeit, in: *Mitteilungen des Historischen Vereins der Pfalz*, 99. Bd. Speyer 2001, pp.7-61, 特に pp.21-22 を参照。

²⁹ 奉獻児童（*puer oblatus*）とは、両親によって、神への捧げ物として修道院に預けられた児童たちを指す。この行為の思想的根拠はサムエル記上第1章24-28節にある。すなわち、ハンナが息子を授けてくださった主への返礼として、息子サムエルを主に仕えさせるために祭司の許に預けるという物語である。聖ベネディクトの会則では、第59章1-2節にて児童奉獻の際の手順が詳細に規定されている。すなわち、修道院に入る者は可能な限り自分の手で誓願証書（*Profeßurkunde/ Petitio*）を書き、修道院附属教会の祭壇上に置くこと、また奉獻の際両親は証書を作成し、その子の手に「誓願証書」と「捧げもの」を持たせ、奉獻のミサの際にはその子の手を祭壇布で巻くことが定められている。また、両親が奉獻児童に何らかの事物を、何らかの手段で与えることは、誓願証書において禁止されていたが、修道院側に「更なる寄進」をすることで土地の用益権を自身の許に残すこと（*precarium*）は可能であった。Jong, M.D., *In Samuel's Image. Child Oblation in the Early Medieval West*. Leiden/New York/Köln 1996, p. 1; Staab, F., Wann wurde Hrabanus Maurus Mönch in Fulda?, pp.76-101.

³⁰ ラバーヌスがフルダ修道院に奉獻されたと思われる788年5月25日には、2通の寄進証書が発給されている。F.シュタープは、2通目に記載された寄進物（ドロメルスハイムの土地）が、ラバーヌスに持たされた「捧げもの」であり、1通目の寄進物（マインツの土地）が用益権を手元に残すための「更なる寄進」に対応すると主張している。そして、

こうしてフルダ修道院の一員となったラバーヌスは795年頃、当時の修道院長バウグルフによってカール大帝宮廷へと派遣された。この時に初めてカールの宮廷顧問アルクインと出会ったと考えられる³¹。いかなる理由からラバーヌスが派遣されたのかを明確に示す史料や記述はこれまで提示されていないが、同じフルダ修道院で教育を受け、カール大帝宮廷に送られることとなったアインハルトを例に背景を探ることができる。アインハルトはラバーヌスの出身地近郊のマインガウの貴族家系出身で、教育が受けられるよう両親によって幼いころにフルダ修道院に預けられた。同修道院でその才能を開花させたアインハルトは「貴族としての出自というよりもむしろその能力と知性の特異性のために」(*potius propter singularitatem capacitatis et intelligentiae quam ob nobilitatis*)³²当時の修道院長バウグルフ（在位780-802）によって宮廷に派遣されたという。ラバーヌスが宮廷に送られたのもバウグルフ修道院長期であったため、類似の事情を想定できるだろう。また、バウグルフは序論で述べた通り、カール大帝から文字や言葉の教育を促進するよう指示する書簡（*De litteris colendis*）を受け取った人物である。故にカール大帝の同書簡が間接的な背景となっている可能性も想定できる。

ここまでをまとめると、次のようになる。ラバーヌスはラインフランケン地方の貴族家門に、家督を継がない次男として生まれた。彼の両親は兼ねてから土地の寄進によってフルダ修道院と縁故関係を形成しており、ラバーヌスが8歳になった頃に奉獻児童としてフルダ修道院に預けた。修道院で教育を受けたラバーヌスは、恐らくその知性の高さの故に、また同院がカール大帝から文字や言葉の教育促進を求める書簡を送付されたという事情もあって、更なる学問探究の機会をえるために修道院長バウグルフによって国王宮廷に派遣された。そこでカロリング・ルネサンス第一世代を代表するアルクインと出会う。つまり、当時貴族家門の次男以降として生まれた子息は周辺修道院に預けられ、そこで学問の才が見いだされた場合には更に学問を深める機会として国王宮廷で学ぶ機会が与えられる仕組みがあったということが想定できるのである。カール大帝がフルダに送った回状は、帝国の他の修道院にも送付されてはならず、こうした経路で国王宮廷への「留学」を果たした貴族子弟は数多くいたことが考えられる。この点については、第4章で検討したい。

(3) アルクインのもとでの教育

800年頃一度フルダに戻った彼は修道誓願を行ない、助祭に叙階された後、修道院長ラトガルスによって修道士仲間でのフルダ修道院長ハットーと共にトゥールのサン・マルタン修道院に派遣された。ラトガルスはその建築好きとしての側面が取り上げられることが多い³³が、先の修道院長バウグルフに

ラバーヌスを書いたであろう誓願証書は失われてしまったと結論づけた。Staab, F., Wann wurde Hrabanus Maurus Mönch in Fulda?, pp.76-101, 特に pp.95-98。

³¹ Beuckers, K. G., *Kreuzeslob. Frühmittelalterliche Bildgedichte von Hrabanus Maurus. Kunsthistorischer Kommentar zur Faksimile-Edition der Handschrift aus der Bibliotheca Apostolica Vaticana Reginensis latinus 124*. Stuttgart 2014, p.8. また、D・シャラーはオルレアンのテオドゥルフによる詩（MGH, *Poetae latini aevi* Bd.1, 27, pp.492-293）における「黒いカラス」（*corvule nigre*）がラバーヌスを指すと指摘している。Schaller, D., Der junge „Rabe“ am Hof Karls des Großen(Theodulf, Carm. 27.), in: Autenrieth, J. und Brunhölzl, F.(hrsg), *Festschrift Bernhard Bischof zu seinem 65. Geburtstag dargebracht*. Stuttgart 1971, pp.123-141.

³² Walahfrid Strabo, Prolog zur Vita Karoli, in: Einhard, Vita Karoli Magni. MGH SS rer. Germ.25, p.28; Haarländer, S. *Hrabanus Maurus zum Kennenlernen*, pp.20, Anm.30.

³³ ラトガルスはフルダ修道院附属教会に西側トランセプトを加え、それをもって幅12mの中央回廊と奥行91mをもつ巨大な教会を作り上げた。彼はさらに、フルダ修道院北側のフラウエンベルクと、4km南東のヨハネスベルクにも教会を建設した。これらの作業に動員された修道士たちは憤りを覚え、抗議のために宮廷に向かうラトガルスに随伴し、カールに「*Supplex Libellus*」という嘆願書を提出した。そこには、20章にわたってフルダ修道院内の問題が書き連ねら

引き続き、フルダ修道院の知的水準を高めるため、二人に更なる教育を授けようとアルクインの許へ送ったのであろう。彼は他にも、カンディドゥスとモデストゥスをアインハルトのもとへ、クレメンス・スコトゥスを宮廷に行かせている³⁴。

当時のサン・マルタン修道院長はアルクインであり、二人は彼が亡くなる804年より前まで、彼の訓育を受けた³⁵。アルクインのもとでの学びの一端は『聖十字架礼讃』冒頭に配置された、聖マルティヌスに対する献呈図に付されたテキストから知ることが出来る。このテキストではラバーヌスの師であるアルクインが彼について語るという形式が採られている。

私（アルクイン）がこの教会（トゥールのサン・マルタン修道院附属教会）の監督者かつ奉仕者であり、聖なる教義を読んでいた時、この若者（ラバーヌス）を、神の御言葉の一節一節によって、道徳的な忠告によって、そして知的研究によってお教えしました。彼はフランクの生まれで、ポコニアの森の住人³⁶です。神の言葉を学ぶため、ここに送られてきたのです。フルダの羊飼いである彼（ラバーヌス）の大修道院長（ラトガルス）は、ラバーヌスをこちらへ、あなたの住まうところ（トゥールのサン・マルタン）へと導きました。父よ、ラバーヌス・マウルスが生徒として私（アルクイン）と共に韻律の学科を学び、歡喜に満ち溢れながら、聖書を正しく身につけるためです³⁷。

Nempe ego cum fueram custos humilisque minister Istius Ecclesiae, dogmata sacra legens, Hunc puerum docui diuini famine uerbi Ethicae monitis et sophiae studiis. Ipse quidem Francus genere est, atque incola siluae Bochoniae, huc missus discere uerba Dei. Abbas namque suus, Fuldensis rector ouilis, Illum huc direxit ad tua tecta pater, Quo mecum legeret metri scolasticus artem, Scripturam et sacram rite pararet ouans.

では、この献呈文中の「神の御言葉の一節一節」「道徳的な忠告」「知的研究」そして「韻律の学科」とは何を指しているのだろうか。また、フルダやトゥールでラバーヌスはどのような著作に触れ、どれ程のレベルの教育を受けたのだろうか。上記の献呈文に加えてその手掛かりとなるのが、トゥールでアルクインのもと勉学に励むラバーヌスについて伝記作家トリテミウスが書いた以下のような記述である。

かれ（ラバーヌス）は、教師たちが自由学芸と呼ぶ七つの学芸を習得し、聖・俗の伝統による全ての知識において、彼の右に出るものはなかった。実際、かれは、文法学、修辞学、論理学、算術、幾何学、詩学、音楽、天文学、占星術、自然学、形而上学、哲学、神学に造詣が深かった³⁸。

In his artibus septem, quas professores earumdem liberales vocant, evasit doctissimus, et in omni scientia, tam divinarum quam humanarum traditionum, non erat illi secundus. Enimvero quam eruditus fuerit in grammaticis, in rhetoricis, in logicis, in arithmetis, in geometricis, in poeticis et musicis, in astronomicis et mathematicis, in physicis et metaphysicis, in philosophicis et theologis, in humanis quoque et divinis, quicunque plenius intelligere desiderat, ejus volumina, quae et plura sunt et elegantissima, diligentius revolvat.

これらの史料の記述、そしてラバーヌスがトゥールに行くより前に助祭に叙階されたという事実から推測されるのは、ラバーヌスはトゥールに来る頃には一通りの初等教育を終えており、より発展的な内

れており、ラトガルスによる建築活動で修道士たちがいかに苦しんでいるかも書かれていた。Raaijmakers, J.E., *The Making of the Monastic Community of Fulda, c.744-c.900*. Cambridge 2012, pp.99-107, 119-125.

³⁴ MGH, SS 13, p.272.

³⁵ Beuckers, K.G. *Kreuzeslob*, p.8.

³⁶ フルダ修道院が所在した場所のこと。

³⁷ 『聖十字架礼讃』の一部は以下の論考で独訳されている。本和訳は以下の論考を参照した著者による拙訳である。Ernst, U. (hrsg), *Visuelle Poesie. Historische Dokumentation Theoretischer Zeugnisse, Bd.1: Von der Antike bis zum Barock*. Berlin 2017, pp.121-125; Haarländer, S. *Hrabanus Maurus zum Kennenlernen*, pp.100.

³⁸ 岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』知泉書館2007年、227頁。原文はMigne, PL 107, Sp.76.

容、すなわち哲学や神学、聖書本文の講読に進む用意が出来ていた（あるいは既にそれを学び始めていた）可能性が高いということである。この前提に立ち、ラバーヌスが学んだ当時のフルダやサン・マルタン修道院の蔵書目録を確認することで、彼がどのような著作に触れ、学んだのか、ある程度突き止めることが出来るであろう。

ラバーヌスがフルダ修道院に預けられた頃の蔵書目録は、セビーリヤのイシドルス『事物の本性について』や薬の作り方、天文学に関する表やヒエロニムスによる書簡の抜粋などが含まれた写本に、後になって fol.17v の次に挿入された³⁹。ただ、写本の他部分と同じスタイルのアングロ・サクソン小文字が使用されているため、写本の制作とリストの追加に大きな時間的差異はなかったと考えられる⁴⁰。リストには「これらが我々の本である」(*isti sunt [nost]r[i] libri*) との文の下に本のタイトルが記載されている。そこに含まれるのは、新・旧約聖書の各文書（全てではない）、大教皇グレゴリウスによる『エゼキエル書註解』『対話』『司牧規定書』、イシドルスの『同義語』(*Synonyma*)⁴¹、『命題集』や道徳・教義に関する神学的著作、その他、聖人伝、奇蹟譚、説教集が記録されている。次の紙葉ではほとんどの文字が解読不可能になっているが、偽ルフィヌスによる『聖エウゲニア伝』、何らかの殉教録 (*passio*)、エフェソスの7人の眠り聖人の物語、エウセビウスの『年代記』と考えられる著作 (*cronih*)、アイルランドの聖人『聖ファシー伝』、古い諺のまとめ本、『アレクサンドルス伝』といった著作が記録されている⁴²。フルダに入り、宮廷やトゥールに向かう前までの約7年間、ラバーヌスが受けていたのは修道士としての初等教育であったと考えられることから、その目的に適う著作を参照していただろう。例えば、新・旧約聖書の中でも初等教育に利用されることの多かった詩篇や、詩篇に大きく依拠したイシドルスの『同義語』(*Synonyma*)、またリストが含まれていた写本に挿入されていた『事物の本性について』も、複雑な文法を用いず短い文から構成されていて初等教育向きであり、少年ラバーヌスがラテン語講読の教科書として用いていたとも考えられる。

ラバーヌスは、宮廷から戻りトゥールへ向かう前の801年頃一度フルダに戻り、助祭に叙階されている⁴³。そのため、宮廷から帰還した時点で助祭に必要な技術や知識は既に身につけていたと考えられる。

³⁹ Basel, Universitätsbibliothek F III,15b. A・ローヴェはこの写本がアングロ・サクソン小文字で筆写され、蔵書目録の紙葉にも同じ書体が見られる点に注目した。このアングロ・サクソン小文字は、アングロ・サクソンに関連した写本所で8世紀から9世紀に見られた書体だとローヴェは指摘し、その理由からこの写本全体がフルダで制作されたものであると主張した。Lowe, E. A., *Codices Latini Antiquiores. A Paleographical Guide to Latin Manuscripts Prior to the ninth Century, Bd. VII.* Oxford 1956, Nr.842.

⁴⁰ Raaijmakers, J.E., *The Making of the Monastic Community of Fulda*, p.80.

⁴¹ イシドルスの2巻から成る著作で、第一巻では男が自らの犯した罪を悔い嘆き、救済を懇願する内容である。この巻は、「理性」が男を慰めるといふ対話形式で書かれており、対話の結果男は罪深い行いを辞める。第二巻では「理性」が、日常生活において、神を敬い適切な言葉を使うこと、信心深く、しかし活動的に日々を過ごすことなど、行動に関する指針を男に与える。最後には男は「理性」による様々な助言に感謝し、讃美詩を歌う。Sciaccia, C.D., *Finding the Right Words. Isidore's Synonyma in Anglo Saxon England.* Toronto 2008, pp.16-17.

⁴² この本のリストには、ベネディクト会系の修道院なら必ず蔵書すべき『聖ベネディクトの会則』や、修道士たちの教育に必要な文法に関する著作、またつながりの深い聖ポニファティウスの著作が記録されていない。更に、このリストが挿入された写本に収録された他のテキストについても記録がないため、このリストをフルダの完全な蔵書目録として考えることはできない。J・E・ラーイマーカーは、このリストはより小規模の図書室の蔵書を記録したものであると推測し、フルダ修道院の下部組織、例えば修道士が住んでいた庵 (*cella*) の一つに所蔵されていた本のリストであると考えている。実際、バウグルフが修道院長退任後に隠居したヴォルフスミュンスター庵から、類似のリストが見つかっている。Raaijmakers, J.E., *The Making of the Monastic Community of Fulda*, pp.80-81.

⁴³ *Annals Laurissenses minores* (MGH SS 1 p.120, 122; aus Codex Vindobonensis lat 430).810年の箇所に“Hraban diaconus factus”と記録されている。

それを踏まえ、彼が学んでいた頃のトゥールの蔵書⁴⁴に目を向けてみると、「神の言葉の一節一節」を学ぶのに不可欠な聖書の各部分や聖書註解、守護聖人たる聖マルティヌスの伝記、典礼に利用する福音書集等が目立つ中に、ティベリウス・クラウディウス・ドナトゥス⁴⁵『アエネイス註解』⁴⁶が見られる。これは注目に値する。というのもアルクインは自身の著書『文法学』の副詞や前置詞を説明する例文として、アエネイスやその他のウェルギリウスの著作を引用しているためである⁴⁷。アルクインは本来、若き修道士たちの教育にウェルギリウスを使う必要はなく、キリスト教詩人の書で事足りると考えていた⁴⁸。しかし、トリテミウスの記述や、ラバーヌスが既に助祭であったことから、文法学の応用として『アエネイス註解』を手にとった可能性が高いと考えられる。こうして早期から養われた文法知識は、ラバーヌスの後の執筆活動に大いに役立ったに違いない。また、「道徳的な忠告」「知的研究」については、トゥールの蔵書に記録されたエウギッピウス『聖アウグスティヌス抜粋集』、聖アウグスティヌス『エンキリディオ（信仰・希望・愛）』が当てはまるだろう。『エンキリディオ』はアウグスティヌスの執筆活動の晩期に書かれた著作で、その成立年代は420年～425年の間と推測されている⁴⁹。彼はこの頃には『告白』『三位一体論』『自然と恩寵』『キリストの恩寵と原罪』といった著作を既に関し終え、『神の国』の執筆も後半に差し掛かっていた。更に、本著作におけるキリスト教に関する諸主題（キリスト論、三位一体論、教会論、恩寵論）の内容からもアウグスティヌスの思想の深まりが見て取れることから、本著作はアウグスティヌスの特徴を明白に示す総括的著作⁵⁰であるのだという。自由七科を習得し、「知的研究」に励むラバーヌスにとって、アウグスティヌスの成熟した神学思想は更なる勉強に適切な文献だったと思われる。

ラバーヌスがトゥール帰還後、最初に執筆した著作が『聖十字架礼讃』であった。本作のような形象詩集を構想するには、彼以前に形象詩を制作した詩人たち、すなわちプブリウス・オプタティアヌス・ポルフィリウスやウェナンティウス・フォルトゥナートゥス、またカール大帝宮廷のメンバーであったオルレアン人のテオドゥルフス、ヨセフス・スコトゥスや直接の師アルクインの作品について学ぶことが不可欠であったろう⁵¹。「韻律の学科」とは、アルクインと共に形象詩の先例を目の前にしながら、その技法や韻律を学び取ったことを指しているのかもしれない。

ラバーヌスがフルダやトゥールでどのような著作から学んだのか、その全てを明らかにすることは不可能に近い。ただ、フルダではラテン語の読み書きをはじめとする初等教育を、トゥールではアルクインのもとでより発展的な内容を学んだとの前提に立てば、前者では比較的読解の難易度の低いインドル

⁴⁴ Rand, E.K., *A Survey of the Manuscripts of Tours*. Cambridge 1929, pp.81-130.

⁴⁵ 4世紀後半から5世紀前半に『アエネイス註解』を制作した教養人で、非キリスト教信者。

⁴⁶ Florence, Biblioteca medicea Laurenziana Plut.45.15; Rome, Biblioteca Apostolica Vaticana, Reg.lat.1484.

⁴⁷ 岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』、156頁。

⁴⁸ “Legerat idem vir Domini libros juvenis antiquorum philosophorum, Virgiliique mendacia, quae nolebat jam ipse nec audire, neque discipulos suos legere, «sufficiunt, inquit, divini poetae vobis, nec egetis luxuriosa sermonis Virgilii vos pollui facundia.”. Migne, PL 100, Sp.101.

⁴⁹ 川中なほ子「聖アウグスティヌスの『エンキリディオ』」『中世思想研究』第2号（1959年）、116～127頁。

⁵⁰ 川中なほ子「聖アウグスティヌスの『エンキリディオ』」、116頁。

⁵¹ 形象詩の系譜については第2章を参照されたい。また、これら詩人の形象詩を収録する9世紀に制作された写本が、ベルン市立図書館に所蔵されている（Cod.Bern.212）。同写本は2つの写本の合冊で、既に9世紀初頭には1つに合わされていたと考えられている。写本の前半部はマインツ大聖堂の写字室の特徴が見られ、後半部は現ドイツ域内あるいは北フランスで制作されたと考えられている。この写本の後半部に、ポルフィリウスやアルクイン、ヨセフス・スコトゥス、テオドゥルフスの形象詩が描かれている。制作時期や制作地、写本の内容に鑑みると、ラバーヌスはこの写本を目にしたことがあったのかもしれない。Homburger, O., *Die illustrierten Handschriften der Burgerbibliothek Bern*. Bd. 1. Bern 1962, S. 85–86, 162–163. Redigiert und ergänzt von Florian Mittenhuber, Februar 2019.

スや詩篇を、後者ではより難解なアウグスティヌスや注意が必要なウェルギリウス、そして『聖十字架礼讃』に繋がる形象詩に関する著作を学んでいたと推測できる。

こうしたフルダや特にトゥールの蔵書は、恐らくカロリング・ルネサンス第一世代の人物によって拡充されたと考えられる。先に挙げたフルダの蔵書目録はバウグルフが修道院長を務める間に制作されたものであったし、イシドルスやヒエロニムス、大教皇グレゴリウス、ベーダの著作が彼の下写字室で制作され、カール大帝の『一般訓令』の写しも制作された⁵²。またトゥールは元宮廷顧問のアルクインが修道院長を務め、その写字室が「正しい」聖書のパンデクタ本を制作できる程に整備された。このような第一世代の素地があったからこそ、第二世代のラバーヌスは自身の勉学に十分な、「正しく」書かれた書籍にアクセスすることができたと言える。ラバーヌスのようにトゥールのアルクインの許に派遣された若者たちも同様に、第一世代によって整えられた蔵書をもって出身修道院で初等教育を終えた後、アルクインの許でウェルギリウスやアウグスティヌスの著作を通じて文才を陶冶し、神学思想を体得していったのであろう。

(4) 執筆活動の本格化

フルダに帰還したラバーヌスは修道院附属学校長として活動するようになる。『聖十字架礼讃』の最初の版は810年頃に完成しているため、ラバーヌスはアルクインのいるトゥールから戻り附属学校長を務めている間に執筆を進めたと推測される。

814年、ラバーヌスはマインツ大司教ハイストゥルフによって司祭に叙階される。マインツ大司教座は、その初代大司教をポニファティウスの弟子ルルが務めたという背景がある。そのため、ポニファティウスを介してフルダ修道院と密接な関係にあった。ハイストゥルフがラバーヌスの『聖十字架礼讃』写本の受取人の一人であったことから、両者の結びつきの強さを見ることが出来る。また、歴代のフルダ修道院長たちもその時々マインツ大司教によって司祭に叙階されている⁵³。

819年、ラバーヌスはマインツ大司教ハイストゥルフのために、聖職者教育の教科書である第二作目『聖職者の教育について』(*De institutione clericorum*)を著し、その翌年には修道士マルカリウスのために『復活祭日の計算について』(*De computo*)を執筆した⁵⁴。そしてフルダ修道院長に選任される頃には旧約聖書・新約聖書それぞれに対する註釈本の執筆を始めている⁵⁵。これらの作品の中には社会的地位の高い人物、すなわち国王や司教、修道院長からの要請で制作されたものも多い。そのような事実からも、学問探究をきっかけにできた宮廷やその地で出会った人々との繋がりが、ラバーヌスの執筆活動の原点にあることがわかる。そして822年、前修道院長のエイギルが亡くなると、ラバーヌスが後継者として選任された。

この期間ラバーヌスが執筆した著作は、フルダ修道院に入りその頭角を現し、当時最高峰の知識人の一人であったアルクインの許で学んだ成果である第一作目『聖十字架礼讃』、修道院附属学校長として

⁵² Raaijmakers, J.E. *The Making of the Monastic Community of Fulda*, pp.82-83.

⁵³ ラバーヌスの前に修道院長を務めたアイギル(818年～822年)は当時のマインツ大司教ルルによって司祭に叙階された。

⁵⁴ MGH, Epp.5, IX 3-4. なお、本論から逸れるが、同作品の第53章における以下の文言とほとんど同じ言い回しが、ベーダ・ヴェネラピリス『復活祭日の計算について』第17章に見られる。

“Habet enim, ni fallor, Ecclesiae fides Dominum in carne paulo plus quam triginta tres annos usque ad suae tempora passionis vixisse: quia videlicet triginta annorum fuerit baptizatus, sicut evangelista Lucas testatur, et tres semis annos post baptisma praedicaverit, sicut non solum in Evangelio suo Joannes commemorato redeuntis Paschae tempore, sed et in Apocalypsi sua, Daniel quoque in suis visionibus prophetice designat”. Migne, PL 90, Sp.594 及び PL 107, Sp.704.

⁵⁵ Wilhelmy-Kotzur, *Hrabanus Maurus. Auf den Spuren*, p.13.

の立場からフルダの仲間の修道士たちに宛てた『聖職者の教育について』、彼らの学びに資するよう執筆した、後期古代文法家らの抜粋付きの教科書『文法について』(*De grammatica*)、そして『マタイ福音書註解』である。これらの著作から見出されるのは、師であるアルクインからの学びを受け継ぎながら、それをさらに発展させたラバーヌスの姿である。第2章で詳しく扱うが、『聖十字架礼讃』はカール大帝時代の詩人たちの形象詩を踏まえつつも、図形だけでなく画像も取り入れて形象詩を制作した点や、数秘術的要素が多分に込められている点、またその制作目的において師とは異なる志向性をもつ。『聖職者の教育について』も同様に、聖職者の訓練に関してヒッポのアウグスティヌスや大教皇グレゴリウスに依拠⁵⁶したり、自由七科の説明においてアルクインの著作を所々で引用したりしながらも、例えば文法学の定義においてはアルクインの定義⁵⁷とは異なり「文法学は、詩人と歴史家（の著作）を註解する」⁵⁸と述べ、文法学が何たるかということ以上に文法学の学びが何に活かされるかという点を重視し、読者に文法学が必須となる場面、すなわち聖書註解をより強く意識させる⁵⁹。そして彼は実際に聖書註解書の執筆に着手し、生涯を通じて旧約・新約ほぼ全ての内容に関する註釈書を執筆した。このように、その執筆活動の初期から、ラバーヌスは宮廷やアルクインのもとでの学習内容を踏まえつつも、日々修道士たちを目の前にする修道院附属学校長として、自由七科を身につけた先にあるより深い聖書理解への道を提示していたと考えられる。

第2節 フルダ修道院成立の経緯とそのネットワーク

ラバーヌスが預けられたフルダ修道院はその成立の過程が非常に重要であるため、ここで一度同修道院について確認しておきたい。

(1) フルダ修道院の成立

フルダ修道院は「ゲルマニアの使徒」ボニファティウスと密接な結びつきを持つ。彼の伝道活動においてフルダ修道院が如何なる位置づけにあったのか、ボニファティウスによる伝道活動を概観しながら確認する。ボニファティウス（幼名ウィンフリス *Wynfrith*）はイングランドのエクセターに672年か675年に生まれ、ウィンチェスター近郊のナースリング修道院で学んだ。716年の春、ボニファティウスは当時のアングロ・サクソン教会の伝統である「流浪」(*peregrinatio*)⁶⁰のために大陸へ向かいフリース

⁵⁶ Hrabanus Maurus Magnentius, in: *Encyclopaedia Britannica*, Vol.13. Cambridge 1911.

⁵⁷ 「文法学は文字の学問であり、正しく話し書くための守り手である」岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』、163頁。原文は、Migne, PL 101, Sp.849.

⁵⁸ 岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』、163頁。原文は、Migne, PL 107.

⁵⁹ 岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』、242頁。

⁶⁰ 原義は「外国で暮らす」ことであるが、キリストに対する罪の償いの一環として自発的に故郷を離れて知らない土地で暮らすというアイルランドの修道士たちの6世紀末ごろからの宗教的实践を指す。彼らはイングランド周辺の島やヨーロッパ大陸に旅立ち、行った先々で修道院や庵を建てた。彼らは伝道師としての役割も持っていた。例えばアイオナの聖コロンバヌスはペレグリーナティオのために大陸を訪れ、リュクスイユやボッピオといった修道院を建設し、アイルランド流の禁欲的な修道制を大陸へと伝えた。Haupt, H., Columban, in: *LexMA Bd.3*, col. 65-67; Angenendt, A., *Peregrinatio*, in: *LexMA Bd.6*, col.1882-1883.

ラントの伝道を試みるも⁶¹、政治的状況が原因⁶²で断念せざるを得ず一度ナースリングに戻った。718年頃再び伝道の旅に出た彼は、自身の伝道者としての立場を確立し、権威の後ろ盾を得ることから始める⁶³。718年秋ごろ彼はローマに到着し、歓待を受けた後、719年5月15日にライン川右岸のゲルマニアに伝道する全権を獲得した。

教皇からの指示を受け、伝道状況の調査のため国中を旅することになったボニファティウスは、テュリンギア（現テューリンゲン地方）、フリースラント、ヘッシア（現ヘッセン州北西部）で伝道活動を行い、オーム川沿いにアマーネブルク修道院庵室を整備して現地の聖職者の教育センターとした。

722年、彼は直接面会したいとの教皇の希望に応えるため、再びローマに向かった。そして722年11月30日、教皇は彼を地域司教（Landbischof）に叙階し、ボニファティウスの指導に従えとする内容のテュリンギアとヘッシアに宛てた書簡⁶⁴を持たせて同地へ向かわせた。教皇はさらに国王カール・マルテルに対し彼の庇護を依頼する書簡を書き送った⁶⁵。それを受け、カール・マルテルは教皇の指示通り庇護下に置くという旨の書簡をボニファティウスに送付した⁶⁶。

ボニファティウスはさっそく上ヘッシアに戻り、不在の間に再び広まりを見せていた異教の根絶に取り掛かった。特に知られているのがトール神のオークの伐採である⁶⁷。下ヘッシアでも多くの信徒を獲得し、彼はテュリンギアへと旅を続けた。この頃、彼の活動を支えるため多くの聖職者がイングランドからやってきた。その中には、後の彼の後継者となるルルやデーネハルト、ブルカルド、ウィグベルト、ソラ、ウィッタ、ユニバルド、ウィリバルドがおり、リオバ、クニヒルド、クニトルド、ベルスギット、ウアルブルガ、テクラといった女性たちも見られた。ボニファティウスは彼らとともに伝道活動を続け、教会や礼拝堂を建てた。また最初の修道院をテュリンギアに建設し、キッツインゲン、ビショフスハイム、ハイデンハイムに女子修道院も整備した。

731年、グレゴリウス2世が没し教皇グレゴリウス3世が即位する。ボニファティウスは彼に敬意と忠誠を示すため使者を送り、一人で伝道活動を続けるのは荷が重いとの内容の書簡を翌年に送った。グレゴリウスは彼の活動をねぎらい、彼にパリウムを授けて大司教として、必要だと思う場所に司教を配

⁶¹ Bonifatius, in: LexMA Bd.2, col.417-420. また Halsall, P., *Willibald: The Life of St. Boniface*, in: Fordham University, Medieval Sourcebook. 2000.09.01. Retrieved 27. Aug. 2023 (<https://sourcebooks.fordham.edu/basis/willibald-boniface.asp>) に掲載された聖ウィリバルドによる『聖ボニファティウス伝』英訳版第4章には、彼が徐々に親族や知人との交流を避け、彼の出生地に留まるよりも外国へ旅することへと心が向くようになったとの記述がある。

⁶² 『聖ボニファティウス伝』によれば、当時フリースラントにおける異教の流入により、フランク人の王カールとフリースラントの王ラドボッドの間に激しい対立が生じ、現地住民の間にも混乱が生じていた。フランク王国の支配下にあったキリスト教会はラドボッドにより迫害され、異教の神殿が再び建てられ、偶像崇拜も復活したという。その状況を鑑みて、ボニファティウスは一度母国に帰ることを決心した。Halsall, P., *Willibald: The Life of St. Boniface*.

⁶³ この時、ウィンチェスター司教ダニエルが、教皇に向けた推薦状をボニファティウスに持たせていた。彼はまた、王、司教、修道院長、司祭らに向けたボニファティウスの公開推薦状も準備した。MGH Epistolae, Bd.3, p.257, S. Bonifatii et Lulli epistolae, Nr.11; Halsall, P.(2000.10.24), The Correspondence of St. Boniface, in: Fordham University, Medieval Sourcebook. Retrieved 03. Sep. 2023(<https://sourcebooks.fordham.edu/basis/boniface-letters.asp>).

⁶⁴ MGH Epistolae, Bd.3, p.268, S. Bonifatii et Lulli epistolae, Nr.19; Halsall, P., The Correspondence of St. Boniface.

⁶⁵ MGH Epistolae, Bd.3, pp.278-280, S. Bonifatii et Lulli epistolae, Nr.20; Halsall, P., The Correspondence of St. Boniface.

⁶⁶ MGH Epistolae, Bd.3, pp.270-271, S. Bonifatii et Lulli epistolae, Nr.22; Halsall, P., The Correspondence of St. Boniface.

⁶⁷ ボニファティウスは異教の神の非力さを異教徒に示すため、彼らの信仰の対象であったトール神に捧げられたオークの木を切り倒した。本来であれば異教の神の怒りでボニファティウスに雷が落とされるはずであったが、何の神罰も下らないボニファティウスを見て異教徒たちは驚き、彼らは次々とキリスト教に改宗したという。Halsall, P., *Willibald: The Life of St. Boniface*.

置する許可を出した⁶⁸。ボニファティウスはその後、アマーネブルク修道院の拡充やフリッツラーにおける新たな修道院の建設に取り掛かった。

738年、ボニファティウスは再びローマに向かった。彼にはこの時、大司教の職を辞し、ザクセン人への伝道に献身する意図があったようだが、教皇はボニファティウスの辞職を許可しなかった⁶⁹。彼は約1年ローマに滞在した後、今度は伯オディオロからの招待を受けてバイエルンへと出発した。バイエルンでは、フランク人達の伝道により既にキリスト教信仰が確立していた⁷⁰が、司教座の設置は依然としてなされていなかった。そこで、ボニファティウスは同地の伯オディオロやヒューゴベルトと協働し、4つの司教座⁷¹を設立した。また同じ頃、ビューラブルク、アイヒシュテット、エアフルト、ヴェルツブルクといった司教区も新設された⁷²。更に、この頃ボニファティウスは新王カールマンとの対話を受け、新たに即位した教皇ザカリウスに対し教会会議開催の必要性を訴え⁷³、一連の教会会議の開催にも携わっていた⁷⁴。

ボニファティウスがフルダに修道院を建設したのは、まさに司教区新設や教会会議が盛んに行われていたこの時期であった。フルダ修道院建設の経緯について、初代院長となるシュトゥルミの伝記は以下のように説明している。両親によってフリッツラーの司祭ウイグベルトに預けられ、初等教育を受けたシュトゥルミは、司祭になって3年経った頃、隠遁者として厳格に暮らすことを求めるようになった。彼の意志を知ったボニファティウスは「ボコニア」⁷⁵と呼ばれる人里離れた場所に行き、神に仕えるのに適した場所があるかどうか見てくるように指示した⁷⁶。そこで彼が見つけたのが、現在フルダ修道院が建つ場所であったのだという。ボニファティウスは、当時の国王カールマンから土地を譲り受け、744年に同修道院を建設したのであった。彼がいかなる意図をもってシュトゥルミをボコニアという地域へ行かせたのか、その理由は史料上明確ではない。しかし、ボニファティウスが教皇に宛てた、フルダの修道院建設を報告する書簡には、

私が教えを説いている民族が住む場所の間には広大な荒野があり、その中央には森のような場所がある。私はそこに、聖ベネディクトの下で生活する修道士たちを配置し、修道院を建てている。…私はここで、あなた様の親切なお許しによって、老いてすり減った肉体を少しの間休ませ、死後はここに

⁶⁸ MGH Epistolae, Bd.3, p.269, S. Bonifatii et Lulli epistolae, Nr.28; Halsall, P., The Correspondence of St. Boniface.

⁶⁹ “Non pigeas, dilectissime frater, itinera carpere aspera et diversa, ut christiana fides longe lateque tuo conamine extendatur. Operare itaque, frater, bonum opus quod cepisti, ut in die Christi dei nostri merearis dicere, inter ceterum sanctorum probabilitium patrum assistens.” (Do not shrink, beloved brother, from difficult and protracted journeys in the service of the Christian faith, for it is written that small is the gate and narrow the road that leads on to life. Continue, then, brother, the exemplary work you have begun, so that in the day of Christ you may be entitled to say in the presence of the saints at the day of judgment). MGH Epistolae, Bd.3, p.293-294, S. Bonifatii et Lulli epistolae, Nr.45; Halsall, P., The Correspondence of St. Boniface.

⁷⁰ Raaijmakers, J.E., *The Making of the Monastic Community of Fulda*, p.21.

⁷¹ ザルツブルク、フライジング、ラティスボン、パッサウ。なお、パッサウはこの時ボニファティウスにより新設されたのではなく、教皇により司教に叙階されたヴィヴィロという人物が既に活動していた。参照：Mershman, F. (1907), St. Boniface, in: *The Catholic Encyclopedia*. Retrieved September 4, 2023 (<http://www.newadvent.org/cathen/02656a.htm>).

⁷² Raaijmakers, J.E., *The Making of the Monastic Community of Fulda*, p.25; Mershman, F. (1907), St. Boniface.

⁷³ MGH Epistolae, Bd.3, p.298-302. S. Bonifatii et Lulli epistolae, Nr.50; Halsall, P., The Correspondence of St. Boniface.

⁷⁴ 742年4月のゲルマニア公会議 (Concilium Germanicum)、743年3月のル・エスティン教会会議、744年3月のソワッソン教会会議、745年と747年の開催地不明の教会会議。Raaijmakers, J.E. *The Making of the Monastic Community of Fulda*, p.25; MGH Epistolae, Bd.3, p.298-302, S. Bonifatii et Lulli epistolae, Nr.56.

⁷⁵ 現在のチューリングゲン地方を指す。

⁷⁶ Halsall, P. (2000.10.01), *Eigil: Life of Sturm, early 9th Century*, in: Fordham University, Medieval Sourcebook. Retrieved 04. Sep. 2023 (<https://sourcebooks.fordham.edu/basis/sturm.asp>).

埋葬されるつもりです。神の恵みによって神の言葉を述べ伝えてきた4つの部族は、誰もが知っているように、この場所の周辺に住んでいます。私が生きている限り、そして私の能力が失われない限り、あなた方の支援によって私は彼らの役に立つことができます。

とある⁷⁷。この記述から推測されるのは、フルダ修道院建設を考えた時には既に、ボニファティウスは自身の死を意識し、自身の最期を過ぎ死後は遺体を安置する場所として同地を想定していたこと、またこの修道院を起点として、自身が最も力を入れて説教をしてきた人々の面倒を、息を引き取るその時まで見届けようとしていたことである。フルダ修道院建設の後、ボニファティウスによる新たな宗教施設は組織されていない。そのことから、このフルダ修道院がボニファティウスの伝道活動を締めくくる、いわば集大成のような位置づけにあることがわかる。彼の遺体はしばらくユトレヒトの司教座に安置されていたが、ラバーヌスが司祭であった819年にフルダ修道院に奉遷された⁷⁸。

(2) カロリング期におけるフルダ修道院のネットワーク

フルダ修道院は、その設立初期には、ボニファティウスを通じて教皇や国王とのコネクションを得た。先に見た通り、ボニファティウスはカール・マルテルの庇護下で伝道活動を行い、息子カールマンからの土地の寄進を受けてフルダ修道院を創設することが出来た⁷⁹。また、ボニファティウスは自ら当時の教皇ザカリアスに働きかけ、フルダの上位管区であるヴェルツブルク司教区からの免属特権を得させ、ローマ教会への直属を認めさせた⁸⁰。

ボニファティウスの死後もフルダ修道院は国王との関係を確立しつつ、貴族から数々の土地の寄進を受け、その基盤を固めることになる。まず、王権との関係性が決定的となったのはカール・マルテルの息子ピピンがフルダの監督権を巡り対立する修道院長シュトゥルミとマインツ大司教ルルの間に介入し、フルダ修道院を直接彼の庇護下に置いたときであった⁸¹。以降、774年にはカール大帝から修道院長選任権とインムニテートが付与され⁸²、760年にはダイニンゲン、765年ウムシュタット、777年ハンメルブルクと、次々に土地の寄進を受けるようになった⁸³。また、ラバーヌスの出身家門のような、フルダ修道院周辺の貴族も土地を寄進した⁸⁴。

⁷⁷ MGH Epistolae, Bd.3, p.367-369, S. Bonifatii et Lulli epistolae, Nr.86; Halsall, P., *The Correspondence of St. Boniface*.

⁷⁸ Lins, J., Fulda, in: *The Catholic Encyclopedia*. Vol. 6, 1909. 18 Jul. 2023 <<http://www.newadvent.org/cathen/06313b.htm>>.

⁷⁹ この寄進を示す直接的な史料は現存していないが、エイギル『シュトゥルミ伝』にはボニファティウスがカールマンに土地の寄進と彼の保護を求めたことが記述されている。Halsall, P., *Eigil: Life of Sturm*.

⁸⁰ Fulda, in: *LexMA* Bd.4, col.1020-1021.

⁸¹ ピピンは宮廷に対する不服従を理由に、一度シュトゥルミをフルダから追放していた。しかし、追放からしばらくしてシュトゥルミをフルダに呼び戻し、再びフルダの長を務めるよう求めた。その際彼はシュトゥルミに、自身（ピピン）を修道院の唯一の庇護者だと考えるように、と述べた。該当箇所を以下に提示する文献から引用する。

“After a short time the king summoned Sturm to his presence and commended to him the government of the Abbey of Fulda, which he had held before. He released him from the jurisdiction of Bishop Lull and commanded him to return with all honour to Fulda, there to govern the monastery with the privileges which blessed Pope Zacharias the Supreme Pontiff, had formerly granted to Boniface. The privilege just mentioned is preserved to this day in the monastery. He also ordered him to consider the king as the abbey's sole protector. On receiving this power from the king, Sturm returned to the monastery, bearing with him the privilege which he accepted from the hands of the king.” Halsall, P., *Eigil: Life of Sturm*.

⁸² この件に関する特権状の原本は現存しないが、マクシミリアン1世が承認した特権状の原本は残っており、その内容は、12世紀にフルダ修道院で制作された財産のリストであるエベルハルト・コーデックスの写しである。そのため内容を復元することが出来る。Raaijmakers, J.E., *The Making of the Monastic Community of Fulda*, p.52.

⁸³ MGH Diplomata, DD Karol. 1, Nr.13, 21, 63, 106, 127, 139, 140, 145. Raaijmakers, J.E., *The Making of the Monastic Community of Fulda*, p.52.

⁸⁴ *Urkundenbuch des Klosters Fulda*.Nr.177, 178.

国王との密接な関係が見られるのは土地の寄進を通じてだけではない。前述の通り、ラバーヌスが修道院入りを果たした修道院長バウグルフの頃（779年～802年）には、カール大帝から「文字の習得について」（*De litteris colendis*）と呼ばれる書簡がフルダに送付されており⁸⁵、国王から直々に学問を振興するよう指示を受けていた。このことが背景にあるかは定かではないが、バウグルフはこの指示を受けて、アインハルトやラバーヌスといった若く才ある修道士たちを教養あるエリートへの許へ預けたのかも知れない。また、シュトゥルミによるモンテ・カッシーノ修道院訪問⁸⁶や書物の交換を通じたイタリアとの、特にモンテ・カッシーノ修道院との結びつきも見られた⁸⁷。加えて、ボニファティウスによる修道院設立以来、アングロ・サクソンとのコネクションも保持していた⁸⁸。

つまり、ラバーヌスが奉獻児童として預けられたフルダ修道院とは、ボニファティウスの伝道活動の系譜を引く修道院の1つで、彼の遺体が眠るボニファティウス崇敬の中心地であると同時に、カール大帝の時代までには国王から認められた教育センターの一つでもあった。また、その設立当初からイタリア（特にローマとモンテ・カッシーノ）、国王、周辺貴族とのパイプを、特権状の付与や土地の寄進を受けることを通じて確立した重要な知の結節点の一つであったと言える。

第3節 修道院長退任まで：823年～842年

ルートヴィヒ敬虔帝が単独統治を始めてから約10年が経った頃、ラバーヌスは修道院長としてのキャリアを歩みだしていた。しかし、ルートヴィヒとその息子たちの政治闘争が激化し、ラバーヌスもそれに巻き込まれる形となってしまった。また、修道院の管理・経営や教え子ゴットシャルクとの対立といった個人的な事情にも骨を折ることになる、ラバーヌスにとっての苦難の時代である。

修道院長に着任したラバーヌスが最初に着手したのが修道院の人と財産の把握であり、そのために数々の記録・目録の制作や改訂がなされた。例えば後にライヒェナウの祈念祈禱盟約の人名リスト

⁸⁵ 784年～785年、あるいは794年～795年にフルダ修道院長バウグルフ宛に送付された。昨今修道院から届く書簡の多くに正しい考えと不適切な表現の両方が見られるので、修道士たちの文を書く能力が低下しているのではないかと、このカール大帝の不安と、彼らを正すように、とする指示が書かれている。Harschall, P. (1996. Jan), *Charlemagne: Letter to Baugulf of Fulda, c.780-800*, in: Fordham University, *Medieval Sourcebook*. Retrieved 05. Sep. 2023. (<https://sourcebooks.fordham.edu/source/carol-baugulf.asp>) .

⁸⁶ 『フルダ年代記』著者であるフルダの修道士ルドルフが書いた『聖レオバ伝』によれば、聖ベネディクトの会則のもとでの生活を学ぶためシュトゥルミはボニファティウスによって、モンテ・カッシーノに派遣された。またフルダ修道院長エイギルによる『聖シュトゥルミ伝』によれば、それは修道院創設の4年後のことであった。新たな修道生活において聖ベネディクトの会則に則った生活を送ることを望んだ修道士たちは、彼らのうち数人を、既に聖ベネディクトの会則下での生活が確立していた修道院に派遣し、その生活を学ばせてフルダへ持ち帰らせるという計画を立てた。この計画を当時の修道院長ボニファティウスに提出したところ、彼はそれを承認し、シュトゥルミウスと他2人をローマに派遣した。彼らは1年間かけて複数の修道院を巡り、そこで生活する修道士たちの生活や習慣を学んだという。MGH *Scriptores SS*, Bd.15, p. 125, *Vita Leobae abbatissae Bischofesheimensis auctore Rudolfo Fuldensi*; MGH, *Scriptores SS*, Bd.2, p.371, *Eigils Vita Sancti Sturmi*.

⁸⁷ レーマンによれば、フルダ修道院はその創設から10年が経過した頃には既に、イタリアの各地、特にモンテ・カッシーノとの写本の貸借関係を結んでいたという。Lehmann, P., *Die alte Klosterbibliothek Fulda und ihre Bedeutung*, in: *Erforschung des Mittelalters 1*. Stuttgart 1959, pp.213-231, p.220 sqq.

⁸⁸ レーマンによれば、フルダで制作された写本の多くにアングロ・サクソン写本に特徴的な半アンシアル体が見られるという。例えば本論文第1節（1）で言及した今日ウィーンにある『フルダ年代記』写本に書かれた復活祭日早見表において、741～797年の表、798～835年の表、836～854年の表にアングロ・サクソンの文字が見られるという。更に、ロルシュで制作されフルダで815～817年にその写しが作られた『ロルシュ小年代記』（*Annales Laurissenses minores*）写本にも、島嶼風の文字が確認されるという。Lehmann, P., *Die alte Klosterbibliothek Fulda*, pp.213-231.

(*confraternity book*) に追加されるフルダの『死者名簿』(*Annales necrologici*) の更新、修道院の蔵書拡張と目録の作成、土地財産に関する私証書のカルチュラリア作成が実施された⁸⁹。

また、修道院の管理だけでなく、ある教え子との思想的対立にも頭を悩ませる。教え子ゴットシャルクとの彼の奉献 (*Oblatio*) の正当性をめぐった論争である。きっかけはゴットシャルクがフルダ修道院からの脱会を求めたことであった。彼によれば、彼は意に反して修道院に預けられ、剃髪されたのだという⁹⁰。

ゴットシャルクは 829 年、マインツでの教会会議でラバーヌスに対し訴えを申し出た。参加していた大司教、司教、司教補佐、修道院長は彼に関して議論し、彼に判決を下した。結果、ゴットシャルクは修道院を去ることを許されたのであった⁹¹。

ラバーヌスはこの事件に関連して、自身の主張を『児童の奉献について』(*Liber de oblatione puerorum*) に著し、数週間後のヴォルムスでの会議でルートヴィヒ敬虔帝に訴えかけた⁹²。ラバーヌスとゴットシャルクは約 20 年後、再び予定説を巡って対立することとなる。

翌年の 830 年、ラバーヌスにも大きく影響を与える事件が発生する。フルダ修道院の最大の支持者たるルイ敬虔帝に対する反乱と敬虔帝の廃位である。これは、ルイ敬虔帝が、彼自身が公布した「帝国整序令」(*Ordinatio Imperii*)⁹³に反し、ユディトとの子カールも含めた帝国領土の相続を決定したことに端を発した。この対立が頂点に達したのは 833 年 6 月末で、コルマールの戦場にて、ルイ敬虔帝に反発するロタール 1 世、アキテーヌ王ピピン、ルートヴィヒ・ドイツ人王の側にルイ敬虔帝の兵士の大部分が寝返り、敬虔帝が廃位されルートヴィヒ・ドイツ人王が西フランクの実権を握る事態に至った⁹⁴。ラバーヌスは一連の事件の後、ルートヴィヒ・ドイツ人王に依頼され、敬虔帝に『子供たちの父に対する尊敬について、また家臣たちの王に対する尊敬について』(*De reverentia filiorum erga patres et subditorum erga reges*) を執筆した。本著作の中でラバーヌスは、旧約聖書のダビデ王が、息子ソロモン王を生前から王として即位させたが、実際に彼が統治を始めたのはダビデ王の死後のことであったという聖書のエピソードを引き合いに出している。また、いかなる人の、あるいは神の権利をもってしても、親をその地位から追放することは正当化され得ず、ルイの息子たちの行いは聖書の教えに反すると批判することでルイ敬虔帝の側に立った⁹⁵。ルイ敬虔帝は翌年復位するものの、その後も息子たちとの争いは沈静化することなく、対立はルイの死後も続いた。

⁸⁹ Raaijmakers, J.E., *The Making of the Monastic Community of Fulda*, p.178. 及び Wilhelmy- Kotzur, *Hrabanus Maurus. Auf den Spuren eines karolingischen Gelehrten*, pp.16-19 を参照。

⁹⁰ ラバーヌスとゴットシャルクの児童奉献 (*Oblatio puerorum*) の正当性をめぐる対立については、Patzold, S., Hraban, *Gottschalk und der Traktat De Oblatione Puerorum*, in: *Raban Maur et son temps*, Turnhout, 2010, pp.105-118 を参照。

⁹¹ Patzold, S., Hraban, *Gottschalk und der Traktat*, pp.105-118.

⁹² Patzold, S., Hraban, *Gottschalk und der Traktat*, pp.105-118.

⁹³ 「帝国整序令」(*Ordinatio Imperii*) はルートヴィヒが帝国の継承計画を定めた文書である。この文書の内容を、岩村清太氏が簡潔にまとめているため、引用する。「…それまでフランク族にはなかった長子権を設けて年長のロタールを帝位につけ、他の皇子たちには王の称号を与え、ピピンはアクイタニア王に、ルートヴィヒ 2 世はパルチア王に任じ、同時に後者ふたりは長子ロタールの権威の下にあるとした。もし兄弟のうちだれかが死亡した場合、その男子があとを継ぎ、子どもがなかった場合は、ロタールがその王国を継ぐとした。またもしロタールが死去した場合、家臣たちは残りのふたりの兄弟のひとりをもつて後継者として選出するとした。こうして、敬虔帝は帝国の分裂を防ごうとしたのであった。」ニタルト／岩村清太訳『カロリング帝国の統一と分割—『ニタルトの歴史四巻』知泉書院 2016 年、訳者まえがき、vi 頁。

⁹⁴ Ludwig der Fromme, *LexMA Bd.5*, col.2171-2172.

⁹⁵ Bigott, B., *Politische und Ideologische Positionen Hrabans unter Ludwig dem Frommen und seinen Söhnen*, in: *Raban Maur et son temps*, pp.77-89.

ルイの死後、ラバーヌスが支持したのはロタール1世であった。というのも「帝国分割令」において正当な後継者とされていたのが彼であったため、また帝国の分割支配ではなく、ロタールの単独支配を望んでいたためである⁹⁶。彼が支持したロタール1世は840年、フントノワでルートヴィヒ・ドイツ人王とシャルル禿頭王と戦うが、当初目指していた短期間での勝利を達成出来ず、両者と停戦協定を結ぶこととなった⁹⁷。ロタールを支持していたラバーヌスは彼の敗北を受け、恐らくその政治的立場を理由に修道院長を退任することとなる。

いくつもの大きな問題に苛まれたラバーヌスであったが、彼の執筆活動はこの時期にその最初の盛り上がりを見せる。S・ハーレンダーによるラバーヌスの著作目録⁹⁸によれば、彼は822年から842年までの間に30作品前後を手掛けている。そこに含まれるのは、聖書のあらゆる部分の註解書（20点前後）や『説教集（*Sermones*）』、『聖ベネディクトの戒律註解』（*Commentaria in Regulam S. Benedicti*）、『教会の規律について』（*De disciplina ecclesiastica*：『聖職者の教育について』の短縮版）といった修道院内で必要とされたテキストから、『補佐司教について』（*De chorepiscopus*）『美德と悪徳について』（*De virtutibus et vitiis*）、『聖体について』（*De eucharistia, De corpore et sanguine Domini*）、『秘跡について』（*Opusculum de sacramentis*）、『何親等との結婚が許されるのか』（*Quota generatione connubium licitum sit*）、『（人間の）予定説について』（*De praedesitatione*）といった教会法に関わる一般的な諸問題まで扱っている。また、当時の政治情勢やラバーヌスが直面した問題を踏まえ、『児童奉獻について』（*De oblatione puerorum*）や『子供たちの父に対する尊敬について、また家臣たちの王に対する尊敬について』（*De reverentia filiorum erga patres et subditorum erga reges*）が執筆された。更に、『聖十字架礼讃』の写本もこの時期に恐らく4点制作されており、それぞれマインツ大司教オトガルス、ルイ敬虔帝、教皇グレゴリウス4世、ブルージュ大司教ラドゥルフに献呈された。またルイ敬虔帝の帝妃ユディトに対しても『ユディト記註解』『エステル記註解』が執筆された⁹⁹。

著作群の主題は、修道院長就任以前のラバーヌスのそれと比較してより多岐にわたっている。このような主題の多様化を引き起こしたのは直接交友関係がもった人物や彼の作品の名声を聞いた人物らからの著作の執筆依頼であったと言える。上記の作品のほとんどは、他の地の大司教らからの依頼で制作されている。そうした執筆依頼が彼の許に届いていたという事実は、彼が王立修道院フルダの院長として、カロリング朝フランク王国の知識人ネットワークに組み込まれたこと、また現場で聖務にあたる各地の司教・修道院長たちから、現場で活かすことのできる知の集成づくりの点で評価されていたことを示す。そして、『子供たちの…』の執筆と修道院長退任のタイミングからは、ラバーヌスが一修道院長であるだけでなく、国王とその息子たちの争いに巻き込まれるほどに重要な政治的アクターとなっていたことを窺い知れる。

⁹⁶ Bigott, B., Politische und Ideologische Positionen Hrabans, pp.77-89.

⁹⁷ Bigott, B., Politische und Ideologische Positionen Hrabans, pp.77-89.

⁹⁸ Haarländer, S. *Hrabanus Maurus zum Kennenlernen: ein Lesebuch mit einer Einführung in sein Leben und Werk*. Mainz 2006, pp.160-171.

⁹⁹ Beuckers, K. G., *Kreuzeslob. Frühmittelalterliche Bildgedichte von Hrabanus Maurus. Kunsthistorischer Kommentar zur Faksimile-Edition der Handschrift aus der Bibliotheca Apostolica Vaticana Reginensis latinus 124*. Stuttgart 2014, pp.10-11.

第4節 ペテルスベルクでの隠居とマインツ大司教就任、そして死：842年～856年

政治的闘争に巻き込まれたラバーヌスは学友であるハットーに修道院長職を任せ、自身は退任した¹⁰⁰。しかし彼がフルダを離れることはなく、フルダ近郊のペテルスベルクに隠居し、イシドルスに立脚した大著『事物の本性について』（*De universo/De rerum naturis*）やその他の神学的著作を執筆した。

隠居中であった843～845年、ラバーヌスはルートヴィヒ・ドイツ人王とラスドルフで会合する。王の方がラバーヌスをラスドルフに呼び出したのである¹⁰¹。両者はこの機会に和解を果たし、そのことはラバーヌスのマインツ大司教就任の布石となった¹⁰²。

こうして彼は847年、60代後半にして、ルートヴィヒ・ドイツ人王によって、ポニファティウスの弟子ルルに始まり、アルプス以北で最大の司教区を統率するマインツ大司教の系譜に名を連ねることとなった。

マインツ大司教としてのラバーヌスの活動についてはあまり史料がなく、詳細を知ることが難しいが、彼が在位期間中に開催した3度の教会会議（847年10月、848年10月、852年10月）の史料から、彼の熱意を垣間見ることが出来る。

W・ハルトマンによれば、ラバーヌスの生きた時代において、彼が大司教に就任する以前、マインツでの教会会議は813年と829年の二度しか開催されていなかった。その上、それらはどちらも帝国全体の改革プログラム推進のためのもので、司教主導ではなく支配者主導であった¹⁰³。ラバーヌスが大司教であった期間、ルートヴィヒ・ドイツ人王が教会会議を召集したとの記録はないことから、3回の教会会議はラバーヌスのイニシアティブで開催されたと推測できるという。また、ハルトマンはラバーヌスの説教集や書簡の内容と3度の公会議の決議録を比較し、条項の内容にラバーヌス個人の考えがかなりの程度反映されていることを明らかにした¹⁰⁴。そのことから、高齢で大司教を務めたラバーヌスはその年齢にかかわらず、精力的に、管轄教区の司牧の改善に関与していたと結論付けている。

3度の教会会議のうち2度目の848年は異端思想への対処のための召集であった。840年には既に、ラバーヌスは司教ノティングから予定説について誤った事柄を吹聴する人々がいると報告を受けており、その返信として予定説に関する自身の考えを『予定説について』（*De praedestinatione*）という形にまとめていた。その後異端思想を唱える人物がゴットシャルクであることが判明し、848年の会議で両者は再び論争することとなった。848年の公会議については詳しい史料が残っていないが、結果としてゴットシャルクは公衆の面前で鞭打ちに処され、ランス大司教ヒンクマルの管轄下であるオルベ修道院に身柄を引き渡され、自身の思想を捨てることを余儀なくされた¹⁰⁵ことから、フランク王国最大規模の教区を統べるラバーヌスの正統信仰の守り人としての強硬な態度が感じられる。

¹⁰⁰ Wilhelmy-Kotzur, *Rabanus Maurus. Auf den Spuren eines Karolingischen Gelehrten*, pp.16-19. 著者 W・ヴィルヘルミーはラバーヌスが修道院長を辞した原因について、842年に彼が著した書簡には様々な病が原因であると書かれているが、実際は政治的状況が大きな要因であったと考えている。

¹⁰¹ MGH Epistolae, Bd.5, p.465, Hrabani Mauri Epistolae, Nr.33.

¹⁰² ルイ敬虔帝の3人の息子に対するラバーヌスの考えや態度についてはビゴットの論文が詳しい。Bigott, B., *Politische und Ideologische Positionen Hrabans*, pp.77-89.

¹⁰³ Hartmann, W., *Die Mainzer Synoden des Hrabanus Maurus*, in: *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*. Wiesbaden 1982, pp.130-144.

¹⁰⁴ 例えば、近親相姦や近親婚についての852年の決議は男女共に平等な裁きを推奨しているが、同様の内容がラバーヌスが補佐司教レギンバルドゥスに宛てた書簡においても確認できる。Hartmann, W., *Die Mainzer Synoden des Hrabanus Maurus*, pp.130-144.

¹⁰⁵ Haarländer, S., *Hrabanus Maurus zum Kennenlernen*, pp.48-50.

このようにして自ら決議録の内容編纂に関与し、異端の排除を通じて大司教区の司牧的ケアのために尽力したラバーヌスであったが、貧しい者たちに対する物的ケアも忘れてはいなかった。2度目の教会会議後の850年、ラバーヌスの管轄する地域で大規模な飢饉が発生した際、ラバーヌスは約300人の食べ物の無い民衆に毎日食料を供給したことがフルダ年代記に記録されている¹⁰⁶。他にも、847年のマインツ教会会議決議には貧民の保護に関わる詳細な条項が多くみられるなど¹⁰⁷、困窮する人々への配慮も欠かさなかった大司教ラバーヌスの姿が見えてくる。

この時期のラバーヌスの著作は、制作年代が判明しているもので約10点である。内容は、先に触れた『事物の本性について』という百科事典や聖書註解書の他、大司教就任後は他地域の修道院長や司教からの教会法上の問題に関する問い合わせへの返答や説教集、贖罪規定書、ロタール2世に献呈された『魂の美德について』等である¹⁰⁸。この中で特に注目すべきなのが『事物の本性について』である。『事物の本性について』はハルバーシュタット司教ハイモの依頼を受けて執筆したもので、ルートヴィヒ・ドイツ人王にも献呈されている¹⁰⁹。内容の多くはイシドルスの引き写しであるが、その構成にはラバーヌス独自の工夫が見られることをF・ブルンヘルツルは指摘している¹¹⁰。イシドルス版が自由七科（1-3巻）の順序に従い、医学（4巻）、法制度と年代計算法（第5巻）、教会における行為（第6巻）、神・天使・聖人（第7巻）とまとめ、その後民族（第9巻）、言語（第10巻）、人々（第11巻）、動物（第12巻）、地球（第13巻）、農業（第14巻）、戦争（第15巻）、船・建築・服装（第16巻）、その他の事物（第17巻）の順に執筆したのに対し、ラバーヌスはこれらの項目を、キリスト教的ヒエラルキーに則った順序へと並び変えた。すなわち初めにキリスト教において最も高いとされる創造主としての神を扱い、その後聖霊、宇宙について論じ、その後世俗世界として、地球とそこで生活する人々やより小さなものについて取り上げているという¹¹¹。ブルンヘルツルの言うところには、ラバーヌス以前にこのような構成の『事物の本性について』は見られない。更に、イシドルスが物事の性質や言葉の意味を説明するに留まっているのに対し、ラバーヌスはそれに加えて物事の持つ神学的な意味にも言及しているという。加えて、この時期には多くの祭壇碑文も手掛けており、マインツ大司教区管轄下の施設に献呈されている¹¹²。

以上のラバーヌスの業績や執筆活動から理解されるのは、修道院長時代に引き続きラバーヌスに求められた、時代の知の集成の提供者としての姿だけではない。マインツ大司教という影響力の大きい立場を有効に活用し、フランク王国全体の司牧改革に努めた、高齢ながらも熱意ある改革者としてのラバーヌスである。ラバーヌスは856年2月4日にその生涯を終え、聖マルティヌスと聖ポニファティウスが守護するマインツの聖アルバヌス教会に埋葬された。

小括

¹⁰⁶ Weber, W., *Hrabanus Maurus in seiner Zeit 780-1980*. Mainz 1980, p.13.

¹⁰⁷ Weber, W., *Hrabanus Maurus in seiner Zeit 780-1980*, p.11.

¹⁰⁸ Haarländer, S. *Hrabanus Maurus zum Kennenlernen*, pp.169-171, pp.56-57. ハーレンダーは、ラバーヌスがロタール2世に献呈した2つの書物（『魂の美德について／軍事的な物について抜粋集 *De virtutibus anmae/De re militaria*』『キプリアヌスの夕食 *Cena Cypriani*』）について、王への献呈書としては珍しい主題の選択であり興味深いとしている。

¹⁰⁹ Beuckers, K. G. *Kreuzeslob*, pp.11-12.

¹¹⁰ Brunhölzl, F., *Zur geistigen Bedeutung des Hrabanus Maurus*, in: *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*, pp.1-17.

¹¹¹ Beuckers, K. G., *Kreuzeslob*, pp.11-12.

¹¹² MGH Poetae, Bd.2, pp.154-258.

ここまでラバーヌスの生涯を通観してきたが、ラバーヌスはカール大帝によるカロリング・ルネサンスの文教政策に即して育成され、社会的地位の上昇を遂げた人物であることが明らかになった。貴族家門の次男として生まれ、家門と結びつきのあった修道院フルダに預けられたラバーヌスは同地で学問的才能を開花させた。フルダはその創設期から写字室を備え¹¹³、王家とも密接な関係にあった大修道院で、カロリング・ルネサンスの主導的な立場を任された修道院の1つであった。才を見出されたラバーヌスは修道院長バウグルフとラトガルスによって数名の修道士と共に国王宮廷やトゥールのサン・マルタンで学ぶ機会を与えられ、カロリング・ルネサンス第一世代の知識人から学び、国王宮廷や自身と類似した境遇の同世代の人物らと人的ネットワークを築く。その後、フルダ修道院に戻り、修道院附属学校長として教鞭をとったラバーヌスはその執筆活動を通じて、同時代に活躍する修道院長、司教、伯、王たちに貢献した。彼による著作は師から教授された内容を踏まえてはいたが、師と異なる方向性をもつこともあり、『聖十字架礼讃』はその一つである。彼がフルダや宮廷、トゥールのサン・マルタンで磨いた文才とそこで築いたコネクションは彼を時代の要人と結びつけ、学問に励む一修道士から重要な政治的アクターへと変え、最後には聖俗どちらにも影響力を行使するマインツ大司教の地位へと導いた。彼の根本にある学問経験には、国王宮廷とアルクインが密接に関わっている。故に彼の聖界における社会的地位の上昇と活躍は、カロリング・ルネサンス第一世代が整えた育成の道をたどった一つの成果と捉えることができよう。

¹¹³ Raaijmakers, J.E., *The Making of the Monastic Community of Fulda*, p.82.

表：ラバーヌス・マウルスの生涯¹¹⁴

780年頃	ラインフランケン地域の貴族出身でマインツ周辺に土地を所有する UUaluram と UUaltrat の間に生まれる
788年頃	puer oblatu sとしてフルダに預けられる
791年9月14日 (Quatembermittwoch)	トンスラを受ける
798-800年	カール大帝宮廷に滞在、アルクインに教わる。
801年	助祭として叙階される
802-804年以前まで	アルクインのもと、修道士仲間ハットーと共にトゥールのサン・マルタン修道院で修学。アルクインから、「マウルス」との二つ名を授かる。
帰還後	フルダの附属神学校長として活動。
810年以降	第一作目として『聖十字架礼讃』を執筆。
814年	マインツのハイストゥルフ（マインツ大司教）から司祭に叙階される。
817年	アーヘンの宗教会議で修道院長ラトガリウスが退任、アイギリスが就任。ラバーヌスの教授・著述活動再開。
819年	聖ボニファティウスの聖遺物（骨）をフルダ修道院へ奉遷。 『聖職者の教育について』（ <i>De institutione clericorum</i> ）執筆。
820年	『復活祭日の計算について』（ <i>De computo</i> ）執筆。
822年頃/以前	旧約・新約聖書への註釈執筆。
822年	フルダ修道院長に選任。
828年	対ブルガール人戦争に向かうルートヴィヒ・ドイツ人王に同行。
829年	ゴットシャルクと彼の奉献（ <i>Oblatio</i> ）の正当性を巡り対立 マインツ公会議
840年	ルートヴィヒ・ドイツ人王討伐に向かうルートヴィヒ敬虔帝に随従。
840年頃/以前	殉教録執筆。
841年	ロターール1世の同行者としてアーヘンとマインツに滞在。
822-842年	多くの生徒を集める（ヴァイセンブルクのオトフリート、ヴァラフリート・ストラポ、フェリエールのルプス、その他名声のあるヘーリアント詩人など）
841-853年	懲罰規定書執筆。
842年	修道院長をハットーに任せ、自身は退任。フルダ近郊のベテルスベルクに隠居。
842年以降	百科事典『事物の本性について』（ <i>De rerum naturis</i> ）の執筆、讃美詩執筆。
843-845年	ラスドルフでルートヴィヒ・ドイツ人王と会合。和解。
847年	マインツ大司教オトガルス（826-847）の死後ルートヴィヒ・ドイツ人王によりマインツ大司教に選任。マインツ教会会議開催。
848年	マインツ教会会議：修道士ゴットシャルクの予定説（人間は最初から善と悪に運命づけられているという考え方）の判決。 ルートヴィヒ・ドイツ人王やその側近たちと和解。
850年	ラインガウでの飢饉：大司教ラバーヌス・マウルスは民衆に食糧供給。
856年	ライン川（？）の片隅で死去、マインツの聖アルバヌス教会に埋葬。

¹¹⁴ 年表は、以下の論考を参照して作成した。Ernst, U., Die Kreuzgedichte des Hrabanus Maurus als multimediales Kunstwerk. Textualität-Ikonizität-Numeralität, in: *Wissen und Neue Medien. Bilder und Zeichen von 800 bis 2000*. Berlin 2003, pp.13-37; Wilhelmy, W., *Hrabanus Maurus. Auf den Spuren eines Karolingischen Gelehrten*, p.13.

第2章 『聖十字架礼讃』分析（1）—作品の構成

第1章の小括で述べたように、ラバーヌスの著作は師アルクインと異なる方向性を持つことがあった。本論文の分析対象たる『聖十字架礼讃』はその一つである。本章では、『聖十字架礼讃』がいかなる点で師とは異なり新規性を持つのかを検討するため、ヴァティカン本『聖十字架礼讃』（Vat.Reg.lat.124, ヴァティカン図書館所蔵、以下ヴァティカン本）の内容（図像、本文、解説文）分析を行う。その後、ラバーヌスの時代までに制作されてきた形象詩の作例と比較しながら『聖十字架礼讃』が引き継いだ／引き継がなかった要素・新しく取り入れた要素を考察しつつ、『聖十字架礼讃』制作にあたり形象詩というスタイルを選択したラバーヌスの意図を検討する。

第1節 現存する写本

『聖十字架礼讃』が最初に史料に現われるのは、812年頃にラバーヌスが学友ハットーに宛てた書簡においてである¹。この中でラバーヌスはハットーに、完成した『聖十字架礼讃』写本の校閲を依頼している²。この時ハットーに送付されたラバーヌスの自筆原稿や、ハットーによる修正本原本は現存していない³が、今日に至るまで約86点の写本に転写されている⁴ことから、長きにわたってその需要が尽きなかったことがわかる。

『聖十字架礼讃』は、2巻から成る。第1巻は①一連の献呈図・文（詩）、②序文（Prologus）、③目次（Capitula）、④形象詩（第1～28詩）を含む。①については写本ごとにバリエーションがある。例えばヴァティカン本は、マインツ大司教オトガルスへの献呈文、トゥールの聖マルティヌスへの献呈図・詩、教皇への献呈図・詩、ルートヴィヒ敬虔帝への形象詩による献呈図・詩を含むが⁵、フランス国立図書館に所蔵されている写本（Ms. lat.2421）はサン・ドニ修道院の修道士に向けた献呈詩とルートヴィヒ敬虔帝への形象詩による献呈図・詩が綴じられている。更に、アミアン市立図書館所蔵の写本（Cod.223）には教皇への献呈図・詩と敬虔帝への形象詩式の献呈図・詩が含まれている。このことから、写本の献呈先によって異なる献呈図・詩の組み合わせが採用されていたことが確認される。第2巻は第1巻の内容を散文体で解説する役割を担い、①序文、②各詩の散文体での解説、から成る。ヴィルヘルミー⁶によれば、この第2巻は、『聖十字架礼讃』における高度に芸術的な言語と図像について、その意味内容が正しく理解されないのではないかと懸念したラバーヌスが追加した⁷もので、当初から

¹ MGH Epistolae, Bd.5, p.381, Hrabani Mauri Epistolae, Nr.1.

² 更にこの書簡には、誰かに写本を転写させる際、原本に描かれた形象詩や文字の順番が損なわれてしまうのではないか、というラバーヌスの不安が書かれている。Haarländer, S., *Rabanus Maurus zum Kennenlernen*. Mainz 2006, pp.80-81; MGH Epistolae, Bd.5, p.381, Hrabani Mauri Epistolae, Nr.1.

³ ボイカースによれば、『聖十字架礼讃』の最初のバージョンには献呈図は含まれていなかったという。しかし、彼はその根拠を述べていない。Beuckers, K.G., *Kreuzeslob. Frühmittelalterliche Bildgedichte von Hrabanus Maurus. Kunsthistorischer Kommentar zur Faksimile-Edition der Handschrift aus der Bibliotheca Apostolica Vaticana Reginensis latinus 124*. Stuttgart 2014, p.17.

⁴ ラバーヌスの著作が転写された写本についてはコッティエが長年に渡って調査しており、2012年にその成果がMGHから補助資料（Hilfsmittel）として刊行された。その後半部には、ラバーヌスの作品が転写された写本が作品ごとに整理されており、『聖十字架礼讃』については86点の写本が挙げられている。Kottje, R., *Verzeichnis der Handschriften mit den Werken des Hrabanus Maurus*. Hannover 2012.

⁵ ヴァティカン本は、他の写本では一部しか採用されていない献呈図・詩サイクルの全てを含む。同時代に製作された写本で、完全な献呈図・詩サイクルを持つのは他に、トリノ本（K.II.20）とウィーン本（Cod.652）がある。

⁶ Wilhelmy, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren eines karolingischen Gelehrten*. Mainz 2006, p.38.

⁷ 『聖十字架礼讃』第二巻の序文にラバーヌスの懸念が記されている。

『聖十字架礼讃』のプログラムの一部として計画されていたか否かは議論の余地があり、一部の研究者⁸はそれがのちの修正・改訂の過程で制作されたと考えている⁹。

今日までに制作された 86 点の写本において、ラバーヌスが作品を完成させた 9 世紀のうちに制作された点数についてはいくつかの見解があった。ただし、これまでの研究史を踏まえると 11 点とするのが妥当であるように思われる。ミュラーは 1973 年の論考で、『聖十字架礼讃』各写本の献呈文の言葉遣い¹⁰から大まかな制作年代を推定し、9 世紀に制作された写本として 6 点を挙げた¹¹。その後の 1976 年、コッティエはミュラーの 1973 年の論考に対する批評において、ミュラーにおいては 10 世紀の制作とされていた 2 点の写本と、ミュラーが触れていなかった 1 点の写本の断片を、9 世紀の制作であると補足した¹²。そして 1991 年、U.エルンストは古代から近代までの形象詩を扱ったモノグラフィーにおいて、ミュラーやコッティエの研究に依拠して、改めて『聖十字架礼讃』写本を時代ごとに整理した。そこでは 9 世紀の制作として合計 12 点の写本が挙げられた¹³。また、2012 年に MGH から公刊された、コッ

「…私（ラバーヌス）は、聖十字架の賞賛のために韻文体で著した作品を、少なくとも散文体では意味がよくわかるように、力を尽くして散文体へと書き換えた。韻文体では（文字の）配置の難しさや、文字で図形を形作る必要性から、選んだ言葉の意味が十分に明確ではないように思われるためである」（…opus quod in laudem sanctae crucis metrico stylo condidi, in prosam uertete curauit, ut quia ob difficultatem ordinis et figurarum necessitate obscura locutio minusque patens sensus uidetur metro inesse, saltem in prosa lucidior fiat.）。なお、和訳は以下に挙げる参考文献の独訳を参照した、筆者の拙訳である。Ernst, U., *Visuelle Poesie. Historische Dokumentation theoretischer Zeugnisse: Von der Antike bis zum Barock*. Berlin 2012, pp.216-217.

⁸ シャゼルはその一人である。Chazelle, C., *The Crucified God in the Carolingian Era. Theology and Art of Christ's Passion*. Cambridge 2001, p.100.

⁹ Wilhelm, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, p.38.

¹⁰ オトガルスに献呈した写本では、「以前」を意味する言葉として“dudum”が使用されており、同じ表現はルートヴィヒ敬虔帝献呈本にも見られる。しかし、教皇献呈本では同じ意味の別の言葉“tempore prisco”が使用されており、サン・ドニ修道院献呈本に同様の表現が見られる。このことから、言い回しの違いは制作年代の違いを示すと主張している。一方、教皇献呈本の後に制作されたであろうフリウリ伯エベルハルト献呈本では、再び“dudum”が使用されている。このことからミュラーは、言い回しの違いは制作年代の違いを反映しているものの、献呈相手との心情的な距離の近さも同時に表現していると結論付けている。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus - De laudibus sanctae crucis. Studien zur Überlieferung und Geistesgeschichte mit dem Faksimile Textabdruck aus Codex Reg. Lat. 124 der Vatikanischen Bibliothek*. Ratingen 1973, pp.30-35.

¹¹ 以下の 6 つの写本を挙げている。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, p.36.

Rom, Biblioteca Apostolica Vaticana, Cod.Reg.lat.124（出所：フルダ）

Paris, Bibliothèque nationale, Cod. lat. 2423（出所：フルダ、以前の持主：大司教ラドゥルフ、ブルジュのサン・スルピス）

Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod.652（出所：フルダ？かつての持主：ヴェルツブルクの聖シュテファン教会？）

Lyon, Bibliothèque de la Ville, Cod.597(511)（出所：トゥール）

Amiens, Bibliothèque municipale, Cod.223（出所：コルビー）

Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod. 911（以前の持主：ザルツブルクの聖堂図書館）

¹² 彼は以下の 3 点を挙げている。Kottje, R., Rezension zu H.-G. Müller: Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis. Studien zur Überlieferung und Geistesgeschichte mit dem Faksimile Textabdruck aus Codex Reg. Lat. 124 der Vatikanischen Bibliothek(1973), in: *Rheinische Vierteljahrsblätter* 40, 1976, pp.278-280.

Turin, Biblioteca Nazionale Universitaria K.II.20

Paris, Bibliothèque nationale, Ms. lat. 2422.

Strasbourg, Archives du Bas-Rhin, J suppl.1985-27 [H1717]（断片）.

¹³ ミュラーとコッティエが挙げたものの他に以下の写本が追加されている。

Paris, Bibliothèque Nationale, Cod.lat.2421.

Köln, Cod.110(Darmst.2109)

Västerås(Sweden), Stadtbibliothek（第 27 詩が書かれたかなり損壊した紙葉）

ティエによるラバーヌス・マウルス作品を含む全写本のリスト¹⁴では、9世紀に制作された『聖十字架礼讃』写本は11点であった¹⁵。彼らの研究とペランの2009年の論考を踏まえ、ボイカースは2014年のモノグラフィーにおいて11点の写本を9世紀のものとして挙げている¹⁶。本論文においては、コッティエによる写本リストに依拠して、9世紀に制作された『聖十字架礼讃』写本は11点であるとの立場をとる。それを踏まえ、以下ではその11点について、判明している限りの献呈先と来歴、他写本との影響関係について確認していく。なお、研究状況に差があり、全ての写本に対し同程度の情報を集めることはできず、特に⑩と⑪については断片が残存しているのみであることから、名を挙げるだけに留める。

① ローマ、ヴァティカン図書館所蔵（Cod.Reg.lat.124）

今日ヴァティカン図書館が所蔵する『聖十字架礼讃』写本は、スウェーデンの女王クリスティーナ（1626～1689年）の蔵書から獲得されたものである¹⁷。彼女は、三十年戦争でプロテスタント軍を率いたスウェーデン王グスタフ2世アドルフの娘で、プラハ侵攻（1648年）の際に皇帝ルドルフ2世の美術品コレクションの大部分をストックホルムに持ち帰らせたという。その中に『聖十字架礼讃』ヴァティカン本も含まれていたと考えられる。というのも、皇帝ルドルフ2世は1598年6月15日の書簡¹⁸でフルダ修道院に対し、プラハで写しを制作する¹⁹ために同写本を要求し、8月4日に受け渡されたことが証明されているからである²⁰。同写本は恐らくフルダに返却されることはなく²¹、クリスティーナによ

Ernst, U., *Carmen Figuratum. Geschichte des Figurengedichts von den antiken Ursprüngen bis zum Ausgang des Mittelalters.* Köln 1991, pp. 309-321.

¹⁴ Kottje, R., *Verzeichnis der Handschriften mit den Werken des Hrabanus Maurus.* Hannover 2012.

¹⁵ 以下の11点である。Kottje, R. *Verzeichnis der Handschriften.*

Amiens, BM, Ms.223. (825-850年)

Lyon, BM, Ms.597(511) (830-860年)

Paris, BNF, Ms.lat.2421 (9世紀)

Paris, BNF, Ms.lat.2422 (9世紀半ば)

Paris, BNF, Ms.lat.2423, (9世紀半ば)

Straßburg, Arch. departementales du Bas-Rhin, J.suppl.1985-27 (825-850年)

Turin, BN, R 1456(K II 20), (9世紀半ば)

Vesteras, Stadsbibliotek, s.n. (9世紀第二四半期)

Vatikan, BAV, Reg.lat.124 (9世紀第二四半期)

Wien, ÖNB, Cod.652(Theol.39) (9世紀半ば)

Wien, ÖNB, Cod.911(Salib.43) (860-890年)

¹⁶ ボイカースはペランの以下の論文を踏まえ、ラバーヌス存命中に制作された『聖十字架礼讃』写本は11点だと述べている。Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.18; Perrin, M., *L'iconographie de la "Gloire a la sainte croix" de Raban Maur.* Turnhout 2009. pp. 97-99. なお、ボイカースはその論考において9世紀の写本は11点と述べているが、実際にはそのうちの10点しか挙げられていない。

¹⁷ ヴァティカン本の来歴については以下を主に参照した。Wilhelmy, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, p.33; Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.17.

¹⁸ この時の書簡はフルダ州立/大学図書館の B18.4° 写本の fol.18r に含まれている。Wilhelmy, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, p.33.

¹⁹ この時に制作された写本は現在、パリのアーセナル図書館に所蔵されている（Paris, Bibliotheque de l'Arsenal, Codex 472）。Wilhelmy, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, p.33. なお、写本の内容構成や言葉遣い、綴りのミスなどから、ミューラーはこの写本がヴァティカン本『聖十字架礼讃』を手本にしていることを示した。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.49-53.

²⁰ 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本がプラハに届いたことを知らせる書簡は、ウィーンの国立公文書館に所蔵されている（Österreichisches Staatsarchiv Wien, Abteilung "Hofakten des Ministeriums des Inneren", Karton I E4）。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.46-47, Anm.119.

ってストックホルムまで持ち去られてしまった。1654年、クリスティーナは王座を退くとカトリックに改宗し、ローマに向かった。以降彼女はローマに定住し、1689年に同地で亡くなった。彼女の死後、その蔵書とコレクションは、生前彼女と親しかった枢機卿デチオ・アッツォリーニの手に委ねられたが、クリスティーナの死の数週間後に彼も亡くなった。そのためコレクションの大部分は教皇インノケンティウス9世によって購入され、ヴァチカン図書館に所蔵されるに至った。以上がこの写本の来歴である。

ヴァチカン本は、現存する9世紀の他の写本と比較して最も完全な形で残っており、第1巻（Liber primus）は聖マルティヌスへの献呈図・詩、教皇への献呈図・詩²²、ルートヴィヒ敬虔帝への献呈図・詩、そして全28詩を全て含んでいる。また第2巻（Liber secundus）も全ての紙葉が残っている。更に、ヴァチカン本には誤った綴りの単語や誤った前置詞が書かれている箇所、正しい綴りや前置詞が書き込まれている。そのため、他の写本の特定の箇所について、修正後の綴りや前置詞が反映されている場合、その写本はヴァチカン本より後に制作されたと推測できる。ミュラーは1973年のモノグラフィーにおいて、ヴァチカン本と他の写本とのテキスト比較を行い、このヴァチカン本が現存する写本の中で最古の伝播の段階（die älteste Überlieferungsstufe）に属することを突き止めた²³。

ヴァチカン本の使用について、これまでの研究では大きく2つの見解がある。1つ目は、フルダ修道院での保管用（Hausexemplar）として利用されたとする見解である。この立場に立ったのはミュラー（1973年）やホルター²⁴、ペランである。彼らはヴァチカン本に数多くみられる語句の訂正・修正を根拠に、①フルダの修道士たちはヴァチカン本を手元で参照しながら、新たな『聖十字架礼讃』写本を制作していた、もしくは、②ペランが主張したように²⁵、ヴァチカン本の転写元（ペランはUrfuldaと呼んでいる）が存在し、そこでなされた修正がヴァチカン本に反映されたとの説を提示した。一方、H.シュピリングは1992年のモノグラフィーにて、このヴァチカン本が、マインツ大司教オトガルスに宛てられた『聖十字架礼讃』写本であるという新たな見解を示した²⁶。彼女はまず、『聖十字架礼讃』写本を受け取った人物らを特定するため、同著作の献呈詩の宛先を検討した。6名の人

²¹ ルドルフ2世は恐らく、フルダから借用した写本を返却しなかった。というのも、1601年からフルダ教会の長を務めたクリストフ・ブラウアーが『聖十字架礼讃』の形象詩の一部を転写した際、ヴァチカン本ではなく、ヘルスフェルトで制作された写本を手本にしているためである。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.49-53.

²² ボイカースは、ヴァチカン本における一連の献呈図・詩サイクルについて、『聖十字架礼讃』の教皇献呈本であるアミアンの写本（Cod.223）の制作後（844年直前頃）に追加されたのでなければ、「聖マルティヌス→教皇→敬虔帝」の順番にはなり得ないと指摘している。というのも、教皇への献呈図は、教皇献呈本制作時に新たに考案されたものだと考えられるからだという。ただし、教皇への献呈図が教皇献呈本制作時に考案された、とする根拠は挙げられていない。Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.62.

²³ ミュラーは、ヴァチカン本における綴りや単語のミスと同じミスを含むことを根拠に、他にこの段階に属する写本として以下を挙げている。

アドモント修道院附属図書館 cod.219 の転写元（現存せず）

ツヴェットウル修道院附属図書館 cod. 86 の転写元（現存せず）

リヨン、市立図書館 Cod.597(511)（トゥールのサン・マルタン献呈本の写し）

グルノーブル市立図書館 Cod.52（Lyon 597の写し）

更に、Admont 219 と Zwettl 86 の転写元の写本は共通しており（ミュラーはこの転写元を“z”と呼んでいる）、更にzの転写元はハットーに送られた試作本であった可能性を指摘している。

²⁴ Holter, K., *Liber de laudibus sanctae crucis: Vollständige Faksimile-Ausgabe im Originalformat des Codex Vindobonensis 652 der Österreichischen Nationalbibliothek. Vol. 1-2*. Graz, 1973.

²⁵ Perrin, M., *Le De laudibus sanctae crucis de Raban Maur et sa tradition manuscrite au IX^e siècle*, in: *Revue d'histoire des textes* vol. 19, Paris, 1989, p. 191-251; Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.17.

²⁶ シュピリングは、ミュラーやペランによる写本の系統関係の復元に依拠し、マインツ大司教ハイストゥルフが写しを求め、最終的には825年にオトガルスに献呈されたヴァチカン本であると同定した。Spilling, H., *Opus Magnentii Hrabani Mauri in honorem sanctae crucis conditum. Hrabans Beziehung zu seinem Werk*. Frankfurt am Main 1992, pp.70-78.

物・施設を候補として挙げた後²⁷、彼女は各献呈先にフルダ制作の写本を1点ずつ当てはめた²⁸。その結果、ヴァティカン本がマインツ大司教オトガルスへ献呈された写本であると主張した。更に彼女はヴァティカン本に見られる修正の跡について、ラバーヌスがマインツ大司教就任時にヴァティカン本を発見し、在任中に書き加えたものだとした。シュピリングの見解はフェラーリによって、「革新的な仮説であり、フルダ由来の『聖十字架礼讃』写本研究の発展における重要な一歩である」とされながらも、説得力に欠けると評価された²⁹。ただ、ボイカースは2014年のモノグラフィーにおいて、シュピリングの見解を採用した³⁰。彼はさらに、ヴァティカン本の装飾の豪華さから、単に依頼された写本を制作し献呈しただけではなく、新たな大司教オトガルスの叙階を適切に祝し、それによってラバーヌスが822年から院長を務めていたフルダ修道院の立場を確実なものとするためにヴァティカン本が制作されたと推測したうえで、献呈の日を826年6月24日だと推定した。この日付はデンマーク王ハラルドがマインツの聖アルバナス教会で受洗した日であり、オトガルスの大司教としての初仕事として記録されている³¹。そのため、写本献呈を利用し自身の修道院のプレゼンスを向上させたかったラバーヌスには理想的な場面であったと主張している。

② リヨン、市立図書館（Cod.597[511]）（トゥール）

トゥールのサン・マルタン献呈本の写し³²。不完全で、献呈文が欠けており³³、第3詩への説明文から始まり第28詩で終わる。ミュラーはテキスト分析の結果、これを最も古い発展段階に属する写本であるとした。

③ パリ、国立図書館（Ms.lat.2423）（フルダ、410×320mm）

この写本はブルージュ大司教ラドゥルフ（在位840/841-866）によってブルージュのサン・シュルピス修道院に送られた後、フランス国立図書館に所蔵されるに至った³⁴。シュピリングによればこれがルートヴィヒ敬虔帝に宛てられた写本だが、その説はフェラーリ³⁵やペラン³⁶等によって反論されている。ボイカースも、この写本は、様式上は最もヴァティカン本に近似しているが、装飾の程度においてはヴァティカン本には程遠いため、皇帝献呈本としては同定が難しい、とシュピリングの説に反論し、皇帝献呈本は既に失われたのではないかとしている³⁷。ミュラーは1973年の論考で、トゥールの聖マルティヌスとルートヴィヒ敬虔帝への献呈文を含むこの写本が「第一発展段階」に属するとし、この写本が

²⁷ トゥール、マインツ大司教オトガルス、ルートヴィヒ敬虔帝、サン・ドニ、教皇、フリウリ伯エベルハルトの6名である。Spilling, H., *Opus Magnentii Hrabani Mauri*, pp.31-50.

²⁸ Spilling, H., *Opus Magnentii Hrabani Mauri*, pp.51-82.

²⁹ ただし、フェラーリは具体的な反証を挙げてはいない。Ferrari, M.C., Hrabanica. Hrabans De laudibus sanctae crucis im Spiegel der Neueren Forschung, in: Gangolf, S. (Hg.), *Kloster Fulda in der Welt der Karolinger und Ottonen*. Frankfurt am Main 1996, pp.493-526.

³⁰ なお、シュピリングの説を支持する根拠は挙げられていない。Beuckers, K.G. *Kreuzeslob. Frühmittelalterliche Bildgedichte von Hrabanus Maurus. Kunsthistorischer Kommentar zur Faksimile-Edition der Handschrift aus der Bibliotheca Apostolica Vaticana Reginensis latinus 124*. Stuttgart 2014, p.18.

³¹ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.18. 元の論文は Staab, F., Die Mainzer Kirche im Frühmittelalter, in: *Handbuch der Mainzer Kirchengeschichte, Bd.1: Christliche Antike und Mittelalter*. Würzburg 2000, pp.87-194.

³² Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.17.

³³ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.17.

³⁴ フランス国立図書館デジタルアーカイブにおける、写本の説明を参照。Gallica, *Rabanus Maurus, De laudibus sanctae Crucis, III* (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9078151c/f8.item>)

³⁵ Ferrari, M.C., Hrabanica, pp. 493-526.

³⁶ Perrin, M., La représentation figurée de César-Louis le Pieux chez Raban Maur en 835. Religion et idéologie, in: *Francia. Forschungen zur westeuropäischen Geschichte*. vol.24,1, 1997.2, pp.39-64.

³⁷ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.18.

その後の作品の伝播の源であると議論している³⁸。更に、彼はこの写本がヴァティカン本と文献学上非常に類似していること³⁹や、ルートヴィヒ敬虔帝への献呈図・文を含むことから制作年代を831年以降と考え⁴⁰、この条件が当てはまるのはオトガルスへの献呈本であると主張し、Ms.lat.2423をマインツ大司教オトガルスに献呈された写本として同定した⁴¹。しかし、ヴァティカン本がオトガルスへの献呈文を含んでいる以上、ヴァティカン本をオトガルス献呈本と考えるのが自然であるように思われる。

④ アミアン、市立図書館 (Cod.223) (コルビー、405mm×330mm)

コルビー修道院の後、現所蔵館へ収められた写本である。この写本には、ルートヴィヒ敬虔帝に向けた献呈文・図 (fol.3v, 4r) 【図1】に加えて初めて教皇に対する献呈文・図 (fol.2v, 3r) 【図2】が挿入されている。更に、写本全体の水準も高いことから、教皇グレゴリウス4世に宛てて制作された写本だと考えられている。なお、聖マルティヌスへの献呈文・図はない。教皇への献呈図が挿入されるのはこの写本が初めてであることから、ミュラーはこの写本を「第二発展段階」に属するとした⁴²。シュピリングもこの説を支持し、この写本に見られる早期の『聖十字架礼讃』写本には稀な、アーチと共に描かれた教皇像に言及した【図2】⁴³。同様の教皇像は、今日ケンブリッジのトリニティーカレッジに所蔵される、930年頃恐らくイングランドで制作された写本 (Cod.Libr.B 16.3) のみに見られるという【図3】⁴⁴。

この写本の完成時期はおそらく842-843年頃である。というのも同写本を教皇に届けるための使節として派遣されたアストリックとルオトベルトという二人の修道士⁴⁵が、843-844年にフリウリ伯エベルハルトのもとに立ち寄っているためである⁴⁶。同写本は844年に完成し届けられたが、同時期にグレゴリウス4世は死去していたため、後任のセルギウス2世に手渡された⁴⁷。

⑤ パリ、国立図書館 (Ms.lat.2422) (365×280mm, fol.1-31が300×250mm, fol.32-42が290×220mm)

サン・ドニへの献呈文は残っていないが、fol.1rに記された大文字のAと先広十字のマークから、サン・ドニに献呈された写本であることがわかる⁴⁸【図4】。ルートヴィヒ敬虔帝への献呈図はなく、献

³⁸ Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, p.83.

³⁹ Ms.lat.2423における“ct”や“rt”といった合字がヴァティカン本に見られる第1の手による合字と類似しているという。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.83-85.

⁴⁰ ミュラーはジーモンの研究に依拠し、敬虔帝への献呈文において、ギリシアからの使節や当時カリフであったアル・マムーン (在位 813-833年) からの使節について言及されていることから、敬虔帝への献呈図・文は831年以降に成立したと主張した。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.32-33; Simon, B., *Jahrbücher des Fränkischen Reichs unter Ludwig dem Frommen*. Bd.2. Berlin 1876, p.11, Anm.11; MGH SS rer. Germ.64, pp.190-191, 467, Anm.676(Thegan, *Die Taten Kaiser Ludwigs, Astronomus, Das Leben Kaiser Ludwigs*).

⁴¹ 更なる根拠として、ミュラーはこの写本の来歴を挙げている。彼が主張するには、おそらくラバーヌス自身が、848年のマインツ公会議の際、その場に出席していたブルージュ大司教ラドゥルフにMs.lat.2423を譲渡したのだという。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.84-85.

⁴² Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.85-91.

⁴³ Spilling, H., *Opus Magnentii Hrabani Mauri*, pp.66-69.

⁴⁴ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, pp.67-68.

⁴⁵ 彼らの名前は、ラバーヌスがフリウリ伯エベルハルトに宛てた書簡や『フルダ年代記』にも記されている。MGH *Epistolae* Bd.5, pp.481-487, *Hrabani Mauri Epistolae*, Nr.42.

⁴⁶ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.18.ただし、根拠となる史料は提示されていない。

⁴⁷ この旨はルドルフによる『フルダ年代記』にも記されている。Reuter, T., *The Annales of Fulda. Ninth Century Histories*, Vol. II. Manchester/New York 1992, pp.22-23.

⁴⁸ サン・ドニ修道院では蔵書される書物に、大文字のAと先広十字のマークが描き込まれたという。そのことからMs.lat.2422はサン・ドニに献呈された本だと判断できるという。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, p.92.

呈文のみが残っている。献呈の際、ラバーヌスは10点の二行詩を添えており⁴⁹、その中でルートヴィヒ敬虔帝に対する献呈図と教皇献呈本に言及しているため、サン・ドニ本の制作は教皇献呈本制作後に行われたと考えられる（「第三発展段階」）。ただしこの写本には教皇、聖マルティヌス、ルートヴィヒ敬虔帝に対する献呈図・文は含まれていない。

⑥ トリノ、国立大学図書館（K.II.20）（デジタル本参照不可）

シュピリングによれば、フリウリ辺境伯エベルハルト宛ての写本だという。火事によってひどく損傷している。シュピリングは教皇献呈本（アミアン本）やサン・ドニ本と字体がかなり類似していることを示した。おそらくフリウリ伯は教皇に写本を届けるため派遣されたフルダからの使者から『聖十字架礼讃』について聞き知り、ラバーヌスに写本の制作を依頼した⁵⁰。この写本は、この写本のためだけの献呈文を欠いている。3つの主要な献呈図・文（トゥールの聖マルティヌス、王、教皇）は存在するものの、その宛先は教皇となっている。

フリウリ伯エベルハルトはこの写本の受領のためフルダに使者を送ったが、実際にはこれを受け取ることができなかったと考えられる。というのもラバーヌスの846年の書簡によれば、エベルハルトは写本の受領を報告しないまま謝意のみラバーヌスに伝えたというためだ⁵¹。また、フリウリ伯の図書館の867年の蔵書目録にもこの写本は記載されておらず、この写本はフルダからフリウリの途上で失われてしまったと考えられる。

ミュラーはこの写本を「第三発展段階」に位置づけ、その制作年代は10世紀であると推定した⁵²。更に彼はこの写本をフリウリ伯エベルハルトへの献呈本とは考えず、この写本の転写元がエベルハルトへの写本であると主張したが、シュピリングの論考やコッティエの写本リスト、ボイカースのモノグラフィーにおいてはこの写本（K.II.20）は9世紀に制作され、フリウリ伯宛であったと考えられている。

⑦ ウィーン、オーストリア国立図書館（Cod.652）（フルダ?かつての持主：ヴェルツブルクの聖シュテファン教会?）

サン・ドニ本とヴァティカン本の転写に携わった写字生の「手」が見られる。また、14世紀に加筆・修正された跡が数多く残っている⁵³【図5】。写本制作の背景や来歴についてはまだ明らかにされていない。3つの主要な献呈図・文（聖マルティヌス、ルートヴィヒ敬虔帝、教皇）、またマインツ大司教オトガルスに対する献呈詩も含まれている。このことは、ラバーヌスがヴァティカン本にオトガルスへの献呈文を追加した後にこの写本が制作されたことを示唆する。それに応じて、この写本の成立時期はラバーヌスのマインツ大司教在位期間中だと考えられている⁵⁴。

ミュラーはこの写本を、他の写本とのテキスト比較から「第三発展段階」としたが、同じ段階に属する他の写本とは異なる単語や綴りを採用しているため、「第三発展段階」の中でもより新しい方であると考えている。また、ツィンマーマンがこの写本の制作地をフルダであるとしたのに対し⁵⁵、ミュラーは、雑然としたテキスト配置やラバーヌスの意に反した色彩の使用⁵⁶から制作地はフルダではないと考え、南ドイツのある地点で制作されたものだと主張した。

⁴⁹ MGH Poetae, Bd.2, p.162, Hrabani Mauri Carmina, Nr.6.

⁵⁰ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, pp.17-18; MGH Epistolae Bd.5, pp.481, Hrabani Mauri Epistolae, Nr.42.

⁵¹ MGH Epistolae Bd.5, pp.481-487, Hrabani Mauri Epistolae, Nr.42.

⁵² Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.96.

⁵³ Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.106-107.

⁵⁴ Holter, K., *Hrabanus Maurus. Liber de Laudibus Sanctae Crucis, Kommentar zur Faksimile-Ausgabe des Codex Vindobonensis 652 der Österreichischen Nationalbibliothek*. Graz 1973, p.21.

⁵⁵ Zimmerman, E.H., *Die Fuldaer Buchmalerei in karolingischer und Ottonischer Zeit*, in: *Kunstgeschichtliches Jahrbuch der k.k. Zentralkommission für Ergorschung und Erhaltung der Kunst- und historischen Denkmale*. Bd.4. Wien 1910.

⁵⁶ ラバーヌスは『聖十字架礼讃』第16詩の解説文にて以下の様に述べている。「したがって、私は青、紫、亜麻色、深紅の4つの主要な色で花の十字架を表しました。(Descripti ergo hic ideo florigeram crucem IIII coloribus praecipuis, id est,

⑧ パリ、国立図書館（Ms. lat.2421）（2422のコピー）

サン・ドニに献呈された写本である Ms.lat.2422 の写しで、いくつかの例外を除き、綴りや単語のミスが一致しているという⁵⁷。9世紀に制作された写本の中で唯一サン・ドニの修道士たちに向けた献呈文を含む。

⑨ ウィーン、オーストリア国立図書館（Cod. 911）（かつての持主：ザルツブルク大聖堂図書館）

ルートヴィヒ敬虔帝への献呈図・文を含む。もとは教皇への献呈図も含んでいたようだが図像部分は破り取られてしまっており、詩のみ残っている。第一巻に加えて、形象詩のテキスト部分のみを書き下した巻が残っている。ミュラーはこの写本を「第三発展段階」に分類した⁵⁸。

⑩ ストラスブール、バ＝ラン県公文書館（J suppl.1985-27 [H1717]）（南西ドイツ、9世紀第二四半期、断片）

⑪ バステルオース（スウェーデン）、市立図書館（s.n）

第27詩が書かれた紙葉のみ残存している写本。1966年に、ブックカバーの詰め物として使われていたのが発見された⁵⁹。

第2節 図像・テキスト分析

本節では、以上の節で確認した情報を踏まえ、『聖十字架礼讃』冒頭の献呈詩と全28詩の内容、並びに図像を分析する。描かれている図像やテキストの分析を通じてラバーヌスの意図や思想を明らかにし、本作品を当時の状況の中でいかに位置づけられるかを検討する次章に繋げることを目的とする。

まず、ヴァティカン本『聖十字架礼讃』全体に共通するページ構成とその他の事項について確認しておく。一般に、形象詩が描かれている見開きでは、左の紙葉に形象詩、右の紙葉に形象詩の解説文が掲載されている【図15】。形象詩はページ全体に描かれるのではなく、ページ上に設けられた正方形の枠線の範囲内に描かれる。枠線の色は様々であるが、背景色は多くの場合紫色（プルプラ）で、その上に白文字で地の文（以下ベーステキスト）が書かれる。ベーステキストを書き下したものは解説文中には書かれず、第28詩以降の紙葉で、全28詩分まとめて掲載されている。形象詩の隣、右の紙葉に書かれた解説文では、多くの場合聖書の箇所が引用され、形象詩の意味が説明される。解説文の後半部では、形象の中に書かれた韻文（以下、インテキスト）の書き下し文が朱色のインクで書かれている。インテキストは、形象詩の内容を簡潔に言い表すことが多い。内容理解の助けとなるため、この後の分析でもその内容を確認することとする。インテキストの訳はボイカースによる『聖十字架礼讃』ヴァティカン本の美術史的註釈本に掲載されたドイツ語訳に依拠し、和訳を作成する。その際、ラテン語の原文も掲載する。

1. マインツ大司教オトガルスへの献呈文、聖マルティヌスへの献呈図・詩、教皇グレゴリウス4世への献呈図・詩（fol.1r-4r）

写本の最初の紙葉にはヴァティカン本の受取手であるマインツ大司教オトガルスに宛てた献呈文が記されている。献呈文からは、本来この写本を受領するのはオトガリウスの前任者ハイストゥルフであったが、彼が亡くなってしまったためにオトガルスに献呈されることになったとの事情を読み取ることが

hyacinthine, purpureo, byssino et coccineo…)」しかし、このオーストリア国立図書館所蔵の写本ではラバーヌスが示した色は使用されず、全体的に錆がかった色味が使われている。Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.134./ Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.43-44, 106-107.

⁵⁷ 例えば 2422 と 2421 が“in inimicis”としているところが他の写本では“inimicis”に、“posuerim”が“posui seu rite”に、“edificio”が“aedificatio”となっているという。Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, p.92.

⁵⁸ Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, pp.104-108.

⁵⁹ 同写本のデジタルデータを提供するプラットフォーム: Alvin - De laudibus Sanctae Crucis (alvin-portal.org) 【最終閲覧日: 2023年9月26日】より。

出来る。隣の紙葉は空白である。次の紙葉には、ページ上に設けられたオレンジ色の正方形の枠の中にラバーヌス、アルクイン、トゥールの聖マルティヌスの三者が描かれている【図 6】。その右側の紙葉には聖マルティヌスに向けた献呈文が現れる。図像においては右側に台座に腰かけ右手で祝福のジェスチャーをする聖マルティヌス、左端に控えめな様子のラバーヌス、その間のややラバーヌス寄りの中央にアルクインが描かれ、ラバーヌスの肩を右腕で抱えて聖マルティヌスの前に入るよう促す構図となっている。隣の紙葉の詩はアルクインを一人称として書かれていて、その内容は、ラバーヌスがトゥールのサン・マルタン修道院で学ぶことになった経緯、30歳になった頃に『聖十字架礼讃』を書き終えたこと⁶⁰、『聖十字架礼讃』の概要⁶¹、そして聖マルティヌスへの執り成しの祈りである。

続く見開きには教皇グレゴリウス 4 世（在位 827 年～844 年）に宛てた献呈図と献呈詩が挿入されている⁶²【図 7】。先に述べたように、教皇への献呈図・詩は、教皇献呈写本が制作された時期（842-843 年頃）に新たに考案されたと考えられている。そのためこの献呈図・詩は後に追加されたものだと推測できる。先ほどの聖マルティヌスへの献呈図・詩と同様、ページ上には正方形（若干横辺が長い）の枠が設けられている。教皇への献呈図では正方形の枠は二重であり、内側がオレンジ、外側がくすんだ緑色に彩色されていて、オレンジの枠には黄色の文字で教皇への献呈文が書き込まれている⁶³。枠内の右側には作品を両手に持ち、教皇の方へ身体を曲げるラバーヌス、中央で台座に腰かけ、ラバーヌスの方を向き、右手で作品を受け取ろうとするグレゴリウス 4 世、そして教皇の左側に 2 人の従者が立ち姿で描かれている。教皇は袖口が広い赤いカズラにパリュム、薄いグリーンのだルマチカを着用しており、ラバーヌスは薄い色の下着の上に茶色のククルスを身につけている。隣の紙葉の詩には、聖ペトロとの結びつきを強調しつつグレゴリウスを讃える献呈詩が書かれている⁶⁴。

2. ルートヴィヒ敬虔帝への献呈図・文 (fol.4v-5r) 【図 8】

教皇への献呈図・文の次の見開きには、ルートヴィヒ敬虔帝に向けた献呈文が配置されている。これまでの献呈図とは異なり、敬虔帝への献呈文は形象詩として構想されている。右側のテキストは左側の形象詩を説明しており、ページ下部の赤字のテキストは形象詩の内部に書かれたテキストを書き下したものである。

左側の形象詩のベーステキストは 37 字から成る 51 行の韻文で構成されている。ラバーヌスはまずキリストを称賛するが、「王の中の王 (rex regum)、…」の呼びかけから始めることで、キリストの支配者としての性質を強調し、ルートヴィヒとキリストとを結びつけようと試みている⁶⁵。12 行目以降は世俗の支配者について語り、「玉座は正しい法によって貪欲な者から奪い取られなければならない、皇帝（ル

⁶⁰ “Ast ubi sex lustra inpleuit, iam scribere temptans, Ad Christi laudem hunc edidit arte librum.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, Turnhout, 1997, p.5.

⁶¹ “Quo typicos numeros, tropicas et rite figuras indidit, ut dona panderet alma Dei, Passio quid Christi mundo conferret honoris, Qualiter antiquum uinceret et celidrum, quod sic uentrum sancti cecinere prophetae, ac libri legis grammate rite debant.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*. Turnhout 1997, p.5.

⁶² ラバーヌスはヴァティカン本『聖十字架礼讃』を幾度か加筆修正したと言われており、この紙葉も加筆の結果の一つと考えられる。聖マルティヌスへの献呈文では、自身の生涯の 30 年経った頃に『聖十字架礼讃』が完成したとあるが、グレゴリウス 4 世即位時にはラバーヌスは既に 47 歳であり、矛盾が生じるためである。また、ヴァティカン本が実際に教皇のもとに届いた頃にはグレゴリウス 4 世は退位しており、セルギウス 2 世がその職を引き継いでいた。このことから、エルンストはこの献呈図が 843 年に制作されたと考えている。Ernst, U., *Visuelle Poesie*, p.127, Anm.18.

⁶³ “Pontificem summum saluator christe, tuere, et saluum nobis pastorem in saecula serua presul ut eximius sit rite Gregorius, almae ecclesiae custos doctorque fidelis in Aula.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.7.

⁶⁴ 献呈詩には「今日この世での時間は危険に満ち溢れている。人々は戦争を始め、至る所で敵が暴れている。」(Tempora sunt huius uitae nunc plena periculis. Bella mouent gentes, hostis ubique fuerit.) との一文がある。エルンストによれば、これは恐らくルートヴィヒ敬虔帝の死後生じた息子たちの対立を示唆しているという。この対立はラバーヌスを、修道院長退任へと追い込んだ。Ernst, U., *Visuelle Poesie*, pp.127-129.

⁶⁵ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.74.

ートヴィヒ）が再び自身の意志で世界を支配することは適切である」⁶⁶と、息子たちにより王の座から廃位させられたルートヴィヒの支配者としての正当性が強く主張されている。最後に、ラバーヌスがキリストの賛美のために小さな作品を制作したことが書かれている。

先にも述べたように、このルートヴィヒに対する献呈図は始めから『聖十字架礼讃』のプログラムに組み込まれていたわけではなく、敬虔帝へ作品を献呈する際に追加されたものだと考えられる。献呈文にてラバーヌスがギリシアやカリフ・アル・マムーンからの使節に言及している⁶⁷ことから、彼らが敬虔帝のもとを訪れた831年が敬虔帝の献呈図制作年の下限、敬虔帝が没する840年が上限であるとの見解が有力である⁶⁸。

左側の紙葉には、ページ大に設けられた青い枠線の中にルートヴィヒ敬虔帝の姿が描かれている。頭の後ろに光輪が描かれ、茶色いヘルメットを被り胸当てをした敬虔帝は、右手に自身の背より大きい赤い色の十字架杖を、左手には盾を手をしている。本来剣や槍と言った武器を手にするはずの右手に十字架杖が描かれていることから、ラバーヌスは熱心なキリスト教者であり支配者であるというルートヴィヒの性質の表現を試みたと考えられる⁶⁹。敬虔帝の身体に書かれたテキストは、この装備に対応するように配置されている。すなわち、ヘルメットを被った頭部周辺には「頭 (vertice)」、十字架杖をもった右手の部分には「彼の手は無敵の力を宿してください (Invictam et faciat optima dextram)」、胸当ての部分には「正義の胸当 (justitiae lorica)」と書かれるなど、テキストの位置がその意味内容と合致するよう配置されている。

この敬虔帝像に採用された「武器と盾を両手に持ち立つローマ風の戦士」図像は、当時ラバーヌスが参照した可能性の高い聖書に関する書物の挿絵にも見られる。例えば、810~820年頃パリのサン・ジェルマン・デ・プレ修道院で制作されたと考えられている『シュトゥットガルト詩篇』の第134章10-11節に対応する箇所 (fol.150v) では、「力ある王たち」に対応する図像として、青いマントにうろこ状の甲冑、踵の無いブーツ、そして敬虔帝の図像にも描かれていたような真っ赤な盾を持つローマ兵の姿が描かれている【図9】⁷⁰。また、セアースによれば、王だけでなく、異教徒に挑み殉教した聖人も盾と槍を持った立ち姿で描かれる例があるという⁷¹。更に、美德の擬人像にこの姿が利用されることもある。美德と悪徳の戦いを描くプルデンティウス作『プシコマキア』の9世紀の写本（パリ、国立図書館 Ms.lat.8085）では、鱗の甲冑を身につけたローマ兵が美德の擬人像として描かれ、美德の一つである「忍耐 (patientia)」は槍を持ち、敬虔帝像と似た姿勢で盾を地面につけている【図10】⁷²。また、ラバーヌスによる敬虔帝像と最も類似する作品として、セアースは『プシコマキア』の10世紀の写本を挙げている。美德と悪徳の擬人像が、1人1ページずつ説明と共に描かれている中で、王冠を被り、ローマ風の肩布を身にまとった兵士は勝ち誇った様子で足元の蛇を踏みつけている【図11】。左手には盾と十字架旗、右手には剣を手をしている。周囲の説明文から、彼はエフェソ人への手紙にて描写された

⁶⁶ “Per iustamque thronum avido quod tollere legem Atque decet, totum Augustus nutu excolat orbem.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.11; Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.74.

⁶⁷ ルートヴィヒ敬虔帝への献呈文には以下の記述がある。「ギリシアの人々は彼に極めて貴重な贈り物をするであろうし、ペルシアの王国も同様にそうするであろう (Nam gentes Graecorum dona pretiosissima illi deferent, similiter et regna Persarum).」Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.14.

⁶⁸ この見解はポイカースだけでなくセアースも支持している。Sears, E., Louis the Pious as *Miles Christi*, in: Godman, P. and Collins, R. (ed.), *Charlemagne's Heir. New Perspectives on the Reign of Louis the Pious (814-840)*. Oxford 1990, pp.605-628.

⁶⁹ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.74.

⁷⁰ Sears, E., Louis the Pious as *Miles Christi*, p.615.

⁷¹ フィレンツェ国立美術館に所蔵されている *The Flabellum of Turnus* という作品がその一例である。ここではサン・ドニと聖マウリティウス（サン・モーリス）が武器と盾を持った立ち姿で描かれているという。Sears, E., Louis the Pious as *Miles Christi*, p.615.

⁷² Sears, E., Louis the Pious as *Miles Christi*, pp.615-616.

「キリストの兵士（miles Christi）」の完成形であることがわかる⁷³。エフェソ人への手紙で言及される「正義の胸当て」「救いのかぶと」は、既に見たように敬虔帝への献呈詩中にも登場する上、「信仰の盾」も描かれている。このことからセアースは、ラバーヌスがエフェソ人への手紙の該当箇所から着想を得た可能性が高いと指摘している⁷⁴。

3. プロローグと目次 (fol.6r-8r)

ルートヴィヒ敬虔帝への献呈図の次にはプロローグが挿入されている。ここでラバーヌスは出エジプト記第25章2-3節⁷⁵を引用しつつ、自分なりの捧げものとして『聖十字架礼讃』を構想したことや、聖十字架の輝きと永続する威厳を、可能な限りの賞賛によって信徒仲間に伝え、その結果、聖十字架に対する人々の意識が高まり、人々が常に贖罪を考え、贖い主に絶えず感謝をするように『聖十字架礼讃』を執筆したことを記している。また、間違いがある場合には訂正を求めること、この作品を読む際にはその秩序に従い読み進めることなどが指示されている。fol.6r-6vでプロローグの文章は終了するが、その隣のfol.7rには紺地に金の文字で書かれた詩が挿入されている【図12】。神に対し『聖十字架礼讃』を捧げるが、たとえ神にとって取るに足らないものでも容赦してほしいとの旨が記されている。6字ごとに文字が赤く強調され、全てを繋ぐと「マイントツのラバーヌス・マウルスがこの作品を制作した（Magnentius Hrabanus Maurus hoc opus fecit）」との文が浮かび上がる。

その後の見開き (fol.7v-8r) は目次のようにになっており、全28詩の形象詩それぞれにタイトルが付されている【図13】。紙葉は紺色に彩色され、形象詩のタイトルは白文字で書かれている。各タイトルの文頭に描かれた円形の図形その他、「本書のカピトゥラが始まる（Incipit Capitula ejusdem Libri）」「カピトゥラが終わる（Expliciunt Capitula）」「本書が始まる（Incipit ipse Libri）」と言った場面進行に関わる文言には金色の文字が使用されている。

4. 第1詩 (fol.8v-9r) 「両腕を広げた十字架型のキリストの像について、また、神性あるいは人性に関係するその名について」【図14】

ページ大に引かれた二重の枠線（外側はオレンジ色に彩色されている）の内側に形象詩が描かれている。黄色地の背景に文字が鮮やかな赤で書かれ、二重に読まれる部分は異なる色で彩色されている。図像として描かれているのは、十字架を象るかのように直立した姿で両腕を広げ、大きく開いた両目でまっすぐに鑑賞者を見据えるキリストの姿である。着衣は赤い腰布のみで、磔刑に処された時の姿を思わせるが、十字架そのものは描かれず、聖痕も描かれていない。

形象詩のベーステキストは39文字から成る韻文48行から構成されている。またインテキストはキリストの身体の輪郭に沿うように配置されており、たとえば光輪には「王の中の王、主の中の主（Rex regum dominus dominorum）」、右腕から顔までの部分には「いとも高き神の右手、イエスが全てを創造した（Dextra dei summi cuncta creavit iesus）」、顔の左側半分から左腕の部分には「キリストはその血によ

⁷³ エフェソ人への手紙第6章10節~17節には以下のように書かれている。「最後に（私は言う）、主にあつて、そしてその強靱さの（持つ）剛力によって強くなりなさい。悪魔の奸計に抗して踏み留まることができるよう、神の武具を身につけなさい。私たちの戦いは血と肉に対するものではなく、もろもろの支配に、もろもろの権勢に、この闇のもろもろ宇宙的支配者に、悪（を体現するところ）の天上（の領域）にいるもろもろの霊的勢力に対するものなのだから。それゆえ、（かの）悪しき日にあつて抵抗できるよう、つまりあらゆるなすべきことをなした上で堅く立つことができるよう、神の武具をつかみ取りなさい。だから堅く立ちなさい、あなたがたの腰を真理（という皮帯）で締め、義の胸当てをまとい、平和の福音への準備という履き物を両足に履き、（これら）すべてに加えて、信仰の盾をつかみ取ることによって。この盾によってあなたがたは悪人の（投じる）あらゆる火のついた矢を消すことができる。さらに、救いの被り物を取（って被）りなさい。そして霊の剣、すなわち、神の言葉をも（取りなさい）。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2004年、702頁。

⁷⁴ Sears, E., *Louis the Pious as Miles Christi*, pp.616-619.

⁷⁵ イスラエルの人々に告げて、わたしのためにささげ物を携えてこさせなさい。すべて、心から喜んでする者から、わたしにささげる物を受け取りなさい。

ってこの世の罪を拭い去った（XPS laxabit e sanguine debita mundo）」と読むことのできるインテクストが書かれている。

第1詩について、カピトゥラでは「両腕を広げた十字架型のキリストの像について、また、神性あるいは人性に関係するその名について」との題目が付されている。題名の通り、キリストの図像とキリストが持ち合わせる2つの性質が主題である。詩や詩の説明文には、2つの性質に由来するキリストの様々な呼び名が例に挙げられる⁷⁶。例えば被造物が仕える存在であることから「主（dominus）」、言葉にして人であるために「神（deus）」、兄弟がいないため「一人子（Unigenitus）」、人性を授かり、それをもって慈悲を分け与えることから「第一子（Primogenitus）」などで、キリストの人性に由来する名、神性に由来する名の両方が列挙されている。キリストの呼び名とそう呼ばれる所以が端的に列挙される第1詩は、鑑賞者に、時に寓意的な聖書を正しい文脈で解釈するためのヒントを与えているかのようなものである。内容の多くがイシドールス『語源』からの引用であるが、呼び名とその由来の列挙を通じてキリストが2つの性質の仲介者たる存在であること、神とも人とも等しい存在であることが示されている⁷⁷。

5. 第2詩（fol.9v-10r）「四角形の中に描かれた十字架の形について。自身があらゆるものを包含すると明らかにする。」
【図15】

第2詩は十字架そのものが主題となっている。正方形の枠の中に田の字になるよう十字架が描かれている。背景は紫色で十字架部分は茶色に彩色され、十字架上に赤文字でインテクストが書かれている。正方形の枠線は辺ごとに青、紺、薄緑で塗られ、その上に書かれた文字はそれぞれ赤、金、茶で彩色されている。十字架の交点と四隅、正方形の枠の四つ角には白で“O”が書かれ、その他のベーステキストも白文字で書かれている。

第2詩の題材は「あらゆる要素を包括する十字架」である。これは十字架の縦横軸や形象詩の枠線に書かれた文言から理解できる。すなわち、十字架の縦軸には「おお、至高なるお方の勝利によって聖性を帯びた十字架よ（O crux quae summi es noto dedicata tropaeo）」横軸には「おお、キリストの貴き勝利により祝福された十字架よ（O crux, quae christi es caro benedicta triumpho）」、上の枠線には「おお、全き天を見下ろし支配する十字架よ（O crux quae excellis toto et dominaris olympto）」下の枠線には「おお、人々が廃墟と化した冥界の外へ出るために与えられた十字架よ（O crux quae dederas rupto plebem ire ab averno）」左の枠線には「おお、みじめな者たちの導き手、広い世界の救済たる十字架よ（O crux dux misero latoque redemptio mundo）」右の枠線には「おお、聖なる者の旗印、世俗の者の敬虔な守り手たる十字架よ（O crux uexillum sancto et pia cautio saeclo）」とそれぞれ書かれている。枠線の色にも意味が与えられており、空に関する文言は青、冥府に関する文言は紺、その間に位置する地上世界に関する文言は薄緑の枠線部分に書かれている。

詩の説明文でラバーヌスは十字架の4つの先端を世界の4つの領域（天 *coelestia*, 地 *terrestia*, 冥府 *inferna*, 天上 *supercoelestia*）と結びつけた。彼はさらに、世界に存在する4種類の被造物⁷⁸と十字架を関連付けて述べた後、人間が理解する際に利用する4つの情動「恐怖」「痛み」「欲」「喜び」を十字架と結びつけて語る⁷⁹。十字架の4つの先端を、4という数字で様々な事物の体系と結びつけることで、第2詩では十字架が世界のあらゆるものを包括するということが表現されている。

⁷⁶ 「第一子（Primogenitus）」、「父なる神と同本質の存在（Omoision Patri）」、「神の口（Os Dei）」、「似姿（Imago）」、「形象（Figura）」など。

⁷⁷ Wilhelm, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, pp.26-28.

⁷⁸ 世界に存在する被造物は、「存在する」「生きる」「感じる」「理解する」の組み合わせにより4つに分けられるという。「存在する」だけなのは石、「存在」し、「生きる」のは植物、「存在」し、「生」き、「感じ」るのは動物、4つ全て備えているのが天使あるいは人間なのだという。Wilhelm, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, p. 51.

⁷⁹ Beuckers, K.G. *Kreuzeslob*, p.28.

6. 第3詩(fol.10v-11r)「天使の9つの階級について、また十字架の形に配置されたそれらの名前について」【図16】

紺色の枠に囲まれ、紫色の背景にベーステキストと形象詩が描かれている。ここでは薄い青色で色付けされた「救済は十字架の内に (Crux Salvus)」という文言が、ページの中央で十字架型に配置され、それぞれのアルファベットの中にインテキストとして、9つの天使の階級 (Seraphin, Cherubin, Virtutes, Potestates, Throni, Principae, Dominationes, Arcangelli, Angeli)⁸⁰が書かれている。その際、アルファベットの位置と天使の階級の高低が一定程度対応するように配慮されており、例えば最高位の熾天使 (セラフィム) は十字架の縦軸の上部に位置するCに書かれている。

第2詩では世界を包括する存在としての十字架が主題とされていたが、ここでは天使の階級が十字架の形に配置されることで、天上世界の構造までも十字架に包括されることが示されているのだと、ボイカースは指摘している⁸¹。この天使の階級については次の詩でも詳述される。

7. 第4詩(fol.11v-12r)「十字架の周りに描かれたケルビムとセラフィムについて、またそれらの意味について」【図17】

第2詩と同様、画面が田の字になるよう構成され、4つの空間に分けられている。上部2つの空間にセラフィム、下部2つの空間にケルビムが描かれている。背景は紫色でベーステキストは白文字で書かれ、画面を4分割する十字に重なるインテキストは赤文字で、セラフィムに重なるものは茶色の文字で、ケルビムに重なるものは黒文字で書かれている。セラフィムの6枚の翼は赤で描かれ、ケルビムは両者とも古代を思わせるトーガを着用している。インテキストは以下の通りである。

十字架の縦軸：「これは祝福をもたらす十字架の砦であり、救済が果たされる作業場である。(En arx alma crucis en fabrica sancta salutis)」

十字架の横軸：「これが王の王座で、世界の償いである (En thronus hic regis, haec conciliatio mundi)」

左上のセラフィム「天上のセラフィムはキリストの十字架のしるしを表し、翼の位置によってその全てが聖別されていることを示す。(Signa crucis Christi ast seraphim caelestia monstrant Pennarum atque situ hac cuncta sacrata probant)」

右上のセラフィム：「なぜなら、これらは祝福の賞賛と共に天におはすかの方を歓呼して迎え、全能の主の王笏 (王国) を三重に知らせるからである。(Nam haec socia exsultant celebrando hac laude supernum Conclamantque tribus scepra Sabaoth vicibus.)」

左下のケルビム：「ここではこれらの聖なる旗がケルビムの勝利を示す。また、広げられた彼らの翼は、(十字架に架けられたキリストの) 腕を示す。(Hinc signant Cherubim haec labbara sancta triumphum. Distensisque alis brachia tensa notant)」

右下のケルビム：「これらは契約の箱の横に立ち、神聖な覆いを守護し、自らの職務によって、贖いの行為を証明する。(Quae latere assistunt arcae et sacra opercula condunt factaque propitia officio ipsa probant.)」

ラバーヌスは第4詩の説明文において、イザヤ書6章6-7節の記述⁸²に基づき、セラフィムやケルビムと十字架を同一視している⁸³。というのもこの記述は、セラフィムの燃える炭が人の罪を取り除くことを示し、罪を償わせる機能において十字架と同等の役割を果たしていると言えるためである。両者の共通性を視覚的にも表現するためであろうか、画面上のセラフィムとケルビムは自身の身体で十字架を表現するかのよう、両腕を広げた格好で描かれている。

⁸⁰ 熾天使、智天使、座天使、主天使、力天使、能天使、権天使、大天使、天使の9つの階級のこと。

⁸¹ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.29.

⁸² 「すると私の所へセラフィムの一人が飛んで来た。その手には熱く焼けた石があったが、それは祭壇の上から火箸で取って来たものである。セラフィムは (それで) 私の口に触れて、言った、『見よ、これがお前の口に触れた。取り除かれた、お前の咎は。お前の罪は、覆い隠された。』」 旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 VII イザヤ書』岩波書店、2007年、28-29頁。

⁸³ Wilhelmy, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, p.55.

8. 第5詩(fol.12v-13r)「十字架の周りに配置された4つの四角形と、神の家の霊的な建物について」【図18】

第2詩、第4詩と同様、正方形の枠に囲まれた空間が十字によって4分割されている。それぞれのスペースの中央には、より小さな正方形が描かれ、薄緑色に彩色されている。

インテクトは以下の通りである。

十字架の縦軸と横軸：「主キリストのかの有名な十字架は基礎であり神殿である (Incluta crux domini christi fundamen et aulae)。」

左上の正方形：「使徒たちはあなたの勝利を適切に伝える (Agmen apostolicum pandit tua rite tropaea)」

右上の正方形：「そのうえ、彼らの清き血が流れた後、殉教者の合唱団も (あなたの勝利を伝える) (Martyrum et ipse Chorus effuso iure crvore)」

左下の正方形：「族長たちの賞賛すべき働きがあなたにしるしをつける (Te patriarcharum Laudabilis Actio signat)」

右下の正方形：「預言者の民は神の言葉によって命じられた。(Plebsque prophetarum diuino fame iussa)」

ラバーヌスは第5詩の解説において、神の家は4つの正方形を通じて理解されると説明する。4つの塔のように、それぞれの正方形で示された4つの集団（使徒、殉教者、族長、預言者）が基礎の上にそびえたつのだという。そしてラバーヌスは列王記上5章17節⁸⁴に基づき、聖なる人々を神殿の基礎となる角石として捉えた。更に、キリストの受難と密接に関わる十字架は教会の基礎を成す存在であるとして、教会の基礎としての十字架を主張した。この詩も、4という数字をきっかけに複数のイメージが想起されるような内容になっている。

9. 第6詩(fol.13v-14r)「十字架に広がる重要な4つの美德(=枢要徳、四元徳)について、またあらゆる美德の報いが十字架を通じて我々に与えられるということ。」【図19】

画面の背景は紫色で、薄緑色の枠線が引かれている。画面には4つの三角形が、十字架を成すように配置されている。三角形には、それぞれの位置に応じて4つの枢要徳すなわち知恵 (prudentia)、節制 (temperantia)、正義 (justitia)、勇気 (fortitudo) が割り当てられ、例えば全ての徳の中で最重要とされる知恵は、最上部に位置する三角形に書かれている。三角形の枠線には、それぞれの徳に関する36字から成る韻文がインテクトとして書かれている。インテクトは以下の通りである。

上の三角形：「主の十字架の上部には知恵がある (Arce Crucis domini summa prudentia sistit)」

下の三角形：「そして正義は下部で、その遵守を求める (Justitia et prona mandat se parte tenendam)」

左の三角形：「勇気は鋭い武器を右の角に抱える (Forti sed in dextro cornu fert spicula tudo)」

右の三角形：「一方左側では節制が、適切な判決を命ずる (Cum in leuo moderans disponit jura modesta)」

ラバーヌスは第6詩において、ヨハネの福音書15章5-6節⁸⁵とガラテヤ人への手紙5章22節⁸⁶を引用し、ここで登場する「実」を霊的な果実として捉えた。更に、ぶどうの木と聖十字架の木を重ねて、人類はキリストが受難した木から救済という果実を授かるのだと論じ、あらゆる美德の報いすなわち救済が、十字架を通じて我々にもたらされることを説明している。

⁸⁴ 「王は命じて大きい高価な石を切り出させ、切り石をもって宮の基をすえさせた。」 International Biblical Association, 列王記上5：聖書日本語 - 旧約聖書 Word Project. <https://www.wordproject.org/bibles/jp/11/5.htm#0> 【最終閲覧日：2023年9月27日】。

⁸⁵ 「私が葡萄の木であり、あなたがたは枝(である)。人が私のうちに留まっていて、私も彼のうちに(留まっている)なら、この人は多くの実を結ぶ。あなたがたは私なしには何もできないからである。私のうちに留まっていない人がいれば、(その人は)枝のように外に投げ出されて枯れてしまうことになる。それら(の枝)は(人々が)集め、火に投げ込み、(こうして)焼かれてしまう」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、361頁。

⁸⁶ 「しかし霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、慈愛、善意、誠実、柔和、自制である。律法はこれらに対立するものではない。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、602頁。

10. 第7詩(fol.14v-15r)「4つの元素と4つの季節の移り変わりについて、また世界の4つの地域について(=方角)、そして一日を構成する4つの自然の時間帯について。全てが十字架の内に配列され、その中で聖別される。」【図20】

第7詩では4つの輪が十字架状に配置されている。輪はそれぞれ赤、薄青、青、黄土色に着色されており、輪の中には36字からなる文がインテクトとして書かれており、内容は以下の通りである。

上の輪：「春、東、火、朝焼けがこの場所で光を放つ (Ver, oriens, ignis, aurora, hac parte relucent)」

下の輪：「秋、西(ゼフィルス、西風のこと)、大地、夜がここに位置する (Autumnus, zephirus, tellus et verpera hic fit)」

左の輪：「北、冬、水、夜中がここに置かれる (Arcton, hiems, limpha, media nox ecce locatae)」

右の輪：「空気、夏、南、正午がここに置かれるだろう (Aer, aestas auster, arci hic sit meridiesque)」

インテクトからわかるように、第7詩では四季、方角、四元素、1日の4つの時間帯が互いに関連付けられている。ラバーヌスは、詩の解説文冒頭で、あらゆるものがキリストの光の中で輝くと賞賛し、聖十字架の功績をたたえる。そして詩篇69章38(35)節⁸⁷とローマ人への手紙11章36節を⁸⁸引用し、4つの要素すなわち四季、方角、四元素、1日の4つの時間帯が、神とキリストの十字架の下で収束するのだと論じる。

四季、方角、四元素、時間を結びつけるとの発想は決してラバーヌスに固有なものではなく、アウグスティヌスやインドールス、更にプラトンやガレノスにも遡る考え方である。しかし、これらの要素を十字架状に並べた輪の形で提示した点がラバーヌスのイノベーションであるとヴィルヘルミーは指摘している⁸⁹。

11. 第8詩(fol.15v-16r)「12の月と12の象徴、また12の風について、そして使徒たちの預言について。また12という数を持つその他の秘義について、十字架内に示される。」【図21】

薄青色の枠線の中に、それぞれの先端が3つに分かれた十字架が描かれている。十字架を形成する文字列の背景は濃い灰色で、インテクトは黒文字で書かれている。インテクトは以下の通りである。

十字架の縦軸：「十字架の中に、(12の)月、風、12の(星の)象徴がある (In cruce nunc menses venti, duodenaque signa)」

十字架の横軸：「使徒の一団はきらきらと輝く光によって際立つ (Grex et apostolicus decoratur luce corusca)」

上部と下部の斜線：「また、ここで皮をはがれた(十字架の)幹と全世界の業が1つに統合される (Sunt quoque consocia hic stips, plaga, et orbis opus)」

左右の斜線：「聖十字架はその道を通じてこの財産を与えることが出来る (Sancta valet celebri ast crux dare calle bonum hoc)」

第8詩の主題は数字の12である⁹⁰。ラバーヌスは詩の解説文において、12か月や風だけでなく、12星座や12の族長、12使徒、天上のエルサレムの12の門、イスラエルの12部族など、聖書中に登場するあらゆる12に関連する事柄を引用する。その後で、第8詩の先端が三又の十字架は、4つの季節がそれぞれ3か月ずつ存在すること、4つの風(東風、西風、南風、北風)がそれぞれ2つの副次的な風を備えることを表現すると述べる。このことからラバーヌスは、数字の12の意味の多様性・重要性を強

⁸⁷ 「かれを賛美せよ、天と地は、諸々の海と、その中を動き回るものすべては。」旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV 諸書』岩波書店2005年、139頁。

⁸⁸ 「すべてのものは彼から(出で)、彼によって(おり)、そして彼へと(向かっている)からである。その彼に栄光がとこしえに(あるように)。アーメン。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、657頁。

⁸⁹ Wilhelm, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, p.57.

⁹⁰ 12という数字は、インドールスにおいては完全性を表す数として理解される。『聖十字架礼讃』には数字に関わる形象詩も多く含まれることから、インドールスの数秘術に関する著作『聖書における数字について』(Liber numerorum qui in sanctis Scripturis occurrunt)を参照していたと考えられる。Migne, J.P. PL 83, Paris, 1850, Sp.192; Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.35.

調し、12 という数字から様々な事物が想起できることを読者に提示しながら、月や風、星座といった自然に関する事柄から聖書的な事柄に至るまで、聖十字架が包括することを示した。

12. 第9詩 (fol.16v-17r) 「4つの六角形の中に配置され統一された一年間の日々について、また閏日の増加について。それらは聖十字架の形に飾られ、聖別されている。」【図22】

薄緑の枠線の中に、4つの引き延ばされた六角形から成る十字架型の花のようなものが描かれている。それぞれの六角形は中央に配置されたCの字で結び付いている。インテクトは以下の通りである。

上の六角形：「全体の時間は、100日×3回、6日×10回、5日×1回。1年の周期に含まれるこれらの日々を、十字架を通じて見よ。(Terque centenos deciesque senos, Et semel quinos habet universum Tempus, annalis cruce circuitus Ecce dies hic)」

下の六角形：「しかし、傷の上に配置された4つの六角形は、全て敬虔にも9日×10を示し、そこにもう1日が加えられている。(Sed plagis posti satis exagoni Quattuor monstrant decies novenos, Singuli totos pie cum monade, Et super unum.)」

左の六角形：「聖なる十字架の木も同様に、堅固な秩序を通じて支配を完成させる。この木は世界の輝きであり、人類にとって重要な救済である。(Stirps quoque sancta crucis complet certo ordine sceptrum Haecque decus mundi est magna salus hominum haec)」

右の六角形：「キリストは、冥府、地上の世界、天の全てを抱えている。というのも彼は天の星と1日のあらゆる障害を統制するからである。(Cuncta tenet Christus barathrum, orbem atque aethera celsa. Nam regit astra poli hic claustraque cuncta diei)」

第9詩の主題は1年の日数である。これは形象詩の形式にも反映されている。4枚の花弁にはそれぞれ91字から成るインテクトが書かれ、中央のCを足すと合計365字となるように構想されている。解説文ではアウグスティヌス『聖三位一体論』などを引用しながら、類似の数秘術の理論が展開され、1年の長さとして十字架とが結びつけられている。

13. 第10詩 (fol.17v-18r) 「70という数とその秘義について。またどのようにして十字架に適合するか」【図23】

10番目の形象詩では、14の小さな四角から成る5つの塊が十字架状に配置されている。小さな四角は紺色で塗られ、赤で1文字ずつインテクトが書かれている。インテクトは、十字架の縦軸を上から下、左から右に読むと一文、横軸を上から下、左から右に読むともう一文現れるようになっている。インテクトは以下の通りである。

縦軸：「敬虔に建てられた十字架よ、お前はここで死の鎖を克服した (Crux pia constructa hic superasti vincula mortis)」

横軸：「大きく、善なる、神聖なる十字架よ、お前はここで世界の罪を克服した (Magna bona et sancta hic superasti crimina saeculi.)」

第9詩同様、作品の主題である70という数字がインテクトの文字数で表現されている(14×5=70)。ラバーヌスは解説文において、70とイスラエルの民の70年間のバビロン捕囚を結びつけた。更に彼は聖書における70の意味の2つ目の例として、ダニエル書9章の預言、すなわち、70週の間エルサレムが再建され、油注がれる者が死ぬとの預言を挙げた。ラバーヌスは「油注がれる者」をキリストと見なし、キリストの受難と70を結びつけている。このように、ラバーヌスは与えられた運命を耐え忍ぶ民を例示することで、鑑賞者にキリストの受難ひいては聖十字架を想起させようと試みたのだろう⁹¹。

⁹¹ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p. 37.

14. 第 11 詩 (fol.18v-19r)「律法に関するモーセの 5 つの書物について、いかにして十字架によって改められ、示されるか。」【図 24】

第 11 詩では 6 字×6 字⁹²から成る金色に彩色された正方形 5 つが、十字架の形に配置されている。複数の同型の図形を十字架状に並べるのは第 10 詩と共通している。1 つの正方形につき、1 文のインテクトが書かれている。形象詩全体の外枠は薄青である。インテクトは以下の通りである。

上の正方形：「創世記よ、お前は幸福をもたらす十字架を大いに喜ばせ、十字架はおまえの贈物を賛美する (Te genesis crvx alma beat, tua munera Laudat)」

左の正方形：「出エジプト記も愛をもって (紅海) 渡渉についての歌を歌う。(Exodus atque canit transitus carmen amore)」

中央の正方形：「レビ記は祭司の法を最もよく詩で讚美する (Iura sacerdotis leuiticus optime psallit)」

右の正方形：「また民数記は (神の) 驚くべき勝利のわざを詩で讚美する (Ast numerus cantat magnalia mira triumphi)」

下の正方形：「申命記は (世界を) 改める喜びを伝えるのである。(Nam deuternomium renouantis Gaudia dicit)」

ラバーヌスは第 11 詩の解説文において、モーセ五書がキリストを予型論的に暗示することを説明している。まず解説文の前半部では、コリントの信徒への第一の手紙の第 10 章~11 章⁹³、ヘブル人への手紙第 10 章 1 節⁹⁴の引用を通じて、モーセ五書は一方では来たる世界の終末の暗示であること、他方では来たる善の影であることを示す。更にローマ人への手紙第 7 章 6 節⁹⁵、12 節⁹⁶、コリント人への第二の手紙第 3 章 6 節⁹⁷を引用し、律法は神聖で善なるものであるが新たな霊に欠けること、文字は殺し、霊は生かすこと、旧約の法は人々にとって達成不可能であったがキリストの十字架上の死によって達成されたことを述べる。最後に、ガラテヤ人への手紙 3 章 13 節⁹⁸を聖十字架と結びつけ、律法の呪いは十字架によって打ち砕かれたのだと、十字架の意義を強調している。

15. 第 12 詩 (fol.19v-20r)「最初の人アダムの名前について、いかにして第二のアダム (キリスト) を暗示し、その受難を示すか。」【図 25】

他のページ同様、深紅色に着色された紙葉に白い文字でベーステキストが書かれている。枠線は銀色である。第 12 詩ではアダムを示す 4 つのギリシア文字 $\Lambda\Delta\Lambda M$ が金色で彩色されて十字架の形に並べら

⁹² 36 (6×6) という数字は、『聖十字架礼讃』で頻繁に登場する。聖書解釈上、36 は完全数である 6 の 2 乗であるため、完全性を示唆する数として使用されるという。Lexikon der mittelalterlichen Zahlenbedeutungen. Ed. Meyer, H.& Suntrup, R. München 1987, pp.707-708.

⁹³ コリント人への第一の手紙第 10~11 章にて、パウロはモーセの民が神に背き、罰を受けた例を複数挙げて、「さてこれらのことは、(私たちへの) 警告としてかの人たちに起こったのである。それは、世の終わりが到達してしまっているこの私たちへの訓戒のために、書かれたのである。」と述べる。新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004 年、525-526 頁。

⁹⁴ 「律法は将来の善いものの影を (有しているの) であって、事柄の現像そのものを持っているのではないから、人々がいつまでも (あいも変わらず) 毎年捧げている生け贄によって、(祭壇に) 進み出る人々を全うすることは決してできない。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004 年、768 頁。

⁹⁵ 「しかし今や、私たちが拘束されていたもの (すなわち律法) に対して私たちは死んで、律法から解放されたのであり、その結果、文字の古さではなくて霊の新しさに私たちは隷属しているのである。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004 年、642 頁。

⁹⁶ 「かくして、律法 (そのもの) は聖いものであり、そして誠めも聖く、そして義しく、そして善いものなのである。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004 年、642 頁。

⁹⁷ 「その神はまさに、私たちが新しい契約の奉仕者として、つまり文字の (奉仕者) ではなく霊の (奉仕者) として、十分に (ふさわしい) 者として下さったのである。なぜならば、文字は (人) を殺し、霊は (人) を生かすからである。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004 年、554 頁。

⁹⁸ 「キリストは私たちのために呪いとなって、私たちが律法の呪いから贖い出して下さった。というのも (次のように) 書かれているからである。木にかけられる者はすべて呪われている。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004 年、594 頁。

れ、インテクストの場となっている。インテクストは上から下、左から右に読み、全てを合わせると以下の文になる。

「キリストのための聖なる歌は韻律と美術によって（形作られるの）がふさわしい。（*Sancta metro atque arte en decet vt sint carmina Christo hinc*）」

ラバーヌスは第12詩の解説文において、再びコリント人への第一の手紙⁹⁹を引用する。最初の人であるアダムは地上の存在で、第二のアダムであるキリストは天上の存在であり、アダムは罪と死をもたらし、キリストは永遠の生命をもたらしたと、アダムとキリストを対置し、受難を通じてアダムの罪を贖った第二のアダムとしてのキリストの性質を強調する¹⁰⁰。更にラバーヌスは、アダムの頭文字を、ギリシア語で4つの方角を示す際の頭文字（*Anatole, Disis, Arctos, Mezembris*）として理解することでアダムは世界の縮図であることを示し、キリストとの類似性を引き出している。ヴィルヘルミーによれば、この詩は、聖アウグスティヌス¹⁰¹、セビーリヤのイシドールス、そしてとりわけアルクインのヨハネの福音書註解¹⁰²に見られる思想、すなわち、アダムに従って世界のあらゆる構成要素が生み出されており、それ故に彼はマイクロコスモス的存在であるとする思想に依拠しているという¹⁰³。最後にラバーヌスはアダムの名を数秘術的に解釈する。すなわち、Aは1、Δは4、Mは40を表し、アダムのアルファベットをすべて足すと46になるという。この数字はヨハネの福音書第2章20節¹⁰⁴で言及される、ソロモン神殿の建設期間を意味している。キリストは同じ箇所で、自身の身体が新たな神殿であり、ソロモンの神殿が崩壊しても3日で建て直すことが出来ると述べる。ラバーヌスは新約聖書の記述や先の神父たち、アダムの名の折句的解釈、数秘術の例をもって、アダムとキリストの予型論的關係性を示したと言える。

16. 第13詩 (fol.20v-21r) 「処女の子宮にキリストが何日間宿っていたかについて、4つの十字架の中に示される。それは276である。またその数字の意味について。」【図26】

69字から成り銀色に彩色された4つの十字架が、十字状に配置されている。枠線は薄緑色である。インテクストは以下の通りである。

上の十字架：「聖別された十字架の形は尊い衣を通じて光を放つ。十字架を大いなる尊厳が飾り、私は喜んでそれを民に伝える（*Forma sacrata crucis uenerando fulget amictu magnus uestit honor laetus loquor hoc nationi*）」

⁹⁹ 第15章45-50節「そのように（聖書に）書かれてもいる。最初の人アダムは、生ける（自然的な）命となった。（そして）最後のアダム（すなわちキリスト）は、（人を）生かす霊（となったのである）。しかし、霊的なものが最初にあったのではなく、むしろ自然的なものが（あったのであり）、次いで霊的なものが（存在したのである）。最初の人土から出て土で造られた者であり、第二の人は天からの者である。（すべての）土で造られた者たちは、土で造られた者（すなわちアダム）と同じさまであり、（すべての）天的な者たちは、天的な者（すなわちキリスト）と同じさまである。そして私たちは、土で造られた者の形を担ったように、天的な像をもまた担うことであろう。さて、兄弟たちよ、私はこのことを言うておく。すなわち、肉と血とは（そのまま）神の王国を受けつぐことはできないし、朽ちゆくものは（そのまま）不朽なるものを受け継ぐことはない。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、546頁。

¹⁰⁰ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.39.

¹⁰¹ 「ギリシア語でアダムと書くとき、四つのギリシア文字によって地の全領域が表されるのである。すなわち、その四文字をたてに並べて書くと、東・西・北・南という世界の四つの部分を示す名称〔の頭文字〕となる。この四つの部分は全世界を表すのである。」アウグスティヌス／赤木善光・泉治典・金子晴勇 共編『アウグスティヌス著作集23』教文館、1993年。

¹⁰² Migne, J.P. PL 100, Paris, 1863, Sp.7771; Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p. 262.

¹⁰³ Wilhelm, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, p.61.

¹⁰⁴ 「そこでユダヤ人たちは言った、『この神殿は46年かかって建てられたのだ。それなのにあなたはこれを3日で起こす（と言う）のか。』」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2004年、309頁。

下の十字架：「聖なる肉体の形成は祝福されたわざによって為される。数字によって光り輝き、彼が祝福を受けて生まれることが（母の肉体の）中で証明される。（Corporis ergo sacri constructio in arte beata e numero radians quae intus probat iisse beate）」

左の十字架：「今私はキリストを称賛し、彼が私の涙を隠し贖い給うことを懇願する。これこそが真の救済、救済の聖なる祝福である。（Nunc canam at exorans lesvm abdere et uda piare uera salus ista est benedictio sancta salutis）」

右の十字架：「彼はあらゆるものの中に住み、あらゆるものを保持し、あらゆるものの中に宿る。善、愛、敬虔性の源、真の救済。（In toto ipse manens tenet ipseque uiuit in omni fons bonitatis amor pietasque redemptio vera）」

第13詩の中心的主題はキリストの人性の称揚である。このことは第13詩のタイトルや、詩の冒頭部分から見て取れる¹⁰⁵。詩の解説文においてラバーヌスは、聖アウグスティヌスの『三位一体論』の引用を通じて、掛け合わせると276になる2つの数字6と46について説明する¹⁰⁶。その後ラバーヌスは、自身がインテクストの文字数（69×4）によって276を表現したことを示し、6と9はキリストがマリアの胎内に存在した期間（9か月と6日）の象徴であり、かつ人間（天地創造の6日目に創造される）と天使（天使の9階級）を示唆すると説明する¹⁰⁷。

17. 第14詩（fol.21v-22r）「世界の始まりからキリストの受難までの年数について、ギリシアの文字で、聖十字架の形に配置される。また同時に（ギリシアの）文字において秘跡のおおいが取られる。」【図27】

深紅色の紙葉に白文字でベーステキストが書かれ、その上に金色に彩色されたギリシア文字（Γ=3、◇◇=1000、T=300、Z=7）がインテクストの場として設けられている。Γを除く3つの記号は3度繰り返されている。インテクストは以下の通りである。

十字架の縦軸：「見よ、この十字架の様相はイエスの名声を良く示している。（En crucis haec species iesus bene monstrat honorem）」

十字架の横軸：「イエスはこの数字を数える。この数字によって彼は地上で受難を受けた。（Computat hunc numerum iesus quo est passus in arvis）」

ギリシア数字の合計は5231である。ラバーヌスは、これが世界の始まりからキリストの受難までの年数を示すことを、エウセビウスとヒエロニムスによる年代記¹⁰⁸に依拠しつつ説明する。それによれば、アダムの創造からノアの洪水まで2242年、洪水からアブラハムまで942年、アブラハムからキリストの洗礼まで2044年、洗礼から受難まで3年であり、合計すると5231年になるのだという¹⁰⁹。加えて、ラバーヌスは各ギリシア数字とキリスト教概念を結びつけた。例えばΓは3を示すため信仰を指し、

¹⁰⁵ 第13詩の冒頭部分では以下のように木が称揚される。「強い芳香を放つ木よ、葉で覆われた樹幹が広がり、聖なる法則に従って、春の盛りにはその豊かさはあふれんばかりである。地上にはその花樹の豊かさに匹敵する庭は無く、数千のつぼみをつけ、品位の点であらゆる高い森を凌駕する」ポイカースによれば、ラバーヌスはこの詩において木とキリストとその人性を関連付けているという。Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.40; Wilhelmy, W., *Rabanus Maurus. Auf den Spuren*, p.63.

¹⁰⁶ Augustinus, *De Trinitate*, Liber IV, Caput V.9.

¹⁰⁷ “Quid enim in nouenario, nisi nouem ordines angelorum; et quid in scenario, nisi homo qui in sexta die creates est insinuantur?” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.110.

¹⁰⁸ “Iohannes filius Zachariae in deserto iuxta Iordanem fluiuium praedicans, Christum Filium Dei in medio eorum adesse testatur. Ipse quoque Dominus Iesus Christus hinc in populos salutarem uiam annuntiat, signis atque uirtutibus uera conprobans esse uiae diceret, computantur in praesentem annum, id est 15 Tiberii Caesaris, a secundo anno instaurationis Templi, … anni 548- A Solomone autem, et prima aedificatione Templi, anni 1060; - A Moysse et egressu Israhelis ex Aegypto, anni 1539; - Ab Abraham et regna Nini et Semiramidis, anni 2044; - A diluuiio usque ad Abraham, anni 942; - Ab Adam usque ad diluuium, anni 2242. … Iesus Christus … secundum prophetias … ad passionem uenit anno Tiberis 18 …” Migne, J.P. PL 27, Paris, 1846, col.569-570; Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.115.

¹⁰⁹ Beuckers, K.G. *Kreuzeslob. Frühmittelalterliche Bildgedichte von Hrabanus Maurus. Kunsthistorischer Kommentar zur Faksimile-Edition der Handschrift aus der Bibliotheca Apostolica Vaticana Reginensis latinus 124*, Stuttgart 2014, p.41.

Z (7) は希望を、T はその形状から十字架と結びついて愛を示し、◇◇ (X、1000) は永遠の生命に対応するという¹¹⁰。これにより、信仰、希望、愛という3つの美德を保持すれば永遠の生命が与えられることも示されている。ラバーヌスはこの解釈を、パウロ書簡を引用しつつ更に展開する。

18. 第15詩 (fol.22v-23r) 「十字架状に配置された4人の福音書記者と子羊について」【図28】

第15詩は、第1詩や第28詩同様、かつてはより黄色い文字でベーステキストが書かれており、背景も金色であった¹¹¹。四福音書記者を象徴する動物と、頭光を持つ子羊が十字架状に配置され、それぞれにインテキストが書かれている。また、四福音書記者の象徴動物はパネルを手にしたように描かれ、それぞれのパネルに各々の福音書の冒頭句が書かれている。インテキストの内容は以下の通りである

マタイの象徴：「マタイは系譜の順序において人の姿を纏った。(イエスの) 系譜の書 (Mattheus hunc hominem signavit in ordine stirpis, liber generationis (Jesu))」

マルコの象徴：「マルコは王の姿をしている。(砂漠で) 呼ぶ者の声。(Marcus regem signat, vox clamantis (in deserto))」

ルカの象徴：「ルカは司祭の姿をしている。ヘロデ王の時代に。(Dat lucas pontificem, fuit in diebus Herodis (regis iudaeae sacerdos))」

ヨハネの象徴：「空高くを飛ぶ鷲として、ヨハネは砦(天上のエルサレム)で言葉を受け取った。始めに言葉があった。(Altivolans aquila et verbum habsit in arce Iohannis, in principio erat v(erbum))」

子羊：「地上の罪を取り去る神の子羊を見よ。(Ecce agnus dei ecce qui tollit peccata mundi)」

子羊の頭光：「神の七つの聖霊 (Septem sp(iritu)s dei)」

ラバーヌスは第15詩において、エゼキエル書とヨハネの黙示録の記述に依拠しながら、四福音書記者とその象徴動物、7つの角と7つの目を持つ子羊について説明する¹¹²。更に、それらと十字架を結びつけ、4福音書記者は十字架の4つの先端に対応し、中央に位置する子羊は、磔刑を通じて地上の罪を取り除いたキリストを示すと述べる。加えて、マタイが下に位置するのは彼の福音書が、キリストに繋がるダヴィデの家系の記録から始まり、キリストの人性と由来を説明するため、ヨハネの鷲が上に位置するのはそれが神から直に靈感を与えられ、空を飛び、キリストの神性を象徴するためなど、4福音書記者が描かれた位置について解説する。他にもラバーヌスは4福音書記者と楽園の4つの川を、マルコと神の7つの霊を、ルカとキリストの受肉を関連付けている。後二者はこの後の形象詩にも登場する主題であるため、詩の解説文における、複数の形象詩を連鎖させる試みが見て取れる。

19. 第16詩 (fol.23v-24r) 「預言者イザヤが列挙した聖霊の7つの賜物について」【図29】

形象詩の空間を4つに区画するように、金色で彩色された5文字分の太さの帯が十字状に描かれている。その帯の中に青と赤と白の花が13個描かれ、それぞれの花の中に13字から成るインテキストが赤字で書かれている。インテキストは13個の花全てを、上から下、左から右に繋げて読むと現れる。

「知恵と認識の霊、思慮と勇気の霊、理解と敬虔の聖霊、主を恐れる聖霊 (Spiritus sapientiae et intellectus, spiritus consilii et fortudinis, spiritus scientiae atque pietatis spiritus timoris Dei)」

¹¹⁰ “Sed quid nobis in gamma, nisi fides Trinitatis innuitur? Quid per zeta, nisi spes fidelium? Et quid per tau, nisi caritas? Quid uero per chi, nisi aeterna beatitudo significatur?” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.116.

¹¹¹ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.42.

¹¹² エゼキエル書第1章10節「彼らの顔の形象は人間の顔であり、4つとも右には獅子の顔、4つとも左には雄牛の顔、4つとも(後ろには)鷲の顔があった。」ヨハネの黙示録4章6-7節、5章6節「玉座の前は、水晶のように透明な、ガラスの海のようなものがひろがっていた。玉座の中央と玉座の周囲には、前面も背面も、一面に目で覆われた4匹の生き物が侍っていた。第一の生き物はライオンに似ており、第二の生き物は若い雄牛に似ており、第三の生き物は人間のような顔を持っており、そして第四の生き物は飛んでいる鷲に似ていた。」「すると、私は玉座と4匹の生き物の間、(24人の)長老たちの真中に、屠られたような小羊が立っているのを見た。その小羊は七つの角を持ち、7つの目を持っていたが、それら7つの目とは、全世界に遣わされた神の(7つの)霊であった。」旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IX エゼキエル書』岩波書店1999年。新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、860、862頁。

ラバーヌスは解説文において、まず聖霊の七つの賜物の典拠であるイザヤ書第11章1-2節¹¹³を引用する。この箇所而言及されるエッサイの木は一方ではキリストの系図であり、他方ではキリストが架けられる十字架の素材である¹¹⁴。そこからラバーヌスは、その純潔性から百合に、キリストの受難からバラに喩えられる「主イエスの花」聖マリアに言及する。そして詩篇第111章10節¹¹⁵を引用しながら、7つの賜物の1つである神への恐れの手続きについて詳しく論じられた後、7つの賜物それぞれの存在理由が説明される。その後、ラバーヌスは形象詩で描いた花の色が持つ象徴的な意味¹¹⁶を説明し、キリストを称賛しながら解説を終える。

20. 第17詩 (fol.24v-25r) 「福音書記者の8つの至福（真福八端）について」【図30】

薄い青色の枠で区切られたテキストフィールドに、8つの八角形が縦に4つ、横に4つ並べられ、十字架を成している。十字架の中央部分は空いている。端の4つの八角形は金色で、内側の4つは銀色で彩色され、それぞれの八角形に37字のインテキストが書かれている。第17詩ではインテキストは最も下の八角形から始まる。続いてその上の八角形、そして十字架の横軸の八角形を左から右に、最後に上2つの八角形を下から上に読む。インテキストの内容は以下の通りである。

最も下の八角形：「主が求めるのは、天の王国が乞食の心をもつ者たちのものになることである。
(*Regna poli Dominus vult pauperis esse beati.*)」

下から2番目：「そして、柔和な者たちだけが天に住まうことを（求める）。(*Atque solum mites semper habitare supernum.*)」

左の八角形：「幸いなる、悲嘆にくれた者たち、彼らのための慰めは高さところ（天上）にある。
(*Felices flentes quis consolatio in alto est.*)」

左から2番目：「というのも、義に飢え渴いている者たちを永遠の潤いが満たすのであるから。
(*Nam justi cupidos aeterna refectio complet.*)」

右から2番目：「天にて憐れみを受けるのは、霊において敬虔なる者たちである。
(*Mente pios sursum miseratio larga repensat.*)」

右の八角形：「そして、心の清い者たちは天の山にて神を見るであろう。
(*Contra serena Deum cernent et in arce superna.*)」

上から2番目：「平和を作り出す子供たちを、神は愛によって抱きしめる。
(*Pacificos Dominus proliis complectit amore.*)」

最も上の八角形：「オリンポス（天）の王国は、キリストのために迫害されてきた者たちに気を配る。
(*Pro Christo afflictos regnum iam spectat Olympi.*)」

ラバーヌスは詩の解説文において、アウグスティヌス『主の山上の説教』(De sermone Domini in monte)を約50行引用し、第16詩の主題である聖霊の7つの賜物と、第17詩の主題である山上の垂訓で、「幸いである」として挙げられる人々との対応関係を説明する¹¹⁷。その後ラバーヌスは自身の言葉で、8つ

¹¹³ 「エッサイの根株より一つの若芽が生え、彼の根から一つの若枝が出て実を結ぶ。その上にヤハウェの霊が留まる。これは知恵と認識の霊、思慮と勇気の霊、ヤハウェを知って畏れる霊である。」旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 VII イザヤ書』岩波書店2007年、49-50頁。

¹¹⁴ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.46.

¹¹⁵ 「知恵の始めはヤハウェへの恐れ、それらを行う者すべてに善き思慮があり、かれの誉れはとわに立つ。」旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV 諸書』岩波書店2005年、236頁。

¹¹⁶ 青 (hyacinthino) はキリストが人々の間で説いた聖なる教を示し、深紅 (purpureo) は受難によって流された血を、白は (byssino) 穢れの無いキリストの肌の色を、緋色 (coccineo) は彼の卓越性と完全なる愛を示すという。(In hyacintho quippe intelligimus coelestem ejus inter homines conversationem; in purpura passionis sanguinem; in candore et bysso corporis ejus inviolatissimam castitatem; in coccineo quoque praecipuam ac perfectam charitatem.) Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.135.

¹¹⁷ ①主への恐れ→乞食の心をもつ者たち②敬虔→柔和な者たち③知識→嘆き悲しむ者④勇気→飢え渴く者⑤思慮（助言）→憐れみ深い者たち⑥理解→心の清い者たち⑦知恵→平和を作り出す者たち。»Timor Dei congruit humilibus, de quibus

の至福と天に繋がる梯子を結びつける。更に、聖十字架を通して人は真に天の王国へと上昇すると述べ、聖十字架を天に到達するための梯子と見なす。加えて、天への各段階は聖十字架の形に配置されているとし、形象詩を説明する。彼によれば、天に到達するには十字架の底部から中央部、次に横軸を左から右に、最後に上部へという順序で、それぞれの八角形に書かれた人々が持つ美德を達成していく必要があるのだという。ここでもラバーヌスは、鑑賞者が複数の神学的内容を関連付けて記憶できるよう工夫を施している。鑑賞者が8つの至福を容易に想起できるよう形象詩には八角形を採用し、8つの至福から聖霊の7つの賜物を連想できるような解説を付し、更に十字架の縦軸・横軸を利用して7つの賜物の序列を表現しているのである。

21. 第18詩 (fol.25v-26r) 「40という数とその秘義について」【図31】

薄緑色の枠で囲まれたテキストフィールドに、4つの逆三角形が、その頂点を内側にして十字架状に並んでいる。1つの三角形は10文字のインテクトから成り、各文字が銀色の背景の四角形で囲まれ、互いに1文字ずつ間隔を空けて書かれている。合計すると40字となるインテクトは、第18詩の主題に対応している。上部の三角形から読み始め、そのまま下部の三角形へ、その後左の三角形、右の三角形と読むと、以下のインテクトが現れる。

「聖なる十字架よ、お前は永遠の王キリストの勝利である。(Crux sacra, tu aeterni es regis victoria Christi.)」

第18詩の解説文においてラバーヌスは、モーセとエリヤの40日間の断食やキリストの40日間の断食、キリストの死から復活までの40時間、復活後キリストが地上に残っていた40日間など、聖書に登場する40という数字の例を次々に挙げる。更に、40という数字から、ソロモンの神殿の至聖所の寸法（縦20キュビト、横20キュビト）へと話を繋げる。また、至聖所の等辺から成る構造の原型は聖十字架であると主張することで聖十字架と関連付け、「イエスの御名において、聖十字架に対してはあらゆる人々の膝がかがめられるべきである」（フィリピン人への手紙第2章10節¹¹⁸）と述べて解説を終える。第18詩以降も数秘術的な要素を持つ詩が続く。

22. 第19詩 (fol.26v-27r) 「50という数字と、その中で明かされる秘義について」【図32】

第18詩に引き続き数字を主題とした第19詩では、Xのような形が5つ、十字架の形に並べられている。中央に配置されたXは銀色で、端の4つは金色に塗られており、それぞれに9文字のインテクトが書かれている。インテクトは上から下に読んだ後、左から右に読むが、左から右に読む際中央のXは飛ばして読む。

「5つの神聖な物を1文字で表すことは喜ばしい。それはすなわち十字架である。(Quinque iuuat apice ast, sacra dicere, de cruce et haec nam est.)」

hic dicitur: Beati pauperes spiritu, quoniam ipsorum est regnum coelorum, id est, non inflati, non superbi. De quibus Apostolus dicit: Noli altum sapere, sed time, id est, noli extolli. Pietas congruit mitibus: qui enim pie quaerit, honorat sanctam Scripturam, et non reprehendit quod nondum intelligit, et propterea non resistit, quod est mitem esse. Unde hic dicitur: Beati mites, quoniam ipsi haereditate possidebunt terram. Scientia congruit lugentibus: qui jam cognoverunt in Scripturis, quibus malis vincti teneantur, quae tanquam bona et utilia ignorantes appetiverunt. De quibus hic dicitur: Beati qui lugent nunc, quoniam ipsi consolabuntur. Fortitudo congruit esurientibus et sitientibus. Laborant enim desiderantes gaudium de veris bonis, et amorem a terrenis et corporalibus avertere cupientes. De quibus hic dicitur: Beati qui esuriunt et sitiunt iustitiam, quoniam ipsi saturabuntur. Consilium congruit misericordibus. Hoc enim unum remedium est de tantis malis evadendi, ut dimittamus, sicut et nobis dimitti volumus, et adjuvemus in quo possimus alios, sicut et nos in quo non possumus cupimus adjuvari. De quibus hic dicitur: Beati misericordes, quoniam ipsi misericordiam consequentur." Intellectus cordis congruit mundis corde, tanquam purgato oculo quo cerni possit quod corporeus oculus non vidit, nec auris audivit, nec in cor hominis ascendit. De quibus hic dicitur: Beati mundo corde, quoniam ipsi Deum videbunt. Sapientia congruit pacificis, in quibus jam ordinata sunt omnia, nullusque motus rebellis est.« Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, pp.140-141.

¹¹⁸ 「それは、イエスの名において、天上の者、地上の者、そして地下の者たちの、すべての膝がかがめられ」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、610頁。

第18詩と同様、ラバーヌスは解説文において、出エジプトの50日後に起こったシナイ山頂での律法の授与、主の復活の50日後に起きた聖霊降臨など、50に関連する聖書のエピソードを列挙する。また、イシドールス『語源』に依拠しつつ、第18詩で扱われた40の約数の合計が50になることを示す。そして、40は現世での生活や存在を意味するのに対し、50は未来と永遠の生命を意味すると主張する。そこから、40と50という数字を通じて、現世で信心深い生活を送り諸徳を達成すれば、天の国への入場が許されることが暗示されていると述べる。そして彼は、バビロン捕囚が約50年で終了し、偶像と罪にひどく仕えていた捕虜が十字架によって滅ぼされた¹¹⁹ため、50という数字が十字架の形で表現されるのは当然であると、50と十字架を結びつける理由を説明する。第18詩同様、1つの数字から複数の聖書関連エピソードや教義を想起させる工夫がされている。

23. 第20詩 (fol.27v-28r) 「120という数字とその意味の秘密について」【図33】

薄青色の枠の中に金色で彩色されたΛが4つ、十字架の形に並べられている。Λはそれ自体30を意味し、それを4つ並べることで詩の主題である120を表現している。更にΛの中には30字のインテクトがそれぞれ書かれているため、文字数でも120が示されている。インテクトは元々赤字で書かれていたが、今日ではほとんど見えなくなっている。テキストは、上から下、左から右に読み、内容は以下の通りである。

上のΛ：「すなわち主の受難は全世界にとっての生である。(Est orbi toto Domini nam passio vita.)」

下のΛ：「世界にとって、十字架は(神の)怒りからの解放への希望である。(Arvo crux una spes libertatis ab ira.)」

左のΛ：「神からの賜物で満たされた喜びの灯りが光る。(Lux laeta lucet divino munere plena.)」

右のΛ：「真実の神意によって、それは統治の始まりをも意味する。(Veraci nutu signat et proemia regni.)」

ラバーヌスは詩の解説文において、120には「偉大な秘義」(sacramentum magnum)があるとし、聖書中の120が登場する箇所を挙げる。すなわち、ノアの洪水が発生するまでの120年間や、ソロモンの神殿の高さが120キュビトであったこと、聖霊降臨の際聖霊に満たされたのが120人であったことなどを述べる。また、4福音書それぞれにおいて三位一体の信仰(3)と戒めの完成(十戒のこと、10)が完全に説明されていることから120という数字を導き出している(4×3×10=120)。十字架との関連性は、洪水に備えてノアが建設した箱舟との間に見出されている¹²⁰。

24. 第21詩 (fol.28v-29r) 「72という数字とその意味について」【図34】

第21詩の枠は薄青色で、インテクトの一文字一文字が銀色の枠で囲まれている。インテクトは十字架に似た、4枚の先の尖った花卉を持つ花のような図形を形づくり、中央のベーステキストである“T”を囲んでいる。インテクトはまず縦軸を左から右に読み、その後と同様に横軸を読む。インテクトの内容は以下の通りである。

縦軸の花卉：「十字架の中で、主の法が、光を放つ灯りによって飾られている。(In cruce lex Domini decoratur luce corusca.)」

横軸の花卉：「複数の民族と言語が、聖なる賛歌において一つになる。(Gentes et linguae sociantur laude sacrata.)」

¹¹⁹“Recteque jubei numerus exprimitur in crucis figura, quia tota ratio illius spiritualiter cruci aptatur. Nam servitus indebita Israhelitarum in illo relaxatur, et per crucem generis humani captivitas et servitus, qua peccato nequiter atque idolis serviebat, destruitur, et verae libertati, qua Deo soli servitur, homo, qui ad imaginem Dei creatus est, redditur.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.155.

¹²⁰“Proinde illud quod arca Noe cum ex Dei oraecepto construebatur, et ad saluationem electorum ad similitudinem sanctae crucis impiis diuio perituris praeparabatur, …” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.161.

第21詩においても、主題の数字がインテキストの文字数で表現されている。また、これまでの詩と同様、ラバーヌスは72に関する聖書の箇所を例示する。すなわち聖霊降臨の後12使徒が話したという72の言語、旧約・新約聖書の合計冊数（72冊）、キリストが2人ずつにして派遣した72人の弟子（ルカの福音書第10章1節¹²¹⁾などである。数字の説明の後、ラバーヌスは聖十字架を賛美する¹²²⁾。

25. 第22詩 (fol.29v-30r)「キリストの御名が示されるモノグラムについて。その中央では賞賛の時が示されている。またもう一つのもの（モノグラム）の中央には審判の前の時が示されている。その未来においては反キリスト者が威張ると考えられている。」【図35】

第22詩は、『聖十字架礼讃』全28詩の中でも極めて複雑な入れ子構造となっている。まず、23文字のギリシア語アルファベットがキリストのモノグラムであるXP（カイ・ロー）を形作る。次に、ギリシア語アルファベットはPの上部（ΟΧΡΗΠΗΧΥΚ）、Pの下部（ΑΛΗΘΙΑ）とX（ΘΧΗΡΠΗΧ）でそれぞれ別の文を構成する¹²³⁾。更に、これらのギリシア語アルファベットがインテキストのためのテキストフィールドとなっているのである。インテキストを読む順序は、まずPの上部の弧の部分を下から上に反時計回りに読み、Pの下部を上から下に読む。その後Xの左上から右下へ、左下から右上へと読む。

Pの上部：「すなわち、救済を授けてくださる書物がキリストの御名により光輝くのは当然である。（Nam alma decet radiant scripta hinc quod nomine Christi.）」

Pの下部：「この神聖な、祝福をもたらす書物はキリストを賛美する。（Sancta salutaris laudat haec scriptio Christum.）」

X：「キリストは人であるとともに、世界の裁き手である。（Christus homo est placidus nempe arbiter hic quoque mundi est.）」

研究史上、オプタティアヌス・ポルフィリウスの第8詩に依拠しているとの見解で一致している¹²⁴⁾第22詩では、クリスモンについて説明された後、形象詩に使用されているアルファベットから算出される数字に言及される。すなわちPには1260という数字¹²⁵⁾が、Xには1335という数字¹²⁶⁾が隠されており、これらの数字はそれぞれ、キリストが公的に布教活動を行った日数（1260日）、ダニエル書で預言された反キリストの破滅からキリストの再臨までの日数（1335日）を示すという。U.エルンストは第22詩について、ラバーヌスの詩はポルフィリウスを参考しているものの、数秘術的解釈の可能性を加えた点でポルフィリウスの形象詩を更に拡張したと述べている¹²⁷⁾。

26. 第23詩 (fol.30v-31r)「24という数字とその秘義について」【図36】

薄緑色の枠線で囲まれた中に、文字列によって十字架が描かれている。十字架と正方形の枠の間は縦横6文字分空いており、十字架のそれぞれの先端の開いた空間に6文字から成る三角形が描かれている。三角形を成す文字の背景は金色で彩色されている。6文字から成る三角形4つで24文字となり、再びインテキストの文字数が主題とリンクしている。インテキストは十字架の縦・横軸と三角形にそれぞれ書

¹²¹⁾ 「さて、この後、主はほかの七十（二）人を任命し、彼らを（おのおの）二人ずつにして、自分が間もなく行く先々のすべての町と場所とに遣わした。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、231-232頁。

¹²²⁾ “O vere bona et vere sancta crux Christi, quis te rite totam enarrare potest? aut quis condigne laudare? quae coelestium arcanorum pia es revelatrix, quae mysteriorum Dei sacra es conservatrix, quaeque sacramentorum Christi idonea es dispensatrix.…”

¹²³⁾ ポイカースによれば、それぞれ“O COTHP IHCYC ΑΛΗΘΙΑ（救世主、イエス、真実）”、“ΘΕΟΧ ΧΡΗΡΠΗΧ ΙΗΧΥΤ（神、キリスト、イエス）”として読み解けるといふ。Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.164,

¹²⁴⁾ 例えば以下の論考が挙げられる。Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.274.

¹²⁵⁾ Pを形作るギリシア語アルファベット（ΟΧΡΗΠΗΧΥΚ, ΑΛΗΘΙΑ）が示す数字とP自身（Δ+Ι）を合計すると1260となるという。Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.274.

¹²⁶⁾ Pの場合と同様、Xを形作るギリシア語アルファベット（ΘΧΗΡΠΗΧ）が示す数字と、Pとの交差部分に位置するHを合計すると1335となるという。Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.276.

¹²⁷⁾ Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.276-277.

かれており、上部の三角形・縦軸・下部の三角形を読んだのち、左の三角形・横軸・右の三角形を読む。内容は以下の通りである。

上の三角形：「強さ（Fortis）」

下の三角形：「勇敢さ（Virtus）」

左の三角形：「勝者（Victor）」

右の三角形：「高名（Clarus）」

十字架の縦軸：「力強い勇敢さを備えたキリスト、その約束を達成する（(Fortis) conpleuit Christus sua famina (virtus)）」

十字架の横軸：「イエス、名高き勝者、敬虔なる褒美を確実にする（(Uictor consignans iesus pia proemia (clarus)）」

ここでも、ラバーヌスは24にまつわる聖書中の箇所を列挙する。例えば1日が24時間であること¹²⁸、旧約聖書の冊数が24冊であること¹²⁹、アaronの24人の息子¹³⁰、ヨハネの黙示録第4章4節以降に登場する24人の長老である。また、ラバーヌスは祭司として主に奉仕するアaronの息子たちから、祭司メルキゼデクへと論を繋げ、更に祭壇を連想して、永遠の祭司かつ犠牲の子羊であるキリストへと展開していく¹³¹。そして、いくつかの聖書の箇所を引用しながら¹³²、キリストが死に至るまでいかに父なる神に従順であったかについて、またキリストの昇天後の弟子たちによる宣教活動について触れられる。

27. 第24詩 (fol.31v-32r) 「144という数字とその秘義について」【図37】

薄青の枠に囲まれた正方形の画面に、瓶のような形状の図形が4つ描かれ、その蓋のような部分が内側になるようにして十字架の形に並べられている。瓶のような図形は銀色で彩色され、金色の線で縁取られている。図形の中にはそれぞれ36字のインテクトが書かれており、合計の文字数は詩の主題である144となる。4つの図形の最も内側の部分のみを繋げて読むと「十字架」(crux)という言葉が現れる。インテクトの内容は以下の通りである。

上の図形：「穢れ無き群れよ、お前は声を張り上げて歌う (Inmaculata cohors cantas tu uocibus illic)」

下の図形：「王たるイエスは歓喜する、処女の子羊が草をはむ場所で (Rex ubi iesus ovat quo pascit virginis agnus)」

左の図形：「歌われることのない歌は栄光を溶かしてしまう (Carmina quae nullus diffuso fame cantat)」

右の図形：「ここにいる君たちの群れは孤立しているのではなく、その秩序は優れている (Hic vester grex ni solus et sprendidus ordo)」

ラバーヌスはまず、144という数字を1000倍し、黙示録第7章4節¹³³や第14章1節¹³⁴に登場する144000人と結びつける。144000という数字について、ラバーヌスは、12の2乗と完全数である10の二

¹²⁸ “Quarter enim seni XXIII reddunt; quo numero horarum caelestis sphaerae ambitus circumfertur, et naturalis diei cursus indicio siderum circumeunitium deprehenditur.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.181.

¹²⁹ ヘブライ語原典において、旧約聖書は24巻から成っていた。

¹³⁰ 歴代誌上第24章。

¹³¹ “...quo numero (24) in sortes Levitica tribus per David distributa est, et cunctos filios Aaron per vices Deo ministrare decretum est, et merito, ut numerus electorum pontificum praemonstraret aeternum Christi sacerdotium, qui pontifex factus secundum ordinem Melchisedech, in ara crucis immaculatam se obtulit hostiam Deo, agnum videlicet illum qui abstulit peccata mundi, cuius sanguinis aspersione sancta et sancta sanctorum mundata sunt, et vera expiatione peccatorum omnium sordes ablutae sunt.” () は筆者が挿入。Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.181.

¹³² ヨハネの福音書第12章32節、マタイの福音書第28章18節、フェリペ人への手紙第2章8-11節、マルコの福音書第16章20節、ルカの福音書第20章17節、使徒行伝第4章10節、コリント人への第一の手紙第2章2節、ガラテヤ人への手紙第6章14節。Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.182-183.

¹³³ 「私は刻印を押された者たちの数を聞いたが、それは十四万四千人で、イスラエルの子孫のあらゆる部族の中から（選出されて）刻印を押されていた。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2004年、866頁。

乗の掛け合わせであることから、教会の安定性を示す数字であると述べている¹³⁵。また、ラバーヌスは144000人の「刻印を押された者たち」から、エゼキエル書第9章3節-6節で人々につけられる額の印であるギリシア語アルファベットTを連想し、Tと十字架を結びつけた。形象詩中央のスペースの中心にアルファベットのTが配置されているのは、これとの関連であろう。更にラバーヌスはイザヤ書第56章3-5節¹³⁶や、同箇所が引用される新約聖書の箇所を挙げつつ、救済に値しないとされる者たちの救済について言及する。その際、第24詩の十字架を成す4つの瓶のような図形が、5つの角をもつことからモーセ五書を、底部が四角形であることから4福音書記者を示し、そこから、キリストによる救済とその福音が4つの世界全体に広がることを示唆するのだと、図形の意味を解説する¹³⁷。これにより、同主題が旧約・新約双方に関係することを、ラバーヌスはテキストによってのみならず図形によっても表現したとわかる¹³⁸。第24詩の解説文からは、ラバーヌスが1つの形象詩に幾重もの数秘術的な意味の層を付与したことに加え、その図形も慎重に選択していたことが理解される。

28. 第25詩 (fol.32v-33r) 「十字架状に配置されたハレルヤとアーメンについて」【図38】

薄青色の枠の中にベーステキストと形象詩が描かれている。内に4字あるいは5字のインテキストを含む金色のアルファベット8文字が十字架状に並べられ、その中央の空いたスペースに、1字ずつ文字を含む4つの小さな四角形が、小さな十字を作るかのように配置されている。小さな四角形は銀色で彩色されている。金色のアルファベットは「ア（ハ）レルヤ（Alleluia）」という単語を成し、中央の4つの四角形に書かれたアルファベットは「アーメン（Amen）」と読める。インテキストはAlleluiaの中に含まれた文字から成り、中央のAmenは含まない。内容は以下の通りである。

「十字架よ、お前は神の永遠の賛美である。お前は天の砦に住まう。(Crux aeterna dei es laus vivis in arce polorum)」

第25詩は、第18-24詩に見られるような数秘術的要素を含まず、黙示録第19章1-8節¹³⁹や5章9-14節¹⁴⁰を引用しつつ、賛美の言葉であるア（ハ）レルヤとアーメンの賛美的意味を解説する。ラバーヌ

¹³⁴ 「また私は見た、すると小羊がシオンの山の上に立っていたではないか。小羊と共に、十四万四千人の人々も（立っていたが）、その人々の額には小羊の名前と小羊の父の名前とが書かれていた。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2004年、882頁。

¹³⁵ “Ad augmentum autem perfectionis pertinent et ipsa XII duodecies multiplicari, et ad summam millenario perfici, qui est denarius numerus quadratus solidus, significans stabilem Ecclesiae uitam.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.187.

¹³⁶ 「だから、ヤハウエに就く異邦人は言うてはならない、『ヤハウエはきつと、私を己が民から分けられる』、と。また宦官も言うてはならない、『見よ、私は枯れ木だ』、と。まことに、ヤハウエはこう言われるからだ、『わが安息日を守り、わたしの喜ぶ事を選び取る宦官たち、わが定めを堅く保つ者たちに、わたしは彼らに、わが家とわが城壁のうちで、息子、娘たちにもまさる分け前と名を与えよう。絶たれることのない永久の名を、わたしは彼に与えよう。』旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 VII イザヤ書』岩波書店2007年、260-261頁。

¹³⁷ “Quinarius ergo numerus legem signat, et quaternarius Evangelium; at IIII pentagoni cum adhaerentibus sibi IIII unitatibus IIII cornua crucis complent, quia passione Christi et resurrectione completa lex simul et Evangelium, in totam mundi latitudinem praedicanda doctoribus comissa sunt.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.190 / Ernst, U., p.259.

¹³⁸ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.53.

¹³⁹ 「これらのことの後に、私は天で、大群衆（が上げる）どよめきのようなものを聞いたが、その声はこう叫んでいた、『ハレルヤ、救いと栄光と力とは、私たちの神のもの。なぜなら、神のさばきは、真実で義しいから。神は、淫行で地上を墮落させたかの大淫婦をさばき、ご自分の僕たちが（流した）血の報復を、かの女になさったから』。ふたたび、彼らは叫んだ、『ハレルヤ、かの女が（焼かれる）煙は、世々永遠に立ち上る』。そして、二十四人の長老たちと四匹の生き物とは平伏して、『アーメン、ハレルヤ』と言いつつ、玉座に座っている神を礼拝した。すると、玉座から声がして、こう言った、『すべての神の僕たちよ、（そしてまた、）神を畏れる者たちよ、卑小な者も偉大な者も、私たちの神を賛美せよ』。私はまた、大群衆があげるとよめきのようなもの、大水の轟きのような、激し雷鳴のようなものを聞いたが、それは、こう言っていた、『ハレルヤ、全能者にして、（私たちの）神なる主が、王となられたから。私たちは喜び、歓喜して、神の栄光を称えようではないか。（ついに）小羊の婚礼の日が来て、その花嫁も準備万端を整えたからである。花嫁は、光り輝く、清い、麻布（の衣）を着ることを許されたのだ』。—ところで麻布（の衣）とは、聖徒たちの義しい行為のことである。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、900-901頁。

スによれば、ア（ハ）レルヤは「主を賛美する」を意味し、復活への希望のために教会はア（ハ）レルヤを、主日と聖霊降臨祭の時期に歌い続けるという。またアーメンは「信仰」「真理」を意味し、司祭による適切な祈禱と祝福に必須の言葉であり、神から授かることのできるあらゆる善や永遠の生命を獲得するための言葉であるのだという¹⁴¹。更にラバーヌスは、ア（ハ）レルヤとアーメンという言葉を通じて主が賛美され、信者が集まり、彼らに永遠の生命が与えられ、古い呪いが解けて新たな契約が為されるため、聖十字架と深く結びつくのだと論じる。最後にラバーヌスはヨハネの黙示録第5章9-11節を引用し、解説を締めくくる。

29. 第26詩 (fol.33v-34r) 「キリストの受難と我々の救済に関する預言者の箇所について」【図39】

今では褪色しているが、かつては銀色に彩色されていた枠線の中に、ベーステキストが書かれている。第3詩以降の形象詩に見られた複雑な幾何学図形や文字、図像による十字架とは異なり、第26詩は第2詩のような簡素な田の字型にデザインされている。中央の十字は金色に塗られ、インテキストは縦軸と横軸両方に書かれているが、どちらも全く同じ内容である。

「十字架よ、お前は高き者たち（高きところ）を好む。お前は这个世界の舵である (Es placita superis crux huic es navita mundo)」

ラバーヌスは解説文の冒頭で、著作の短さ故にすべての箇所を挙げることは不可能であると留意しつつ、タイトルに示されている通り、受難と救済に関わる旧約聖書の預言者たちの叙述の数々、すなわち詩篇（第22章17節、69章2節、95章9-10節）¹⁴²、イザヤ書（第9章5節、11章10節、11章12節、53章6-7節、50章6節、65章2節）¹⁴³、エゼキエル書（第10章2節、9章4節、34章11-13節、15-16

¹⁴⁰ 「彼らは、次のように（歌詞を）口ずさんで、新しい讚美の歌を歌った、『あなたは子巻物を受け取り、その封印を解くにふさわしいお方、なぜなら、あなたは屠られ、あらゆる部族とあらゆる国語（の違う民）とあらゆる国民とあらゆる民族の中からあなたの血潮によって、（人々を）神のために贖われ、彼らをば私たちの神に仕える祭司たち（となし）、そして（彼らが支配する）王国を造り上げたからです。彼らは、地上を統治するであります。そして、私は幻の中で、玉座と生き物たちと長老たちとを取り巻いている大榮の天使たちの声を聞いた。彼らの数は、万の数万倍、千の数千倍であって、大声でこう叫んでいた、『屠られた小羊は、力、富、知恵、強さ、誉、栄光、そして賛美を受けるにふさわしき方』。また、天上と地上と地下と海の上に（いる）あらゆる（被造）物とそれらの中に（存在する）すべてのものが、こう言っているのを私は聞いた、『玉座に座しておられるお方と小羊とに、賛美、誉、栄光、そして権力とが世々永遠にありますように』。そして、四匹の生き物は『アーメン』と唱え、長老たちは平伏して礼拝した。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、862-863頁。

¹⁴¹ “Haec ergo duo uerba hebraica, id est, Alleluia et Amen, cum interpretari queant, nam Alleluia laudate Fominum interpretatur, Amen quoque in fidem siue ueritatem transfertur, propter reuerentiam tamen sanctitatis primae illis linguae seruatur auctoritas; atque Alleluia in Dominicis diebus totoque quinquagesimae tempore, propter spem resurrectionis, quae in Domini est laude futura, continue canit Ecclesia; Amen uero propter impetrandam eandem perpetuam uitam; immo omne bonum quod in praesenti siue in future a Somino optat accipere, ad sacerdotis deprecationem seu benedictionem, rite deuotio respondet fidelium.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.196; Ernst, U., *Visuelle Poesie*, p.201, 203.

¹⁴² 「まことに犬どもが私を囲んだ。悪をなす者の群れが私を取り囲んだ。獅子のように、わが手と足を。」（第22章17節）「彼らはわが食事に毒草を入れ、わが渴きに酢を飲ませました。」（69章2（21）節）「ヤハウエにひれ伏せ、聖なる装いで。かれの前にもだえよ、全地。諸国民の中で言え、『ヤハウエが王であられる。大地もまた据えられ、揺るがされない。かれは民らを公平をもって裁く』と。」（95（96）章9-10節）旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV 諸書』岩波書店2005年。

¹⁴³ 「まことに、一人の嬰兒がわれらのために生まれ、一人の男の子がわれらに与えられた。主権はその肩にあり、その名を、奇しき議官、力強い神、永遠の父、平和の君主、と呼ぶ。」（9章5節）「その日になると、諸国民のための旗として立ったエッサイの根、彼を諸国が求め、彼の留まるところは栄えあるところとなる。／主は国々のために旗を掲げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの離散の民を、地の四隅から集められる。」（11章10節、12節）「われらは皆、羊のようにさ迷い、おのおの己が道に向かった。ところがヤハウエは、彼に執り成しをさせた、われら皆の咎に対して。虐げられたが、しかし彼こそは忍び、口を開かず、屠り場へ引かれる子羊のように、あるいは毛を刈る者の前に黙す雌羊のように、口を開くことをしなかった。」（53章6-7節）「わが背を、打つ者どもに、わが頬を、（髭を）抜く者どもに、ゆだねた。辱めと唾に対して、わが顔を隠すことをしなかった。」（50章6節）「わたしはわが手をひねもす、差し伸べていた、反逆する民、己が思いに従って良くない道を歩む者たちに向かつて。」（65章2節）旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 VII イザヤ書』岩波書店2007年。

節)¹⁴⁴、ダニエル書（第9章24-25節、26-27節）¹⁴⁵、ホセア書（第13章14節）¹⁴⁶、ヨエル書（第4章15-17節）¹⁴⁷、アモス書（第8章9-11節）¹⁴⁸、オバデヤ書（第17章、21章）¹⁴⁹、ミカ書（第4章1節、第5章1節）¹⁵⁰、ハバクク書（第3章4節）¹⁵¹を引用する。解説文のほとんどが引用であり、ラバーヌス自身の考えはほとんど書かれていない。この次には、受難と救済に関して新約聖書の使徒たちがいかに叙述しているかを主題とする第27詩が続く。『聖十字架礼讃』を締めくくるのにラバーヌスが選択したのは、十字架と密接に結びつくキリストの受難と人々の救済に関する、旧約・新約の叙述の予型的比較であった。

-
- ¹⁴⁴ 「彼は亜麻布をまとう男に言った、『ケルビムの下の車輪の間に入れ。そして、ケルビムの間から（取った）炭火で両掌を満たし、（それを）町にまき散らせ。』すると、わが眼前で、彼は（車輪の間）に入った。」（第10章2節）「ヤハウェは彼に言った、『町のただ中、エルサレムのただ中を行き巡れ。そして、そのただ中で行われたあらゆる忌まわしい行為について嘆き、呻く人々の額に印をつけるがよい。』（9章4節）「実に、主ヤハウェはこう言った、『みよ、わたし自らがわが羊の群をたずね求め、探し出す。その羊の群の中から散らされ（ていなくな）るものが出た日、牧者がその群を探し出すように、わたしはわが羊の群を探し出す。そして雲と黒雲のかかる日、彼らが散って行った場所から彼らを救い出す。わたしは彼らを諸国民の中から導き出し、彼らを国々から集める。そして彼らをその土地に導き入れ、イスラエルの山々で、川床で、この地のあらゆる居住地で、彼らを牧養する。…/わたしがわが羊の群を牧養し、わたしが彼らを伏させるのだ—とは主ヤハウェの御告げ—。わたしは滅びゆく者を捜し求め、追いやられた者を連れ戻し、挫かれた者に包帯を巻き、病にある者を強めるが、肥えた者と強い者は根絶する。わたしは公正をもってこれを牧養する。』（34章11-13節、15-16節）旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IX エゼキエル書』岩波書店1999年。
- ¹⁴⁵ 「あなたの民とあなたの聖都に対して七十週が定められた。反逆を立ち、罪に終止符を打ち、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言者を認証し、最も聖なる者に油を注ぐためだ。知り、そして悟れ。エルサレム再建の言葉が出てから、君主たるメシアの時までが七週。六十二週して、困難な時期に広場と堀が再建される。この六十二週の後、メシアは断たれ、彼にはない。都と聖所はつぎに来る一人の君主の兵によっては可視荒れ、その終末には洪水が伴い、終戦の時まで荒廃が定まっている。彼は一週の間、多数の者と同盟を強化し、半週の間、犠牲と献げ物を廃し、忌まわしいものの翼の上に荒廃をもたらす者（が座し）、定められた破滅が荒廃をもたらす者に注がれる」（第9章24-25節、26-27節）旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV 諸書』岩波書店2005年。
- ¹⁴⁶ 「陰府の手からわたしは彼らを贖い出し、彼らを死から贖う。死よ、あなたの悪疫はどこにあるのか。陰府よ、あなたの病魔はどこにあるのか。わたしの目から同情は隠される。」（第13章14節）旧約聖書翻訳委員会『旧約聖書 III 預言書』2005年。
- ¹⁴⁷ 「太陽と月は暗くなり、星々はその輝きを失った。ヤハウェがシオンから吠え、エルサレムからその声を上げれば、天と地は揺れ動く。だがヤハウェはその民の避け所、イスラエルの子らの砦。『あなたがたは、知るようになる、わたしこそあなたがたの神ヤハウェであり、わが聖なる山、シオンに住まう者であることを。エルサレムは聖なる地となり、もはや二度と異国の民がそこを通ることはない。』（第4章15-17）旧約聖書翻訳委員会『旧約聖書 III 預言書』2005年。
- ¹⁴⁸ 「『その日には、—（これは）主なるヤハウェの御告げ—わたしは真昼に太陽を沈め、白昼に大地を暗くする。わたしはあなたがたの祭りを葬儀に変え、あなたがたの祝いの歌をすべて哀歌に変える。わたしはすべての者の腰に粗布をまといせ、すべての者の頭髪を剃り落とさせる。わたしはそれを独り子の葬儀のようにし、その終りを、苦しみの日のようにする。』『見よ（次のような）日々（が来る）。—（これは）主（なる）ヤハウェの御告げ—わたしはこの地に飢餓を送る。パンの飢餓ではなく、水の渇きでもなく、ヤハウェの言葉を聞けない飢餓である。』（第8章9-11節）旧約聖書翻訳委員会『旧約聖書 III 預言書』2005年。
- ¹⁴⁹ 「しかしシオンの山には、救いがあり、（そこは）聖なる所となる。そしてヤコブの家が、彼らの所有物を受け継ぐ。」（17節）旧約聖書翻訳委員会『旧約聖書 III 預言書』2005年。「シオンの山に救われた者たちが、エサウの山を裁くために上って来る。そして王国はヤハウェのものとなるであろう。」（21節）旧約聖書翻訳委員会『旧約聖書 III 預言書』2005年。
- ¹⁵⁰ 「終わりの日々に、ヤハウェの家の山は、諸々の山の頂に堅く立ち、諸々の峰よりも高くそびえ立つ。諸々の民が流れるように向かい…」（第4章1節）「ベツレヘム、エフラタよ、あなたはユダの氏族の中で小さき者、あなたからわたしのためにイスラエルを治める者が出る。その（者の）由来は古く、永久の昔に遡る。」（第5章1節）
- ¹⁵¹ 「その下にある輝きは（陽）の光のようで、その傍らから閃きを発する。その力はそこに隠されている。」ハバクク書（第3章4節）旧約聖書翻訳委員会『旧約聖書 III 預言書』2005年。

30. 第27詩 (fol.34v-35r)「新約聖書における同じことに関する使徒の叙述について」【図40】

第26詩と同様、第27詩も田の字型の形象詩が採用されている。おそらく内容の関連性を形式上も示すためであろう。しかし、色遣いは第26詩とは異なり、枠は薄緑色で十字は銀色で描かれている。インテクストについては第26詩と同様、十字架の縦軸と横軸に全く同じ韻文が書かれているが、第27詩のインテクストは反対側からも読むことが出来る。そのため、インテクストは以下の2つとなる。

「私がお前に詩を捧げる時、私はその歌においてお前を賛美する、キリストよ (Si do te tibi metra sono his te iesus in odis)」

「私が詩に努力と芸術を捧げる時、その名声はこの詩にも宿るであろう (Si do nisus ei et si honos Artem ibit et odis)」

ラバーヌスはまず第26詩で引用されたキリストに関する預言が、十字架の力を通じて人間となったキリストによって実現されたと説明する。そしてキリストの受難と人々の救済に関する新約聖書の使徒たちの言葉を、様々な箇所から引用する。すなわち使徒行伝 (第10章 37-43節)¹⁵²、ペトロの第一の手紙 (第3章 18節、2章 21節、23-24節)¹⁵³、ヤコブの手紙 (第5章 10節)¹⁵⁴、ヨハネの手紙 (第2章 1-2節、3章 16節)¹⁵⁵、コリント人への第一の手紙 (第1章 17-18節、2章 2節)¹⁵⁶、ガラテヤ人への手紙 (第6章 14節)¹⁵⁷、エフェソ人への手紙 (第2章 14-16節)¹⁵⁸、フィリピ人への手紙 (第2章

¹⁵² 『…ヨハネが洗礼を述べ伝えた後、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起こった出来事を、あなたたちは知っているでしょう。それは、ナザレ出身のイエスのことです。神は子の方に聖霊と力とをもって油を注がれました。この方は、神がこの方と共にいられたので、各地を巡って善い業をなし、悪魔におえつけられていた人々をことごとく癒されたのです。私たちは、イエスがユダヤの地方とエルサレムで行われたすべてのことの証人です。この方を、人々は木にかけて殺した。しかしこの方を神は三日目に起こし、甦らせてくださいました。ただし、それはすべての民にではなく、神からあらかじめ選ばれていた証人に、すなわち、イエスが死人の中から蘇られた後、一緒に飲み食いした私たちに對してです。そしてイエスは、ご自分が生きている者と死んだ者との裁き人として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、また証言するようにと、私たちに命じられたのです。預言者も皆、このイエスを信ずる者はことごとくその名によって罪の赦しが得られると、証言しております。』新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004年、423-424頁。

¹⁵³ 「なぜなら、キリストも、罪（の贖い）のために一度苦しみを受けた。義人が不義な人々のために（苦しんだ）。あなたがたを神のもとへ連れて行くために。肉（の次元）では殺されたが、霊（の次元）では生かされたのである。」（第3章 18節）「このためにこそ、あなたがたは召されたのである。キリストも、あなたがたに模範を残そうとして、あなたがたがその足跡に従うようにと、あなたがたのために苦しんだのだから。」（2章 21節）「彼は侮辱されて、侮辱し返さず、苦しんでいるときに、脅かすこともせず、義をもってさばく方に委ねていた。彼は自ら私たちの罪を、自分の体のうちに、木の上に運び上げた。私たちがそれらの罪から離れて、義に生きるために。」（2章 23-24節）新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004年、822頁。

¹⁵⁴ 「兄弟たちよ、諸悪に耐えること、忍耐することについては、主の名において語った預言者たちを模範としなさい。」ヤコブの手紙 (第5章 10節) 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004年、797-798頁。

¹⁵⁵ 「私の子どもたちよ、私があなたがたにこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないためである。もしそれでも誰かが罪を犯す場合には、私たちには父のもとに義なるイエス・キリストが弁護者としていて下さる。この方こそ私たちの罪のための、いや、私たちの罪のためのみならず、全世界のための贖いの供え物である。」ヨハネの第一の手紙 (第2章 1-2節) 「私たちが愛を知ったのは、あの方が私たちのために自分の命を捨てて下さったことによる。私たちもまた兄弟たちのために命を捨てるべきである。」（3章 16節）新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004年、801頁、805頁。

¹⁵⁶ 「キリストは私を、洗礼を授けるためにではなく、むしろ福音を告げ知らせるために、遣わされたのだからである。しかも、言葉の知恵とは異なる仕方（福音を告げ知らせる）のために、またキリストの十字架が空しくされないために。なぜならば、十字架の言葉は、滅びる者たちにとっては愚かさ（そのもの）であるが、救われる者たち、（すなわち）私たちにとっては、神の力だからである。」（第1章 17-18節）「なぜならば私は、あなたがたのうちにあっては、イエス・キリスト、しかも十字架につけられてしまっているその方以外にはなにごとくも知ろうとはしないという決断をしたからである。」（2章 2節）新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004年、502-503頁。

¹⁵⁷ 「しかし、私にとっては、私たちの主イエス・キリストの十字架以外のものを誇ることは、断じてあってはならない。そのキリストをとおして、世界は私に對して、私も世界に對して、十字架につけられてしまっているのである。」（第6章 14節）新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店 2004年、603-604頁。

8-11 節)¹⁵⁹、コロサイ人への手紙（第1章 16-20 節、2章 13-15 節）¹⁶⁰が引用されている。ポイカースは第27 詩に引用された聖書の箇所について、救済史的出来事を想起させる終末論的象徴かつ神の救済計画の総体としての十字架の賛美のために選び取られたと主張している¹⁶¹。確かに、これまでの形象詩で聖十字架が常に中心的な主題であったわけではなく、図像や幾何学的図形が十字架状に配置されるなど聖書に関する知を包括する容器として利用されていたことと比較すると、第27 詩は聖十字架への言及が多く、聖十字架に重点が置かれていると言える。ラバーヌスは第28 詩へ移る前に、『聖十字架礼讃』全体の主題である聖十字架の役割や意義について直接的に言及し、今一度鑑賞者に聖十字架を想起させるのである。

31. 第28 詩 (fol.35v-36r) 「聖十字架の崇敬について、そこで制作者自身が自身のためのとりなしの祈りを捧げる。また彼自身の肖像は、祈るために十字架よりも低い位置に跪いている。」【図41】

『聖十字架礼讃』第一巻を締めくくるのは、褪色した銀色の枠線で囲まれた金色の背景に描かれた、十字架とラバーヌス本人の肖像から成る形象詩である。第28 詩は少々分量が多く、47 行×35 列となっている。十字架の4 つの先端は第23 詩の場合と同様、画面の端から4 字分離れたところに留まり、それによって画面上に浮かんでいるかのような視覚的效果を生み出している¹⁶²。インテクストは十字架とラバーヌスの肖像の中に書かれており、十字架の中のインテクストは回文になっている。

十字架（縦横軸どちらも同じ内容）：「樹よ、祭壇よ、私は懇願する、祭壇へ上げられるのを。(Oro te ramus aram ara sumar et oro)」

ラバーヌスの肖像：「私はお前に懇願する、寛大なキリストよ、審判において我ラバーヌスを慈悲深く守り給え (Rabanum memet Clemens rogo christe tuere o pie iudicio)」

ラバーヌスは第28 詩において、まず神に対し、作品を完成させるうえで受けた慈悲への感謝を述べる。その後キリストに対し、自身の能力が許す限り、聖十字架の賞賛に関する詩を吟じ、救済について僕仲間たちに伝えるという誓いは果たしたとして、作品を献呈する。続いて、慈悲によってラバーヌスの作品執筆を支え、慰めてくれたという聖霊に対し感謝を述べつつ、誤りがあった際にはラバーヌスの

¹⁵⁸ 「事実、キリストは私たちの平和であり、(ユダヤ人と異邦人の) 両者を一にし、垣根の隔壁を、(つまり) 敵意を倒壊させた方(である)、もろもろの戒律の総体であるもともとの掟の律法を自らの肉において無効とすることによって。二人(の人)を御自身において一つの新しい人に造り上げて平和を創出し、両者を一つの体において十字架を通して神と和解させ、(こうして) 御自身において敵意を抹殺するために。」(第2章 14-16 節) 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、692頁。

¹⁵⁹ 「己れ自身を低くした、死に至るまで従順になりつつ、しかも十字架の死に(至るまでも)。それゆえほかならぬ神は、彼を高く挙げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。それは、イエスの名において、天上の者、地上の者、地下の者たちのすべての膝かがめられ、すべての舌が、『イエス・キリストは主なり』と告白するためである、父なる神の栄光のために。」フィリピン人への手紙(第2章 8-11 節) 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、610頁。

¹⁶⁰ 「事実、御子において万物が創造された。天にあるものも地の上にあるものも、見えるものも見えざるものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権勢であれ。万物は御子を通して、そして御子に向けて創造されている。また御子は万物に先立ち、万物は御子において存立している。また御子はその体の頭、すなわち教会の(頭)。この方は始源であり、死人の中からの最初の誕生者、あらゆることにおいて第一人者になるように、と。(それは) 全き充満が御子の内に宿ることをよしとしたからであり、また御子を通して見個に向けて万物を和解させることを(よしとしたからである)。地上のものであれ、天上のものであれ、御子の十字架の血を通して(御子を通して) 平和に至らしめることで(和解させることを)。」(第1章 16-20 節) 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、677-678頁。

「あなたがたはもろもろの過ちやあなたがた自身の肉の包皮によって死んでいたが、(神はそういうあなたがたを) キリストと共に生かして下さった。私たちのためにすべての過ちを赦し、もろもろの戒律によって私たちの債務を定めた証文—これらは私たちに敵対的であった—を抹消し、これを十字架に釘付けして除去してしまっている。そして(神は) もろもろの支配と権勢の服を剥ぎ取り、キリストにおいてこれら(の勢力)を凱旋行進に従えて公然とさらし者にしたのだった。」(2章 13-15 節) 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、679-680頁。

¹⁶¹ Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.56.

¹⁶² Beuckers, K.G., *Kreuzeslob*, p.58.

もとに来て伝えるよう懇願する。その後、ラバーヌスは様々な賛美的な名で神へと呼びかけながら、祈りを捧げる。そして、今後引き受けるすべての仕事がキリストの恵みによるものとなり、キリストの恵みを通して、そしてキリストの恵みの中で、完全にキリストの賞賛となるように、そしてラバーヌスが罪からより遠くなり、良い行いにおいてより強くなることができるように、と祈る。インテキストの書き下し文の後、解説文の最終部において、ラバーヌスは 28 という数字が 100 までの数字の中で完全な数であることを説明し¹⁶³、故にあらゆる事物の総体であり事物の完全性・完成を意味する十字架を賛美する本作品を 28 詩構成としたのだと説明する。更にテガーは、全 28 詩を、1 詩行における文字数によってグループに分け、以下の事実を発見した。すなわち、計 14 詩において 37 文字、計 7 詩で 35 文字、計 4 詩で 39 文字、計 2 詩で 36 文字、残りの 1 詩は 41 文字であり、14、7、4、2、1 は全て 28 の約数であり、かつ合計すると 28 となる。つまりラバーヌスは『聖十字架礼讃』のために制作する詩の数の決定においてだけでなく、詩の形式的区分に際してもこの完全数を応用したのだという¹⁶⁴。これほどまでに 28 に固執したのは、先にも述べたように、完全数である 28 と聖十字架の完全性とを重ねるためであろう。またそれによって、28 やその約数が暗示する聖書の箇所を、聖十字架のイメージを通じて鑑賞者に喚起する効果もあったのかもしれない。

以上、ラバーヌス・マウルス『聖十字架礼讃』全 28 詩について、書かれている内容や図像を確認した。最後の形象詩の後には、ルートヴィヒ敬虔帝への献呈図を含む各形象詩のベーステキストの書き下し文が掲載され (fol.36v-43r)、その後第二巻 (Liber secundum) の序文が続く。

このように『聖十字架礼讃』の章構成の全体を見ると、同作品が、多層的な意味を持つ聖書を正しく読み解くための手ほどきとなっていることがわかる。テキストの内容自体、聖書解釈に役立てうる知識にあふれているが、それだけでなく、複数の意味の層を持つ難解な形象詩を図として提示し、次ページでその読解に必要な知識と読解の手順を説明する、という構成が、聖書解釈の基礎となっているからである。聖書解釈を行なう者は、まず聖書を文字通り・字義通りに読む。ただし、それだけでは難解な場合もあるし、正しく読み解いたことにはならない。そのため、アウグスティヌスが『創世記逐語註解』(De Genesi ad litteram imperfectus) において、聖書は歴史 (historia)、比喩 (allegoria)、類比 (analogia)、原因 (aetiologia) の 4 つの観点から解釈されるべきだと述べたように¹⁶⁵、聖書の一語一句を比喩的に解釈したり、他の箇所と突き合せたりすることによって、意味の層を一層ずつめくっていく。このような姿勢が、形象詩の視覚的観察と内容的考察を促す『聖十字架礼讃』においても求められるのである。故に、聖書に精通する読者はまず形象詩を見て自分なりに解釈を試みた後に、ラバーヌスの説明を読むことで理解を深めることができたであろうし、独力での聖書解釈に能わぬ者は、形象詩と説明を同時に読むことで、聖書を正しく読み解くうえで必要な知識と姿勢を養うことができたであろう。聖書を正しく解釈できる人材の養成はカロリング・ルネサンスの核の 1 つであったから、『聖十字架礼讃』のように難解な意味の層を丁寧に明らかにしてみせる、現代で言うところの聖書解釈の「ハウトゥー本」が、こ

¹⁶³ 28 は 2 つの理由から完全数とされる。1 つ目は約数の合計が 28 になるため ($1+2+4+7+14=28$)、2 つ目は 1-7 までの数字の合計が 28 になるため ($1+2+3+4+5+6+7=28$) である。また 28 という数字は出エジプト記第 26 章 2 節で言及される、幕屋の幕の長さ (4 キュビト×7 キュビト) としても登場するため、神学上重要な数字である。Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.215; *Lexikon der mittelalterlichen Zahlenbedeutungen*, pp.689-692.

¹⁶⁴ Taeger, B., *Zahlensymbolik bei Hraban, bei Hincmar- und im "Heliand"?* Studien zur Zahlensymbolik im Frühmittelalter, Wiesbaden 1970, pp.55-57.

¹⁶⁵ 大教皇グレゴリウスや聖ヒエロニムスもこの観点を共有しており、サン・ヴィクトールのフーゴーは彼らの見解を踏まえ、著書『ディダスカリコン (学習論)』(Didascalicon de studio legendi) 第 5 卷第 2 章にて、聖書は歴史的な理解の仕方、寓意的な理解の仕方、転義的な理解の仕方の 3 通りの理解の仕方をもつと論じている。Migne, J.P. PL 34, *Liber Imperfectus de genesi ad Litteram*, Sp.222-223.; 上智大学思想研究所編『中世思想原典集成 9 サン=ヴィクトル学派』、平凡社、1996 年、127 頁、193 頁註 243。

の時代に生まれたことは合点がいく。故に『聖十字架礼讃』はある意味で聖書註解書であるとも言えるが、それを形象詩集として構想したのがラバーヌスのオリジナリティであると言える。

第3節 形象詩の系譜におけるラバーヌス

本節では、ラバーヌスにおける形象詩が先行する形象詩といかなる点で異なるのか、ラバーヌスが以前の事例から何を受け継いだのかを、後期古代からカロリング・ルネサンス第一世代にいたる6人の詩人の作品を通じて考察する。また、ラバーヌス以前の形象詩の個別事例を詳しく検討することで、カロリング・ルネサンスの世代交代期にあって、なぜ形象詩という類型が採用されたのかという問いに対する示唆を得ることが本節の目的である¹⁶⁶。

1. プブリウス・オプタティアヌス・ポルフィリウス

キリスト教形象詩の系譜を論じる上で極めて重要な人物は、プブリウス・オプタティアヌス・ポルフィリウスである。ポルフィリウスはローマのコンスタンティヌス大帝の宮廷で活躍した詩人であると同時に、329年から333年までの間都市総督に任じられるなど、政治家としても高い地位にあった人物である。更に、ある書簡においてコンスタンティヌス大帝は彼を「最愛の兄弟 (frater carissime)」と呼んでいる。そのことから、ポルフィリウスは大帝と近い距離にあった人物の一人であったと考えられる¹⁶⁷。しかしながら、ポルフィリウスは政治闘争に巻き込まれ、コンスタンティヌス大帝から追放処分を受けてしまう¹⁶⁸。今日に伝わる彼の形象詩作品は、そのような時分に制作されたものである。

ポルフィリウスはコンスタンティヌス大帝に宛てて2つの形象詩集を制作している。1点目の形象詩集は追放中の身分であるポルフィリウスが、追放処分の撤回を狙いコンスタンティヌス大帝の即位20周年に合わせて制作した、主に支配者讃美的な内容の20詩から成る詩歌集である。詩歌集を受け取ったコンスタンティヌスは326年にポルフィリウスを赦免し、書簡の中でポルフィリウスが古代の韻律の規則だけでなく新たな詩作の技術を熟知していることを褒め称えた¹⁶⁹。2つ目の形象詩集は、大帝による称賛をきっかけに制作され、先の20詩に加えて新たな7つの形象詩を含んでいる。

彼が制作した形象詩の型には、ギリシア型の形象詩 (Technopaignia) を模倣した形象詩、文字列で幾何学的図形を形作る形象詩、文字列で文字を形作る形象詩の3種類がある。そのうち、ギリシア型の形象詩においてはその内容に異教的要素 (ギリシア・ローマ神話など) が見られる。例えば、ポルフィリウスが追放中に制作したと考えられている¹⁷⁰祭壇を象った第26詩【図42】では、冒頭からこの祭壇がピュティア (デルフォイ) の神に捧げられている旨が書かれている¹⁷¹。またその最終文において、擬人化された祭壇がアポロに対し、著者 (=ポルフィリウス) が喜びに満ち溢れながら聖なる合唱隊のもとに於けるよう懇願する内容が書かれている¹⁷²。更に、木管楽器パンフルートの形象を形作る第27詩【図43】は牧歌的な風景を描き、ローマ神話の神ファウヌスが奏でるパンフルートの意味が語られる。

¹⁶⁶ 本節の内容は、エルンストによる視覚効果を持つ詩の歴史を扱った大著『カルメン・フィグラートゥム—古代の起源から中世の始まりまでの形象詩の歴史』(Carmen Figuratum. Geschichte des Figurengedichts von den antiken Ursprüngen bis zum Ausgang des Mittelalters) に大きく依拠する。

¹⁶⁷ Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.97

¹⁶⁸ Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.97.

¹⁶⁹ Migne, J.P. PL 8, Epistola ad Porphyrium.

¹⁷⁰ Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.99.

¹⁷¹ “Vides ut ara stem dicata Pythio, fabre polita vates arte musica.” Kwapisz, J., Optatian and the Order of Court Riddlers, in: *Morphogrammata. The lettered Art of Optatian. Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*. Paderborn 2017, p.173.

¹⁷² “Has, Phoebe, supplex dans metrorum imagines temolis chorisque laetus intersit sacris.” Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.99; Kwapisz, J., Optatian and the Order of Court Riddlers, p.174.

その後、パンフルートの音色が森の神パンとナイアスやドリユアスを喜ばせ、バッカスの秘密の饗宴で鳴り響く様子が表現されている¹⁷³。

形象詩の系譜におけるポルフィリウスの功績は、ギリシアから引き継いだギリシア型の形象詩（Technopaignia）に独自の要素を追加した点にある。ポルフィリウスは、ギリシアのモデルに倣っていくつかのギリシア型の形象詩を制作した後、ラバーヌスを初めとする中世ヨーロッパの詩人に影響を与えることになる新たなタイプの形象詩を制作した。この点において¹⁷⁴、中世の形象詩の出発点と言える存在である。ポルフィリウスは、ギリシアの形象詩が先に言及した祭壇やパンフルートの形象詩のように、詩行の長短を利用して形象を生み出していたのに対し、これをさらに発展させ、異なる彩色や枠線によって他の文字とは区別された文字列で幾何学的図形や物の形を表現し、更に1つの詩に2つのテクストの層（ベーステクストとインテクスト）を入れ込んだ形象詩（インテクスト型形象詩）を考案した。これは例えば、ポルフィリウスの第3詩や第6詩に見られる【図44,45】。第3詩では、35字×35字の正方形の形象詩の中に、枠線で囲んだ文字列で、十字架と4枚の花弁のような図形が描かれている。この詩の主題は皇帝讃美で、本文にはムーサへの呼びかけが詠みこまれており¹⁷⁵、ポルフィリウスが制作したギリシア型の形象詩に見られる異教的要素が、この詩においても確認される。また第6詩も文字列によって三角形や台形、六角形、半八角形が組み合わさった複雑な図形が描かれている。この詩ではまず、詩の構造¹⁷⁶が説明された後、皇帝コンスタンティヌスが322年にイラン系サルマタイ人の王ラウシモード（Rausimod）に対し勝利を取めた点が賞賛されている。詩の最終部にて、ポルフィリウスは皇帝に新たな詩の制作を約束し、追放罰の撤回への期待を、生き生きとした調子で述べる。この詩においても太陽神ポイボス（アポロ）やムーサが言及され、異教的要素が残存している。

一方、彼の第8詩や第14詩では、キリストのモノグラムであるカイ・ローや、カイ・ローとイエス（JESUS）の文字が組み合わされた図案が採用されている。第8詩【図46】では主にキリストが賛美される¹⁷⁷が、皇帝の敬虔さも強調され賞賛される¹⁷⁸。また勝利の女神が皇帝コンスタンティヌスとその息子に同行するように、との著者の願いも表現されている¹⁷⁹。第14詩【図47】の主題は、コンスタンティヌス帝による世界支配と、彼の治世により保証された黄金時代である。カイ・ローを描くインテク

¹⁷³ Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.103.

¹⁷⁴ 実際、ラバーヌスも第1巻の序文において彼の作品を参考にしたと書き記している。“Nam non recordor alicubi me fecisse in ipsis uersibus punctos, nisi ubi quae pronomen uel que conjunctio fuit, uel us finalis syllaba dictionis, quod idem et Porphyrius fecit, secundum cujus exemplar litteras spargere didici et pro m littera alicubi uirgulam, super antecedentem sibi uocalem notaui.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, p.19.

¹⁷⁵ それが太陽神ポイボスの秩序から外れる行いでなければ、ムーサの力を借りて、皇帝コンスタンティヌスの顔を詩の中に描きたいとの旨が述べられる。“Fingere Musa queat tali si carmine vultus Augusti, et metri et versus lege manente, picta elementorum vario per musica textu vincere Apelleas audebit pagina ceras. Grandia quaerentur, si vatis laeta Camena orsa iuuet, versu consignans aurea saecula.” Schierl, P.& Lämmle, C.S., *Herrscherbilder. Optatian und die Strukturen des Panegyrischen*, in: *Morphogrammata*, p.295.

¹⁷⁶ この詩のインテクストは2文のみであるが、それぞれ7字から成る5単語で構成されており、インテクスト内の単語であれば交換可能であるという。例えば *Dissiona Musarum Vinciri Stamine Gaudens* の *Dissiona* は、同じ枠内にある *Grandia* と交換しても意味が通るのだという。Körfer, A.L., *Lector Ludens. Spiel und Rätsel in Optatians Panegyrik*, in: *Morphogrammata*, p.211.

¹⁷⁷ 第8詩の冒頭では、キリストが「世界の黄金の光」として賛美されている。“Accipe picta nouis elegis, lux aurea mundi, clementis pia signa dei uotumque perenne. summe, faue. te tota rogat plebs gaudia rite, et meritam credit, cum seruat iussa timore Augusto et fidei, Christi sub lege probata.” Rühl, M., *Vielschichtige Palimpseste. Optatians Gedichte und die Möglichkeiten individueller Lektüren*, in: *Morphogrammata*, p.243.

¹⁷⁸ “Et pietate potens Constantius omnia pace ac iustis auctus completerit saecula donis.”

¹⁷⁹ ローの部分のインテクストに“Sit Victoria comes Aug. et natis eius.”と書かれている。Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.122.

スト¹⁸⁰や地の文で、コンスタンティヌスの軍事的功績が賞賛され、コンスタンティヌスによる世界支配の達成が希求されている¹⁸¹。この2つの詩に見られる皇帝讚美的要素とキリストのモノグラムとの融合は、当時公認されて間もないキリスト教のカイ・ローというモノグラムが、皇帝に力を与え勝利をもたらす記号として、詩作の領域にも入り込み始めていたことを示唆している。

2. ウェナンティウス・フォルトゥナートゥス

2人目はウェナンティウス・フォルトゥナートゥスである。彼はヴェネツィアの北に位置するトレヴィーゾに生まれ、ラヴェンナで文法学と修辞学を学んだ¹⁸²。その後、フランク王シギベルトの宮廷に辿り着いた彼は詩の披露を通じて、メロヴィング朝の支配者層と結びついていった¹⁸³。567年、フォルトゥナートゥスはパリ、トゥールを経由してポワティエに向かい、その中でクロタール1世の未亡人ラデグンデやその里子アグネス、トゥールのグレゴリウスと交友関係を結んだ。フォルトゥナートゥスはラデグンデのために折に触れて詩を制作していた。例えば、568年、ラデグンデが東ローマ帝国のユスティニアヌス2世とその妻ソフィアに聖十字架断片の譲渡を依頼し569年の秋の終わりにそれを受け取った際、フォルトゥナートゥスはラデグンデに代わって、ユスティニアヌスとソフィアに芸術的な感謝の詩を制作した¹⁸⁴。このうち、形象詩として構想されたのは2点である。

1つ目は「聖十字架のしるしについて (*De signaculo sanctae crucis*)」と呼ばれる詩である【図48】。内容はアダムとイブの誕生と楽園追放(1-12行)、キリストの受肉と磔刑(13-16章)、十字架の賛美(17-33行)、最後の審判におけるラデグンデ、アグネス、フォルトゥナートゥスのための代願の祈り(34-35行)である¹⁸⁵。また、ポルフィリウスが生み出したインテクスト型形象詩が利用され、インテクストの文字列で十字架が描かれている。インテクストには、「聖なる十字架よ、敬虔なるアグネスとラデグンデをお守りください。聖なる十字架よ、弱きフォルトゥナートゥスをお守りください。木、子羊の血、そして釘を通じた我々の真の願い。愛しい木よ、お前が我々に新たな命をもたらす。」と書かれており¹⁸⁶、フォルトゥナートゥスとその友の守護者として、またキリストと同様新たな命を与える存在として十字架が捉えられている。

2つ目は、一部が未完成の十字架詩である【図49】。インテクストは全て書かれているが、ベーステクストは5行目までしか完成していない。インテクストには、「信者を助けたまえ、信条という装身具よ、救済という武器よ」「お前の犠牲によって、キリストよ、原罪は取り払われた」「私にとって木は甘美であり、バラの生垣よりも強く香り、神聖である。お前(キリスト)は植物が濃く茂り覆い隠された丘から名誉の木を生み出した。十字架は神の神殿を豊かにしその幕を飾る。アブラハムの頃からお前は存在する。大いなるものが信仰の功績から戻った」とあり、十字架を賛美する内容となっている¹⁸⁷。

フォルトゥナートゥスからはもう1点、別の機会に制作された形象詩が残っている。それはある捕虜の解放を求めて、オータン司教シアグリウス(位561-600頃)に宛てて制作された形象詩である【図

¹⁸⁰ カイの部分では暴君を打倒し世界を平定したコンスタンティヌスが賛美され (*summi dei auxilio nutuque perpetuo tutus orbem totum pacavit trucidatis tyrannis*) ローの部分では永遠なる支配者、世界を改める者として称賛されている (*Constantinus pius et aeternus imperator reparator orbis*)。Rühl, M., *Vielschichtige Palimpseste*, pp.249-250.

¹⁸¹ 第14詩の最終部にて、コンスタンティヌスによってもたらされる黄金時代について歌われる。“*Sint mage felices, pariter quos, alme, tuere, et reparata iugans maestis diuortia mundi, orbis iunge pares; det leges Roma uolentis principe te in populos; miti felicius aevo omnia laetentur florentibus aurea rebus.*” Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.124.

¹⁸² Ernsts, U. *Carmen Figuratum*, p.150.

¹⁸³ Brennan, B., *The Image of the Frankish Kings in the Poetry of Venantius Fortunatus*, in: *Journal of Medieval History* 10, Amsterdam 1984. pp.1-11.

¹⁸⁴ Ernst, U. *Carmen Figuratum*, p.151.

¹⁸⁵ Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, p.125.

¹⁸⁶ Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.151.

¹⁸⁷ Ernst, U., *Carmen Figuratum*, pp.151-152.

50】。インテクトは5つで、形象詩の枠となる四辺と、最初の詩行の文頭の文字から最後の詩行の文末を繋ぐ対角線、最初の詩行の文末から最後の詩行の文頭を繋ぐ対角線、中央の十字であり、インテクトの文字列で幾何学的図形を描くポルフィリウスの先例が踏襲されている。形象詩の上部には、 α と ω が釣り下がった十字架が描かれている。詩の内容は、アダムとイブの創造、楽園での生活（1-9行目）、原罪とその後（10-18行目）、救済のため姿を現す神人（キリスト）（19-25行目）、キリストの受難による捕虜（=信徒）の解放すなわち救済（26-30行目）、拘束を解くことへの懇願（31-34行目）である¹⁸⁸。この詩に特徴的であるのが、数秘術的論理の利用である¹⁸⁹。本文によれば、フォルトゥナトゥスはキリストの生涯の年数（33年間）を心に留め、33行33文字という制約の中で詩を書いたという¹⁹⁰。

皇帝讚美的要素や異教的要素が強く打ち出されていたポルフィリウスの作品と比較すると、形象詩という芸術的枠組みを完全にキリスト教化したと言えるのが、ウェナンティウス・フォルトゥナトゥスであったと言える。フォルトゥナトゥスの形象詩においては採用された図形・内容共にキリスト教的要素がかなり支配的となり、ポルフィリウスで頻繁に見られた太陽神ポイボスや詩の神ムーサといった異教的要素は、もはやどこにも見られない。このことに関連して、キリスト教の象徴記号を図案として採用する動機も変化している。ポルフィリウスにおいては、キリストのモノグラムが、皇帝に力を与え、勝利や成功をもたらす存在として捉えられていた。一方フォルトゥナトゥスにおいては、十字架が、信徒を守護し新たな命を与える存在と見なされている。またフォルトゥナトゥスは、形象詩に数秘術を取り入れたという点で形象詩を技術的に進歩させた。この技術は後にラバーヌスが採用したという点で重要である。更に、特に3点目の形象詩に関して、フォルトゥナトゥスはテキストの内容選択を非常に慎重に行っている。彼は捕虜の解放を求めるという目的のため、受難により信徒を原罪から解放したキリストと司教シアグリウスを重ねて詩に詠みこんだ。キリスト教に精通しているシアグリウスは、キリストと比較されてしまっただけで、捕虜を自由の身とする選択肢を取らざるを得なかったであろう。読み手に特定の行動を促す手段として形象詩を選び、その目的が達成されるように読み手を駆り立てる内容を選択する手法は、ラバーヌスには見られない点である。

3. ボニファティウス

これまで見てきた二人の形象詩作家が大陸で生まれ育ったのに対し、ボニファティウスは、第1章で確認した通りアングロ・サクソン期のイングランドで生まれ育った。ボニファティウスの一つ前の世代にはマームズベリー大司教アルドヘルム¹⁹¹やベーダ・ヴェネラビリスがおり、彼らによって韻律論を用いた芸術作品や頭韻法、数秘術、なぞなぞ詩（エニグマ）、ポルフィリウス作品の知見¹⁹²といったものが、ボニファティウスの世代へと受け継がれた¹⁹³。

¹⁸⁸ Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, p.125.

¹⁸⁹ Enno Friedrich(M.A.), *Das Christliche Weltgewebe des Venantius Fortunatus - Weltbeziehungen und die Carmina*. Unveröffentlichte Doktordissertation. Karl-Franzens-Universität Graz, pp.47-48.

¹⁹⁰ 更に、フリードリヒによれば、33という数字を通じてフォルトゥナトゥスはキリストを模倣しているのだと分析する。というのも33はキリストにとって受難を表す苦しみ数字であり、フォルトゥナトゥスもこの詩の作成において33行の詩という条件に苦しんだからであるという。Enno Friedrich, *Das Christliche Weltgewebe des Venantius Fortunatus*, p.48.

¹⁹¹ Düchtung, R., Aldhelm, in: *LexMA Bd.1*, col. 346-347.

¹⁹² アルドヘルムは『韻律とエニグマ、詩脚についてのアキルクウス（ノーサンブリア王アルドフリッド）への書簡』（*Epistola ad Acircium de metris et enigmatibus ac pedum regulis*）において数字の7の象徴性について扱った後、教師と生徒の対話形式で六歩格の詩の内部構造について説明する。また100点のエニグマを示した後、韻律論を解説している。ベーダは著書『韻律について（*De arte metrica*）』において、異教的だとして拒絶しつつも、ポルフィリウスに言及している。Düchtung, R., Aldhelm, in: *LexMA Bd.1*, col. 346-347; Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.160.

¹⁹³ Düchtung, R., Aldhelm, in: *LexMA Bd.1*, col. 346-347; Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.162.

ボニファティウス自身も韻律論についての著作を残しており¹⁹⁴、現フランス地域での伝道活動中には『美德と悪徳についてのエニグマ』（*Aenigmata, De virtutibus et vitiis*）という詩集を制作した。この詩集では、美德と悪徳に関する10点の散文体のエニグマが含まれており、その答えがアクロスティク（折句）¹⁹⁵によって提供されている。

形象詩として構想されたのは、10世紀に制作されたヴェルツブルク・コデックス（M.p.th.f.29, fol.44r）に残っているものである【図51】。中央に小さな十字架が配置され、その周りを菱形が囲んでいる。その縦軸と横軸それぞれに IESUS XRISTUS と読めるインテクトが書かれている。ポルフィリウスやフォルトゥナトゥスの作品とは異なり、各アルファベットは等間隔で配置されていない。

この形象詩はボニファティウスの最初の伝道活動より前に制作されたもので、元々ボニファティウスの文法に関する著作『文法学』（*Ars Grammatica*）の口絵として構想されたと考えられている¹⁹⁶。自由七科の一つである文法学の教科書の表紙に、形象詩の図案が採用されているのは注目に値する。というのも、この事実は形象詩が文法学の分野（学科）で教授されていた可能性を示すからである。この図案の宛先は、ボニファティウスの教え子の1人であるドゥドという人物で、ボニファティウスの幼名とドゥドの名前がアクロスティクとテレスティックに詠まれている¹⁹⁷。この形象詩におけるインテクトはアクロスティクとテレスティック、先に言及した十字架内のキリストの名である。形象詩の内容は神と神によりもたらされる世界の賛美や信徒の守護の懇願、神への感謝であり、特殊な内容は見られず、十字架ではなく神に対し常に呼びかけている。ただ、この形象詩を説明するボニファティウス本人の言葉を確認すると、工夫された構造が見えてくる。その説明的な文章は『文法学』写本に同封されたシギベルト宛の献呈文に残っている¹⁹⁸。これによれば、十字架を囲む菱形は旧約・新約聖書の形象を象っているという。また、この菱形の最初の半分は、六歩格でなくその進行も完璧ではない。ボニファティウスはこれを旧約聖書と関連付け、旧約聖書において物事はいわば半分までしか達成されず、未完了の状態であると説明する。しかし、十字架の後、すなわちテキスト上では十字架より下の部分であり、時間的にはキリストの受難後であるが、詩は完全なる六歩格となり、世界ではキリストの慈悲によって原罪が克服され、あらゆるものが正しい場所へと納められ、完了されたという。また、ボニファティウスはこの菱形を通じて、宛先であるシギベルトが、膨大な著作を研究し、読み、調べたりする際、それが何であれ、常に正統信仰の最も確かな形象（*circulus/Figur*）を参照し、思考の不安定さのために、この形象の外をさまようことのないようにと懇願すると述べる。最後に、中央の十字架が再度言及される。ボニファティウスによれば、キリストの名が書かれた十字架は受難するキリストを表す。これを霊的な目で見ることができれば、旧約・新約聖書の一つひとつの規定を、教会法に則った形で理解したと言えるのだという。

詩の内容や献呈文を読むと以下の2つのことが分かる。まず、1つ目に、ボニファティウスは形象詩に韻律という意味の層を加えたということである。1つの詩における異なる韻律の使用は、ポルフィリウスやフォルトゥナトゥス、またラバーヌスも行っているが、単に採用した韻律への言及に留まり、

¹⁹⁴ 完全な状態では伝わっておらず、その断片が Cod.Vat.Pal.1753 の fol.114r-116v に残されている。Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.162.

¹⁹⁵ 各詩行の最初の文字を並べると、ある単語や単文が現れるという詩の技術。Gruber, J., *Akrostichon*, in: *LexMA Bd.1*, col.255-257.

¹⁹⁶ Ernst, U., *Carmina Figurata*, p.165; *Ars Grammatica*, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, <https://www.geschichtsquellen.de/werk/670> (Bearbeitungsstand: 03.01.2023).

¹⁹⁷ 文頭・文末の文字を繋ぐと「ヴィンフリットはドゥドのため、古の教えをまとめた。彼は絶え間ない努力で先生を助けた。」（*Uynfrith priscorum Duddo congesserat artem, Uiribus ille iugis iuuauit in arte magistrum*）となる。Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.165.

¹⁹⁸ Rau, R., *Briefe des Bonifatius. Willibalds Leben des Bonifatius, nebst einigen zeitgenössischen Dokumenten*. Darmstadt 1968, p.364; Ernst, U., *Carmen figuratum*. pp.165-166.

主にインテクストにより描かれた幾何学的な図形や十字架、キリストのモノグラムの意味が解説されていた。一方ボニファティウスはインテクストで形作られる図形にのみ頼るのではなく、ページ上部と下部で別の韻律を使用することで、ページ全体に比喩性を帯びさせた。すなわち、形象詩を文字通り読むだけでは真の意味が見えてこず、詩の解説文となっている献呈文を読むことで初めてその内奥の意味が見えてくるといふ、『聖十字架礼讃』に類似した構成となっているのである。2つ目に、ボニファティウスは聖十字架を、旧約・新約の正しい理解の象徴として捉えている。聖十字架は、いわば旧約・新約聖書の教えの記憶術的な参照記号（アイコン）なのである。この様な考え方は、聖十字架を世俗世界と天上世界のあらゆる事物を包括する宇宙的な存在であるとするラバーヌスに引き継がれていると言えよう。

4. アルクイン、ヨセフス・スコトゥス

4人目に取り上げるのが、ラバーヌスの師で、彼に直接詩について教授した可能性の高いアルクインである。彼は730/735年頃ノーサンブリアの貴族家庭に生まれ、ヨーク司教座教会に隣接していた修道院で初等教育を受ける。その後エグベルトが司教を務めていた時期にヨーク司教座附属学校へ移り、学問を続け、766年頃助祭に叙階された¹⁹⁹。778年には司教座聖堂附属神学校長に任ぜられた。781年、ローマへ派遣された帰路に立ち寄ったパルマでカール大帝と会見する機会を得て、宮廷学校の教師としてカール大帝宮廷に招聘されることとなった。796年以降はフランスのサン・マルタン修道院の修道院長を務め、ラバーヌスを初めとする才ある若き修道士たちに教育を授け、同地で亡くなった²⁰⁰。

アルクインは彼の教え子であるヨセフス・スコトゥスと共に6点の形象詩を含む形象詩集を制作し、カール大帝に献呈した。うち4点をヨセフス・スコトゥスが、2点をアルクインが制作した。この詩集は、現在ベルン市民図書館が所蔵する写本（Cod. Bern. 212）のfol.123r-125vに残っており、この写本は他にカッシオドルスの『綱要』第二巻（fol.1r-110v）、ポルフィリウスの形象詩（fol.111r-122r）²⁰¹とオウルレアンのテオドゥルフスによる形象詩（fol.126r）を含んでいる。形象詩集を支配者に献呈するといふ行為は、ポルフィリウスの例と重なる。

アルクインの制作した1つ目の形象詩は「地上の飾り／栄光たる十字架（Crux decus es mundi）」とのフレーズで始まる十字架詩である【図52】²⁰²。この詩は37文字37行から成り、十字架の2つの軸線を取り去ると、縦横36文字から成る36の韻文が現れる。36は、それ自体完全数である6の2乗から算出される数字で、これもまた完全数だと考えられている²⁰³。十字架とキリストを賛美する内容の形象詩にこの数を採用したのは、エルンストによれば、聖十字架という象徴によって救済された世界の完全性を表現するためであるといふ²⁰⁴。詩行の数に意味を持たせるのは、ウェナンティウス・フォルトゥナートゥスの形象詩でも行われており、アルクインはこの伝統を継承したと考えられる。詩の最初の文、最終文、アクロスティク、テレスティク、また中央に描かれた図面大の十字架と、十字架の4つの先端を結びつけてできる菱形の輪郭線がインテクストとして別の色で彩色されている。詩の内容はキリストと聖十字架の賞賛である。詩の前半部分ではキリストが様々な存在として語られ、讃えられる。例えば、十字架において審判を下す神聖なる王として、十字架上の苦しみによって悪魔を倒す戦士として、人類

¹⁹⁹ 岩村清太『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』知泉書館、2007年。

²⁰⁰ Heil, W., Alkuin, in: *LexMA Bd.1*, col. 417-420; Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.168.

²⁰¹ シャラーによれば、アルクインがポルフィリウスの作品をイングランドから大陸にもたらした可能性があるという。8世紀のイングランドにポルフィリウスの作品が伝わっていたことはW・レヴィソンが既に示している。Schaller, D., *Die Karolingischen Figurengedichte des Cod. Bern. 212*, in: *Medium aevum vivum. Festschrift für Walther Bulst*. Heidelberg 1961, pp.22-47.

²⁰² 写本の色調上、形象詩が見づらいため、MGHに掲載されている図を引用する。

²⁰³ 第11詩の註を参照。

²⁰⁴ Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.173.

のために十字架に架けられた犠牲として、羊を開放する羊飼いと、また迫害に苦しみつつ最終的にはあらゆる人々を救済する「真のヨセフ」として称賛される²⁰⁵。詩の後半部では聖十字架が「救いのしるし」として讃えられ、最終部において、全世界が十字架への感謝の気持ちを込めて祈り（votum）を捧げるべきであると述べられ、聖十字架に対して著者から冠を受け取るよう呼び掛けられる²⁰⁶。インテクストにおいても聖十字架が賞賛されている²⁰⁷。ミュラーによれば、菱形の左の2辺とアクロスティク、十字架の横軸は、これまでの十字架の歴史的な意味を述べ、菱形の右の2辺とテレスティク、十字架の縦軸は、アルクインの時代における同時代的な意味を述べているという。形象詩の構造に意味を持たせるのはボニファティウスの形象詩を思わせる。更にエルンストはインテクストの内容から、この図案が世界の4つの部分に対応する十字架を示していると主張し、その意味でラバーヌスの第2詩と同じ系譜にあると述べた²⁰⁸。

アルクイン作の2つ目の形象詩はカール大帝に対する頌歌である【図53】。縦横35字の正方形のテキスト領域に、9字ごとに3つのメソスティコンが縦横に配置されており、計16個の小さな正方形が構成されている。水平方向に書かれた3つのメソスティコンは、いずれもカールを同じ名（Flavius Anicius Carlus）で呼びかけている。ベーステキストではカール大帝が、「私たちの人生の最大の光（vitae lux maxima nostrae）」や「善良な王よ、あなただけが徳に向けて世界を指揮する（rex bone, versus Virtutum meritis mundo tu praecipe solus.）」などと言及され賞賛される。この詩において特徴的なのは、フォルトウナートゥスやボニファティウスでは見られなかったウェルギリウスの牧歌的な言葉遣いである。それは例えば、「ムーサ（musa）」（3, 28行目、アクロスティク）、「笛（fistula）」（19行目）「葦（calamus）」（8行目）「笛（tibia）」（4, 10, 29行目）である。また、他にもムーサやアポロに関連する表現が見られる。例えば *periiis versibus* や *lege Castalia*, *Pitheo Carmine* などである。D.シャラーによれば、アルクインはこれらの牧歌的な言葉遣いを好んでおり、宮廷に関係する詩においてだけでなく、例

²⁰⁵ “Rex deus ex cruce donavit caeleste tribunal. Victor tollendo mala regnat, vicit et hostem Xristus, nostra cruce grandis, en, hostia fixa. Pastor oves moriens dextra sanante redemit.” (2~5行目) “Ut pressos plagis sanaret ab hostis; et istic Sit nunc nostra salus, excelsus verus Ioseph, passus in arce crucis sic, ne seduceret error Afficiens homines trudensque ex luce fidei, Rector in orbe, tuis sanavit saecula sigillis.” (15-19行目) ALCVIN. Carm, Oxford University, CLASP: A Consolidated Library of Anglo Saxon Poetry, Retrieved on 08. Nov.2023 (<https://clasp.ell.ox.ac.uk/db-latest/poem/ALCVIN.Carm>).

²⁰⁶ “Inclyta crux, mundus debet tibi solvere vota: Suscipe sic talem rubicundam, celsa, coronam.” ALCVIN. Carm, Oxford University, CLASP: A Consolidated Library of Anglo Saxon Poetry, Retrieved on 08. Nov.2023 (<https://clasp.ell.ox.ac.uk/db-latest/poem/ALCVIN.Carm>).

²⁰⁷ 各文章は以下の通り：

最初の文：「十字架よ、お前は世界の飾りで、イエスの血により聖別された（Crux, decus es mundi, Iessu de sanguine sancta）」

最終文：「崇高なるお前、私からこの光り輝く冠を受け入れよ（Suscipe sic talem rubicundam, celsa, coronam.）」

アクロスティク：「聖十字架、真の救いよ、地球の4つの部位を（Crux pia vera salus partes in quattuor orbis）」

テレスティク：「崇高なるお前、キリストに支配されつつ、冠を受け取れ。（Alma teneto tuam, Christo dominante, coronam）」

菱形の左側：「聖く光り輝く、十字架万歳、お前は地上の鎖を打ち砕く（Salve sancta rubens fregisti uincola mundi）」

菱形の右側：「十字架万歳、しるしたるお前が、全世界の新たな救済への扉を開く（Signa valetate novis reserata salutibus orbi）」

十字架の縦軸：「起き上がれ、お前の信仰において皆の穢れが払われるに違いないのだから（Surge, lavanda tuae sund saecula fonte fidei）」

十字架の横軸：「救済のしるしを、世界の統率者はお前に与えなされた（Rector in orbe tuis sanavit saecula sigillis）」

※邦訳は著者による拙訳。エルンスト論考に掲載されたドイツ語訳を参照した。Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p. 172-173.

²⁰⁸ Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, p.130-131.

えばアルクインによる韻文の『ヨーク教会の司教、王ならびに聖人たちについて』においてもこのような言葉遣いが見られるという²⁰⁹。

アルクインの形象詩について指摘すべきことは3つある。まず1つ目に、アルクインは皇帝に献上する詩の形式として形象詩を選んだという点で、ポルフィリウスによる形象詩の利用法を踏襲している。先に見たようにポルフィリウスは、自身の追放処分への撤回が真の狙いではあったものの、コンスタンティヌス帝即位20周年の記念として、皇帝讃美的な内容の形象詩を制作し献上した。アルクインが詩集を制作した直接的な動機²¹⁰は未だ不明であるが、彼は後期古代的な言葉遣いで皇帝を褒めたたえた。8世紀の大陸において、再び形象詩を支配者の賞賛に用いたのである。こうした支配者と形象詩の関係は、もしかすると、ルートヴィヒ敬虔帝の形象詩を制作したラバーヌスも念頭においていたかもしれない。ただし、形象詩の利用方法は重なるものの、アルクインの詩の図案はポルフィリウスには見られないものだった。これが2点目である。聖十字架を称賛する1つ目の詩の図案は、その内容上、ポルフィリウスの第2詩【図54】と類似している。ポルフィリウスの第2詩では、コンスタンティヌス大帝によって全世界に黄金時代がもたらされることがインテクトで表現され、賞賛されている²¹¹。一方、ポルフィリウスの第2詩に菱形を加えたようなアルクインの形象詩においては、支配の主体は皇帝ではなく、十字架として読み換えられている。これはラバーヌスの第2詩にも引き継がれている²¹²。3つ目に、アルクインの2つの詩の間では言葉遣いが異なる。アルクインが様々な場でウェルギリウスの牧歌的な言葉遣いを借用しているというシャーラーによる指摘は尤もだが、アルクインは十字架を賛美する詩ではそのような表現を用いず、カール大帝の頌歌では用いた。つまり、形象詩を捧げる対象によって異なる語彙を使用していたと言える。こうした後期古代的／ウェルギリウスの言葉遣いによる支配者の賞賛は、ラバーヌスの敬虔帝に対する献上詩には見られない。ラバーヌスがウェルギリウスを知らなかったとは考えにくい²¹³ことから、彼は意図的にそれを使用しなかった可能性がある。背景にあるのは、ラバーヌスにとっての敬虔帝の理想像を描くうえで、その優れた霊的資質を強調する必要性があったこと²¹⁴、あるいは「聖十字架の賛美」という全体を貫くキリスト教的テーマや、『聖十字架礼讃』の聖書註解書としての性質との矛盾であろう。

また、アルクインの弟子であるヨセフス・スコトゥスが制作した4点の形象詩についても簡単に触れたい。ヨセフスによる1点目の形象詩は、中央に配された小さな十字架の類似性からボニファティウスによる形象詩を思い起こさせる【図55】。この詩の主題はアダムとイブ、キリストとマリアの対置を通じた「原罪と救済の連続性」である。中央の十字架のインテクト「カールよ、読みなさい、幸を噛みしめて *Lege feliciter Carle*」から教訓的な意図があった可能性をエルンストは指摘している²¹⁵。2点目の詩も教訓的である【図56】。この詩の主題は、永遠の命を授受するための美德である。前半部ではカー

²⁰⁹ Schaller, D., *Die Karolingischen Figurengedichte des Cod. Bern.* 212, pp.22-47.

²¹⁰ エルンストは形象詩集制作のきっかけとして、西ローマで空位状態であった皇帝位を掴み取らんとするカール大帝の野望が関係していると推測している。既にシャーラーは *Cod. Bern. 212* の文献学的な研究の結果、形象詩集の制作年代は780年代である可能性が高いと指摘していた。これが真実であるなら、カールは皇帝戴冠の10年以上前から西ローマ皇帝の座を狙っており、アルクインはそれに呼応する作品として、彼をローマ皇帝の正統な後継者として宣伝し正当化するためにこの詩集を制作したとエルンストは主張している。Ernst, U., *Carmen Figuratum*, p.177.

²¹¹ ポルフィリウスは第2詩のインテクトにおいて、コンスタンティヌス大帝による支配を表現した (*Aurea sic mundo disponas saecula toto*)。

²¹² Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, p.131.

²¹³ 第1章1節を参照。

²¹⁴ 第1章3節を参照。敬虔帝の献上図・詩が制作された時代は、敬虔帝が息子たちとの闘争のさなかにあった830年頃であったと考えられている。この時書かれた著作において、ラバーヌスは、旧約聖書のダヴィデ王とソロモン王を引き合いに出し、息子たちの所業を非難した。ルートヴィヒの立場をより正当化するため、彼の「聖書的な正しさ」すなわち霊的側面を強調する必要があったのかもしれない。

²¹⁵ Ernst, U., *Carmen figuratum*, pp.178-180.

ルの強大さ・賢明さが賞賛され、後半部では世俗的な喜びにかまける他の王たちとカールが比較され、カールは物質的な財を正しく用いると讃えられる²¹⁶。3点目の詩ではキリストの96の称号が列挙されており【図57】²¹⁷、ラバーヌスの第1詩を思わせる。そして4点目の詩【図58】では、神殿のような形をした建物とその内部にある3つの十字架がインテキストで描かれている。中央の十字架はキリストが架けられた十字架を示し、残りの二つはキリストと共に十字架に架けられた盗賊たちの十字架を表現している。詩の主題は聖十字架であり、勝利の象徴・救済の道具として称賛される²¹⁸。

ここまで、ラバーヌス以前の形象詩の系譜を確認してきた。形象詩は詩行によって幾何学図形や、十字架のような特定の象徴物を描くことができ、視覚的に鑑賞者に訴えかけることができる点で、通常の詩とは異なる。また、ベーステキストとインテキスト、更に図形によって生じる意味の多層性も、形象詩の特徴と言える。形象詩が持つこれらの効果を認識したうえで、ポルフィリウスは形象詩を自身の追放罰の撤回のために用い、その内容には皇帝讃美やローマの神々への懇願、またキリストの賛美・懇願を取り入れた。その後フォルトゥナトゥスは、彼の友人ラデグンデに聖十字架断片を贈呈したビザンツ皇帝夫妻への感謝の印として聖十字架を主題とした形象詩を作成し、それをもって形象詩と聖十字架が結びつけられた。更に彼は形象詩に数秘術的要素を取り入れた。その後ボニファティウスは異なる韻律の使用に意味を与え、『聖十字架礼讃』のように文字通りの読解では真の意味に辿り着くことのできない形象詩を制作した。また旧約・新約を集約する存在としての十字架を図面の中央に描いた。アルクインはカール大帝に形象詩集を献呈し、そのうち一点を聖十字架賛美詩とした。アルクインの詩では、聖十字架に救済の象徴としての意味が帰され、世界の四方に広がる救済を表わす存在とされた。中世に引き継がれる型の形象詩は元々大陸で生まれたものの、何らかの経路でポルフィリウスの作品がアングロ・サクソンに伝わり、そこで独自の発展を遂げ、再びアルクインによって大陸に持ち込まれた。またフォルトゥナトゥスの形象詩も8~11世紀の間に19点の写本あるいは写本の断片に残されていることから²¹⁹、カロリング期にも一定程度知られていたと考えられる。すなわちカロリング朝フランク王国には、アングロ・サクソン経由で持ち込まれたポルフィリウスの形象詩と、大陸でその命脈を保ち続けたフォルトゥナトゥスとの作例がどちらも伝わっていたのである。

このように形象詩が継受されてきた中で、ラバーヌスが『聖十字架礼讃』に形象詩を利用した理由を検討してみたい。ラバーヌスによる形象詩の選択に大きく関係するのは、やはりアルクインである。先にアルクインの項で触れたように、彼がカール大帝に献呈した形象詩集にはオプタティアヌス・ポルフィリウスによる形象詩のすべての作品が含まれていた。これが示すのは、アルクインはポルフィリウスの形象詩を熟知していたこと、すなわちポルフィリウスの形象詩が記録された写本を所持していた可能性があるということである。シャラーやエルンストは、アルクインこそがポルフィリウスの形象詩が含まれた写本を大陸にもたらした人物であるとさえ述べている²²⁰。この前提に立てば、アルクインのもとで「韻律の学科」を学んだと述べるラバーヌスが、韻律論や詩の書き方を学ぶ中で、ポルフィリウスの作例を教授されたという説が成り立つであろう。実際、ラバーヌスは『聖十字架礼讃』序文においてポルフィリウスを参考にしたと叙述している²²¹。つまりラバーヌスは、恐らくアルクインを経由して形象詩の技法を学んだのである。

²¹⁶ Ernst, U., *Carmen figuratum*, p.179.

²¹⁷ Ernst, U., *Carmen figuratum*, pp.184-185.

²¹⁸ Ernst, U., *Carmen figuratum*, p.186.

²¹⁹ Ernst, U., *Carmen figuratum*, p.157.

²²⁰ Ernst, U., *Carmen figuratum*, p.168.; Schaller, D., *Die Karolingischen Figurengedichte des Cod. Bern. 212*, pp.22-47.

²²¹ ラバーヌスは序文において、「彼（ポルフィリウス）の例に従って点を打つ(文字を均等配置する)ことを学んだ」(… secundum cuius exemplar litteras spragere didici) と叙述している。Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, Turnhout, 1997, p.19.

アルクインからポルフィリウスの技法を学んだラバーヌスは、アルクインの制作した十字架詩にも触れていたであろう。故に、聖十字架を主題とした詩の執筆に思い至った時、形象詩という形式は1つの選択肢として頭に浮かんだはずである。加えて、その制作動機のために、形象詩に固有の意味の多層性も重要な要素であったと思われる。第2節で指摘した通り、『聖十字架礼讃』各詩は幾重もの意味の層から成る。フルダ修道院附属学校学校長を務めたラバーヌスにとって、寓意に満ちた聖書の解釈に挑む修道士たちに役立つ著作を執筆する上で、聖書と類似の構造を持つ形象詩以上にふさわしい形式はなかったと考えられる。

小括

ここまで、『聖十字架礼讃』の作品分析と形象詩の継受という観点から、ラバーヌスが形象詩の歴史から何を継承したのか、またなぜラバーヌスが形象詩という形式を採用したのかの2点を検討した。彼の作品は、ポルフィリウスの幾何学的な図案や文字を形作る図案、フォルトゥナートゥスを取り入れた数秘術、ボニファティウスや師アルクインの十字架の捉え方を確かに受け継いでいた。一方、形象詩の図案に図像を取り入れたのはラバーヌスの新規性である。また、それまで国王・皇帝の称賛の文脈で利用され、彼らや司教に献呈される場合が多かった形象詩を、聖書註解と結びつけて自身の修道士仲間のための著作に用いたという点も新しい。この新規性の背後にあるのは、『聖十字架礼讃』の制作動機と形象詩という形式の親和性であったと考えられる。詳しくは第3章で触れるが、ラバーヌスは同著をフルダの修道士たちの読書に役立つ著作として執筆した。日々の学習—修道院においてはとりわけ聖書の正しい読解を指す—に資する学びに溢れた作品を構想するなかで、多層的な構造を持つ形象詩という形式は、聖書の内容を、その深遠さを損なわないようにまとめ直すために最適な型であったのだろう。故にラバーヌスは、自身の独自性を加えつつ、アルクインから学んだ形象詩という形式を用いたと考えられる。

第3章 『聖十字架礼讃』の分析（2）—聖十字架崇敬の展開

先の章では、ヴァティカン版『聖十字架礼讃』の作品内在的分析を行なった。多層的な形象詩の意味の層を1つずつ解釈してみせる『聖十字架礼讃』は、ラバーヌスが仲間の修道士たちのために、聖書の正しい解釈に必要な知識と解釈の方法を学んでもらうために制作した著作であると指摘した。また、ラバーヌスはボニファティウスやアルクインの思想を受け継いで聖十字架を世界を包括する存在と見なし、聖書中に見られるあらゆる存在や寓意的な数字を関連づけ、集約し、秩序立てるのに最適な図形であると捉えていたことが明らかとなった。

本章では、『聖十字架礼讃』の主題である聖十字架の崇敬が、作品制作時のカロリング朝でいかに展開していたのか、またそれに関連して、カロリング朝の宮廷が聖画像論争に対していかなる態度を取っていたのかという観点から、ラバーヌスが聖十字架という主題を選択した理由の解明を試みたい。

第1節 ビザンツとの聖画像論争—『カールの書』とパリ教会会議の間で

ラバーヌス・マウルスが国王宮廷やアルクインの許で教育を受け、『聖十字架礼讃』初稿の執筆並びにその写本制作に取り組んでいた間、カロリング朝国王宮廷は2度にわたり、聖画像の取り扱いについて意見を表明している。1度目は、カール大帝治世下の『カールの書』(*Libri Carolini/Opus Caroli Regis contra Synodrum*)であり、2度目は、ルートヴィヒ敬虔帝治世下の『パリ教会会議録』(*Libellus Synodalis*)である。これらはどちらも、国王の命で作成された文書である。第1章で確認した通り、国王宮廷で教育を受け、その後も国王と近い距離にあったラバーヌスは、ここから少なからぬ影響を受けたものと推測される。そのため、本節では上記の2文書を比較し、得られた結果をもとに『聖十字架礼讃』の分析を試みる。

実にもう何年も以前に、ビテュニアの一地方において、ある教会会議（ヒエレリア）が行われた。これは大変不注意で思慮に欠けた破廉恥なもので、教会の装飾物としてまた昔の人々による事績の記念として置かれた画像を、無思慮にも廃棄して打ち砕くようにという決議を行った。…さてその後約30年の後、別の教会会議（第二回ニカイア）がその地方で行われた。…今回の会議は…誤謬に関してやはり免れなかった。…先の会議ではそれを認めることすら許さなかった画像に関して、これを礼拝するように強いたのである。…つまり、先の会議では善き持ち物を廃棄しようとする一方、今回の会議では善き持ち物を悪しき仕方で用いようと努めた。…これら2つの悪事は、上述のように、倨傲という源から迸る罪悪である。…かくして我々は…『画像を礼拝すべし』という極めて恥知らずな伝えを退けるためにビテュニア地方で行われた先の教会会議をも、言わば汚物として軽蔑したのである。…結局われわれは、…教会の装飾物として、また行われた事績の記憶のために画像を有し、ただ神のみを礼拝し、その聖なる人々に対して必要な崇敬を示す。…それらを打ち砕くこともなければ、…それらを礼拝したりもしない¹。

これは、ビザンツで巻き起こった聖画像論争に対する西方側の立場を表明する文書として、791年にカール大帝宮廷で作成された『カールの書』²からの引用である。787年にビザンツ帝国で第2回ニカイア公会議が開催された後、出席していたローマ教皇ハドリアヌス1世の二人の使節が教皇のために決議

¹ 秋山学『『カロリング文書』(Libri Carolini)』『西洋美術研究』No.6(2001年)、pp.155-159.

² 実際に執筆を担当したのは、オルレアン人のテオドゥルフスとも、アルクインであるとも言われている。Chazelle, C., *The Crucified God in the Carolingian Era. Theology and Art of Christ's Passion*. Cambridge 2001, p.39.

文の翻訳を制作した³。しかし、制作されたラテン語版の水準は非常に低く、ギリシア語における 2 つの崇敬の形態—画像に対する»proskynesis«（跪いて畏敬の念を表す）と神に対する»latreia«（礼拝）—⁴が、ラテン語版では一様に神に対する礼拝を意味する *adoratio* として訳出されていた⁵。このラテン語版は当時のフランク王カール大帝の宮廷にも届いたが、添え状に欠けていた⁶。そのため、カール大帝宮廷はこの版が教皇のために制作された質の低いラテン語訳ではなく、コンスタンティノープルから直接送付されたと誤解してしまったものと考えられる⁷。このことが、カール大帝宮廷における聖画像崇敬への激しい反発へと繋がり、全 4 巻 120 章から成る『カールの書』制作の契機となった。

誤解のある訳出もあってか、冒頭の引用箇所からもわかるように、『カールの書』は第 2 回ニカイア公会議に出席した聖職者たちに対する激しい叱責と、事績の記憶としての画像は許容されるものの崇敬の対象としての画像は否定されるべきであるとの考えが特徴的である。例えば、画像は単なる芸術品（*opificia*）に過ぎず、世俗的芸術の物質的な産物であり⁸、その価値は使用された原料に依存するのであって、「高価」「より高価」「特別に高価」ではあり得るが、「神聖」「より神聖」「特別に神聖」ではあり得ないのだ⁹という。また聖画像に対する崇敬は、画像そのものではなくそれに描かれた人物に向けられているべきであり、普段から実践している教養ある者たちは〈像そのもの〉ではなく〈像が暗示するもの〉を崇拜できるが、無学な者は〈像そのもの〉を崇拜してしまうため、聖画像は禁止されるべきであるという¹⁰。注目すべきは、同様の理由から皇帝や王の肖像も、彼らが民衆から愛されている場合には、危険になり得ると主張されている点である。この主題については、ダニエル書や出エジプト記、創世記を引用しながら、第 3 巻第 15 章において 1 章に渡って議論されている。全体として、一貫して、神のみが「崇拜されるべき」（*adorandus*）であるとの主張がなされている。

一方で、一見画像に分類されてもおかしくはない十字架は、それとは区別されている。『カールの書』においては 1 章分（第 2 巻第 28 章）が、「主の十字架は、彼らが確かに十字架と同一視する画像と、その秘義の説明においてどれ程離れているのか」（*Quanta ratione mysterium Dominicae crucis ab imaginibus distet, quas quidem illi eidem aequiperare contendunt*）という章題のもと、十字架のために割かれている¹¹。

³ “Quam synodum iamicti missi in Greco sermon secum deferentes...praedictus egregious antistes in latino eam translari iussit, et in sacra bibliotheca partier recondi, Dignam sibi orthodoxe fidei memoriam aeternam faciens.” MGH Leges, Conc.2 Suppl.1 Opus Caroli regis contra synodum(Libri Carolini), p.1 ; Le Liber pontificalis, 1. Ed. Duchense, L. Paris 1886, p.512.

⁴ 参考までに、秋山学による第 2 回ニカイア公会議決議概要の和訳（ギリシア語原文に基づく）を載せる。

「キリスト、神の母、天使および諸聖人を、形象に表現することは許される。なぜなら、これらの形象を眺める者は、これらを通して、これらの形象によって表現される本体への追想と模倣の思いをかき立てられるからである。画像に対して表される崇敬（*proskynesis*）は、表現される本体、すなわち原像に向けられている。これは、神のみがそれに値するところの礼拝（*latreia*）とは区別されなければならない」。秋山学『『カロリング文書』(Libri Carolini)』、p.154.

⁵ 「崇拜」「崇敬」に関わる単語の区別は、著者により異なる。『カールの書』においては、*adorare/colere* の 2 語が神のみに向けられるべき祈りの形態として使用され、*veneratio/venerari* が神以外の聖人等に向けられる祈りの形態として使われた。一方、後に言及するアインハルト『十字架の崇敬について』では、神のみに向けられる祈りの形態は *oratio/orare* と表現された。また秋山の和訳の通り、ビザンツの側でも神に向けられる祈りとそれ以外に向けられる祈りは区別されていた。秋山学『『カロリング文書』(Libri Carolini)』、154 頁。

⁶ フリーマンによれば、添え状が存在したとすれば、ローマとコンスタンティノープルから送付された書簡をすべて収集する目的で 791 年に制作されたコーデックス・カロリヌスに挿入されていたはずであるため、ラテン語版は添え状が無かったと考えられるという。MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), p.2.

⁷ MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), p.2.

⁸ MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), p.25, 179.

⁹ MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), p.25, 118-119.

¹⁰ “Nam esti a doctis quibusque vitari possit hoc quod illi in adorandis imaginibus exercent, qui videlicet non qui sint, sed quid innuant venerantur, indoctis tamen quibusque scandalum generant, qui nihil aliud in his praeter id quod vident venerantur et adorant.” MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), p.28.

¹¹ “Quanta ratione mysterium Dominicae crucis ab imaginibus distet, quas quidem illi eidem aequiperare contendunt.”

これによれば、十字架は人々が従うべき〈旗印／権標〉(vexillum)として尊重される¹²。更に、十字架には邪悪を征服する力があり、悪魔を追い払うことができるのだという¹³。また、「ガラテヤ人への手紙」を引用しながら、神に従って生きるためには人々は画像ではなく十字架に、キリストと共に釘つけられており¹⁴、画像によってではなく十字架の木を通じて、最初の人間の中に閉じ込められた古き罪が贖われる¹⁵と論を展開して、十字架のもつ贖いの力や正当性、信仰における重要性が繰り返し主張されている。つまり、既にカール大帝の時代から、十字架には特別な意味が付与されていた。ただし、ここで想定されている十字架とは十字架の「表象物」(画像、彫刻)ではなく、十字架という「図形」である。というのも、第1巻19章において、物質的な十字架は他の芸術作品と同じであり神聖さをもたないということが示唆されているためである¹⁶。

『カールの書』に見られる画像に対する厳しい態度は、「神のみが崇拜されるべきである」との一点においては、ルートヴィヒ敬虔帝下で開催されたパリ教会会議(825年)においても引き継がれた。しかしながら、ルートヴィヒの世代においてはその態度は全体的に軟化した。

パリ教会会議開催の契機となったのは、ビザンツ皇帝ミカエル2世からの書簡であった。ただし、全184行から成るこの書簡において、聖画像についての問題は127行目以降において初めて言及されている¹⁷。書簡の中でミカエル2世はまず、レオ5世の死去後帝国を襲う苦難、特に一部で巻き起こっている危険な反乱によって帝国が分断されているとの事情を説明し、彼らのもとに再び平和をもたらしたいとの望みを述べる¹⁸。その後、彼の帝国において平信徒も聖職者も、使徒的伝統から離れて悪の創出者になってしまったと嘆き、彼らが教会から十字架を取り去り、代わりにその場所に画像を設置したり、画像の近くにランプを置いて画像の前で香を焚いたり、十字架を崇敬するのと同じように画像を崇敬し、一部の司祭は聖餐式のパンを画像の上に置き、信徒たちにそこからパンを取らせているのだと嘆く。これらの行為を帝国から一掃するため、ビザンツでは会議が開催され、無知で弱い者たちに崇拜されないように(ne ab indoctioribus et infirmioribus adorarentur)低い位置への画像の設置を禁止し、高い位置への配置は許可した¹⁹。また、ランプと香の使用も禁止したと彼は述べる²⁰。ミカエル2世はこれらの禁止に反発する者が「古きローマ」へと逃げ、そこで教会に対し無礼を働いていると述べる。この無礼は、

¹² “Non igitur quaedam materialis imago, sed Dominicae crucis mysterium est vexillum, quod in campo duelli, ut fortius conflagamus, sequi debemus.” MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), p.296-297.

¹³ 「画像ではなく十字架旗で武装すると、古くから邪悪である敵を征服することが出来る。この武器の色ではなく、輝きをもってすれば、悪魔を追い払うことができる。画像ではなく十字架によって、地獄の門扉は破られる。画像ではなく十字架に、我々の犠牲となった救世主は架けられた。画像ではなく十字架こそ、われらの王の権標であり、その上に我々が王の軍勢は目を向ける。我々の軍勢は戦いにおいて、十字架に従うのである」。MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), pp.296-297.

¹⁴ “Ego, inquit, per legem legi mortuus sum, ut Deo vivam, Christo confixus sum cruci; vivo autem iam non ego, vivit vero in me Christus.” MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), p.298. 「実際私は、神に対して生きるために、律法を通して律法に対して死んだのである。私はキリストと共に十字架につけられてしまっている。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちで生きておられるのである。」新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店2004年、593頁。

¹⁵ “Per crucis lignum, non per imagines, antiqui ill[ius] sceleris facinus / diluitur, quod in protoplasto per ligni aesum contractum est.” MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), p.297.

¹⁶ ここでは、旧約聖書を拝するユダヤ人たちが来るべきもの予兆たる物質的な像を持っていたのに対し、キリスト教徒は予兆されていたもの自体を、像を介さず持つ、との旨が述べられている。故に、十字架の像は旧約聖書的な、物質的な世界に属するため、神聖ではないとのテオドゥルフの考えを引き出すことができる。MGH Leges, Conc. 2. Suppl.1 : Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), pp.192-193; Chazelle, C., *The Crucified God*, pp.50-51.

¹⁷ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*. Philadelphia 2009, p.260.

¹⁸ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.260.

¹⁹ 高い場所に置かれた画像は崇拜されず、聖書の代わりになるという。MGH Leges, Conc.2,2 : Conc. Parisiense a. 825, p.479.

²⁰ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.262; MGH Leges, Conc.2,2 : Conc. Parisiense a. 825, p.479.

自分たちがあらゆる東方正教信徒が合意した計7回の公会議に心から従っている故に受けているのであるとローマの窮状を訴える。最後に、彼はローマ教皇に対し書簡を書き送ったことや彼の使節がローマを訪れること、その際ルイに教皇との間を取り持ってもらいたいとの内容を伝える。また彼は教皇に対して、偽キリスト者や教会を中傷する者たちの追放を求めていることも読み取れる²¹。

この書簡において重要なのは、ミカエル2世がルートヴィヒに対し、聖画像に関する見解の表明を求めているわけではない点である。彼はただ、ビザンツ帝国内で蔓延る聖画像崇敬を例示し、その後で自身の帝国で行われた会議で定められたことを簡潔に述べ、ローマ教皇が偽キリスト者や誤った実践をしている人々を追放するよう、ルートヴィヒに間を取り持ってほしいと話したにすぎず、聖画像に関する神学的議論に立ち入ることはしなかった。しかしながら、ルートヴィヒはこの書簡を受け取った翌年の825年11月1日にパリ教会会議²²を召集した。そしてその成果として『教会会議録』(*Libellus Synodalis*) (以下『会議録』)、『教会会議録摘要』(*Epitome*: 以下『摘要』)を制作させた²³。

『会議録』は、先の教皇や教父による著作を頻繁に引用しながら、聖画像に関する諸問題について論じていく。いくつかの箇所では書き手が引用文を踏まえて意見を述べているが、多くの場合自身の見解を述べることはなく、ほぼすべての箇所で「～の問題について～はこのように言っている。…また、～にはこう書かれている。…」という形式で先へと進んでいく²⁴。『カールの書』と比較しても引用文の分量がはるかに多く、聖画像に関する諸問題を問われた際に参照すべき権威ある教父・教皇著作や書簡を総覧できる書物となっている。

『会議録』には4つの主題がある。すなわち、①画像は許容できる場合があり、画像を破壊するのは誤っているということ、②正しい／誤った崇拜の方法について、③画像が十字架と同一視されてはならない場合について、④画像が許容される場合について、である²⁵。まず、①について、聖画像を擁護する教父著作から14か所が引用されている。例えば、エウセビオス『教会史』からは、パネアスの血を流す女性像がキリストの衣に触れることで治癒されたとの第7巻第28章のエピソード、『聖シルウェステル伝』からはコンスタンティヌス大帝に見せられたペテロとパウロの聖画像について、ヨハネス・クリュソストモスからは画家が描くことのできる事物について、ノラのパウリヌスからは旧約聖書の諸場面における見ることの価値について、ニュッサのグレゴリウスからはいかにしてある画像が彼に涙を流させるか、アウグスティヌスからはなぜ画像は真でないか、また一方で画像は真の物を想起させ、人々に罪の意識を起させることについて、である²⁶。その後、今度はなぜ聖画像破壊が間違っているかという点について説明する。ここでは、神の聖画像を破壊することは人類にとって神を冒瀆することであるとのアウグスティヌスの言葉²⁷や、ユリアヌスがパネアスで聖画像を破壊し自身の像と取り換えると、天からの炎で自身の像が破壊されたとのカッシオドルスの記述を引用しつつ、異教の像は破壊され得るが、聖画像を破壊すると天罰が下ると論じる。その後は教皇グレゴリウス1世の書簡から4か所引用し、聖像破壊が誤った行為であるとの主張を補強する。②について、『会議録』は聖画像崇拜が誤り

²¹ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.262.

²² ノーブルによれば、ルートヴィヒと教皇の間で交わされた書簡の内容や決議集における“conventum”という語の使用、会議への出席者の少なさから、この教会会議は「教会会議」(synod, council)と呼ぶほど規模の大きなものではなく、ミカエル2世からの書簡を受けたルートヴィヒが教皇に、神学的な問題について探求するために許可を得て開いたフランク王国の神学者たちの「会合」(meeting)であったという。Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.265.

²³ この書物は825年12月6日に発送された。すなわち、パリに集まった神学者たちは1か月余りでこの長大な本を完成させたことになる。Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.266.

²⁴ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.270.

²⁵ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, 2009, p.269.

²⁶ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.271; MGH Leges, Conc.2,2 : Conc. Parisiense a. 825, p.484-489.

²⁷ MGH Leges, Conc.2,2 : Conc. Parisiense a. 825, p.487.

であるとの主張に軸足を置きつつ、正しい崇拝と誤った崇拝の方法を区別するところから論を展開する。ノーブルによれば、ここに見られる正しい崇拝のあり方の定義は長年に渡った聖画像論争において革新的であるという²⁸。著者はまず、どのようにして聖画像崇敬が起こるのか、アウグスティヌスから6つの文章を引用しつつ説明する²⁹。最後には『神の国』が引用され、創造主たる神のみが崇拝されるべきであり、その被造物は崇拝の対象であるべきでない、との見解が示される。その後、今度はフルゲンティウスやオリゲネス、ヒエロニムス、イシドールス、ラクタンティウス、そしてアウグスティヌスから、合わせて13の文章が引用される。この引用の中で、支配者の肖像の崇拝が禁じられている点は注目に値する³⁰。全体を通じて、神のみが崇拝されるべきであり、聖画像は神の似姿に過ぎず真の神ではないので、崇拝されるべきではない、との主張が、繰り返しなされている。

③に関する議論では、十字架の持つ奇跡的な効力の事例が引用される。例えばエウセビウス『コンスタンティヌス伝』からはコンスタンティヌス帝が天に見た十字架の話が、カッシオドルス『三部教会史』(*Historia Ecclesiastica Tripartita*)からは十字架に触れることで蘇った死人の話が、『神の国』からはある女性が患っていたがんが十字架によって治癒された話が引用されている。更に、ヨハネス・クリュソストモスの説教やセドゥリウスの詩も引用され、十字架のもつ特殊な意味や力が強調される。これらの引用を踏まえ、『会議録』の書き手である司教たちの見解が示されている。主に様々な教父著作からの引用で構成される『会議録』の中で、最も長く司教たちが自身の言葉で考えを述べている箇所がこの部分である。彼らはまず、「聖画像を崇拝する人々は、自分たちの考えを支持するために、十字架への崇敬、崇拝、十字架の掲揚をする」と、聖十字架を画像と同一視する者たちの言い分を紹介する。これに対し彼らは、「キリストは人類の救済のために画像ではなく十字架に架けられることを選んだのであり、聖なる母なる教会は、全世界において、十字架の秘儀を、数ある秘儀の中でも、受難への愛という点のみをもって、すべてのカトリック信者に許容する。それ故、カトリック信者は十字架に対して一礼することや、受難の祭日においては十字架に平伏し崇拝することが許容される。」と述べる³¹。更に、教会は洗礼盤の聖別や洗礼、その他の祝福や祈りで十字架を使用し、ミサでは聖体拝領時に十字架の印がつけられることを挙げ、これらが画像や他の印と交換不可能であることは、ある人が賢くあれ愚かであれ、自明であると述べる³²。ノーブルは、これほど十字架について分量を割き議論している書物は、それまでの聖画像論争に関する著作の中でも先例がないと述べている³³。

これに続いて、④について論じられる。このセクションは全体で最も長大である。ここでは内容のほとんどが、グレゴリウス大教皇の複数の書簡やヨハネス・クリュソストモス、聖バシレイオス『聖霊論』、聖アタナシウス、アレクサンドリア総主教キュリロス、ディオニュシウス・アレオパギタ、アン

²⁸ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.271.

²⁹ アウグスティヌスがシモン・マグスやグノーシス主義者、ヘルメス・トリスメギトウスに言及している箇所を、聖画像崇拝の例として引用している。MGH Leges, Conc.2,2 : Conc. Parisiense a. 825, pp.489-490.

³⁰ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.272.

³¹ “Quibus primo respondendum est, quia Christus non in imagine, sed in cruce suspendi elegit, quando genus humanum redimere voluit et ideo sancta mater Ecclesia toto orbe terrarum inter caetera innumera crucis sacramenta, quae a sanctis Patribus multipliciter longe lateque per universum mundum enumerata sunt, decrevit licitum esse universis catholicis ob amorem solius passionis Christi, ubicunque eas viderint, inclinando si voluerint venerari, et insuper die sancto quo passio Domini in universo mundo specialiter celebratur cum omni devotione universum ordinem sacerdotalem, seu cunctum populum prostratum adorare.” MGH Leges, Conc.2,2 : Conc. Parisiense a. 825, p.506.

³² “Et licet haec magna sint, quid de consecratione corporis et sanguinis Domini nostri Jesu Christi dicturi sumus, quae utraque in sacris missarum solemnibus ex quo consecrari coeperint, usque in finem pene sine intermissione crucis signaculo benedicantur, nec est quisquam tam sapiens vel insipiens, qui ullo modo hanc consecrationem aliter se posse perficere Deo placite praesumat, nisi hoc semper ejusdem sanctae crucis signaculo consecrare studeat?” Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.277; MGH Leges, Conc.2,2 : Conc. Parisiense a. 825, p.506.

³³ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.276. 『カールの書』も聖十字架には1章分を割いて議論しているが、『会議録』におけるそれははるかに分量が多い。

ブロンヌス、ニュッサのグレゴリウス、アウグスティヌスなどの著作からの引用である。冒頭には忠告文が書かれ³⁴、聖画像を破壊する者たちに対して、破壊されてはならない理由が示される。ここでは、特にグレゴリウス大教皇の書簡の引用から、文字の読めない者たちに物事を「教える」ことができる画像の機能や、真なるものを喚起する力が示され、特定の対象・場合においては、聖画像が正しく機能すること、それ故聖画像は破壊されてはならないことが論じられる³⁵。画像が持つこのような機能は、前述の通り『カールの書』においてはむしろ否定的に捉えられていた。

ここまで『カールの書』そして『教会会議録』の内容を見てきたが、ここでこの2つの聖画像論争に関する文書について、3つの点を指摘しておきたい。1つ目は史料の引用元である。『カールの書』が聖書からの引用を頻繁にするのに対し、『会議録』は教父著作からの引用をより頻繁にしている³⁶。また、『カールの書』に比して『教会会議』では引用が占める割合が非常に高い。聖書から教父著作への引用元の変化、そして書き手自身の見解よりも引用の割合の増加は、両文書の制作目的の違いからも求められるだろうが、ルートヴィヒ敬虔帝の世代における百科全書的な知の集成づくりや実践的な知の重視にあるのかもしれない。画像や教義に関わる諸問題を章題として提示し、それぞれの問題に言及した教父著作を満遍なく引用することで、ある問題についてこれまで交わされてきた議論が一覧できるように作られている。これは、現場で聖務にあたり、様々な疑問に直面してきた書き手である司教たちの実践知であり、同じように活動する他の聖職者たちにとって非常に役に立ったであろう。2つ目は、『会議録』において、画像の教育的側面が認められている点である。『カールの書』の序文によれば、「教会の装飾物として、また行われた事績の記憶のため」に画像を有するべきであり、第3巻16節によれば、無学な者たちは画像を見て、描かれている事物ではなく画像そのものを崇拜して自らの魂を汚してしまうため、画像は避けられる必要があるという³⁷。しかし『会議録』では、聖画像は崇拜されるべきではないと論じられつつも、聖像破壊をしてはならない根拠として、聖画像は文字の読めない者たちに歴史や物語を教えることができるとのグレゴリウス大教皇の書簡が引用されている。少なくとも、聖画像がもつ教育的機能を認めているのである。『聖十字架礼讃』においては、敬虔帝の献呈詩、第1詩、第4詩、第15詩、第28詩の5点において画像表現が見られる。『カールの書』と『会議録』の間であって、『聖十字架礼讃』の鑑賞者がその高度な内容上高位聖職者あるいは貴族に限定されていたからこそ、ラバーヌスは両文書に矛盾しない形で、強いイメージ喚起力をもつ画像を取り入れることができたのかもしれない。またそれらの画像をインテキストの場として採用し、文字をその上に重ねることで、ミュラーが指摘しているように、文字は画像に対して優位性を保つ³⁸。加えて『聖十字架礼讃』の画像は解釈の対

³⁴ 「…もしあなたが聖像破壊者であるなら、以下の内容を読み、聖画像のある場所ならどこでも、それが許容できない異端のために制作されたものではなく、適切で許容できる目的のために制作されたものであった場合にも、それを引き倒すか嘲笑してやろうというあなたの軽率さに許可が与えられたと思わないよう注意しなさい」。Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.277; MGH Leges, Conc.2,2 : Conc. Parisiense a. 825, pp.506-507.

³⁵ MGH Leges, Conc.2,2 : Conc. Parisiense a. 825, p.507.

³⁶ ノーブルはこの原因が、両文書が制作された時代状況の差にあると考えた。『カールの書』の制作時、フランク王国は複数の民族を1つのキリスト教徒の民へと統合し、その制度的・知的・教会改革に乗り出したばかりで、なるべく早く彼らのアイデンティティを定義する必要があった。それ故、著者の一人であるテオドゥルフの目的は、新たなフランク王国を、聖書や使徒、教皇、そしてローマの唯一の正当な継承者として定義することであったという。正統信仰の体現者として、聖書からの引用に固執したのかもしれない。Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, pp.322-323.

³⁷ “Nam esti a doctis quibusque vitari possit hoc, quod illi in adorandis imaginibus exercent, qui videlicet non qui sint, sed quid innuant venerantur, indoctis tamen quibusque scandalum generant, qui nihil aliud in his praeter id, quod vident, venerantur et adorant.” MGH, Leges, Conc. 2. Suppl.1: Opus Caroli regis contra synodum (Libri Carolini), p.411.

³⁸ 「その理由は、画像が形象詩の中に統合された一要素としてその独自性・特性を大いに失うためであろう。画像はその使用法に基づき、必要なやり方で、言葉との密接な関係を結ぶ。それによって画像が独りでに何かを語るのではなく、画像が持つ比喩性とその機能に従って、線による形象と完全に同一視される。「著作の価値」(pretium operis)と「読者にとっての有用性」(utilitas lectionis)に寄与する画像的要素は、挿絵的描写(abbildlichen Darstellung)ではな

象であり、解説文においてその表面的な意味だけでなく霊的な意味も明かされる。故に『カールの書』に対抗しない形で、作品内に画像表現を組み込むことが可能となっている。3つ目は十字架に対する態度である。十字架のもつ奇跡的な力を強調しているという点では、両者に大きな相違はない。ただし、『カールの書』第2巻第28章の最終部を読むと、十字架そのものではなく、十字架に架けられ、父と聖霊と共に永遠に君臨するキリストだけが崇められ、従われ、礼拝されるべきであると記述されている³⁹。一方、『会議録』には、カトリック教徒が十字架に対し一礼したり、受難の主日には平伏し崇敬したりすることは許容されると明示的に書かれている。つまり、十字架そのものに対する崇敬がはっきりと認められているのである。この考え方は、『聖十字架礼讃』第28詩に描かれた十字架に跪くラバーヌスの肖像が、批判なく受け入れられた根拠となっているかもしれない。

第2節 カロリング朝における十字架崇敬

先の節では、カール大帝期とルートヴィヒ敬虔帝期における画像に対する態度の差異から、『聖十字架礼讃』における図像表現を分析した。本節では、カール大帝治世期の後半からルートヴィヒ敬虔帝への交代という期間に、フランク王国でどのように十字架崇敬が拡大していたのか、また十字架と密接な関係にあるキリストの受難がどのように捉えられていたのかを考察し、いかにして『聖十字架礼讃』に結実したのか、分析を試みる。

(1) 聖十字架崇敬の起源と聖十字架片の広まり

十字架という記号は、カイ・ローやタウ・ローといったクリストグラムも含めれば、初期キリスト教時代から使用されてきた⁴⁰。十字架記号への崇敬が最初の高まりを見せたのは、ローマ皇帝コンスタンティヌスの母親ヘレナが、キリストの磔刑に実際に使用されたとされる十字架の木片をエルサレムで発見したとの伝説が広まった、4世紀～5世紀頃だと考えられている⁴¹。この真の十字架の木片は「聖十字架」と呼ばれ、既に古代末期からラテン西方世界へと献上されていた。例えば、コンスタンティヌス大帝はローマのサンタ・クロチェ・イン・ジェルサレンメ聖堂に聖十字架片をもたらししている⁴²。こうした聖十字架片の贈呈はメロヴィング朝・カロリング朝期にも行われた。例えばクロタール1世の未亡人ラデグンデは、自身が創設したポワティエのサン・クロワ修道院のために、東ローマ皇帝ユスティニアヌスとその妻ソフィアから聖十字架片を譲り受け⁴³、また565年以前にはトゥールのサン・マルタン修道院も由来不明の聖十字架片を所有していた⁴⁴。更に799年、エルサレム総主教ゲオルギウスによ

く、詩で扱われる内容に不可欠な描写であり、孤立しているのではなく、詩の根本的な意味を担う言葉に依存している。それはインテキストや解説文にも示されている。」Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis. Studien zur Überlieferung und Geistesgeschichte mit dem Faksimile Textabdruck aus Codex Reg. Lat. 124 der Vatikanischen Bibliothek*. Ratingen 1973, p.141.

³⁹ “Si ergo crucem tollere et te, qui per crucem triumphans terrena caelestibus sociasti, sequi et imaginem Caesaris Caesari reddere debemus, non sunt imagines cruci aequiperandae, non adorand, non colendae, sed huic mundo cum ceteris, quae mundi sunt, relinquendae, et tu solus adorandus, tu solus sequendus, tu solus colendus es, qui in unitate substantiae cum Patre et Spiritu sancto perpetim regnas.” MGH Leges, Conc.2, Suppl.1: Opus Caroli regis contra synodum(Libri Carolini), p.300.

⁴⁰ カイ・ローやタウ・ローといったクリストグラムの使用から十字架記号の使用への転換については I.ガリプサノフの単著第2章に詳しい。Garipzanov, I., *Graphic Signs of Authority in Late Antiquity and the Early Middle Ages, 300-900*. Oxford 2018, pp.50-80.

⁴¹ 聖十字架崇敬の起源については、I.ガリプサノフが、キリスト教的図形記号に関する文字史料や画像史料を用いて詳細に論じている。彼は4世紀から5世紀にローマ帝国で発行された皇妃の硬貨や宝飾品、記念碑や彫刻に、十字架記号が見られることを指摘している。Garipzanov, I., *Graphic Signs of Authority*, pp.81-105.

⁴² Klein, H. Eastern Objects and Western Desires: Relics and Reliquaries between Byzantium and the West, in: *Dumbarton Oaks Papers* 58, 2004, pp.283-314.

⁴³ Gregory of Tours/ Trans.by Dalton, O.M., *The History of the Franks Vol.2*, Oxford, 1927, p.413

⁴⁴ Wilhelmy, W. *Rabanus Maurus: Auf den Spuren eines karolingischen Gelehrten*, Mainz, 2006, p.30.

って派遣された使節は、アーヘンにてカール大帝に、「受難の地/主の墓の（de loco resurrectionis/ de sepulchro Domini）」聖遺物をもたらしたという⁴⁵。更に『アデマールの年代記』によれば、カールは807年にエルサレム総主教トマスから聖十字架片を贈呈され、それを、シャローに修道院を建設したりモージュ伯ロジェールに授与したという⁴⁶。

聖十字架片の贈答は、聖十字架に関する文学作品、特に詩の制作の契機となった。例えば先に触れたようにウェナンティウス・フォルトウナートゥスは聖十字架片の授与にあたって聖十字架を主題とした形象詩を制作した。またラバーヌスも、819年頃の聖ボニファティウスの聖遺物奉遷を契機に「殉教者ボニファティウスが最初に埋葬された十字架に宛てて（Ad Crucem, ubi martyr Bonifacius primum fuerat tumulatus）」という詩を制作し、その中で、ボニファティウスの遺体が安置された場所に置かれた聖十字架片を含むスタウロテークに言及している⁴⁷。また、マインツ大司教ルルによって創設された聖ウィグベルト教会に宛てた「祭壇の近くに置かれた十字架に宛てて。（その十字架は）これらの聖遺物を含んでいる。（Ad crucem erga altare positam. Has reliquias continet.）」との題の詩においても同様に、同教会に所蔵されていた聖十字架片を詠みこんでいる⁴⁸。この詩が制作されたのは聖ウィグベルト教会が建設された850年頃とされているが、A.フロロウによれば814年より以前には既に同地に別のヘルスフェルトの聖ウィグベルト教会が存在しており⁴⁹、聖十字架片がもたらされていたという⁵⁰。このように、聖十字架片の獲得・奉遷に際して聖十字架に宛てた詩が詠まれ、聖十字架が賞賛された。故に、最後に例示した聖ウィグベルト教会のようなマインツ大司教区における聖十字架片の獲得は、ラバーヌスの『聖十字架礼讃』制作の間接的な理由になっているのかもしれない。

(2) 聖十字架に関する典礼・祝祭日

聖十字架崇敬との関連で、当時のフランク王国で祝われていた聖十字架に関する祝祭日や典礼についても確認しておきたい。聖十字架崇敬に関する祝祭日として、5月3日の聖十字架発見の祝日（*Inventio sanctae crucis*）と9月14日の十字架称賛の祝日（*Exaltatio sanctae crucis*）の2つが典礼暦上特に重要であった。十字架称賛の祝日の起源と普及を典礼書や読誦集の分析から考察したL.V.トンヘレンによれば、後者に関する記述がローマ以外で最初に確認されるのは、初代カロリング王ピピンによる典礼統一の試みの中で760年から770年に制作された『ゲラシウスの秘跡書』写本⁵¹においてであるという⁵²。この秘跡書には前述の2つの祝祭日のミサで読まれるべき祈祷文が含まれている⁵³。つまり、ローマで祝わ

⁴⁵ Frolow, A., *La relique de la vraie Croix: recherches sur le développement d'un culte*. Paris 1961, pp.198-201 ; MGH SS, I, p.186(*Annales regni*).

⁴⁶ Frolow, A., *La relique de la vraie Croix*, p.208.

⁴⁷ “Membra beata senex bonifacius hic sua clausit, postquam martyri astra superna petit. Qui translatus ab hinc prescibus tamen adstat honetis, munera vice sui multa reliquit et hic. Pars crucis hic domini est, ubi caesus parsque columnae, petra cruentata calvariaeque locus. Spongia quae Christo potum porrexit aceti, Cum qua hic sancti mixta locant spolia, Andreas, Paulus, Gervasius atque Protasius, Felix et Papias, sanctus Apollinaris. Gregorius praesul, Cosmas simul et Damianus, Atque Coronati quatuor ecce manent. Landebertus honor, Leudgarius et Nicolaus, Caecilia Eugenia, martyr Anastasia. Commanet hic Simeon, Christi portator honestus, Zacharias vates atque videns Samuel.” MGH Poetae Latini aevi Carolini, II, p.206.

⁴⁸ “Pars crucis hic domini est, qua Christus saecula beavit, portio sudarii chlamydis atque sacrae. Papa en Gregorius, Martinus praesul et almus, Ambrosius doctor atque Medardus ovant. Maximus adest, Germanus, hicque Remigius Virgine cum insigni et martyre Anastasia.” MGH Poetae Latini aevi Carolini II, p.230.

⁴⁹ ヘルスフェルト修道院は当時すでに存在していたため、その附属教会としてあったのかもしれない。

⁵⁰ Frolow, A., *La relique de la vraie Croix*, p.215.

⁵¹ Klöckener, M., Sakramentar, in: *LexMA Bd.7*, col.1273-1274.

⁵² Tongeren, L.V., *Exaltation of the Cross: Toward the Origin of the Feast of the Cross and the Meaning of the Cross in Early Medieval Liturgy*. Leuven/Paris/Sterling[Virginia] 2000, p.59.

⁵³ Moreton, B., *The Eighth Century Gelasian Sacramentary. A Study in Tradition*. London 1976, p.132; Chazelle, C., *The Crucified God in the Carolingian Era. Theology and Art of Christ's Passion*. Cambridge 2001, p.30.

れていた十字架に関する典礼を、ローマ以外で最初に取り入れたのはカロリング朝であったということになる。8世紀版の『ゲラシウスの秘跡書』写本は複数点制作されているが、その全てが800年頃に由来する⁵⁴。これらの写本についての最も古い証言はサン・リキエ修道院の聖具保管室の831年の蔵書目録で、19点の『ゲラシウスの秘跡書』写本と3点の『グレゴリウスの秘跡書』写本、1点の『アルピヌスによって注文されたグレゴリウスとゲラシウスの典礼書』（*missalis gregorianus et gelasianus modernis temporibus ab albino ordinatus*）が記録されている。833年にはケルンの蔵書目録で、また9世紀のロルシュの蔵書目録や850年頃のランスの複数の教区教会で、『ゲラシウスの秘跡書』写本の記録が残っている⁵⁵。このことから、カロリング朝の主要な教会施設においては十字架称賛の祝日のミサが行われていたか、あるいは少なくとも知られていたと考えられる。故に王立修道院とされていたフルダも、当然『ゲラシウスの秘跡書』写本を所有していただろう。また、カール大帝は教皇ハドリアヌス1世に対し、ローマ典礼を再現できる秘跡書を送るよう繰り返し依頼し、教皇グレゴリウス1世の下で編纂された『グレゴリウス秘跡書』を踏まえた『ハドリアヌス秘跡書』（*Liber Hadorianum*）を受け取った⁵⁶。この秘跡書にも十字架称賛の祝日のミサで読まれるべき祈祷文が690~692番に含まれていた⁵⁷。この『ハドリアヌス秘跡書』は更に加筆・修正され、その後の転写のための模範本となり⁵⁸、各地の宗教施設にその写本が残されている。例えば現在マイントのマルティヌス図書館に所蔵されている『ハドリアヌス秘跡書』写本（Hs.42）は9世紀前半に西ドイツあるいはラインラントで制作されたと考えられているし、アウクスブルク大学図書館に所蔵されている『ハドリアヌス秘跡書』写本（Cod. I.2.4° 1）は9世紀半ば～後半にロルシュで制作されたと考えられている。更に、850年頃メッツで制作された『ドロゴの秘跡書』も、その大部分を『ハドリアヌス秘跡書』に負っているという⁵⁹。9世紀前半に制作された『ハドリアヌス秘跡書』写本では、聖十字架発見のミサ祈祷文が、十字架称賛のミサの祈祷文に含まれることもあったという⁶⁰。

聖金曜日においても、聖十字架の崇敬（*Adoratio crucis*）が重要な位置を占めるようになった。メッスのアマラリウスは『典礼について』（*Liber Officialis*）において聖十字架崇敬の儀を擁護しており、ヒエロニムスの言葉を註解しながら、信徒はまるで受難したキリストがそこにいるかのように十字架や聖十字架片の前で跪くのだと述べている⁶¹。

フランクフルトやリンブルクの主に中世後期のミサ典礼書や定時課の祈祷文といった史料を集め分析したクリューガーによれば、フランクフルトやリンブルクを越えた地域においても、少なくとも交唱とレスポンソリウムでは、初期中世から聖十字架発見と十字架称賛の祝日が祝われていたことの妥当性を主張できるという⁶²。しかしながら、ラバーヌス『聖十字架礼讃』のテキストにはこれらの祝祭日からの影響はほとんど見て取ることができない⁶³。この点から推測できるのは、『聖十字架礼讃』は少なくとも典礼用に制作されたのではないということだ。

⁵⁴ Tongeren, L.V., *Exaltation of the Cross*, p.48, note 56.

⁵⁵ Moreton, B., *The Eighth Century Gelasian Sacramentary*, p.2.

⁵⁶ Klöckener, M., *Sakramentar*, in: *LexMA Bd.7*, col.1273-1274.

⁵⁷ Chazelle, C., *The Crucified God in the Carolingian Era*, p.30.

⁵⁸ この加筆修正を完了させたのは、ルイ敬虔帝宮廷において尚書局長を務めたヘリザカルであったという。Tongeren, L.V., *Exaltation of the Cross*, p.48.

⁵⁹ Bierbrauer, K., *Drogo-Sakramentar*, in: *LexMA Bd.3*, col.1405-1406.

⁶⁰ Tongeren, L.V., *Exaltation of the Cross*, p.128.

⁶¹ Chazelle, C., *The Crucified God in the Carolingian Era*, pp.122-124.

⁶² Krüger, A., *Die Verehrung des heiligen Kreuzes im Mittelalter am Beispiel der Städte Frankfurt am Main und Limburg an der Lahn*, in: *Im Zeichen des Kreuzes. Die Limburger Staurothek und ihre Geschichte*, pp. 51-88 [cit. in Beuckers, K.G., *op.cit.*, p.88].

⁶³ Beuckers, K.G., *op.cit.*, p.89.

以上を踏まえると、聖十字架に関する祝祭日や典礼はピピン短躰王の時代に既にカロリング朝の典礼テキストに取り入れられ（『ゲラシウスの秘跡書』）、写本を通じてルートヴィヒ敬虔帝の時代まで主要な教会・修道院に伝わっていたこと、カール大帝の時代に更に典礼の統一化が図られたものの聖十字架関連の典礼は残ったこと（『ハドリアヌス秘跡書』）、ラバーヌスの生活圏であるマインツ大司教区地域でも聖十字架に関する祝祭日・典礼は行われていた可能性が高いが、『聖十字架礼讃』にその影響は見られないということが言える。

（3）カール大帝期の聖十字架崇敬

カール大帝期のカロリング朝において、国王宮廷に属する人物らの間で十字架が重視されていたというのは、先に分析した『カールの書』の記述からも明らかである。『カールの書』においては、聖十字架に関する問題を扱うために1章分が割かれていた。そしてその中で、勝利の象徴として、悪魔を追い払う護符として、キリストによる救済の象徴としての役割が示され、信仰における重要性が強調されていた。聖画像崇拜に対して厳しい態度を取ったカール大帝宮廷においても、聖十字架という形象は別物であった。

①モノグラム

カール大帝自身、十字架と自身の名前を組み合わせたモノグラムを使用していた【図 59】⁶⁴。カール大帝のモノグラムを考案したのは、当時ヒテリウスが責任者を担っていた国王宮廷尚書部であったと考えられている⁶⁵。カール大帝のモノグラムは、その名前のアルファベット KRLS が十字架の4つの先端に配置されている。ガリプサノフは R の文字が十字架の縦軸の上部に配置されていることから、キリストのモノグラムであるカイ・ローを連想させると指摘している⁶⁶。また、十字の交点の部分には菱形の図形が配されている。菱形と十字形の組み合わせは、先のフォルトゥナートゥスやボニファティウス、またカールと同時代のアルクインが制作した形象詩にも見られたため、アルクインを始めとするカール大帝の宮廷のメンバーには馴染みのある組み合わせであったのだろう。ガリプサノフによれば、このような十字架と名前を組み合わせたモノグラムは、教皇ティベリウス3世（698-705）やグレゴリウス3世（730-741）、ハドリアヌス1世（772-795年）も使用していたという。この事実からガリプサノフは、カール大帝の治世におけるフランク王国とローマ教皇との接触の増加が、カールのモノグラムに反映されていると主張する⁶⁷。モノグラムへの十字架形の採用には、ローマ教皇との密接性や西ローマの伝統を正当に引き継ぐ後継者であることを対外的にアピールする意味があったのかもしれない。

②硬貨

カール大帝のモノグラムは、当時流通していた硬貨にも打刻されていた。カール大帝はその治世の間、3種類のデナリウス硬貨を作らせているが、その2番目（793/794年-812年頃）の種類にモノグラムが採用されている。2番目の種類の表面の中央には輪で囲まれたカール大帝のモノグラムが打刻され、その外側に「フランク人の王カール（CARLUS REX FR[ancorum]）」と刻まれている。裏面の中央には等腕十字架が描かれ、それを囲むように鑄造地を示すアルファベットが刻まれている【図 60】。また3番目の種類の硬貨（812-814年頃）には、モノグラムは使われていないものの、依然として十字架が図案に組み込まれている。表面にはカール大帝の胸から上の横顔が描かれている。カールは月桂冠を被り、皇帝のマントを着用した姿である。その周囲を「我々の主、インペラートル・アウグストゥス、フランク

⁶⁴ カール大帝の十字架形のモノグラムを確認できる最初の例は、769年1月のカールの国王証書においてである。メロヴィング朝の王たちや先のピピン短躰王においてはモノグラムの使用はまばらであり、I. ガリプサノフによれば、カール大帝はいわば国王モノグラムの使用を復活させたという。Garipzanov, I., *The Symbolic Language of Authority in the Carolingian World* (c. 751-877), pp.169-172.

⁶⁵ Garipzanov, I., *The Symbolic Language of Authority*, pp.173-175.

⁶⁶ Garipzanov, I., *The Symbolic Language of Authority*, p.177.

⁶⁷ Garipzanov, I., *The Symbolic Language of Authority*, p.175.

人とランゴバルド人たちの王（DN KARLVVS IMP AVG REX F ET L.[Dominus Noster Karlus Imperator Augustus Rex Francorum et Langobardorum]）」とのフレーズが囲んでいる。そして裏面の中央には神殿が描かれている。その神殿の中央と破風の上には十字架が見える。この神殿の周囲を「キリスト教（XPICTIANA RELIGIO [Christiana Religio]）」という言葉が囲む【図 61】。十字架という記号がキリスト教正統信仰の象徴として捉えられ、王権と強く結びついていたことの証左と言える。

③写本挿絵

十字架形が取り入れられたのは国王のモノグラムの図案や硬貨の意匠においてだけではない。カール大帝宮廷の写本芸術においても、十字架形が頻繁に採用された。例えばカール大帝の依頼で 781 年から 783 年に制作された『ゴデスカルクの福音書』（パリ、フランス国立図書館 Nouv. Acq. Lat. 1203）の fol.3v【図 62】に描かれた生命の泉の挿絵では、その上部に等腕十字架が描かれている他、790 年頃に制作された『サン・マルタン・ドゥ・シャンの福音書』（パリ、フランス国立図書館、アーセナル図書館、Ms.599）の fol.58r では、マタイの福音書の後に「私のために祈れ（Ora pro me）」との文言が十字架の形に並べられている【図 63】。また『アダ福音書』（トリアー、市立図書館、Hs.22）の四福音書対観表の最初の見開きでは、その上部に十字架の意匠が施されているし【図 64】、宝石がちりばめられたその豪華な表紙も十字架をデザインの基盤としている【図 65】。770 年頃に制作されたとされる『リンドーの福音書』（ニューヨーク、モルガン・ライブラリー、MS M1）⁶⁸【図 66】の裏表紙も同様に、十字架形を構成原理としている。8 世紀末のカール大帝宮廷派の写本は、ほとんど例外なく十字架形をその挿絵や装丁に取り入れている。

（4）ルイ敬虔帝下での聖十字架崇敬

ルイ敬虔帝下で制作された先の『教会会議録』においては、聖十字架の崇敬が明示的に認められていた。この態度は、同時代の神学者たちの著作にも反映されている。その 1 つがオルレ안의ヨナスによる『聖画像の崇敬について』（*De cultu imaginum*）である。この著作は過激な聖画像破壊を行うトリノ司教クラウディウスへの反駁書として執筆されたもので、827 年にクラウディウスの訃報をもって執筆が中断されたが、840 年頃カール禿頭王から依頼を受けたことや、クラウディウスの弟子たちの活動を耳にしたことをきっかけに執筆を再開し、書き上げられた⁶⁹。ヨナスはまずその第 1 巻において十字架像を破壊したとされるクラウディウス⁷⁰を批判し⁷¹、第 2 巻にて聖十字架の崇敬に関するクラウディウスの見解に対し詳細に反論している。ヨナスによれば、十字架は救済の普遍的な象徴であり、アウグスティヌスやグレゴリウス、ベーダといった権威によっても擁護されてきた。十字架はキリストの受難の記憶と、その上で達成された復活の故に崇敬され、尊敬される。ただし、それは神に捧げられるのと同じ崇敬ではない。また十字架はどのような材料から構成されているかではなく、キリストがその上で死んだという理由で崇敬の対象となる⁷²のだという。更にヨナスはオリゲネスやヨハネネス・クリュソストモス、エウセビウスやアウグスティヌス『神の国』等における聖十字架に関連する奇跡譚を引用しながら、

⁶⁸ <https://www.themorgan.org/collection/lindau-gospels>.

⁶⁹ Chazelle, C., *The Crucified God in the Carolingian Era*, p.120.

⁷⁰ クラウディウスの主張はこうである。誤った宗教や迷信に陥っている者たちは、十字架（あるいは受難）の崇拝（worship）、尊敬（veneration）、崇敬（adoration）を誤って正当化している。その崇敬の対象はキリストであるとし、キリストの記憶と名譽のためにその物（十字架）が描かれ、形作られると断言する。しかしそのような者が真に礼拝しているのはキリストの死すべき運命にある人性のみであって、それ故彼の受難の屈辱とその死の嘲笑であり、これは復活を否定するユダヤ人や異教の民の言いぐさと同様である。十字架を崇拝するのは神の子を再び十字架に架けることと同等であり、偶像による忌まわしき冒瀆によって、人々の魂を永遠の責め苦へ導く。Chazelle, C., *The Crucified God in the Carolingian Era*, p.121; MGH Epistolae 12, 4.611.

⁷¹ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.296.

⁷² Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, pp.298-299.

聖十字架の賞賛とそれが持つ力を正当化する⁷³。神に対する崇拜（colere）と十字架に対するそれは異なる、という点においては『カールの書』と一致するが、物質的な十字架も含めて⁷⁴、十字架は崇敬されるべきである（adorandus/veneratio）と断言している点は、カール大帝宮廷における十字架に対する態度とは異なる。

また、パヴィーアのドゥンガルも、クラウディウスへの反論を1つの著作にまとめている。『トリノ司教クラウディウスの見解に対する反駁』（*Responsa contra perversas Claudii Taurinensis episcopi sententias*）はルートヴィヒ敬虔帝とその息子ロタールの依頼で執筆された⁷⁵。ドゥンガルのこの著作はかなり聖画像擁護的である。というのも彼は序文においてグレゴリウス大教皇を引用しながら「無知な者」「文字を知らない者」に対する聖画像の教育的効果を認めており、更に後の箇所では「我々はその似姿や肉体を持つ者たち（すなわち聖画像）を『神のうちに』崇敬し（veneramur）、彼らの執り成しによって神の助けが我々の上に現存するよう求める」と述べているためである⁷⁶。「神のうちに」崇敬するのであれば、聖画像の崇敬も認められると読むことができる点で、ヨナス以上に聖画像に対し寛容であると言える。十字架について、ドゥンガルはヨナスと同様十字架には長い伝統があり、賞賛すべきであると主張する。一方で神のみが崇拜され、心に抱かれるべきだとも論じる。また、主でありあらゆる事物の創造主は、その被造物（creation）によって崇拜されるべき（adorari et coli）であるという。しかし、彼によれば、我々人間は神が創造した神聖で善き被造物、すなわち天使や聖人、聖十字架を、その価値の程度に応じて崇敬する（adoramus et colimus）。すなわち謙虚に尊敬し（humiliter honoramus）、愛し（diligimus）、抱きしめる（amplectimur）。我々は神のために、神のうちにこうするのであるという⁷⁷。更にドゥンガルは別の箇所では、十字架の予型と見なされる旧約聖書の箇所を列挙し、新約聖書における十字架についても論じる。彼は真の十字架、すなわち聖十字架片にも言及しながら、聖十字架片は聖人の聖遺物と同様崇敬され、心に抱かれるべきであると主張する⁷⁸。本著作の最終部において、ドゥンガルは聖画像崇敬に関する自身の見解を明示する。それによれば、神聖な画像や主の神聖な十字架、また神に選ばれた者たちの神聖な聖遺物が、それらにふさわしい名声をもって、正統信仰と正しい信仰をもつ人々によって、神のうちに、そして神のために崇敬されるべき（venerari）であるのは極めて確かであり、明らかであるという。ただし、神のみに払われる敬意や信仰はこれら他の事物には払われない、と忠告を加える。それでもなお、ドゥンガルにおいてはそれが神のうちに、神のためである限り、聖画像並びに聖十字架の崇敬は自明の理とされている点で、カール大帝宮廷の態度より遥かに柔軟になっている。

⁷³ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.300.

⁷⁴ ヨナスは第1巻において、「キリストの十字架を崇敬（adore）する者、聖人の遺体を敬う（honor）者、もしくは十字架の軍旗に会釈する（salute）者は、自身を悪魔と結びつけ、自らを永遠の断罪に陥れている」とするクラウディウスの主張を否定している。一方で「我々は彫刻や画像を崇拜（colo）しない（Nos figmenta et imagines non colimus.）」と述べるが、聖人の画像や聖遺物がもつ、人々の魂の救済を執成す効果は認めている。また第2巻の序文において、クラウディウスの主張を引用しながら、キリストの十字架に礼やキスをするのは、キリストの死を賛美するためであると述べている。この様な記述から、ヨナスは、神に対する礼拝・崇拜は十字架（模造物も含む）に向けられるべきではないが、adorare や honorare といった言葉で表現される祈りの形（崇敬・尊敬）は許容されると考えたと言える。Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, pp.298-299; Migne, J.P. PL 106, Sp.325A-330B.

⁷⁵ ドゥンガルは恐らくアイルランド出身の修道士。アルクインと交友関係にあった。カール大帝はトゥールのフレデギスス著『無と闇の實在について』（*De substantia nihili et tenebrarum*）についての彼の見解を求めたり、日食に関して問うたりしていた。ロタール1世は825年にドゥンガルをパヴィーアの由緒正しい学校の学校長に任命した。Leonardi, C., *Dungal*, in: *LexMA Bd.3*, col.1456-1458.

⁷⁶ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.308; Migne, PL 105, Sp.472B.

⁷⁷ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.309.

⁷⁸ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.310.

最後に確認するのは、ラバーヌスと同じくフルダ修道院出身で国王宮廷に派遣され、教育を受けたアインハルトの見解である。アインハルトは 830 年代に、フェリエールのルプスからの問い合わせに答える形で『十字架の崇敬について (*Quaestio de adoranda crucis*)』と呼ばれる著作を書いた。この著作は 836 年 4 月にルプスのもとに届いている⁷⁹。この著作において最も重要なのは、アインハルトが「祈ること (orare)」と「崇敬すること (adorare)」を区別している点である。彼は「祈ること」を、人々が見えない神もしくは他の何かに、救いを求めてすがり、「精神あるいは声によって、あるいは精神と声によって、身体的な動作無しに祈ること」と定義し、「崇敬すること」を「目に見える事物に瞳を向けて、その場で頭を傾けたり、あるいは全身を曲げたり平伏したりすること、また腕を伸ばしたり手のひらを広げたりすることなど、身体的な動作に関係することによって崇敬を表明すること」と定義した⁸⁰。聖書においては「崇敬心 (veneratio)」が「崇敬行為 (adoratio)」と呼ばれており、人は「敬意」を表するために「崇敬」するのだという。その上で、「祈ること」は神のみに向けられ、「崇敬すること」は神ではなく、生き物や感覚機能のある存在、あるいは教会や墓、聖遺物のような生命を持たない物に対し向けられるものであると主張した⁸¹。一方で、神に対し心の中で「祈り」つつ、彼が目の前に存在するかのように地面に平伏する（すなわち身体的動作で「崇敬する」）場合、神にも「崇敬」が適用されることを彼は認めている⁸²。この様に議論した後、アインハルトは、十字架を目の前にして未だ十字架に架けられている主を見たかのように地面に平伏したパウラ⁸³のように、我々も心の目を開いて十字架に架けられた主を「崇敬」しつつ十字架の前で平伏すべきであると述べ、聖十字架崇敬は拒絶すべきではないと主張する⁸⁴。すなわち、アインハルトにおいては物質的な十字架が「崇敬」の対象であると明言され、十字架を通して受難された主を観想するという、可視の物質的な事物から不可視の霊的な存在に達するプロセスが想定されている。一方で、「祈り」は神のみに向けられるとも述べている。こうした、物質的な事物の崇敬の対象としての容認や神に向けられる特定の形の祈りの存在の想定は、以上で確認してきたルイ敬虔帝下の他の知識人と共通する点である。

以上見てきた通り、ルイ敬虔帝下では聖画像崇敬への態度の軟化と共に、十字架記号だけでなく物質的な十字架に対する崇敬も容認されるべきとする見解が登場してきた。

①モノグラム

国王のモノグラムのスタイルは、ルートヴィヒ敬虔帝下において変化する。彼は十字架ではなく、彼の名前の頭文字 H をベースにした箱型のモノグラムを使用した【図 67】。ルイ敬虔帝期、モノグラムという領域においては十字架の図案が採用されることは無かったため、本論文では詳しくは立ち入らない。

②硬貨

ルイ敬虔帝の下発行された硬貨は主に 3 種類あるが、その表面の図案で支配的であるのが、十字架を中央に配しその周囲を「皇帝ルートヴィヒ (Hludovicus IMP[erator])」との文字が囲むものである【図 68】。この図案の硬貨は 814 年以降発行され、その裏面には硬貨の鑄造地が印字された。814-819 年に発行された硬貨には、カール大帝期のように、ルイ敬虔帝の右向きの横顔が刻まれたものもあり、この図

⁷⁹ MGH Epistolae, Bd.5, pp.146-149.

⁸⁰ Müller, H.G., *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis*, p.137.

⁸¹ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.322.

⁸² Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.322.

⁸³ 聖ヒエロニムスはその書簡第 108 番において、パウラが聖地を訪れた際に十字架の前で、十字架に架けられた主を見るかのように身を投げ出して礼拝したことを記述している。Translated by W.H. Fremantle, G. Lewis and W.G. Martley. From Nicene and Post-Nicene Fathers, Second Series, Vol. 6. Ed. by Philip Schaff and Henry Wace (Buffalo, NY: Christian Literature Publishing Co., 1893). Revised and edited for New Advent by Kevin Knight. <<http://www.newadvent.org/fathers/3001108.htm>>; Migne, J.P., Epistola CVIII AD EUSTOCHIUM VIRGINEM. Epitaphium Paulae matris, in: *Epistolae (Hieronymus Stridonensis)*, vol.22, 1845.

⁸⁴ Noble, F.X.T., *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, p.322.

案の裏面にはカール大帝の硬貨にも見られた神殿と十字架、「キリスト教」の図案あるいは硬貨の鋳造地が刻まれた【図 69】。その他、822 年以降発行された硬貨にも 4 つの点が付いた十字架を取り入れた図案が採用されており【図 70】、その裏面にも神殿の図案が刻まれ両面に十字架が描かれた。このように、硬貨における十字架記号の使用は依然として続いていたものと考えられる。またモノグラムに関して言えば、827 年から 840 年に教皇庁から発行された種類の硬貨の裏面には「敬虔な pius」のモノグラムの印字がある【図 71】。しかし、彼の名前のモノグラムが印字された硬貨は無い⁸⁵。カール大帝期と比較して国王モノグラムの使用が見られない点や両面に十字架を描く図案の採用から、敬虔帝が、硬貨を使用する幅広い層の民衆に対し、西ローマ皇帝やフランク王国国王という立場よりもキリスト教の守護者としての立場を示そうとしていたことが読み取れる。

③写本挿絵

カール大帝期に制作された写本に引き続き、ルイ敬虔帝期の写本においても、十字架表現は多く見られる。例えばルイ敬虔帝統治初期の 820 年頃に制作された『シュトゥットガルト詩篇』（ヴュルテンベルク州立図書館、Cod.bibl.fol.23）の fol.2r や 25v、27r【図 72】、80v に磔刑に処されるキリストが描かれているし、同じ頃に制作された『ユトレヒト詩篇』（ユトレヒト大学図書館、MS Bibl. Rhenotraiectinae I Nr 32）においても、fol.12r にてキリストが架けられた十字架が受難具と共に描かれ、更に fol.51v【図 73】や 67r、90r では十字架上で受難するキリストが描かれている。また 825-850 年の間にサントメールのサン・ベルタン修道院で制作された『ルートヴィヒドイツ人王の詩篇』（ベルリン州立図書館、Ms. theol. lat. fol. 58）の最終紙葉にもキリストの受難図が描かれている【図 74】。十字架形は装飾イニシャルにも採用されることがあり、例えば 835 年以前にランス大司教エボの下制作された『エボの福音書』（エペルネー市立図書館、Ms.1）の fol.19r において、「始まる incipit」の頭文字 I と「本 Liber」の頭文字 L が重ねられ、十字形を作っている【図 75】。また 821 年頃にキエーティ周辺で制作された複数の作品が一つに納められた集合写本（カールスルーエ、バーデン州立図書館、Aug.Perg.229）の fol.140v には、「章の終わり Expliciunt capitula」の P と V の開口部に十字架が描かれている【図 76】⁸⁶。カール大帝期と比較して、ルートヴィヒ敬虔帝期では福音書写本の挿絵に十字架が登場することは少なく、詩篇写本の挿絵に取り入れられることが多かったようである。

小括

ここまで、カール大帝期とルートヴィヒ敬虔帝期それぞれの十字架に対する見解と視覚芸術における十字架記号を確認してきた。十字架に対する見解について、カール大帝期には聖画像と十字架は区別され、十字架に宿る特別な効果やその神聖性が認められた。ただし十字架そのものの崇敬については明言されず、十字架に架けられ、父と聖霊と共に永遠に君臨するキリストだけが崇められ、従われ、礼拝されるべきであると記述されていた。視覚芸術においては、カール大帝のモノグラムに十字架の図案が使用され、硬貨に打刻された。写本挿絵においても十字架記号は「生命の泉」の描写や四福音書対観表に見られ、写本の装丁の意匠にも採用されていた。十字架崇敬を公に認めることはないが、十字架の象徴性や救済力、悪魔から身を守る護符としての特別な効果は認められ、それ故に様々な視覚芸術に取り入れられたと言える。ルートヴィヒ敬虔帝期では聖画像の教育的な側面が認められ、「神のうちに」聖画像を崇敬するのは許容されるとの見解が登場すると同時に、キリストの受難の記憶を想起させ、その上で復活が達成された故に十字架も崇敬され得ると明言された。十字架形はモノグラムには反映されなかったものの、硬貨の両面に印字されたり、写本の文字装飾に取り入れられたりした。また主に詩篇写本においてキリストの受難が画像化されるなど、カール大帝期から引き続き視覚芸術に浸透していった。

⁸⁵ ガリプザノフによれば、ルートヴィヒのモノグラムは、鑑賞者が聖俗のエリートに限定される証書においてのみ使用されていた。Garipzanov, I., *The Symbolic Language of Authority in the Carolingian World (c. 751-877)*, p.185.

⁸⁶ Garipzanov, I., *Graphic Signs of Authority in Late Antiquity and the Early Middle Ages, 300-900.*, Oxford, 2018, p.299.

聖画像や聖十字架を巡るこのような状況の中で、ラバーヌスは810年頃に『聖十字架礼讃』を書き上げた。ではなぜ聖十字架を主題としたのか、ここで検討してみたい。

810年頃という時期は『カールの書』が出されてから約20年後であり、バリ教会会議が開催される約15年前にあたる。すなわちカール大帝からルートヴィヒ敬虔帝への、聖画像拒絶から一定条件下での容認への過渡期であると言える。800年頃に宮廷で教育を受け、アルクインの許で更に学問を迫及したラバーヌスであれば、国王宮廷が聖画像に対しいかなる態度を取っていたのか、その概要は知っていたはずである。実際、ラバーヌスは、学友ハットーに宛てた詩において、画像について以下の様な言葉を残している。

文字という記号は図像という形よりも価値があり、物事の姿形を正しく伝えない色彩をもつ偽りの画像よりも、魂に美しさを与える。というのも聖書は完全で、救済のための祝福された規範であり、最も重要であり、皆により役に立つからである。…文字は耳、唇、目のためになるが、画像は目に多少心地よいだけである。文字は形において、発言されることにおいて、意味において真実を示し、長きにわたって好ましいものである。画像は、それが新しい時には目を楽しませるが、時が経つと重荷になる。画像はすぐに消えてしまうため、信心深い真実の伝達者ではない⁸⁷。

つまりラバーヌスは、画像は単なる芸術品に過ぎず真実を示さないという点で『カールの書』と類似した立場を取っているのである。ただし、ラバーヌスにとって十字架は、『聖十字架礼讃』第28詩の解説文にもあるように「あらゆる事物の総体であり完成」を示す象徴記号であり⁸⁸、『カールの書』に見られたように画像とは異なる重要性を持った。十字架を「あらゆる事物の総体であり完成」と捉えるのは、前章のボニファティウスやアルクインの形象詩にも共通する考え方である。

十字架を主題として選んだ理由を更に検討する上で有用なのが、フルダの修道士ブルン・カンディドゥスによる『聖アイギル伝』の記述である。この序文においてブルンは、霊的な事物に関する読書を分かち合える修道士仲間がいないことを修道院長ラバーヌスに嘆いたとき、このように言われたと述べている。

読書を通じて自身を鍛え、何か有用なものを編纂しなさい。なぜなら、私があなたの今いる場所にあった時、神の恩寵による靈感をもって、散文と韻文による聖十字架の称賛についての本を始め、熱心な仕事によって、忠実な兄弟たちの読書のために、完成させたのであるから。

Exerce temet ipsum legendo et aliquid vitilitatis adde dictando. Nam dum ego ibidem, ubi nunc ipse moraris, quondam commanerem, librum prosa et versibus in laudem sanctae crucis, divina gratia inspirante, incepi atque fidelibus legendum studioso labore consummavi.⁸⁹

⁸⁷ “Plus quia gramma valet quam vana in imagina forma,
Plusque animae decoris praestat quam falsa colorum
Pictura ostentans rerum non rite figuras.
Haec facie verum monstrat, et fame verum,
Et sensu verum, iucunda et tempore multo est,
Illas recens pascit visum, gravat atque vetusta,
Deficiet prope veri et non fide sequestra est.”
MGH, Poetae latini aevi Carolini, Bd.2, p.196; Kessler, H.L., *Spiritual Seeing. Picturing God's Invisibility in Medieval Art*. Pennsylvania 2000, p.150.

⁸⁸ “Continent autem totus iste liber XXVIII figuras metricas cum sequente sua prosa, absque superliminari pagina et prologo: qui numerus intra centenarium suis partibus perfectus est, ideoque iuxta huius summam opus consummare uolui, quia illam formam in eo cantui quae consummatio et perfectio rerum est.” Perrin, M., *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*. Turnhout 1997, p.221.

⁸⁹ 邦語訳は筆者の拙訳。ハーレンダーによるドイツ語訳を参考にした。MGH SS, Bd.15,1, *Candidi Vita Eigilis Abbatis Fuldenses*, p.222; Haarländer, S., *Rabanus Maurus zum Kennenlernen*. Mainz 2006, p.25.

この序文の引用から、ラバーヌスが『聖十字架礼讃』を「読書を通じて自身を鍛え *exerce te met ipsum legendo*」編集した「忠実な兄弟たちの読書のため *fidelibus legendum studioso*」の「何か有用なもの *aliquid vitilitatis*」だとして、すなわち自身のそれまでの学習内容を集約し、仲間内で読み学ぶための作品として捉えていたことがわかる。ラバーヌスにとっての「それまでの学習内容」は、第1章1節で検討した通り、聖書を解するための様々な学問であったことは間違いない。それを集約するための主題として、ボニファティウスやアルクインによって「新約・旧約聖書全体の象徴」、「世界の四方に広がる存在」と見なされてきた十字架が適切であったのだろう。加えて、この時期はカール大帝の治世末期で、ルートヴィヒに統治を引き継ぐ直前期であったし、ビザンツとの関係はブルガール人との間に抱えた問題をきっかけに改善しつつあった⁹⁰。既に少しずつ十字架や画像に対する態度が変化し始めていたのかもしれない。

この15年ほど後、ルートヴィヒ敬虔帝宮廷サークルに属する面々は『教会会議録』や各々の著作において、聖画像に対する態度を軟化させた。ラバーヌスの『聖十字架礼讃』は『カールの書』と『教会会議録』の間であって、『カールの書』の発展形であり、かつ『教会会議録』のプロトタイプの著作であったと言える。

第3節 カロリング朝国王宮廷における聖十字架の機能

2節で確認した通り、カール大帝期、ルイ敬虔帝期の両者において十字架記号は硬貨や写本挿絵といった視覚芸術において使用され続けた。また当時制作された典礼書には聖十字架に関する2つの祝祭日と聖金曜日における十字架の崇敬の記録が残っており、これらの典礼が既にカロリング朝で行われていた可能性を裏付けている。では、このような十字架への関心の高まりの背景には何があったのだろうか。国王宮廷の方針という文脈から検討してみたい。

(1) キリスト教的統一—異教徒に対する戦い

初期カロリング朝において十字架に託された役割についての示唆を得るため、今一度オルレアンの特オドゥルフによる『カールの書』に立ち戻りたい。『カールの書』第2巻28節によれば、十字架は「我らが王の記章 *nostri regis insigne*」であり「皇帝／支配者の象徴 *signum nostril imperatoris*」、「戦場においてより強く戦うために我々が従うべき旗印 *vexillum, quodo in campo dueli quod in campo duelli, ut fortius confligamus, sequi debemus*」であると考えられていた。更に、「悪魔を征服した武器 *His armis, non colorum fucis, diabolus expugnatus est.*」であり「我々の自由を守る武器 *Arma, quibus libertatem tueri valeamus*」でもあった。テオドゥルフにとって十字架は勝利をもたらす象徴であり、フランク王国軍を勝利させる武器として捉えられていたと言える。類似の考えはアルクインが798年にパウリヌスに送った書簡にも見られる。この書簡においてアルクインは「常にキリストの陣営において一列に並び、一致した助言と勇気をもって聖なる十字架の旗の下で戦い、私たちを通してキリストが敵を征服できるようにしよう *simus semper in castris Christi commanipulares et in una acie, sub vexillo sanctae crucis concordii consilio et virtute proeliantes, ut suos adversarios per nos vincat qui vinci non potest.*」と述べている⁹¹。アルクインも、フランク王国の民が「敵」と戦う際の軍旗として十字架を捉えていた。

では、カール大帝宮廷における「戦い」「敵」とは何を指したのだろうか。それはアルクインの書簡から推測が可能である。アルクインはカール大帝に向けた800年6月の書簡においてこう述べている。「陛下が聖なる志をもち、神より託された権力を用いることにより、使徒から継承したカトリック信仰

⁹⁰ 810-813年頃、ビザンツ帝国はブルガール人との深刻な戦争状態にあり、皇帝ニケフォロス1世はフランク王国と友好関係を結ぶことで、西方の国境地帯での軍事的な負担を軽くしようと努めた。五十嵐修『王国・教会・帝国—カール大帝期の王権と国家』（知泉書館2010年）、375-378頁。

⁹¹ MGH Epistolae, Bd.4, p.221, Alcuini Epistolae, Nr.139, l.11-14.

をいかなる場合にも擁護せられんことを。また、勇敢に戦ってキリスト帝国を拡大し、使徒から継承した真の信仰を守り、教え、伝道するように努め給わんことを」⁹²。つまり、アルクインにとって「戦い」とはキリスト帝国の拡大に繋がるもの、すなわち異教徒との戦い、異教徒の改宗を意味していたと言える。

これらのことを踏まえると、カール大帝宮廷にとって十字架は異教徒改宗のための戦いにおいて勝利をもたらす記号であり、人々が従い、その下で一列に並ぶべき軍旗であったと言える。このような意味付けはルートヴィヒの宮廷にも引き継がれたと考えられる。というのも『教会会議録』の十字架に関する箇所において、『コンスタンティヌス大帝伝』が引用されつつ、十字架が軍旗とされた伝説について叙述されているからである⁹³。更に『聖十字架礼讃』の敬虔帝に向けた献呈詩の解説文において、ラバーヌスも「聖十字架の旗印 *vexillum sanctae crucis*」という表現を用い、同じ詩でルイがキリストの力によってキリスト教に反対する者たちの力を削ぎ、全世界を支配するように、と詠んでいる。このように、カール大帝/ルイ敬虔帝宮廷において、十字架が異教徒との戦いにおける旗印と捉えられていたからこそ、硬貨や写本挿絵と言った視覚芸術に取り入れられ、聖十字架片が求められたのだと考えられる。

(2) キリストの模倣—勝者キリストの象徴としての十字架

シャゼルはカロリング期における受難図と十字架の意味を研究した単著において、初期カロリングの文学では神に祝福された統治や美德、教会の敵との戦いという文脈で称賛される世俗の王と、キリストとがしばしば重ねられていると述べている。その最たる例として彼女が挙げたのが、ピピン短髯王が『サリカ法』拡張版に追加した序文で⁹⁴、これは798年、カール大帝によって再度発行された。これには、キリストはフランクの民、兵士、その君主を見守っているとの文言や、フランク族の勇敢さと偉大さを称える描写、キリストの庇護下での戦闘における勝利が述べられる。絶大な力をもつ無敵の救世主像と、彼に見守られるフランク人たちの強さとが重ねて述べられている⁹⁵。また、ピピンを始めとするカロリング王に向けた書簡において、教皇はキリストとカロリング王の強さや敬虔さを重ねて述べ、王はキリストの恵みを受けて王国の境界を広げ、全ての敵対者を足跡にひれ伏させると書いた⁹⁶。地上において、キリストの勝者としての性質を受け取り、支配する存在としてカロリングの王たちは描かれたのである。その上、フランク王国の支配者と彼の軍に対して祈祷やミサが捧げられるようになった。

⁹² 和訳は五十嵐修氏の2001年の論文より引用。五十嵐修「帝国理念の交錯—カール戴冠再考」『人文・社会科学論集』（東洋英和女学院大学）19号（2001年）、19-49頁；MGH *Epistolae*, Bd.4, p.336, *Alcuini Epistolae*, Nr.202, l.20-23。

⁹³ “Exin signum, quod in coelo sibi fuerat demonstratum, in militaria vexilla transformat, ac Labarum, quem dicunt, in speciem crucis Dominicae exaptat, et ita armis vexillisque religionis instructus, adversum impiorum arma proficiscitur. Sed et in dextra sua manu signum nihilominus crucis ex auro fabrefactum habuisse perhibetur.” MGH *Conc.* II, Bd.2, p.502, *Concilium Parisiense*.

⁹⁴ Chazelle, C., *The Crucified God in the Carolingian Era. Theology and Art of Christ's Passion*. Cambridge 2001, p.19; MGH *LL. nat.Germ.* 4.2: *Lex Salica*, pp.2-9.

⁹⁵ “Gens Francorum inclita, auctorem Deo condita, fortis in arma, firma a pace fetera, profunda in consilio, corporea nobilis, incolumna candore, forma egregia, audax, velox, et aspera, nuper ad catholicam fidem conuersa, emunis ab heresa. Dum adhuc ritu teneretur barbaro, inspirante Deo, inquerens scienciae clauem, iuxta morem suorm qualitatem desiderans iusticiam, costodiens pietatem. … Vivat qui Francus diligit, Christus eorum regnum costodiat, rectores eorundem lumen suae gratiae repleat, exercitum protegat, fidem munimenta tribuat. Paces gaudia et felicitatem tempora dominancium dominus Iesus Christus propiciante pietatem concedat. Haec est enim gens, que fortis dum esset robore valida. Romanorum iugum durissimum desuis ceruicibus excusserunt pugnando, atque post agnicionem baptismi sanctorum martyrum corpora, quem Romani igne cremauerunt uel ferro truncauerunt uel besties lacerando proiecerunt, Franci reperta super eos aurum et lapides preciosos ornauerunt.” MGH *LL. nat.Germ.* 4.2: *Lex Salica*, pp.2-9.

⁹⁶ “Unde et petimus misericordissimam Dei nostril longanimitatem, ut, sua vos gratia protegens, aevis et prosperis temporibus regalia scepra concedat perfruenda, dilatans terminos regni vestri, et victorias vobis de caelo tribuat omnesque adversarios vestris prosternat vestigiis et sicut terrenum, ita et celeste regnum vobis per infinita secula tribuat possidendum.” MGH *Epistolae*, Bd.3 pp.539-540, *Codex Carolinus* 33.

例えばフランク王国では8世紀末頃から、国王礼讃（*Laudes Regiae*）と呼ばれる儀式が行われ、そこでは勝者として世界を支配する強いキリストとフランク王とが重ねて称賛される祈祷文が詠まれた⁹⁷。

このような強いキリストとカールの比較は詩においても見られた。シャゼルは『サクソン人の改宗』（*De conversione Saxonum*）を例示し、カール大帝によるザクセン人の討伐が、受難、キリストの冥府降下、復活と重ねて歌われていると指摘している⁹⁸。更に、先に触れたアルクインによる形象詩集に含まれるオルレアンのテオドゥルフの詩も、キリストとカールを重ねて両者を称賛していた⁹⁹。

勝者としての強いキリストと似た性質を備えているとしてフランク王を称える際に重要であったのが、勝利の象徴たる十字架であった。先に『カールの書』で見たように、十字架は悪魔を追い払う力があり、敵を打ち砕く武器として捉えられていた。そのような考え方は実際、当時の象牙版や写本挿絵にも反映され¹⁰⁰、キリストとルートヴィヒ敬虔帝を同時に称える『聖十字架礼讃』の献呈詩においても、敬虔帝が十字架の杖を右手に持った姿で描かれた。すなわち十字架は、死に勝利し地獄の門をこじ開け、獣を踏みつける強大なキリストとカロリング王権を結びつける上で、重要なモチーフであった。故に、カロリング期における十字架崇敬や十字架記号の頻繁な使用の背景を成したと言える。

小括

ここまで、聖画像論争と聖十字架崇敬の展開という文脈で『聖十字架礼讃』を分析し、ラバーヌスが聖十字架を主題に選んだ意図の解明を試みた。同作品は聖画像拒絶的な『カールの書』と聖画像擁護的な『教会会議録』の間の時期に制作された。宮廷と近い距離にあったラバーヌスは恐らく宮廷の見解を見聞きしていたと考えられる。実際、ラバーヌスは図像について懐疑的であった。ただし、十字架は彼にとって「あらゆる事物の総体であり完成」の象徴であった。『カールの書』『教会会議録』でも十字架は特別視されていたため、聖画像論争の最中でも作品に取り入れることができた。加えて、ラバーヌスは『聖十字架礼讃』を、自身のそれまでの学習内容を集約し、仲間内で読み学ぶための作品として捉えていた。この目的にとって、「あらゆる事物の総体であり完成」である十字架を主題とするのがふさわしかったのだと考えられる。また、カール大帝期から聖十字架には異教徒との戦いにおける旗印として、また強大なキリストとカロリング王権を結びつけるモチーフとしての役割が与えられ、モノグラムや硬貨、写本といった視覚芸術の図案に使用されていた。敬虔帝期に制作された写本にも十字架の図案は取り入れられ、強大なキリストのアトリビュートとして写本挿絵や象牙板に描かれていた。つまり、形象詩集の主題に聖十字架を選択することは、当時の聖十字架崇敬の高揚を考えれば適切なことであったと考えられる。ラバーヌスが十字架を主題に選択したのは、当時の聖画像論争や聖十字架崇敬に関する王権の意向と矛盾せず、『聖十字架礼讃』の制作意図にも適していたためであると結論できよう。

⁹⁷ “Christus vincit, Christus regnat. Christus imperat. … Exaudi Christe Carolo excellentissimo et a Deo coronato atque magno et pacifici regi Francorum et Longobardorum ac Patricio Romanorum vita et victoria. …” 王の称賛（*Laudes Regiae*）の元となっているのは、「キリストは勝ち、キリストは統治し、キリストは命じる。（*Christus vincit, Christus regnat. Christus imperat.*）」から始まる連祷である。これはガロ＝フランクの教会に特有の祈祷で、通常は *Laudes* と呼ばれる。*Laudes* はキリストの苦しみではなく、勝者や支配者としてのキリストの性質を強調している点で他の祈祷文とは一線を画している。Kantorowicz, E.H., *Laudes regiae. A study in liturgical acclamations and mediaeval ruler worship*. New York 1974, pp.14-15.

⁹⁸ Chazelle, C. *The Crucified God*, p.20 ; “Horrida probrosae dempsit qui criminal mortis, Et facinus mundi Iordanis lavit in undis, Signavitque pios pretiosi sanguinis ostro. Sic quoque fellivomi praedam de fauce celydri Abstulit et Cocyti calidas spoliavit arenas, Victor ovans rediit, patriam remeavit ad arcem.” MGH Poetae, Bd.1, pp.380-381.

⁹⁹ Ernst, U., *Carmen Figuratum*, pp.196-197.

¹⁰⁰ 例えばシュトゥットガルト詩篇 fol.29v には、地獄の門を打ち破らんとする険しい顔のキリストが描かれているが、その右手には十字架杖が描かれている【図 79】。またオックスフォードのボドリアン図書館所蔵の9世紀前半に制作された象牙板（Ms.Douce 176）では獣を踏みつけるキリストが描かれているが、その右手には同じく十字架杖がある【図 80】。

第4章 カロリング・ルネサンス第二世代とその仕事

ここまで、カロリング・ルネサンス第一世代が組み上げた人材育成の仕組みに従って上昇を遂げたラバーヌスの生涯、『聖十字架礼讃』の作品内容、形象詩の系譜、聖画像論争、聖十字架崇敬における『聖十字架礼讃』という4つの観点で、ラバーヌスにおけるカロリング・ルネサンス第一世代の受容と『聖十字架礼讃』の制作動機を分析してきた。『聖十字架礼讃』はラバーヌスが仲間の修道士のために制作したもので、聖書を解釈する学問である神学に向かう彼らが、聖書の読解に必要な知識と姿勢を獲得できる、実践的かつインタラクティブな著作であった。その主題と形式の選択において、ラバーヌスは自身の表現する内容にふさわしく、国王宮廷の方針とも矛盾しないものを慎重に選択していた。また、『聖十字架礼讃』の成立には、形象詩の教授という点でカロリング・ルネサンス第一世代の筆頭であるアルクインが大きく関わっていた。

本章では序論で述べたように、「カロリング・ルネサンス第二世代の一員としてのラバーヌスとその著作」という、よりマクロな視点で、ラバーヌスと『聖十字架礼讃』を検討する。『聖十字架礼讃』が制作された時期、他にいかなる主題の著作が執筆されていたのか、当時活動していた聖職者たちや国王宮廷顧問の著作群を総覧することで分析したい。それにより『聖十字架礼讃』、そしてラバーヌスのカロリング・ルネサンス第二世代における役割の検討が可能になる。それと同時に、カロリング・ルネサンス第二世代の群像とその豊かさが浮かび上がるだろう。

カロリング・ルネサンス政策を始めたのは、序論でも述べたようにカール大帝宮廷である。その第一目的は民衆をキリスト教の下に治めることであり、そのために対外的には異教徒との戦争が、国内ではカール大帝がヨーロッパ各地から招聘した側近・顧問を中心に教義の統一（異端の排除）や質の良い聖職者育成のための教材（写本）制作、エリートの教育が進められた¹。このカロリング・ルネサンスを引き継いだのが、ルートヴィヒ敬虔帝を始めとするカロリング・ルネサンス第二世代と呼称されるべき人物たちである。この言葉が指す範囲は、ルートヴィヒ敬虔帝下での執筆著作がある者、あるいはルートヴィヒ敬虔帝宮廷に登用された者たちとする。ラバーヌスのようにルートヴィヒ敬虔帝下で活躍した知識人について、①出自、②教育、③役職・役割、④具体的な功績（著作・作品）の4点を確認し、カロリング・ルネサンス第二世代の通有性を浮き彫りにする。その結果は表にまとめているので、適宜参照されたい。

第1節 カロリング・ルネサンス第二世代の各員とその機能

まず、カロリング・ルネサンスの第二段階、すなわちルートヴィヒ敬虔帝の下で活躍した人物それぞれに課された役割とその成果について概観する。そのうち、ルートヴィヒ敬虔帝の側近に数えられる人物については、デュプローによる『ルートヴィヒ敬虔帝側近の個人誌（781-840）』の記述を主に参照する。

①リジュー司教フレクルフ（?-864年）

フレクルフはその名前から恐らく南ドイツ出身だと推測されている²。リジュー司教に就任する以前は敬虔帝宮廷で国王使節やローマに行く際の敬虔帝の同行者として活動していた³。ルートヴィヒのアキテーヌの宮廷において尚書局長を務め、アーヘンに移ったのちも宮廷の尚書局長を務めたヘリ

¹ カール大帝下のカロリング・ルネサンスについての委細は、五十嵐修による2010年の単著を参照。五十嵐修『王国・教会・帝国—カール大帝期の王権と国家』知泉書館2010年。

² Schmale, F.J., Frechulf, in: *LexMA Bd.4*, col.882-883.

³ 彼は822年にルートヴィヒの使節として活動し、824年にはローマに向かうルートヴィヒに同行した。更に、829年のパリ公会議にも参加していた。Noble, T.F.X.(2009), p.352; Schmale, F.J., Frechulf, in: *LexMA Bd.4*, col.882-883.

ザカル（Helisachar）の教え子である⁴。敬虔帝の宮廷には、アキテーヌ時代の側近から教育を受けた者も活躍していたことがわかる。

彼は師ヘリザカルの提案で、アダムからキリストの誕生までの7巻に渡る歴史書を執筆し、ヘリザカルに献呈した。その1年後、彼はキリストの誕生からグレゴリウス大教皇の時代までの歴史を全5巻にまとめ、830年より前にシャルル禿頭王の教育のために皇妃ユディトに贈った。第二部の献呈文にはこのようにある。「皇帝たちの行い、聖人たちの勝利、偉大なる学者たちの教えに啓発され、（シャルルは）慎重に為すべきこと、懸命にも避けるべきことを学ぶだろう」⁵。つまり、フレクルフはこの年代記が君主鑑として利用されることを想定していたことになる。一方で、第一部のヘリザカルに宛てた献呈文ではこのようにある。「親愛なるヘリザカル、…あなたは古代の人々による著作や聖人伝、あるいは異邦人の著述家たちの書物を熱心に読むことによって、歴史の真実に関わるものは何であれ、最初の人間から主キリストの誕生に至るまで簡潔かつ明瞭に集めるよう命じられました」⁶。つまり、歴史に関する著作を聖俗関係なく、また正統・異端関係なく網羅的に参照し、まとめ上げたのがこの著作である。

これらの献呈文の通り、この全12巻に渡る年代記は、人類の誕生からフランク人・ランゴバルド人による建国（600年代）までの歴史を、聖書の内容と組み合わせながら語っている点が特徴的である。例えば第一部（最初の7巻）では彼は構成原理として旧約聖書の預言者ダニエルの世界帝国⁷を用いたし、旧約聖書で語られるイスラエルの歴史を辿りつつ同時代に発生していた異教の帝国にも触れている。更に第二部ではローマ帝国の歴史を軸に据えながら、例えばその第一巻ではローマ皇帝ネロの時代の出来事と、聖パウロの生涯、主の兄弟ヤコブの迫害、ヤコブの兄弟ユダについてといった正統信仰に関する内容が組み込まれている。また第二部の二巻では、コンスタンティヌス大帝の統治下で「インド」に信仰の種が芽生え、続いてアルメニア人も改宗したとの旨が書かれている⁸。そして、第二部の27章「教皇ボニファティウスの事績について」では、東の皇帝フォカスがローマ教会と使徒的教会があらゆる教会の長であることを認めていたこと、またパンテオンが異教の神殿からキリスト教の教会に改築されたことを述べ、キリスト教の勝利が強調されている。そして最終章では6回の普遍公会議が列挙され、ウォードが述べるように、キリスト教の勝利と正当性の確立が意味される⁹。つまりこの年代記は、人類の始まりからフランク人の王国が誕生する600年代までの歴史的事実とキリスト教の勝利の歴史を同時に語っているのである。このような構成軸は、献呈文で述べられていた

⁴ Depreux, P., *Prosopographie de l'Entourage de Louis le Pieux (781-840)*. Sigmaringen 1997, pp.235-240.

⁵ “In his enim, velut in speculo, per tuae sanctissimae devotionis admonitionem atque jussionem dominus meus Carolus, gloriosissimus tuae filius excellentiae, inspicere quid agendum vel quid vitandum sit poterit.” Ward, Graeme, *The Sense of an Ending in the Histories of Frechulf of Lisieux*, in: *Historiography and Identity III. Carolingian Approaches*. Turnhout 2021, pp.291-318.

⁶ “Tu quidem, mi dilectissime Elisachare, et amore insatiabilis sophiae venerande praeceptor, post caeteros quos stimulis instanter charitatis agitare soles, ut vigilantes fideliter ea quae eis credita sunt domini sui famulis tempore distribuant opportuno, tandem meam agressus parvitatem, jussisti ut perscrutando diligenter volumina antiquorum seu hagiographorum, sive etiam gentilium scriptorum, quaecunque pertinent ad historiae veritatem, breviter ac lucide colligere desudarem, a conditione quidem primi hominis usque ad Christi nativitatem Domini”. また、フレクルフの記述内容から、彼が主に参照していたのは、エウセビウス『年代記』のヒエロニムスによるラテン語訳、フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ戦記』『ユダヤ古代誌』のラテン語訳、オロシウス『異教徒に反駁する歴史』、アウグスティヌス『神の国』、エウセビウス『教会史』、カッシオドルス『三部教会史』、ヒエロニムス『偉人伝』などであることがこれまでの研究で明らかにされている。Ward, Graeme, *The Sense of an Ending in the Histories of Frechulf of Lisieux*, in: *Historiography and Identity III. Carolingian Approaches*. Turnhout 2021, pp.291-318.

⁷ ダニエル書第2章で、ダニエルがネブカドネザル王の夢解きをし、4つの帝国が順に興亡するとの預言を残したことが叙述される。フレクルフはこの構成を踏襲し年代記を記述した。

⁸ Ward, G., *The Sense of an Ending in the Histories of Frechulf of Lisieux*, p.299.

⁹ Ward, G., *The Sense of an Ending in the Histories of Frechulf of Lisieux*, p.304.

ように、フレクルフが聖俗、正統・異端に関わらず網羅的に著作群を参照したからこそ可能であったと言える。更にこの著作は、先に言及した通り君主鑑としての機能を果たす点も重要である。

②サン・ドニ修道院長/宮廷礼拝堂付司祭長ヒルドゥイヌス（?-855/861年）

ヒルドゥイヌスはサン・ドニの修道院長職を任せられつつ、サン・ジェルマン・デ・プレやソワッソンのサン・メダール、ルーアンのサントゥアンといったメロヴィング朝に起源をもつ修道院の院長を兼任¹⁰した人物である。中世ラテン文学者でヒルドゥイヌスについての単著を執筆したラピッジによれば、彼は王族の親戚でルートヴィヒ敬虔帝のいここにあたる人物であったという¹¹。またラピッジは彼の教育について、カール大帝宮廷で教育を受けた可能性を留保しつつ、ヒルドゥイヌスの家門の土地所有地域からライヒェナウ修道院で教育を受けた可能性が高いと推測している¹²。ヒルドゥイヌスは814年にサン・ドニ修道院長に任命された後、819年からはケルン大司教ヒルデバルドから引き継ぐ形で宮廷礼拝堂付司祭長（archicapellanus）に任命され宮廷ミサの責任者となるなど、ルートヴィヒ敬虔帝宮廷において非常に重要な役割を任されていた。ルートヴィヒにとっても信頼のおける助言者で、特に霊的な問題や司教との関係について彼に助言を仰いだという。

ヒルドゥイヌス自身の著作として残っているのは、西欧における最初のディオニュシオス・アレオパギテスの著作のラテン語翻訳版『偽ディオニュシウス文書』（*Dyonysiaca* : 832-835年頃）、パリ司教ディオニュシウスの聖人伝で、『聖十字架礼讃』同様韻文と散文の2巻本のスタイルで書かれた『パリ司教聖ディオニュシウスの受難』（*Passio s. Dionysii episcopi Parisiensis* : 835-840年頃）、『教皇ステファヌスの幻視と祭壇奉獻の記憶』（*Revelatio ostensa papae Stephano et memoria de consecratione altaris* : 814-840年）¹³、またルートヴィヒ敬虔帝に献呈されたダゴベルト1世とクローヴィス2世の伝記『ダゴベルトの事績』（*Gesta Dagoberti*）の4点である¹⁴。中でも注目すべきは『偽ディオニュシウス文書』ラテン語版の制作だ。この原本は827年にビザンツ皇帝ミカエル2世からの使節がルートヴィヒにもたらしたもので、そのラテン語版の制作がヒルドゥイヌスに任せられ¹⁵、彼は少なくとも3人のギリシア語母語話者と共に翻訳をおこなった¹⁶。そこに含まれていたのは『天の階級について』（*De caelesti hierarchia*）『神の名について』（*De divinis nominibus*）『聖職者の階級について』（*De ecclesiastica hierarchia*）『神秘神学について』（*De mystica theologia*）『書簡集』（*Epistolae*）であった。

ヒルドゥイヌスの下で制作されたラテン語訳の水準はとても低く、ギリシア語原文を読まなければラテン語版の意味内容を把握することが困難であるほどだという¹⁷。実際、このラテン語訳はあまり普及しなかった¹⁸。ただ彼の活動は、サン・ドニ修道院がギリシア語写本の集積地・翻訳拠点となっ

¹⁰ Prelog, J., Hilduin von St-Denis, in: *LexMA Bd.5*, col.20.

¹¹ Lapidge, M., *Hilduin of Saint-Denis. The Passio S. Dionysii in Prose and Verse*. Leiden 2017, pp.4-8.

¹² Lapidge, M., *Hilduin of Saint-Denis*, p.9.

¹³ “Hilduinus abba S. Dionysii Parisiensis”, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*. <https://www.geschichtsquellen.de/autor/2883> (Bearbeitungsstand: 15.04.2021) 【最終閲覧日：2023年12月11日】.

¹⁴ Prelog, J., *Gesta Dagoberti*, in: *LexMA Bd.4*, col.1407.

¹⁵ “Authenticos autem eosdem libros Graeca lingua conscriptos, quando oeconomus ecclesiae Constantinopolitanae, et caeteri missi Michaelis legatione publica ad vestram gloriam Compendo functi sunt, in ipsa vigilia solemnitatis sancti Dionysii pro munere magno suscepimus,…” Migne, PL 106, Sp.16; Lapidge, M., *Hilduin of Saint-Denis*, pp.69-70; “Idcirco, venerabilis custos ac cultor ipsius provisoris et adjutoris nostri domini Dionysii, monere te volumus ut quidquid de ejus notitia ex Graecorum historiis per interpretationem sumptum vel quod ex libris ab eo patrio sermone conscriptis, et auctoritatis nostrae jussione, ac tuo sagaci studio, interpretumque sudore in nostram linguam explicatis,…” Migne, PL 104, Sp.1328A; Lapidge, M., *Hilduin of Saint-Denis*, p.71.

¹⁶ Lapidge, M., *Hilduin of Saint-Denis*, p.71.

¹⁷ Lapidge, M., *Hilduin of Saint-Denis*, pp.73-80.

¹⁸ 上智大学中世思想研究所『中世思想原典集成6 カロリング・ルネサンス』平凡社1992年、202頁。

ていた可能性を示す。その痕跡は、800年頃にサン・ドニ修道院が制作したとされ現在フランス国立図書館に所蔵されている写本（lat.528）にも見られる。この写本の fol.134v-135r にはギリシア語の単語とラテン語の単語が対置されたメモが残されているのである¹⁹。更にリシェによれば、ピピン短牒王の時代に教皇パウロ1世から贈られたギリシア語の書籍は、サン・ドニ修道院の蔵書のためであったと考えるのが妥当であると述べている。その理由は、サン・ドニの守護聖人とディオニュシウス・アレオパギタが同一人物であるとする説が当時からすでに確認されていたためである²⁰。これらのことは、ディオニュシウス・アレオパギタと同一視された聖人の名を冠するサン・ドニ修道院がギリシア語の学習地、あるいはギリシア語文献の集積地として機能しており、それがヒルドゥイヌスの時代においてもサン・ドニの特色であったことを示唆する。それだけに、ヒルドゥインの時代に初めてラテン語訳された点は示唆深い。

③アインハルト（770頃-840年）

アインハルトは東フランク地域に位置するマインガウの貴族家門出身である。先に述べた通りフルダ修道院で教育を受けた後、更なる高度な教育を受けるため修道院長によって宮廷に送られた。同地でアルクインから教育を受け、アルクインがトゥールのサン・マルタン修道院に隠居すると、自身もカール大帝の宮廷学校の一員となった²¹。王位がルートヴィヒに移った後、カール大帝時代の側近が宮廷から退去を命じられる中アインハルトは残り、ルートヴィヒの息子ロタールの教育を委託された。その返礼として多くの修道院で院長の地位を得た。すなわちアインハルトはカール大帝期に若くして宮廷に入り、敬虔帝宮廷においても活躍した、第一世代と第二世代を繋ぐ重要人物であったことがわかる。

ここで触れたいのは、ミュテリヒが指摘したアインハルトに見られるビザンツ的・古典古代模倣的な姿勢である。

アインハルトは『カール大帝伝』や『十字架崇敬について』と言った著作の他に、十字架を置くための凱旋門の形をした台を考案している【図77】。この台の意匠が注目に値する。

まず、凱旋門というモチーフや描かれている兵士や皇帝の服装がきわめて古代ローマ的である点に目が留まる。また、4福音書記者像も注目に値する。ミュテリヒによれば、大きな書見台の上にあるインク壺にペンを持った手を伸ばす姿で描かれたヨハネ像はカロリング朝の他の福音書記者像だけでなく、ビザンツの複数の書字道具が置かれた書見台と共に描かれる4福音書記者像をも思わせるという²²。

アインハルトの十字架台に見られるこれらの特徴は、敬虔帝宮廷で制作されたと考えられている写本²³にも見られる、古代ローマ模倣的な姿勢を示す。アインハルトはフルダから宮廷に派遣された後、そのまま国王宮廷に残ってカール大帝と敬虔帝のどちらにも仕えたため、カールの宮廷の特色であった「帝政ローマの模倣」を引き継いだ可能性がある。

¹⁹ Lapidge, M., *Hildduin of Saint-Denis*, pp.79-80.

²⁰ ピエール・リシェ／岩村清太訳『中世における教育・文化』東洋館出版社1988年、458-459頁。

²¹ Fleckenstein, J., Einhard, in: *LexMA Bd.3*, col.1737-1739.

²² Mütherich, F., *Studies in Carolingian Manuscript Illumination*. Pindar 2004, pp.109-116; Weitzman, K., *Die byzantinische Buchmalerei des 9. und 10. Jahrhunderts*. Berlin 1935, TAFEL XII.

²³ ミュテリヒは2004年の論考で、825年～850年に制作された4つの写本、すなわちヴァティカン版『テレンティウス』（ローマ、ヴァティカン市立図書館、Vat.lat.3868）、『アグリメンソール・コデックス』（ローマ、ヴァティカン市立図書館、Pal.lat.1564）、『キケロ版アラートゥス』写本（ロンドン、大英博物館、BL Harley 647）、『ゲルマニクス・コデックス』（ライデン、国立大学図書館、Voss.lat. Q79）を、ルートヴィヒ敬虔帝宮廷で制作された写本であると主張した。この4写本に共通するのは、転写元の写本が古代の著作であるという点である。ミュテリヒの推測が正しければ、ルートヴィヒ敬虔帝下における視覚芸術にも、カール大帝期からの連続性を感じさせる古代模倣的姿勢が見られるということになる。Mütherich, F., *Studies in Carolingian Manuscript Illumination*, p.104.

④ランス司教エッポ（778頃-851年）

エポはカール大帝の御料地で働くザクセン地方の農奴の一人息子として生まれた。彼の母親はルートヴィヒ敬虔帝の乳母で、エポは彼の乳兄弟であった。エポはカール大帝宮廷にてルートヴィヒ敬虔帝と共に教育を受け自由七科を身につけた後、自由人の身分を与えられた²⁴。ルートヴィヒがアキテーヌ王を務めていた際には司書（Bibliothecarius）²⁵として、アーヘンに移動した後の816年以降はランス司教、そしてサン・レミ修道院長として活動した。彼は司教や修道院長だけではなく国王使節としての任も担い、教皇からの委託を受けて822/823年からデーン人の改宗にも着手した。更に831/832年にはアンスガールと共に教皇グレゴリウス4世から委託を受け、ハンブルク大司教区の設立に尽力した。ルートヴィヒ敬虔帝下で開催された会議への出席や証書への署名の記録も多く残り、エッポがアーヘンのルートヴィヒ敬虔帝宮廷においても常に内政に関与していたことがわかる²⁶。エッポのこうした経歴は、宮廷の役人の息子がカール大帝宮廷で教育を受けていた可能性を示唆し、学問に優れば元の身分に関わらずルートヴィヒ敬虔帝宮廷で登用され得たことを示す。

彼の功績は、ランスに写本・書字文化を植え付け、勢いよく流れるような動的な筆遣いが特徴的なランス派と呼ばれる写本流派を花開かせた点にある。彼の大司教在任期間中、ランス大司教区の写字室は2点の挿絵入り写本を生み出した。1点目は『エポの福音書』（エペルネーメディアテーク、Ms.1,）である。恐らくエポ自身が自身の管轄下にあるオーヴィレール修道院へ贈呈するために発注したこの福音書では、ランス派の特徴である激しくダイナミックな筆写で描かれた4福音書記者像が見られる【例：福音書記者マルコ像、図78】。福音書記者像に向かい合う紙葉には、ほとんど1ページ大で、各福音書の冒頭文字の豪華で美しい装飾イニシアルが描かれる【図78】。装飾イニシアル以外の文字もすべて金インクで書かれたこの作品は、カロリング朝を代表する壮麗な写本の1つに数えられる。2点目は『ユトレヒト詩篇』（ユトレヒト大学図書館、Ms.32, 820-835年頃制作）である。挿絵は茶色いインクのみで描かれているが、この作品においてもランス派に独特の筆遣いが見られる。

『ユトレヒト詩篇』の挿絵【図73】については中世ヨーロッパの美術史家辻佐保子氏の次の描写が的確である。「詩編の関連語句の逐語的（リテラル）な映像化…時にはささやかな点景にすぎず、語句との関連がただちに見出しがたいような場合にすら、別の一節から誕生した、離れた位置にある大局的なモチーフと呼応しあい、あるいは近接する他の小場面と結びついて、さまざまな連想作用や新しい意味を生み出してゆくのである。こうした複雑な操作をへて、各詩編の主要テーマ、抽象的な命題をおのずと浮かび上がらせる一つの有機的な画面が構成されてゆく」²⁷。モノクロでありつつ極めて写実的な挿絵も見事であるが、1つ1つの小さな挿絵が1つの大きな画像を成し1つの主題を提示するという画像構成は『ユトレヒト詩篇』以外には見られない極めて高度な図案であり、ランス派ひいてはカロリング朝写本芸術を代表する作例と言える。

こうした2つの見事な写本がエポの下ランスで制作された事実は、ルートヴィヒ敬虔帝の治世において写本センターが増殖した1例として注目すべきである。

⑤トゥールのフレデギス（?-834年）

²⁴ Shrör, M., *Aufstieg und Fall des Erzbischofs Ebo von Reims*, in: *Streit am Hof im frühen Mittelalter*. Göttingen 2011, pp.203-222.
²⁵ 司書（bibliothecarius）とは、書物や公文書、その他の宝物の管理責任者のことで、8世紀初頭からフランク王国宮廷や修道院、教皇座で見られるようになる肩書である。国王宮廷の bibliothecarius は宮廷礼拝堂の所属で、ルートヴィヒ敬虔帝のアーヘン宮廷ではゲルヴァルドゥスという人物が務めていたが、その後同じ肩書を持つ者は史料中には登場しないという。また修道院における bibliothecarius は、その修道院が蔵書する聖書や教父著作の写本の管理者で、修道会則にも bibliothecarius に関する規定が含まれていた。9世紀以降、bibliothecarius を指す様々な別の肩書が生まれ、bibliothecarius が文書管理の仕事だけでなく、聖具係、宝物管理係、文書管理官、写字室監督係の仕事も兼ねていたことがわかる。Semmler, J., *Bibliothecarius*, in: *LexMA Bd.2*, col.111-112.
²⁶ Depreux, P. (1997), pp.169-174.
²⁷ 辻佐保子『ロマネスク美術とその周辺』岩波書店、2007年、253頁。

フレデギスは 8 世紀末ごろにイングランドに生まれ、アルクインに師事した。彼は 793 年以降アルクインが教鞭をとるカール大帝宮廷に滞在し、オルレアン・テオドゥルフによって「技術・芸術の専門家 *gnarus artis*」、「品格があり *decens*」「教養高い *doctus bene*」と形容された²⁸。カール大帝統治期から、カールとアルクインの間を取り次いだり、カールの姉妹ギスラの個人教師となったり、カール大帝に著書『無と闇の實在について』（*De nihilo et de substantia tenebrarum*）を献上したり²⁹と、宮廷と近い距離にあった。ルートヴィヒ敬虔帝宮廷でも 819 年以降尚書局長を務め、804 年以降アルクインの次のサン・マルタン修道院長に就任した³⁰。アインハルト同様、カール大帝時代の国王宮廷に身を置き、敬虔帝時代の宮廷でも活動した人物である。

彼はアルクインから引き継いだトゥールのサン・マルタン修道院を、ルートヴィヒ敬虔帝統治初期における写本センターとした点で注目すべきである。フレデギス修道院長期には恐らくスイスのムーティエ・グランヴァル修道院からの依頼で制作された『ムーティエ・グランヴァル聖書』を始めとする聖書のバンデクタ本が複数作られた他、アルクインの時期と比較して文字や装飾の様式もより洗練され、アルクインの時代には見られない調和的な配色が使用され始めた³¹。また、挿絵にギリシア文化の影響を受けたローマ期の芸術的特徴が見られる『シュトゥットガルト福音書』（ヴュルテンベルク州立図書館、HB II 40）もフレデギスの下で制作された。トゥールは後に国王ロタール 1 世に向けた『ロタールの福音書』（パリ、国立図書館、lat.266）やカール禿頭王に向けた『ヴィヴィアン聖書』（パリ、国立図書館、lat.1）を制作するなど国王宮廷向けに写本を供給する立場となる。この素地を作ったという意味で、フレデギスは重要である（写本センターを作ったのは第二世代の仕事と言える）。

⑥サン・ミイールのスマラグドゥス（在位：809-826/841?）

スマラグドゥスの生没年や出身家門について、詳細は未だ明らかにされていない。しかし、著作における言葉遣いから恐らく西ゴート族の出身³²で、809 年には既にサン・ミイールの修道院長を務めたと推測されている³³。また彼はルートヴィヒの使節としても活動していたことが、聖クロード修道院の修道院長録に残っている³⁴。故に、アインハルトやフレデギス同様、カール大帝期から宮廷との関係を築き、ルートヴィヒ敬虔帝の治世初期を支えた人物であると言える。

彼は司祭の頃にドナトゥスの著作の文法註釈付版『ドナトゥスの一部分について』（*Liber in Partibus Donati*）、『詩篇註解』などを執筆した。これらが執筆されたのはカール大帝統治期であったことが判明している³⁵。修道院長就任以降の 812 年には新約聖書の書簡集や福音書に関する読み物や註解書から構成される小冊子（*Liber Comitis*）を執筆し、その後で現存する最古の『聖ベネディクトの会則註解』や、修道士のための道徳的著作『修道者の王冠』（*Diadema Monachorum*）など、修道生

²⁸ Jun, J. N., The Letter of Fredegisus of Tours on Nothingness and Shadow. A New Translation and Commentary, in: *Comitatus. A journal of medieval and renaissance studies*, Bd 34, 2003, pp.150-169.

²⁹ Depreux, P., *op. cit.*, pp.199-203.

³⁰ Colish, L.M., Carolingian Debates over Nihil and Tenebrae: A Study in Theological Method, in: *Speculum*, vol.59, 1984, pp.757-795.

³¹ ランドによれば、青と黒のインクで書かれた見出しがその例であるという。この色の組み合わせはそれ以前のトゥール写本には見られず、9世紀のリヨンの写本で視られた特徴であるという。Rand, E.K., *op.cit.* p.55-56.

³² Rädle, F., *Studien zu Smaragd von Saint-Mihiel*. München 1974, pp.18-19.

³³ レードルによれば、スマラグドゥスは宮廷からの依頼で『聖霊の行進について』（*De processione sancti spiritus*）と呼ばれる専門書を書いている。このような専門書執筆は通例、あまり知られていない修道士ではなく高位聖職者に依頼されるため、既に 809 年には修道院長だったと考えられるという。Rädle, F., *Studien zu Smaragd von Saint-Mihiel*, pp.18-19.

³⁴ Depreux, P., *op. cit.*, pp.376-377 ; Rädle, F., *Studien zu Smaragd von Saint-Mihiel*, p.20.

³⁵ Rädle, F., *Studien zu Smaragd von Saint-Mihiel*, p.21.

活に関して書いている。中でも重要なのが『王の道』（*Via Regia*）である。恐らく未だアキテーヌ王であったルートヴィヒのために書かれ、遅くとも 810~814 年には完成したこの著作は、カロリング朝で最初の君主鑑であった³⁶。彼は聖書と彼自身の修道院思想に大きく依存しつつ、グレゴリウス大帝の思想や西ゴートの司教タイオとイシドルスの見解、初期キリスト教の禁欲思想の集成である偽バシレイオスの『霊的な息子への訓戒』（*Admonitio ad Filium Spiritualem*）といった著作を用いて、32章から成る『王の道』を完成させた。ルートガーはこれらの参照された著作群について、「平和の必要性や正義（*iustitia*）の行使から、全てが正しく行われた場合に天国で得られる賜物まで、あらゆるものを網羅している」と指摘している³⁷。

スマラグドゥスはまず、王という職務とは聖務（*ministerium*）、すなわち神より与えられた仕事で、その使命は罪人を処罰し、また改心させること、そして弱者や抑圧された者の保護であると述べる³⁸。そして、地上の王が天上の王国へと到達するためには王の道を通らなければならない、ヨシュアやダビデ、ソロモン、ウジヤといった旧約聖書の諸王たちもその道を歩いてきたという³⁹。そのあとで、王は教会（*Ecclesia*）という神の身体の一員として、キリストの代わりに神の家たる教会を守り、世界の平和を維持しなければならないし、彼の行いによってだけでなく彼の個人的な敬虔さと信仰の強さによって、支配下の者たちの安寧を保つ責任があるという⁴⁰。この後も聖書に基づきながら、四元徳や神への恐れ、判断力と言った支配者が備えるべき資質から、過度な誇りや富の信頼、嫉妬、怒り、強欲といった注意すべきことが列挙され、それぞれについて旧約・新約聖書の箇所を引用しながら解説されている。最後の章では読者として想定される王に対し、ダビデやソロモンを例示しながら「最も忠実な王であるあなたは、主の助けを得て王国を守ることができるように、主の保護を絶えず祈ってください。」⁴¹と促す。

スマラグドゥスの描く理想的な王は、武勇に優れた強き王ではない。キリスト教に精通し、キリストのような美德を備えた穏やかな王である。それは、スマラグドゥスが読者である王に対し、「最も強大なる王よ」ではなく、「最も柔和/温厚な王よ *mitissime rex*」「最も慈悲深き王よ *clementissime rex*」と語りかけていることから明らかである。スマラグドゥスの『王の道』は、理想的な君主像の転換を示唆している。

⑦アニアースのベネディクトゥス（750-821年）

ベネディクトゥスはルートヴィヒ敬虔帝の下で「唯一の会則 *una regula*」とされた『聖ベネディクトの会則』を、フランク王国中の修道院に遵守させるといって修道制改革の中心となった人物である。彼は 750 年に西ゴートのマグローヌ伯の息子として生まれ、ピピン短躰王宮廷とカール大帝宮廷で教育を受けた。その後ディジョンのサン・セーヌ修道院で修道士となるが、修道会則の遵守が十分に為されていないことを理由に去り、父の残した土地財産が残るアニアースで教会と庵室を建てた。ベネディクトゥスはアルクィンと交友関係にあり、アルクィンと西ゴート地域の修道院たちの仲介役となることを通じて、養子論（*Adoptionismus*）といった異端の排除にも尽力した。こうした活動に注目した敬虔帝はアキテーヌ王時代にベネディクトゥスを顧問に選び、アキテーヌ王国内修道院の修道制改革を委任した。その結果、ほぼ全ての修道院が『聖ベネディクトの会則』を核とする修道生活の遵守

³⁶ Anton, H.H., *Fürstenspiegel*, in: *LexMA Bd.4*, col.1041-1042.

³⁷ Rutger, K., *Rethinking Authority in the Carolingian Era. Ideals and Expectations during the Reign of Louis the Pious (813-828)*. Amsterdam 2019, p.133.

³⁸ Angenendt, A., *Das Frühmittelalter. Die abendländische Christenheit von 400 bis 900*. 3. Auflage. Stuttgart 2001, pp.365-366.

³⁹ Rutger, K., *Rethinking Authority in the Carolingian Era*, p.134.

⁴⁰ Rutger, K., *Rethinking Authority in the Carolingian Era*, p.134.

⁴¹ “Et tu ergo, fidelissime rex, ut Domini possis auxilio fultus tuum defendere regnum, ejus jugiter orans require praesidium.” Migne, J.P. PL 102, p.970B.

を受け入れるに至った⁴²。敬虔帝がフランク王国国王に就任して以降は帝国中の修道院の改革を任せられ、例えば修道院に改革を法的に義務付ける『修道生活に関する法律集』（*Capitulare monasticum*）を率先して交付したのは彼だったと推測されるという⁴³。また彼は改革のため、サン・ドニ修道院にも赴いた。

ルートヴィヒ敬虔帝下で彼に任された役割は明白で、修道制改革の遂行であった。この修道制改革は、1章で触れた聖ボニファティウスによる宣教活動との連続性の中に位置づけることができる。というのも『聖ベネディクトの会則』は、聖ボニファティウスによってもたらされたためである。ボニファティウスはその宣教活動において、フルダ修道院を始めとするベネディクト会系修道院を建設し、そこで生活することになる修道士数人を『聖ベネディクトの会則』誕生の地であるモンテ・カッシーノに派遣し、その生活を学ばせて新興の修道院に持ち帰らせるという手続きを踏んでいた⁴⁴。故に帝国全体の『聖ベネディクトの会則』への回帰を目指したアニアヌのベネディクトゥスは、聖ボニファティウスによる改革の継承者として重要な役割を果たしたと言える。

⑧モドゥイヌス (?-840/843)

モドゥイヌスはリヨンで教育を受けた教会知識人で、804-814年に宮廷に滞在し、815年以降オートタン司教に就任した。彼は833年のルートヴィヒと息子たちとの闘争の中にあってもルートヴィヒの側に就き、『サン・ベルタン年代記』（サントメール図書館、Ms.706）の記述によればモドゥイヌスは「嘘の野原」においても皇帝に忠誠を誓ったという。モドゥイヌスは836年以前にフラヴィニーに派遣された国王使節の一人であったと考えられる⁴⁵。つまり彼は地方の修道院で教育を受けた後に宮廷学校に入り、そのまま国王の側近となった人物であったと言える。

モドゥイヌスはカール大帝宮廷において、オウイディウスを指す「ナソ Naso」というあだ名で詩を書く詩人でもあった。彼はカール大帝に2点の田園詩を献呈し、その中でカールの治世を、偉大なるローマの刷新、黄金時代の再来であるとして讃えた。また追放の身にあったオルレアン人のテオドゥルフに対しても、慰めととりなしの祈りを込めた詩を書いている。彼は詩という芸術的枠組みの価値の高さと、国王の詩人が受け取る報酬の豊かさを強調した⁴⁶。彼は田園詩の手本としてカルプルニウス・シクルスを利用した。

カール大帝宮廷の詩人の輪の中で詩作り、詩作行為に高い価値を置く詩人が、ルートヴィヒ敬虔帝の側近として宮廷に残ったというのは注目に値する。

⑨パスカシウス・ラドベルトゥス (785/795?-865 以前)

パスカシウス・ラドベルトゥスの出自については何も知られていないが、ソワッソンの聖マリア女子修道院で、修道院長テオドラーダの下育てられたことがわかっている。テオドラーダはカール大帝の従姉妹にあたり、アダラルトとワーラと兄妹であった。ラドベルトゥスはソワッソンの修道院を離れた後812年より前に修道院長アダラルト（前述と同一人物）の下コルビー修道院にて再び修道生活を始め、そこでワーラとも知り合ったと考えられる。アダラルトとワーラは共にピピン短躰王の国王宮廷で学んでおり、カール大帝の側近であった。故にラドベルトゥスは、間接的にではあるが国王宮廷での教育を施されたことになる。ラドベルトゥスは、アダラルトの死後ワーラが新たな修道院長に選任されるよう、宮廷にかけあうために派遣された修道士の一人であった。そして無事に修道院長に

⁴² Benedikt von Aniane, in: *LexMA Bd.1*, col.1864-1867.

⁴³ Depreux, P., *op.cit.*, Sp.128.

⁴⁴ 第1章第2節(2)を参照。

⁴⁵ Depreux, P., *op.cit.*, pp.333-334.

⁴⁶ Depreux, P., *op.cit.*, pp.333-334.

就任したワーラと共に、コルヴァイ修道院の創設にも関与し、846年以前にコルビー修道院長となった⁴⁷。

彼は多くの著作を残している。生涯にわたって執筆した12巻本の『マタイの福音書註解』や新設されたコルヴァイ修道院の院長ワリヌスに向けて826-833年の間に書かれた『信仰について』、少し後に書かれ、同様にワリヌスに宛てた『希望について』、そのまた少し後に『愛について』を執筆した。またアダルルトの死とワーラの修道院長選任をきっかけに『聖アダルルト伝』と『田園詩』(Ecloga)を、831-833年の間に、聖餐式とそれに関わる教義についての最初の体系的な研究である『主の肉と血について』を執筆した。更に845年頃聖書註解の執筆に戻り、5巻本の『哀歌註解』を制作し846年以降には『聖処女の誕生について』(De partu virginis)を、ソワッソンの聖マリア修道院長エマに献呈した。また、彼は聖ルフィヌスと聖ヴァレリウスの殉教伝や、3巻に渡る『詩篇第45篇註解』を、ソワッソンの修道女たちに向けて執筆した。他にも、年代不明ではあるが、『聖マリアの降誕について』(De navitate sanctae mariae)や聖マリアについての4つの説教文を書いている⁴⁸。

ラドベルトゥスはカール大帝宮廷で直接的に学問の鍛錬を受けたのではなく、ピピンの宮廷で学んだ人物の下で修道生活を送り、学んだ人物である。それでも、聖書註解書や聖人伝、教義に関する問題を中心に多くの著作を執筆し、特に『主の肉と血について』はシャルル禿頭王へも献呈された上、この著書をきっかけにラトラムヌスやラバーヌス・マウルスが神学論争を繰り広げたという意味で重要である。彼の存在は、カール大帝の世代の知的遺産が宮廷を離れて地方修道院へ移植され、その地で次の世代の優れた神学者として結実したことの証左として捉えられる。

第2節 カロリング・ルネサンス第二世代の共通項とその仕事

ここまで、カロリング・ルネサンス第二世代に属する代表的な9人の人物について、その出自や教育の履歴、宮廷内外での役職や著作について確認してきた。そこから、カロリング・ルネサンス第二世代に共通する方向性として以下のことが導出される。

まず第二世代として活躍した面々が身分の上昇を遂げた型としては、以下の6つが主に挙げられる。

①フレクルフ型（該当者：フレクルフ、ワラフリード・ストラボ）

ルートヴィヒ敬虔帝宮廷との結びつきがある個人から学び、そのまま敬虔帝の宮廷で活動。

②ヒルドウイヌス型（該当者：ヒルドウイヌス）⁴⁹

王家の親族で、カールの宮廷/地方の大修道院で学び、ルートヴィヒの宮廷入り。そのままルートヴィヒの宮廷で活躍。

③アインハルト型（該当者：アインハルト、モドウイヌス）⁵⁰

地方貴族家門出身で地方の大修道院で学び、才覚を見出されてカール大帝宮廷に派遣された後、ルートヴィヒの宮廷でも活躍。

④エツボ型（該当者：エツボ）

カール大帝宮廷の役人の息子で、カール大帝の宮廷学校で学び、アキテーヌ王時代を共にし、ルートヴィヒの宮廷入り。そのまま宮廷で活躍。

⁴⁷ Cabaniss, A., *Charlemagne's cousins. Contemporary lives of Adalard and Wala*. California 1967, pp.1-5.

⁴⁸ Cabaniss, A., *op.cit.*, pp.1-5.

⁴⁹ メッツ司教ドロゴもこの型に該当すると考えられる。ドロゴはカール大帝の息子でルートヴィヒとは異母兄弟であり、敬虔帝の忠実な側近で、宮廷礼拝堂付司祭長 (archicapellanus) を務めた人物である。

⁵⁰ フルダ修道院からは多くの修道士が宮廷に派遣されており、例えば『聖バウグルフ伝』(散逸)、『聖エイギル伝』を書いたブルン・カンディドゥスもその一人である。Eder, E.C., Brun (Candidus), in: *LexMA Bd.2*, col.756-757.

⑤フレデギス型（該当者：フレデギス、スマラグドゥス？）

カール大帝の宮廷学校教師の在地の弟子で、教師と共にカールの宮廷入り。そのままルートヴィヒの宮廷で活躍。

⑥アニアヌのベネディクトゥス型（該当者：ベネディクトゥス）

ルートヴィヒがアキテーヌ王時代に宮廷に招聘した人物で、共にアーヘンに移り、ルートヴィヒの宮廷で活躍。

⑦パスカシウス・ラドベルトゥス型（該当者：パスカシウス・ラドベルトゥス）

カール大帝の側近となった人物の下で学問に励み、宮廷の一員とはならないものの、ルートヴィヒ敬虔帝治世で多くの著作を執筆。

⑤⑥を除く、第二世代の中でも比較的若い人物の型に共通するのは、直接的・間接的に宮廷学校の知的遺産に関わっているという点である。カール大帝の宮廷学校での活動が確認される者もいれば、宮廷学校所属の人物の許で指導を受けた者もいる。つまり、宮廷学校での学問経験がカロリング・ルネサンス第二世代の共通の背景を成していたことを意味する。実際、ラバーヌスもアインハルト同様フルダから宮廷に派遣され、その後で更にアルクインに訓育されている。この事が示すのは、カロリング・ルネサンス第一世代による教育が、ルートヴィヒ敬虔帝の治世に確かに繋がっているということである。青年期にカール大帝宮廷／カール大帝宮廷学校教師の許で学んだ人物のほとんどが、敬虔帝の国王使節や宮廷学校の教師、司教、修道院長となり、著作を残している。カール大帝下でのカロリング・ルネサンスは、次世代を担う人材の育成とその増殖・分散・定着に成功したと言える。

また、出自の点でもう1点指摘しておくべきことがある。それは、第一世代の面々と比較して第2世代には「外国人」が少ないという点である。第1世代においては、イタリア、イングランド、セプティマニアといった外国ないし新支配地域で知的鍛錬を積み重ねてきた俊秀が宮廷サークルの主たるメンバーを構成し、彼らが著作を書き残した。一方で、第二世代においては、アインハルト、フレクルフ（恐らく）、ラバーヌス・マウルス、ヒルドゥイヌス、モドゥイヌス（恐らく）、エルモルドゥス・ニゲルス、ワラフリード・ストラボなど、フランク王国が古参地域（アキテーヌ、ネウストリア、アウストラシア）の出身で著作を書いた知識人が複数見られる。このことは、カール大帝期を経てルートヴィヒ敬虔帝期にはフランク王国域内の在り地修道院が優れた若者を育成するに足る機関として機能し始めたこと、そして彼らが国王宮廷とコネクションを築くことのできる仕組みが整い始めていたことを示唆する。無論、全ての修道院でそれが可能であったわけではない。ラバーヌスとアインハルトの出身であるフルダ、ヒルドゥイヌスやワラフリード・ストラボの出身であるライヒェナウ、アルクインが修道院長を務めたトゥールのサン・マルタン、ラドベルトゥスが学んだコルビーなど、カール・マルテルやピピン3世の時代までに創建された古参修道院が中心となって、人材の供給を行っていたと考えられる。

次に、第二世代による活動の特徴について検討したい。1つ目に挙げられるのは、①聖書を応用した著作の執筆とそこに見られる神学思想の深化である。実例として、リジューのフレクルフによる歴史書やスマラグドゥスによる君主鑑、パスカシウス・ラドベルトゥスによる神学的著作、そしてラバーヌスの『聖十字架礼讃』が挙げられる。フレクルフの歴史書では、聖書で語られる歴史と世俗の歴史とが巧みに織り合わされ、歴史叙述の聖俗融合が果されている。また、スマラグドゥスは、君主が備えるべき資質を聖書のあらゆる箇所引用を通じて示した。そしてラドベルトゥスは、それまで問題提起されずにいた聖餐について論争を巻き起こす書を著した。第一世代が用意した質の高い自由七科の教本や聖書註解書で学んだ第二世代が、聖書を応用した更に複雑な構成を持つ著作や教義上の個別の問題についての著作を執筆できるほどに、学問の探究が深まったと言える。本書の研究対象であ

るラバーヌス『聖十字架礼讃』も、第一世代（アルクイン）のもとでの聖書講読や詩の学びが深化した結果として捉えることができる。

2 つ目は②帝政ローマを模倣する姿勢である。先に言及したように、アインハルトによる凱旋門型の十字架台は、凱旋門というモチーフそのものが帝政ローマ的である上、描かれている騎馬像も帝政ローマ風であった。またルートヴィヒ敬虔帝宮廷で制作されたと考えられている4点の写本（ヴァティカン版『テレンティウス』写本（ローマ、ヴァティカン市立図書館、Vat. Lat. 3868）、『アグリメンソール・コーデックス』（ローマ、ヴァティカン市立図書館、Pal.lat.1564）、『キケロ版アラトゥス』写本（ロンドン、大英博物館、BL Harley 647）、『ゲルマニクス・コーデックス』（ライデン、国立大学図書館、Voss.lat. Q79））についても、元の著作は古代ギリシアや帝政ローマに遡り、敬虔帝宮廷におけるギリシア・ローマ模倣的・異教的古代知に対し寛容な姿勢が見て取れる。『聖十字架礼讃』も、古代ローマの詩人ポルフィリウスに端を発する形象詩という形式を、恐らくアルクインから教授されたラバーヌスが利用して制作した作品であった。修道制改革を推し進め、彼の伝記作者アストロノムスに「王であると同時に司祭でもある *ita ut non modo regem, sed ipsius opera potius eum vociferarentur sacerdotem*」⁵¹と書かれたルートヴィヒ敬虔帝の時代においても、古代の著作への関心は薄れず、それらを参照した写本制作が続けられていたのである。

3 つ目に挙げられるのは③著作の主題の豊富さである。第一世代と比べて第二世代においては神学上の個別の問題に関する著作が支配的で、聖書註解書のような神学の基礎を成す書籍や自由七科関連の著作があまり見られないように思える。しかし、第1章で確認したラバーヌスの著作を念頭に置くとその印象は変化する。彼はフルダの修道士たちが聖書講読をスムーズに進められるよう『聖十字架礼讃』を書き、フルダ修道院長就任以降は依頼を受けて聖書のほとんど全ての部分に対し註解書を書いた。また『聖職者の教育について』では自由七科がどのように教授されるべきかを解説した。聖書註解書や教育に関する著作は第二世代の他の人物があまり扱わなかったカテゴリであり、ラバーヌスが第二世代において、教育関連著作や神学的議論の基盤を成す聖書註解書を供給する役割を担ったことが唆される。ラバーヌスの著作群を念頭において表を見ると、第二世代は神学的議論（ラドベルトゥス、アゴバルドゥス）から聖書註解書・教育（ラバーヌス）、歴史（フレクルフ）、ギリシア語・ビザンツ関連著作（ヒルドゥイヌス）、君主鑑（スマラグドゥス）、詩（モドゥイヌス、エルモルドゥス・ニゲルス、ワラフリード・ストラボ、プルデンティウス）、数学・幾何学（ディクイル）、古代ローマの著作（宮廷）に至るまで、様々な著作・写本が生み出されていることが分かる。アルクインのように、神学的議論から自由七科、詩作まで一人で広い範囲の主題を扱った個人は第二世代にはいない。しかし、第二世代という群像としてこの時代に書かれた書物を見ると、第一世代の知的遺産を踏まえて彼らに勝るとも劣らない多様な主題を扱ったことが見えてくるのである。

ここまで、執筆著作の特徴や傾向を見てきたが、最後に、第二世代においては写本センターの増殖が起きたことも指摘しておきたい。第一世代においては主に宮廷が写本の制作拠点であり、アダ派や宮廷派と呼ばれるスタイルの写本が制作された一方、第二世代では宮廷学校で教育を受けた人物が地方の修道院や司教区に写本文化を植え付けた。それが、エッポが大司教を務めたランスのオーヴィレール修道院や、フレデギススが修道院長を務めたトゥールのサン・マルタン、そしてラバーヌスが修道院長を務めたフルダ（マインツ大司教区）であった。第二世代は、第一世代が宮廷に蓄積した描画・書字文化を学び、それを地方に移植したのである。先に述べたように、この移植は全ての修道院で同時に行われたわけではなく、700年代前半までに創建され、院内秩序が確立していた古参修道院を中核として行われたと考えられる。

⁵¹ MGH SS. rer. Germ., Bd.64, p. 334, Thegan, Die Taten Kaiser Ludwigs; Astronomus, Das Leben Kaiser Ludwigs.

以上のカロリング・ルネサンス第二世代の分析を踏まえると、次のことが言える。ラバーヌスを初めとする第二世代の人物たちは宮廷、あるいは宮廷学校に属する人物が率いる修道院で学んだ。そこから敬虔帝の使節として、敬虔帝下の司教や修道院長として活動しながら、それぞれの地で著作の執筆や、写本制作の技術向上に取り組んだ。彼らを群像としてマクロな視点で見ると、フランク王国の中核地域に知の拠点を次々に作り、第一世代の知的遺産を自分なりに引き継いだ著作を残した様子が見えてくる。

第一世代から第二世代への移行には、集中・拡散のダイナミズムがある。カール大帝は対外戦争が一区切りついた後、フランク王国内の教育プログラムを整備するための人材を国外に求めた。そうして集められたのが、アングロ・サクソン、アイルランド、スペイン、ランゴバルド出身の知識人たちであった。つまり、カール大帝期の知的遺産は外から獲得され、それがフランク王国の中核たるアーヘン宮廷に集中したのである。彼らはカロリング小文字体を普及させ、自由七科の教本を作り、聖書註解書を書き、教義に関する著作を用意し、学問教授の順序を体系化して環境を整えた。その上で、国内の選りすぐりの若者を集めて自由七科教育を施し、筆写技術を教授した。第一世代の許で学んだ青年たちは、上で確認したように、やがて地方の修道院や司教区の長を務め、その地で精力的に活動した。つまり第二世代の人物は中央から地方へ拡散し、各地に拠点を増やした。その結果が、ラバーヌス下のフルダやフレデギス下のサン・マルタン、『ユトレヒト詩篇』を生んだエッポの下でのオーヴィレールであったと言える。

小括

ルートヴィヒ敬虔帝の統治を支えた人物たちは、その多くがカール大帝宮廷の知的遺産へのアクセスが可能であった。カール大帝の宮廷学校での学問経験はカロリング・ルネサンス第二世代の共通の背景を成し、確かにルートヴィヒ敬虔帝の治世へと繋がっていたのである。また、カロリング・ルネサンス第二世代の出身地域はフランク王国の中核地域に集中していた。これは、ルートヴィヒ敬虔帝期にはフランク王国域内の在地の修道院等からの知的人材の獲得が容易になり、彼らが宮廷とコネクションを築くことのできる仕組みが整い始めていたことを示唆する。更に、彼らを群像として捉えると、その非常に多様な仕事が見えてきた。彼らは神学的議論から聖書註解書・教育、歴史、ギリシア語・ビザンツ関連著作、君主鑑、詩、数学・幾何学、古代ローマの著作に至るまで、幅広い主題について著作を残していたのである。それは同時に、第二世代が各担当地域で、第一世代の知的遺産を活用しつつ、著作の執筆や写本の制作に取り組んでいたことを示す。すなわち、彼らは第一世代の成果を、各々の土地に広める役割を果たしていたのである。

(付表1) カロリング・ルネサンス第二世代

人物	出自	教育	アキテーヌ王時代の 役職・活動	アーヘン宮廷での役職	宮廷外での役職	功績（執筆著作・分野・作品）
ラバーヌス・マウルス (780-856)	ラインフランケン地方の貴 族家門出身	フルダ修道院→カール大 帝宮廷→アルクイン@トゥ ールのサン・マルタン→フ ルダ修道院	×	正式な肩書は持たなかつた ものの、ルートヴィヒから 相談を受ける顧問の1人で あった ¹ 。	フルダ修道院長→マインツ大司 教	『聖十字架礼讃』 『聖職者の教育について』(De institutione clericorum) 『復活祭日の計算について』(De computo) 『文法について』(De grammatica) 『マタイ福音書註解』 聖書のあらゆる部分の註解書(20点前後) 『説教集(Sermones)』 『聖ベネディクトの戒律註解』(Commentaria in Regulam S. Benedicti) 『教会の規律について』(De disciplina ecclesiastica: 『聖職者の教育につい て』の短縮版) 『補佐司教について』(De chorepiscopus) 『美德と悪徳について』(De virtutibus et vitiis)、『聖体について』(De eucharistia, De corpore et sanguine Domini) 『秘跡について』(Opusculum de sacramentis) 『何親等との結婚が許されるのか』(Quota generatione connubium licitum sit) 『(人間の) 予定説について』(De praedestinatione) 『児童奉獻について』(De oblatione puerorum) 『子供たちの父に対する尊敬について、また家臣たちの王に対する尊敬につい て』(De reverentia filiorum erga patres et subditorum erga reges) 『事物の本性について』(De universo/ De rerum naturis) 贖罪規定書 『魂の美德について』
フレクルフ (?-864)	不明 名前から南ドイツ出身だと 推測される。	ルートヴィヒ敬虔帝の尚 書局長ハリザカル	×	敬虔帝の国王使節	リジュー司教	『年代記(Chronica)』 : 12巻の歴史書、前5巻はハリザカル、後7巻はユディットに献呈)
ヒルドウイヌス (?-855/861)	おそらくネウストリア地 域の王家の親族家門出身 で、自身は敬虔帝の従兄 弟。	カール大帝宮廷学校ある いはライヒエナウ修道院	×	敬虔帝期の国王使節 敬虔帝期の宮廷禮拜堂付司 祭長 (archicapellanus)	メロヴィング朝起源の複数の修 道院の院長(サン・ドニ、サ ン・ジェルマン・デ・プレ、ル ーアンのサン・トゥアン、ソワ ツソン、サロンヌ)	『偽ディオニュシウス文書』翻訳 『パリ司教聖ディオニュシウスの受難』(=韻文)
アインハルト (770頃-840)	マインガウの貴族家門	フルダ修道院→ カール大帝宮廷学校	×	カールの宮廷学校の教師 カール大帝期の使節	敬虔帝期の複数の修道院の俗人 修道院長(ミヒャエルシュタッ ト、ゼーリゲンシュタット、フ ォントネル、サン＝ピエール・ オ・モン＝ブランダン、サン・ バヴォン)	『カール大帝伝』『十字架の崇敬について』 『聖マルケリヌスと聖ペテロの奉遷と奇跡』 (Translatio et miracula ss. Marcellini et Petri) 『聖マルケリヌスと聖ペテロの受難についての韻文』 (Passio ss. Marcellini et Petri rhythmica) 凱旋門形の十字架台
エッポ (778頃-851)	父: カール大帝の御料地 で働く農奴。 母: ルートヴィヒ敬虔帝 の乳母	カール大帝宮廷学校	司書 (Bibliothecarius)	敬虔帝の国王使節	敬虔帝期の修道院長兼司教(ラ ンス大司教、サン・レミ修道院 長、後にヒルデスハイム司教)	ハンブルク大司教区設立 ランスにおける写本文化の展開 『ユトレヒト詩篇』『エッポの福音書』ほか

¹ Depreux, P., *op.cit.*, pp.350-352.

フレデギス (?-834)	アングロ・サクソン	ヨークにてアルクインに 師事	×	ハリザカルの後の尚書局長 (chancellor)	アルクインの後のサン・マルタ ン修道院長	トゥールにおける写本文化の展開 『シュトゥットガルト福音書』『無と闇の实在について』
スマラグドゥス (?-826/841)	西ゴート族（セプティマ ニア、スペイン）。	オルレアンの子テオドゥル フ、アニアヌのベネデ ィクトゥスと交友関係に あったため、彼らの影響 を受けた？	×	敬虔帝の国王使節	サン・ミヒール修道院長（カ ール大帝治世末期以降）	『ドナートゥスの一部分について』（=文法学に関する著作） 『王の道』『詩篇註解』『聖ベネディクトの会則註解』 『修道者の王冠』 『典礼年と聖人に従った書簡と福音書の集成』 (<i>Collectiones epistolarum et evangeliorum de tempore et de sanctis</i>): 四福音書と 使徒書簡の註解書 『戒告』(<i>Monitorium</i>): アキテーヌ王ピピンへの君主鑑的な戒告状 『詩歌集』
アニアヌの ベネディクトゥス (750-821)	西ゴート地域のマグロー ヌ伯の息子	ビピン短絁王、カール大 帝宮廷		修道院改革政策代表者 不明	修道院改革政策代表者	修道制改革 『聖ベネディクトの戒律』の浸透
モドゥイヌス (?-840/843)	不明	リヨン、カール大帝宮廷	×	敬虔帝の使節	オータン司教	カール大帝に向けた田園詩 オルレアンの子テオドゥルフに向けた慰めの詩
パスカシウス・ ラドベルトゥス	不明	ソワッソンの聖マリア女 子修道院 コルビー修道院（アダル ハルト、ワラ）	×		×	コルビー修道院長 コルヴァイ修道院創設 『マタイの福音書註解』『信仰について』『希望について』『愛について』『聖ア ダルハルト伝』『田園詩』(<i>Ecloga</i>) 『主の肉と血について』『哀歌註解』 『聖処女の誕生について』(<i>De partu virginis</i>) 『聖マリアの降誕について』(<i>De navitate sanctae mariae</i>)
エルモルドゥス・ ニゲルス ² (?)	アキテーヌ王国内のロワ ール周辺地域？	オルレアンの子テオドゥル フ？（エルモルドゥスの 詩にはテオドゥルフから の影響が見られる）	×		×	アキテーヌ王ピピンの宮廷聖職 者。 824年のルートヴィヒ敬虔帝に よる対ブレトン人戦争に向かう 際ピピンに同行。 『最も信仰深き皇帝ルートヴィヒを称える哀調を帯びた詩』(<i>Carmen elegiacum in honorem Hludowici Christianissimi Caesaris Augusti</i>) : 敬虔帝による追放処分撤回のために制作 『名誉ある王ピピンを称える二詩』(<i>Carmina duo in honorem gloriosissimi Pippini regis</i>)
ワラフリード・ ストラボ ³ (808-849年)	シュヴァーベン生まれ	ライヒェナウ修道院 ラバーヌス修道院長期の フルダ修道院（827-829 年）	×	838年までルートヴィヒ敬 虔帝宮廷で詩人として活躍 シャルル禿頭王の家庭教師	838年以降ライヒェナウ修道院 長	『聖プラトマスの生と死』(<i>De beati Blaithmaic vita et fine</i>) 『造園について』(<i>De cultura hortorum</i>) 『教会職務の始まりとその成長に関する小論』(<i>De exordiis et incrementis quarundam in observationibus ecclesiasticis rerum</i>) 『テオデリクスの立像について』(<i>De imagine Tetrici</i>): ルートヴィヒ敬虔帝の頌 詩 『修道士マムの生と死』(<i>De vita et fine Mammae monachi</i>) 『書簡集』 『様々な機会に制作された数々の詩』(<i>Versus de rebus diversis</i>) 『証聖者ガルス伝』(<i>Vita s. Galli confessoris</i>) 『ヴェッティヌスの幻視』『聖オトマルス伝』(<i>Vita s. Otmar</i>)

² Ermoldus Nigellus, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/2188?mark=%28%3Fis%29%28ermoldus%5C%20nigellus%29>, Bearbeitungsstand: 28.09.2022) 【最終閲覧日: 2023年12月13日】; Ermoldus Nigellus, in: *LexMA Bd.3*, col.2160-2161.

³ Walafridus Strabo, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/5070>, Bearbeitungsstand: 02.11.2023) 【最終閲覧日: 2023年12月13日】; Walafridus Strabo, in: *LexMA Bd.8*, col.1937.

ディクイル 814年頃-825年頃まで活動していた記録が残っている ⁴	アイルランド	不明	×	宮廷学校教師？ デュブローは彼が、伝記作家アストロノムスと同一人物である可能性を指摘 ⁵ 。カール大帝宮廷、ルートヴィヒ宮廷両方に仕えていた。	不明	『天文学について』(Liber de astronomia) 『度量衡に関する書簡』(Epistula censuum) 『始めの音節について』(De prima syllaba)：音調論に関する著作 『文法学に関する詩』(Versus de grammatica)：学校での詩の教授のための27つの詩 『文法学についての10の質問に係る書簡』(Epistula de questionibus decem artis grammaticae)：現存せず 『地球の計測について』(Liber de mensura orbis terrae) ：あらゆる土地に関する地理的描写
ブルデンティウス (?-861) ⁶	スペイン	不明	×	敬虔帝宮廷での宮廷礼拝堂付司祭 (capellanus)	846年以降トロワ司教	835年以降『サン・バルタン年代記』執筆 帝妃ユディトに詩歌集献呈 『トロイの聖マリア伝』(Vita Maurae virginis Trecentis) 四福音書に関する詩
リヨンのアゴバルドゥス ⁷ (769-840)	スペイン	不明	×	不明	816年以降リヨン大司教	『グンドバドゥス法令集反駁』(Adversus legem Gundobadi) 『皇帝の贖罪記録』(Cartula de poenitentia ab imperatore acta) 『農奴のユダヤ人の洗礼に関する意見と請願』(Consultatio et supplicatio de baptismo Judaicorum mancipiorum) 『ユダヤ人奴隷の洗礼に関する不敬な法令に反対して』(Contra praeceptum impium de baptismo Judaicorum mancipiorum) 『ユダヤ人との共存と共同体の回避について』(De cavendo convictu et societate Judaeorum) 『信仰の真理について』(De Fidei veritate) 『画像について』(De imaginibus) 『迷信について』(De inlusione) 『ユダヤ人の誤った教義について』(De Judaicis superstitionibus) 『教会の統治方法について』(De modo regiminis ecclesiastici) 『ルートヴィヒに宛てた、使徒座の特権について』(De privilegio apostolicae sedis ad Ludovicum) 『司祭の特権と権利について』(De privilegio et iure sacerdotii) 『マトフレッドに宛てた、不正に対する苦情の書簡』(Deploratoria de iniustitiis ad Matfredum) 『希望と恐れに関するランス大司教エボへの書簡』 『フランク王国の司教たちに宛てた教皇グレゴリウス4世の書簡』 『ユダヤ人の子供の洗礼に関するリヨン大司教から皇帝への書簡』 『フランク王国がルイの息子たちに分割されたことに関する悲哀の手紙』 『敬虔なるルイ皇帝に宛てたウルジェルのフェリクス反駁』 『神のさばきに対して』(Liber contra iudicium dei) 『フリドゥギス大修道院長の告発に対して』 『教会事務の管理について』『敬虔なるルイの息子たちを支持し、その妻ユディトに反対する2冊の本』

⁴ Cróinín, D.Ó., Dicuil, in: LexMA Bd.3, col.982; Dicuil Hibernicus, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/1932>, Bearbeitungsstand: 17.07.2023) 【最終閲覧日：12月13日】。

⁵ Depreux, P., *op.cit.*, pp.159-160.

⁶ Depreux, P., *op.cit.*, pp.349-350; Stratmann, M., Prudentius, in: *LexMA Bd.7*, col.289.

⁷ Agobardus archiepiscopus Lugdunensis, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/147> Bearbeitungsstand:15.03.2021) 【最終閲覧日：2023年12月29日】。

ルートヴィヒ敬虔帝宮廷で制作されたと考えられている著作/写本⁸

- ヴァティカン版『テレンティウス』写本（ローマ、ヴァティカン市立図書館、Vat. Lat. 3868）
- 『アグリメンソール・コーデックス』（ローマ、ヴァティカン市立図書館、Pal.lat.1564）
- 『キケロ版アラトウス』写本（ロンドン、大英博物館、BL Harley 647）
- 『ゲルマニクス・コーデックス』（ライデン、国立大学図書館、Voss.lat. Q79）

⁸ Mutherich, F. (2004), p.104.

(付表2)カロリング・ルネサンス第一世代

人物	出自	教育	アーヘン宮廷での役職	宮廷外での役職	功績(著作・作品)	備考
アルクイン ⁹	ノーサンブリア出身 バルマでカール大帝と会 合し、宮廷に入ること に。	ヨークの修道院学校 (修道院長エグベル ト、アエルベルト下)	宮廷学校教師で主導的立場 にあった。	トゥールのサン・マ ルタンの俗人修道院 長	<ul style="list-style-type: none"> 自由七科それぞれに対する教本 Ex. 『文法学 (Ars grammatica)』『幾何学について (De Arithmetica)』『韻律論 (De arte metrica)』『自由七科について (De septem artes liber)』 etc. 聖書註解 Ex. 『黙示録註解 (Expositio Apocalypsis)』『ヨハネの福音書註解 (Expositio in Iohannis Evangelium)』『聖パウロのエフェソ人への手紙註解 (Expositio in sancti Pauli Epistolam ad Ephesios)』『聖パウロのヘブル人への手紙註解 (Expositio in sancti Pauli Epistolam ad Hebraeos)』 教義に関する著作 Ex. 『キリストの受難について (De incarnatione Christi)』『三位一体と創世記について (Quaestiones de Trinitate et Genesi)』『信仰の教義について (Doctrina de fide)』 聖人伝 Ex. 『ユトレヒト司教聖ウィリブロルド伝 (Vita sancti Willibrordi Traiectensis episcopi)』『トゥールの聖マルティヌス伝 (Vita sancti Martini Turonensis)』『サン・リキエの聖リカリウス伝 (Vita sancti Richarii Centulensis confessoris)』 数百の書簡 詩・なぞなぞ詩 	
オルレアン の テオドゥルフ ¹⁰ (760-821)	北スペインもしくはセプ ティマニア	おそらくサラゴサ ¹¹ カール大帝宮廷到着頃 には既に詩作と自由七 科の知識に長けていた	宮廷学校教師 カール大帝宮廷の巡察使	オルレアン司教 フルーリー修道院長	<ul style="list-style-type: none"> 『カールの書』 『聖霊について (De Spiritu sancto)』 『洗礼の順序について (De ordine baptismi)』 『裁判官に対して (Versus contra iudices)』 讚美歌「栄光、賞賛、名誉 (Gloria laus et honor)」 『詩歌集』『説教集』 	
パウルス・ ディアコヌス ¹² 720/725-799頃	ランゴバルドの貴族家門 出身	ランゴバルド王のパヴ ィア宮廷→モンテ・ カッシーノ修道院	宮廷学校教師 (数年後にモ ンテ・カッシーノへ帰還、 カール大帝と書簡のやり取 りを続けた)	×	<ul style="list-style-type: none"> 『詩歌集』『書簡集』 『ボンバイウス・フェストゥス『語義論』抜粋集』(Excerpta ex libris Pompei Festi de verborum significatione) 『ドナートゥスの教科書註解』(Expositio artis donati): 文法学に関する著作 『説教集』『ランゴバルド人史』(Historia Langobardorum) 『ローマ人史』(Historia Romana) 『メッツ司教たちの事績』(Gesta Episcoporum Mettensium) 『大教皇グレゴリウス伝』(Vita gregorii magni) 『聖パネディクトの会則』写本 	ランゴバルド王の 娘の教師

⁹ Ernst, U.(1991), pp.168-169; Alcuinus, in: ALCUIN Infothek der Scholastik, Universität Regensburg (<http://www.alcuin.de/philosopher.php?id=119>)【最終閲覧日: 2023年12月15日】。

¹⁰ Ernst, U.(1991), p.188; Theodulfus episcopus Aurelianensis (Theodulf von Orléans), in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/4903>, Bearbeitungsstand: 13.09.2023)【最終閲覧日: 2023年12月13日】。

¹¹ Ernst, U. (1991), p.188.

¹² Ernst, U. (1991), p.198; Paulus Diaconus, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters* (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/4242>, Bearbeitungsstand: 09.06.2023)【最終閲覧日: 2023年12月11日】。

ピサのベトルス ¹³ (744頃?-799)	詳細不明	不明だが、パヴィーア もしくはピサで文法教 師を務める	774年以降宮廷学校教師でカ ールのラテン語教師（晩年 はイタリアに帰還）	×	『文法』（Grammatica） 『詩集』（Carmina）（パウルス・ディアコヌスの詩と共に綴じられている）	アルクィン、サン・ リキエのアンギルベ ルト、パウルス・デ ィアコヌスと交友関 係
アクイレシアのパウ リヌス ¹⁴ (752/754-802)	恐らくフリウリ生まれ	不明だが、チヴィダー レで文法教師を務めて いた	776年以降宮廷学校の教師	787年以降アクイレ シア総大主教	『詩歌集』（Carmina）『書簡集』 三巻本『ウルヘルム司教フェリクス反駁』（Contra Felicem Urgellitanum episcopum libri tres） 『イタリアの司教たちのエリパンドゥス反駁』（Libellus episcoporum Italiae contra Elipandum） 最古の俗人鑑『伯エリクスへの戒告』（Liber exhortationis ad Hericum comitem）	
サン・リキエのアン ギルベルト ¹⁵ (750頃-814)	フランクの高貴な生まれ ルートヴィヒ敬虔帝伝を 書いたニタルドゥスの父 親	ピサのベトルス、アク イレシアのパウリヌ ス、アルクィンに教わ った	カール大帝の国王使節とし て教皇に謁見。宮廷学校の メンバーで、「ホメロス」の 渾名で呼ばれていた	サン・リキエ修道院 の俗人修道院長	『詩歌集』『サン・リキエ教会についての小冊子』（De ecclesia Centulensi libellus） 『ザルツブルク大司教アルノへの三書簡』（Epistolae tres ad Arnonem episcopum Salisburgensem） 『様々な職務に関する論文』（Institutio de diversitate officiorum）（修道院組織や 典礼規定に関する著作）	イタリア王ビピン の宮廷礼拝堂の長 であった。
コルビーのアダルハ ルト ¹⁶ (750頃-826)	ビピン短躰王の兄弟ベル ンハルトの息子で、カール 大帝の従兄弟にあたる	国王宮廷 コルビー修道院 モンテ・カッシーノ修 道院	巡察使として、未熟なイタ リア王ゲルンハルトの下で イタリア統治を委任される	780年以降コルビー 修道院長	コルヴァイ修道院の設立 『宮廷の秩序について（De ordine palatii）』（=カール大帝宮廷における宮廷秩 序についての著） 『規則集（Statuta）』（=コルビー修道院の改革のための指示集）	
ワラ ¹⁷	コルビーのアダルハルト の弟	×	カール大帝の助言者。軍司 令官として対ザクセン戦役 を先導／812年にはサラセン 人との防衛戦のためイタリ アへ派遣される	カールの親族とし て、早くから伯職を 歴任 ¹⁸ 826-830年コルビー修 道院長	×	
ヨセフス・ スコトゥス（?-804年 以前） ¹⁹	アイルランド	クロンマクノワーズ修 道院 アルクィン	アルクィンと共に790年以前 にフランク王国に到着、宮 廷サークルの一員になる	不明	『ヒエロニムスによるイザヤ書註解』要約 『詩歌集』（カール大帝宛ての4点の形象詩を含む）	

¹³ Petrus Pisanus grammaticus, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters* (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/4390>, Bearbeitungsstand: 10.09.2019) 【最終閲覧日：2023年12月11日】。

¹⁴ Paulinus patriarcha Aquileiensis, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters* (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/4226>, Bearbeitungsstand: 22.05.2023) 【最終閲覧日：2023年12月13日】；佐藤彰一『フランク史 III カロリング朝の達成』名古屋大学出版会2023年、69頁。

¹⁵ Angilbert, in: *LexMA Bd.1*, col.634-635; Angilbertus abbas S. Richarii, in: *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters* (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/576>, Bearbeitungsstand: 10.09.2019) 【最終閲覧日：2023年12月13日】。

¹⁶ Cabaniss, A., *op.cit.*, 1967, pp.1-5.

¹⁷ Prinz, F., Wala, in: *LexMA Bd.8*, col.1936-1937.

¹⁸ 佐藤彰一『フランク史 III カロリング朝の達成』、66-67頁。

¹⁹ Ernst, U. (1991), p 178.

結論

ラバーヌスと『聖十字架礼讃』の位置づけを、作品が執筆された時代やカロリング・ルネサンス世代論の観点から問い直すべく、第1章から第4章を通じて、ラバーヌスの生涯の各段階とカロリング・ルネサンスの展開、『聖十字架礼讃』の詳細な内容・形象詩の系譜・聖画像論争との関係・聖十字架崇敬との連動性、カロリング・ルネサンス第二世代の人物・著作群の実態について検討してきた。

まず第1章では、ラバーヌスの生涯を大きく三つの段階に分けて検討した。ラバーヌスの生涯を段階を追って見ていくと、彼がカール大帝によるカロリング・ルネサンスのプログラムの中で社会的地位の上昇を遂げたことが明らかになった。ラバーヌスの活躍の根底には、国王宮廷での学びと人脈の形成、アルクインの下での上級教育、地域の拠点修道院として期待されたフルダ修道院での教育・運営・著述といった、カロリング・ルネサンス第一世代が準備した育成の道、整えられた学究環境があった。

これら学術資産が、ラバーヌスによる『聖十字架礼讃』の構想と制作に導いたことは疑いない。ラバーヌスは形象詩という伝統ある高度な文学表現をアルクインから教わった可能性が高いからである。というのも、アルクインは、同郷のヨセフス・スコトゥスと共に制作した十字架の形象詩集をカール大帝に献呈しており、ポルフィリウスの形象詩写本を初めて大陸にもたらした人物とも見なされているからである。実際、ラバーヌスは『礼讃』序文でポルフィリウスの形象詩を参照した旨を記している。

また、作品の主題を聖十字架とした理由にも、アルクインの影響があったと考えられる。『聖十字架礼讃』の構成を聖十字架崇敬の展開と結び付けて分析した第3章では、カロリング期に十字架が勝利の象徴、強大なキリストの象徴として視覚芸術に取り入れられていたこと、カール大帝宮廷が関与した聖画像論争においても十字架は描画可能とされたこと、ボニファティウスやアルクインが聖十字架を旧約・新約聖書の全体を表わす象徴、世界の四隅に広がる存在として形象詩の図案に取り入れていたことが、ラバーヌスが聖十字架を作品の主題に選んだ理由として確認できた。

ラバーヌスはアルクインをただ単に受け継いだ訳ではなかった。第2章の作品分析を通じて明らかになった点は、『聖十字架礼讃』の構成と内容が、多義的で曖昧な表現を含む聖書を正しく、豊かに解釈する手法を理解し、実践する教材として編まれたことである。若い修道士が聖書の知識を吸収するだけでなく、聖書の多層的で深遠な意義を引き出す高度な読解の技法を養うことができるよう、いわばワークブックとして『聖十字架礼讃』を制作した可能性である。

第4章では、ラバーヌスと『聖十字架礼讃』について先行する3つの章で明らかになった諸点を、カロリング・ルネサンスの世代論の観点から考察するために、カロリング・ルネサンス第二世代に属する教会知識人の著作や活動について検討した。主にルートヴィヒ敬虔帝の下で活躍したカロリング・ルネサンス第二世代の知識人は共通して、カール大帝宮廷下に整備された学術資産へのアクセシビリティがあった。高位聖職・修道院長職に就いた彼らを通して、フランク王国の各地で重要な写本の制作が進んだだけでなく、独自の主題・構成・図像を伴う新たな手稿本の制作が本格化した。トゥールのサン・マルタン修道院やランス大司教座のような、新たな学術拠点が王国中に増殖したのである。第二世代には、第一世代のアルクインのごとく、幅広い著作の執筆や改革を主導する中心的な人物は登場しなかったが、その著作や活動を世代の群像として評価するなら、第一世代を凌ぐ多彩さと豊かさをもって改革を推し進める力の存在を認めることができよう。国王宮廷の圧倒的な指導力が見えにくくなったのは、地方の拠点が彼ら第二世代を通して、改革を在地で実現する段階に、カロリング朝の文教改革がステップアップしたためであった。

では、ラバーヌスとその著『聖十字架礼讃』は、そうしたカロリング・ルネサンス第二世代の活動の中でどのような役割を果たしたのであろうか。第1章で確認したように、ラバーヌスはフランク王国各地の司教や修道院長、国王や教皇から数多くの著作を依頼された。なかでもラバーヌスによる聖書註解は、ユトレヒト司教フリードリヒやヴェルツブルク司教フンベルトゥス、帝妃ユディト、リジュー司教フレクルフ、ヒルドゥイヌスなど、地位や地域の異なる多くの人物から求められた¹。その結果、ラバーヌスは、聖書の主だった文書について註解書を書くことになったが、それはちょうど第一世代で師アルクインが果たした役割をなぞる形となった。この執筆依頼が証明するのは、各地で活動する第二世代の間に共通の知的基盤があることであり、聖職者・修道士教育の裾野を広げ、その質を高めるという使命に対する共通の認識であった。ラバーヌスの著作は、こうした期待に応えるものであったといえる。

一方で、『聖十字架礼讃』の制作は、ラバーヌスがアルクインの下での勉学—上級学科ないし、それまでの学びの仕上げ—を終え、故郷のフルダ修道院に戻って附属学校長に就任して間もない時期に行なわれた。制作の着想は、改革に人生を捧げた高齢の師アルクインが見守るサン・マルタン修道院時代に芽生えていたのかもしれない。ラバーヌスのその後の人生は別として、本書制作の意図は、810年というこの制作年において探られなければならないだろう。自分が学びえた最高の学問の水準とそれを支える研究環境を継承・発展させること、研究の成果を有益な著作に記して広く社会に供すること、著作を教育の拡充・人材の育成に活用すること。聖書を多層的に読みこむ聖書註解の鍵となる技法が、巧みに、かつ美しく綴じ込められた形象詩集は、師から弟子への学の継承という時系列の伝統と、王国各地で奮闘する第二世代の同僚知識人との連帯を生み出すことを願って制作された作品であった。と同時に、先行する形象詩がそうであったように、『礼讃』は改革の旗振り役であるカロリング朝君主—カール大帝から若きルートヴィヒ敬虔帝への交替期—を讃え、鼓舞する君主鑑的な要素も備えた作品でもあった。それは、歴史書でありながらシャルル禿頭王に向けて「慎重に為すべきこと、懸命にも避けるべきこと」²を示したフレクルフの『年代記』にも当てはまる。第二世代の一連の著作が、改革の中心たる君主を各地から支え、励ます構図こそが、第二世代の在り方といえよう。

構想の要の位置を占め、カロリング・ルネサンスを精神的に支えたのは、キリスト教信仰、とくに十字架に架けられたキリストへの崇敬であった。

見よ、救世主の像が、その四肢の位置によって吾々に聖別するのは、もっとも健全で、香しく、愛情の籠った聖十字架のかたちである。その名を信じる者たちとその命令に従う吾らが、かの御方の受難によって永遠の生の希望を手にするようにと。吾らが十字架をじっと見つめるときは何時でも、吾らのために十字架上で受難された御方を思い出すよう、吾らを闇の権力から救い、吾らが永遠の生の相続人になれるよう、死を飲み込まれた御方、「天に昇られて御使いも権力も勢力も自身に服従させた御方」が³。

ラバーヌス・マウルスの処女作『聖十字架礼讃』をカロリング・ルネサンス世代論の観点から問い直す本論文の課題は、これをもって一応の結論に達した。一方で、課題も数多く見出された。本論文では『聖十字架礼讃』全28詩の内容分析を行なったが、全ての詩についてラテン語原文の精密な読解ができたわけではない。また、『礼讃』の聖書註解書としての役割を検証するには、ラバーヌスが執筆した聖書註解書の内容との照合が不可欠となる。加えて、カロリング朝における聖十

¹ MGH Epistolae, Bd.5, No.7-14, 17ab, 26, 27, 29.

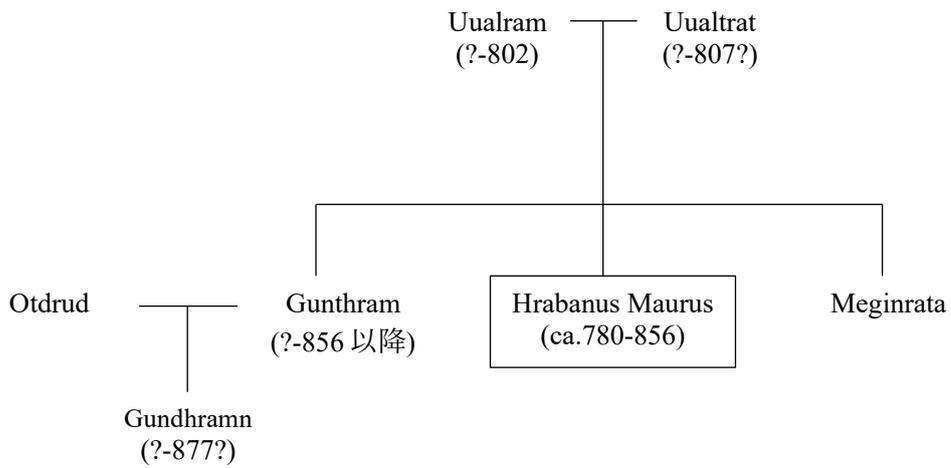
² “In his enim, velut in speculo, per tuae sanctissimae devotionis admonitionem atque jussionem dominus meus Carolus, gloriosissimus tuae filius excellentiae, inspicere quid agendum vel quid vitandum sit poterit.” Ward, G., *op.cit.*, pp.291-318.

³ 序論冒頭を参照。

字架崇敬について、カール大帝期とルートヴィヒ敬虔帝期との間に連続性があったことは示せたが、その質的差異に言及できるほどには十分な分析はできなかった。カロリング・ルネサンス第二世代論についても、より多くの人物を取り上げ、その生涯や著作を分析し、再検証する必要がある。これらの点については、今後の研究の進展に期待したい。

付録（系図・写本一覧・写本系統図・地図）

付録I ラバーヌス・マウルスの家系図



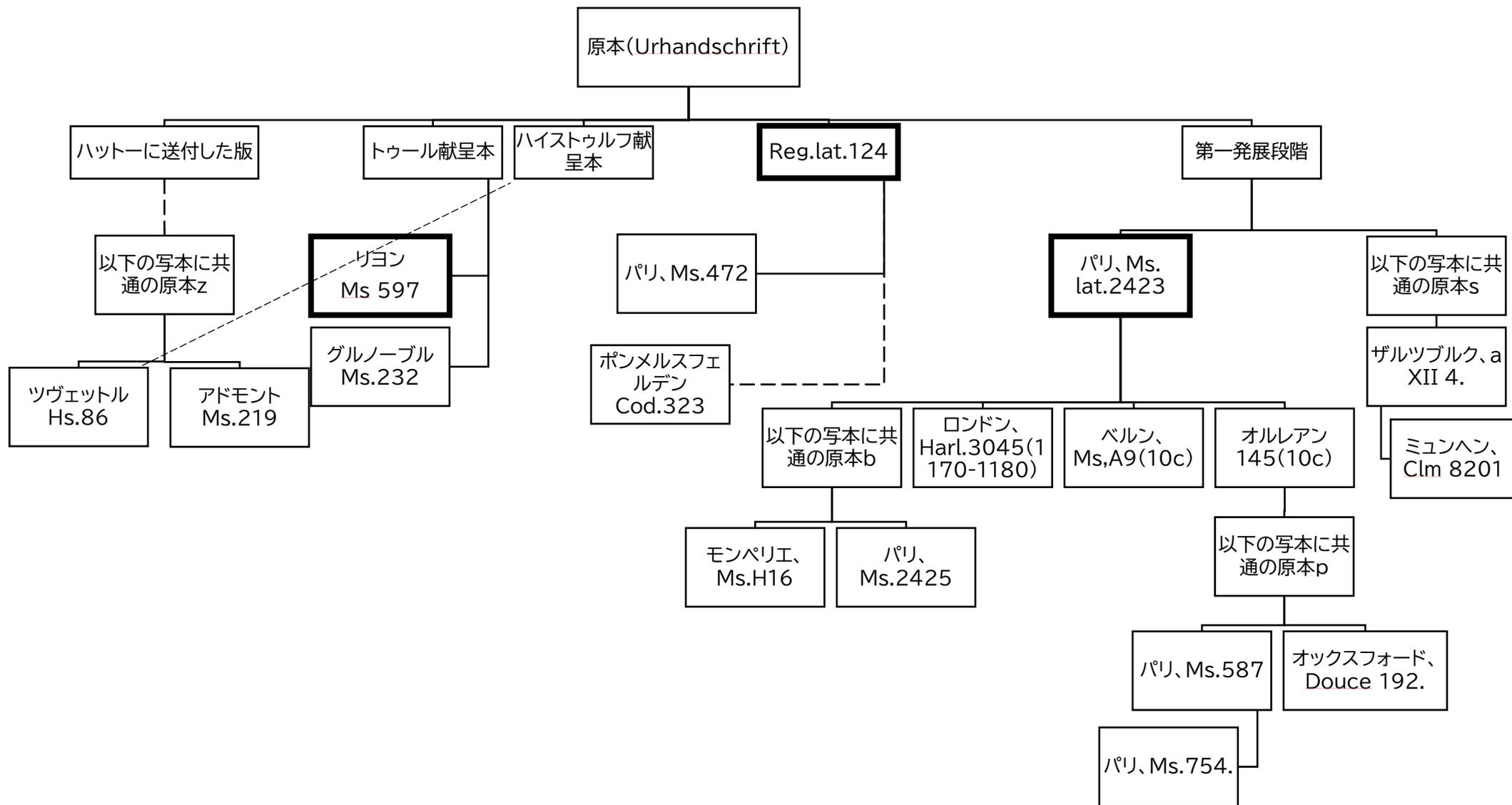
出典：Staab, Franz, Beobachtungen zur Anteilnahme seiner Familie an den Anfängen seiner Laufbahn, in: *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*. Wiesbaden 1982, pp.76-101, p.101.

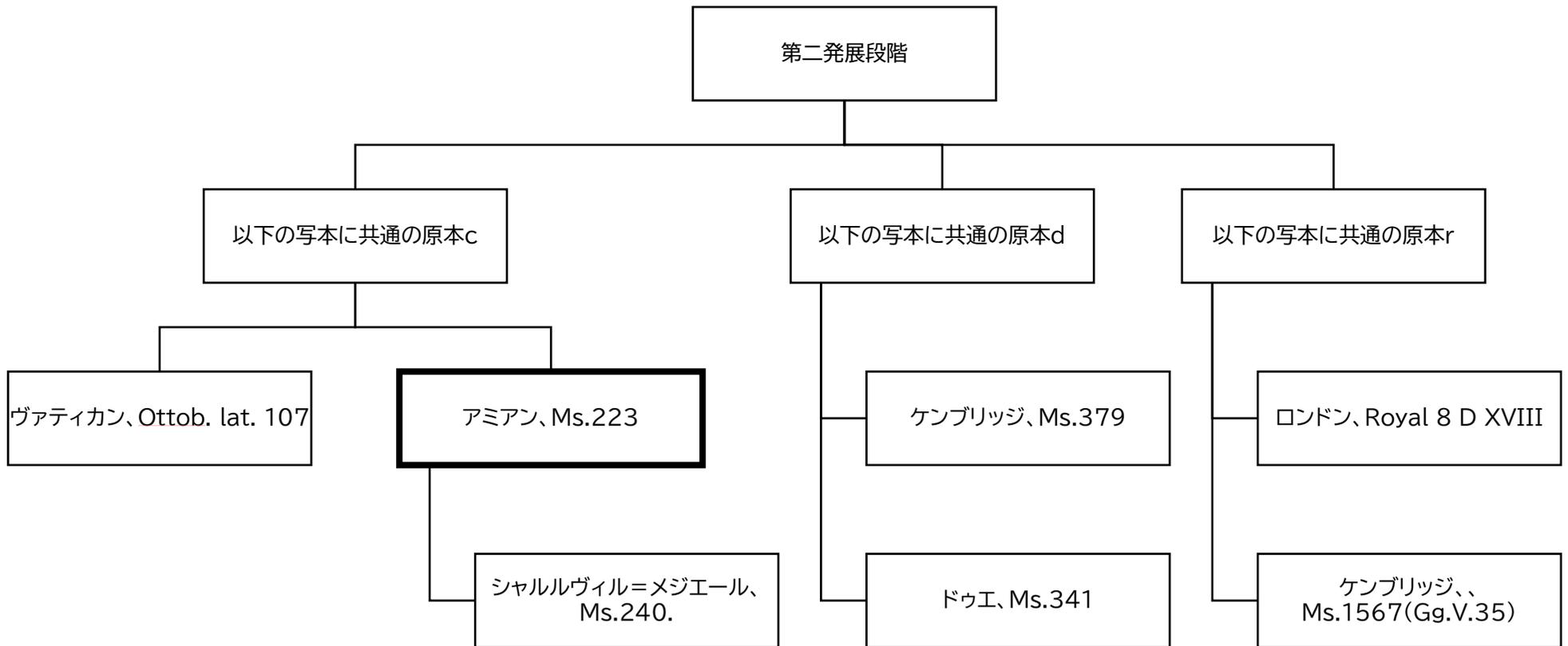
付録Ⅱ 『聖十字架礼賛』写本一覧

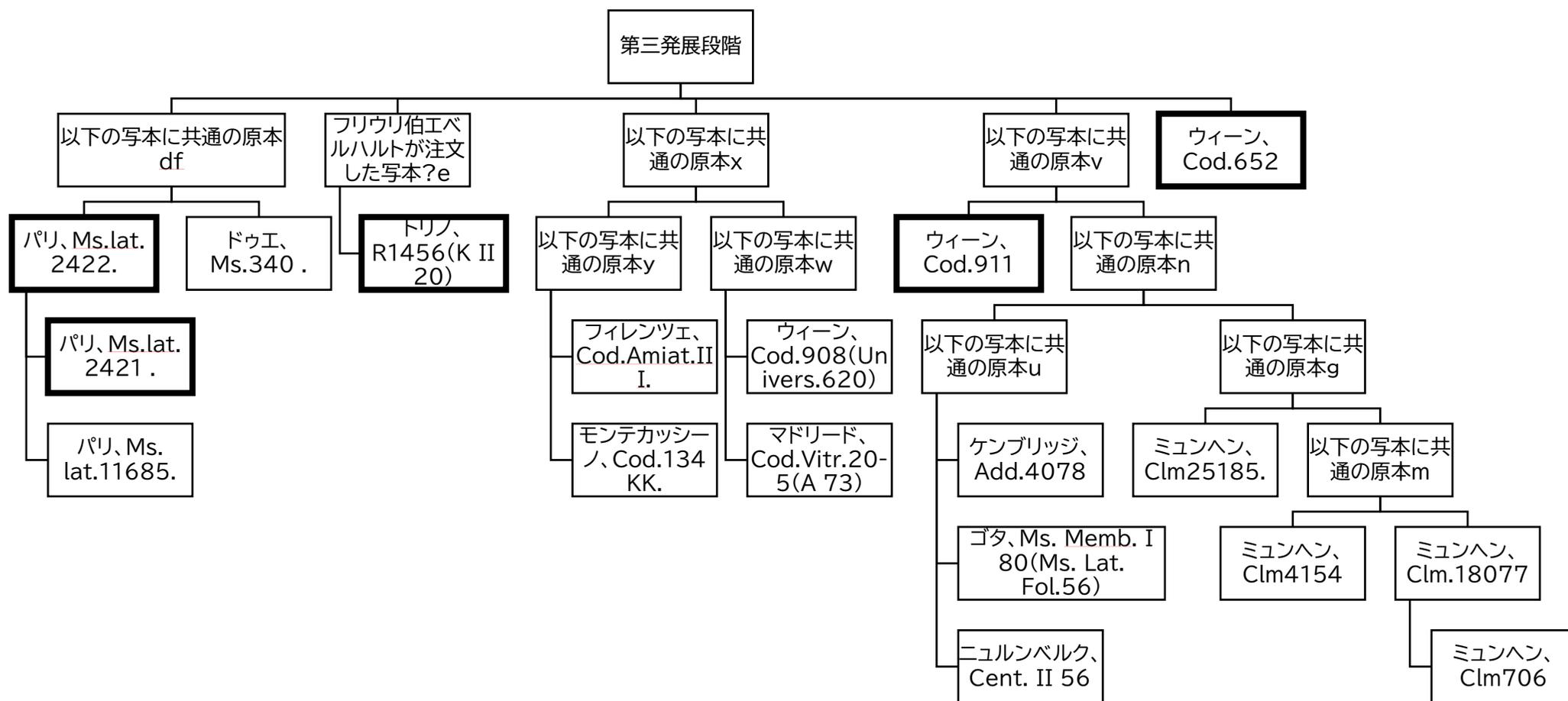
整理番号	写本名	制作年代	由来・出所
4	アドモント、修道院図書館 Ms.209,fol.1-41.	13 世紀頃	アドモント修道院(ベネディクト会系)、1380年のアドモントの蔵書目録に記録。
9	アミアン、市立図書館 Ms.223,fol.1-47.	9 世紀半ば頃	フルダ、コルビーへの献呈本
10	アミアン、市立図書館 Ms.Lescal.93, fol.170r-171v.	15 世紀	ブリュッセル、カルトゥジオ会系修道院
17	アンジェ、市立図書館 Ms.320(311), fol.153v-154r.	10 世紀	ラ・ボメット
52	バーゼル、大学図書館 A XI 71(E CXXIV) fol.198v-199r.	15 世紀	マインツのカルトゥジオ会系修道院?後にバーゼルのカルトゥジオ会系修道院
102	バルン、市立図書館 Ms.A9 fol.1-24.	10 世紀後半-11 世紀	フランス
117	ポローニャ、Collegio di Spagna, Bibl.Alborn.12 fol.2r-60r.	10-11 世紀	記述なし
180	ケンブリッジ、トリニティ・カレッジ、Ms.379 fol.1-45.	10 世紀半ば	カンタベリー?ウィットギフトの献呈本
188	ケンブリッジ、大学図書館、Ms.1567(Gg.V.35) fol.210v-263r.	11 世紀	カンタベリーの聖オーガスティン修道院
191	ケンブリッジ、大学図書館、Ms.Add.4078(C) fol.1r-49v.	12 世紀	聖ペテロ修道院、ミュンハウラハ
201	シャルルヴィル=メジエール、市立図書館、Ms.240.	1213 年	記述なし
210	コルマル、市立図書館、Ms.40(337) fol. 84-86r.	16 世紀	記述なし
228	デン・ハーグ、王立図書館、Cod. 72 J 12 fol.49-64.	12-13 世紀	記述なし
237	ドゥエ、市立図書館、Ms.340, fol. 1-49.	12 世紀	Anchin 修道院(ベネディクト会系)
238	ドゥエ、市立図書館、Ms.341, fol.1-16.	13 世紀	ランカスター、1640 年にドゥエの聖グレゴリウス修道院(ベネディクト会系)
241	ドレスデン、ザクセン州立図書館、Ms. A 44, fol.1-48.	15 世紀	記述なし
257	ダラム、大聖堂図書館、Hunter 58, fol.59v-61v.	16 世紀半ば	イングランド
267	アインジーデルン、修道院図書館、Cod.232, p.94.	1507 年	アインジーデルン修道院(ベネディクト会系)
283	エル・エスコリアル、サン・ロレンツォ・デ・エル・エスコリアル修道院王立図書館、f IV 8, 見返し部分。	1467 年	記述なし
303	フィレンツェ、ロレンツォ・メディチ国立図書館、Cod.Amiat.III, pp.173-212.	11 世紀	イタリア
318	フィレンツェ、ロレンツォ・メディチ国立図書館、Plut.XXXI Sin. Cod. IX, pp.1-40.	13 世紀/14 世紀	フィレンツェ、サンタ・クロチエ教会(フランシスコ会系)
333	ゴタ、フリーデンシュタイン城研究図書館、Ms. Memb. I 80(Ms. Lat. Fol.56), fol.1v-40v.	15 世紀	ニュルンベルクのドミニコ会系修道院
339	グラーツ、大学図書館、Cod. 19(40/23), fol.1-16.	15 世紀	記述なし
345	グルノーブル、市立図書館、Ms.232, fol.1-31.	13 世紀	Portes のカルトゥジオ会系修道院
416	ケルン市歴史文書館、GB4*192 fol. 40r-50v.	1439 年	ケルン、聖十字架兄弟団(Köln Kreuzbrüder)
502	ロンドン、大英図書館、Harl.3045 fol.2v-47r.	1170-1180 年	18 世紀まで制作地に所在:アルンシュタインの聖マリア・聖ニコラウス修道院(プレモントレ会系)
510	ロンドン、大英図書館、Royal 8 D XVIII fol.1-6.	12 世紀後半	記述なし
519	ルッカ、国立図書館、Cod.370 B, fol.1-20.	11 世紀	記述なし
521	リヨン、市立図書館、Ms.597(511), fol.1-24.	833-866 年頃	トゥール近郊、後にリヨンの神学校
523	マドリード、大学図書館、Cod. 131, fol. 1 以降。	10 世紀	ザルツブルク、聖ペテロ修道院(ベネディクト会系)
531	マドリード、国立図書館、Cod.Vitr.20-5(A 73), 1r-120v.	10 世紀	記述なし
541	マインツ、市立図書館、Hs. I 281, fol.58r-v.	13 世紀後半	マインツのカルトゥジオ会系修道院
543	マインツ、市立図書館、Hs. I 314, fol.68r-v.	15 世紀	マインツのカルトゥジオ会系修道院
544	マインツ、市立図書館、Hs. I 331, fol.82v-84r.	15 世紀後半	マインツのカルトゥジオ会系修道院
558	モンテカッシーノ、修道院文書館、Cod.134 KK, pp.2-141.	11 世紀	記述なし
561	モンパリエ、大学図書館(医学部セクション)、Ms. H 16, 不完全。	11/12 世紀	記述なし
569	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 706, fol.?-49.	1472 年	エベルスブルクのベネディクト会系修道院
572	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 3050, fol.?-22.	15 世紀	アンデクスのベネディクト会系修道院
577	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 4154, fol.1-44.	1478 年	アウクスブルクのドミニコ会系修道院
602	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 8201, fol.38v-79v.	1414 年	メッテンのベネディクト会系修道院
604	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 8826, fol.179r-192v.	15 世紀	ミュンヘンのフランシスコ会系修道院
612	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 14062, fol.119v.	14/15 世紀	レーバンスブルク、聖エメラム修道院(ベネディクト会系)
613	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm14174, fol. 81r-82r.	1480 年/15 世紀末	レーバンスブルク、聖エメラム修道院(ベネディクト会系)
631	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 18077, fol.1-49.	1459 年	テーゲルンゼーのベネディクト会系修道院
633	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 18188, fol.1-20.	1446 年	テーゲルンゼーのベネディクト会系修道院
643	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 21624, fol.111-121.	1430 年	ヴァイエンシュテファンのベネディクト会系修道院
646	ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Clm 25185, fol.1-59.	1495 年	記述なし
677	ニュルンベルク、市立図書館、Cent. II 56, fol.2r-42r.	15 世紀	聖エギディウス修道院(ベネディクト会系修道院、スコットランド系)
681	オルレアン、市立図書館、Ms. 145(122), pp.1-84.	10 世紀	フルーリー修道院(ベネディクト会系)

684	オックスフォード、オールソウルズ・カレッジ、29, fol.195r-233r.	15 世紀半ば	記述なし
700	オックスフォード、ボドリアン図書館、Douce 192, fol.1-64.	15 世紀 (fol.1-2)、 13 世紀 (fol.3-64)	大陸、1456 年マグステルのヨハネス・ル・ベーギュがフランス国王の秘書(パリの聖十字架修道会士)に献呈。
715	オックスフォード、ボドリアン図書館、Lyell 54, fol. 22v.	12 世紀	南ドイツ/スイス
745	パリ、アーセナル図書館、Ms.472, fol.2v-93v.	1600 年	皇帝ルドルフ二世への献呈本。
747	パリ、アーセナル図書館、Ms.587, fol.1-47.	14 世紀	サン・マルタン・デュ・シャン教会
748	パリ、アーセナル図書館、Ms. 754, fol.1-69.	15 世紀前半	1444 年パリのサン・ヴィクトール修道院
856	パリ、国立図書館、Ms. lat. 2357, fol. I-IIv.	12 世紀	ルーアン司教区のフーカルモン修道院(ベネディクト会系)
860	パリ、国立図書館、Ms. lat. 2421, fol.1-46r.	9 世紀	サン・ドニ修道院(ベネディクト会系)
861	パリ、国立図書館、Ms. lat.2422, fol.1-43.	9 世紀半ば	サン・ドニ修道院、1579 年 J・A・ド・トゥーモとに。
862	パリ、国立図書館、Ms. lat.2423, fol.1-45.	825-850 年頃	フルダ修道院(ベネディクト会系)、ブルージュ大司教ラドゥルフがサン・シュルピス修道院に献呈。
864	パリ、国立図書館、Ms. lat.2425, fol.97r-135r.	12 世紀	フォンテーヌ修道院(シトー会系)、オートゥン司教区。
870	パリ、国立図書館、Ms. lat.2431, fol.163.	12 世紀	サン・マルタン・デュ・シャン修道院(ベネディクト会系)
901	パリ、国立図書館、Ms. lat.8916, fol.1r-55v, 65v.	1468 年	ケルン、聖十字架修道会。書き手:聖十字架修道会士ダニエル・ド・モンテ(1508 年 12 月 6 日死去)
909	パリ、国立図書館、Ms. lat.11685.	11 世紀	パリ、サン・ジェルマン・デ・プレ修道院(ベネディクト会系)
919	パリ、国立図書館、Ms. lat.14289, fol.166v-212r.	15 世紀	パリ、サン・ヴィクトール修道院
948	ボンメルスフェルデン、シェーンボルン伯城図書館、Ms.323, fol.2v-61v.	15 世紀	記述なし
970	ローマ、アカデーミア・デイ・リンチェイ・エ・コルシニアーナ図書館、Ms.Rossi 19(41 G 5), fol.1-48.	1449 年	アウクスブルクの聖ウルリヒ・アフラ修道院(ベネディクト会系)の修士ハインリヒ・ピッティンガー(死去 1487)により書かれた。
989	ザルツブルク、聖ペテロ修道院図書館、a XII 4, pp.3-82.	1481 年	ザルツブルク
1022	セヴィリヤ、コロンビーナ図書館、Z138 28, fol.48v 以降。	14 世紀	記述なし
1028	ストラズブルク、パ＝ラン県公文書館(J suppl.1985-27)、1 二重葉(Doppelblatt)。	9 世紀半ば	南西ドイツ
1030	シュトゥットガルト、ヴェルテンベルク州立図書館、Cod. Theol. Et phil. 2°39, fol.1r-68v.	15 世紀前半	南ドイツ(アウクスブルク?)
1031	シュトゥットガルト、ヴェルテンベルク州立図書館、Cod. Theol. Et phil. 2°40, fol.2r-55v.	1492 年	南西ドイツ、後にシェーンブーフのアインジーデルの聖ペテロ修道院
1033	シュトゥットガルト、ヴェルテンベルク州立図書館、Cod. Theol. Et phil. 2°122, fol.1v-47v.	1490 年	ロルシュ修道院(ベネディクト会系)
1108	トリノ、国立図書館、R1456(K II 20), fol.1-43.	9 世紀半ば	フルダ修道院(ベネディクト会系)
1120	ヴェステルオース、市立図書館、s. n., 1 fol.	825-850 年頃	南西ドイツ
1123	ヴァチカン図書館、Barb. lat. 556, fol.1v.	11/12 世紀	サンタンドレ・ル・アヴィニヨン
1129	ヴァチカン図書館、Chig. A. V 129 I-II, fol.1-38.	14 世紀	記述なし
1131	ヴァチカン図書館、Ottob. lat. 88, fol.?	11 世紀	記述なし
1132	ヴァチカン図書館、Ottob. lat. 107, fol.1r-20v.	10/11 世紀	1680 年までスウェーデン。
1164	ヴァチカン図書館、Reg. lat. 124, fol.1v-61r.	9 世紀半ば頃	826 年フルダ修道院(ベネディクト会系)、マインツ大司教オトガルスに献呈、フルダ修道院、1598 年プラハ、1680 年スウェーデン。
1247	ウィーン、国立図書館、Cod. 652(Theol.39), fol.1v-46v.	9 世紀半ば頃	フルダ修道院(ベネディクト会系)、マインツ、ヴェルツブルクの聖シュテファン、1576 年ウィーン宮廷図書館。
1251	ウィーン、国立図書館、Cod. 908(Univers.620), fol.1v-109.	11 世紀	プラハ近郊のブジェヴノフ、1756 年宮廷図書館。
1252	ウィーン、国立図書館、Cod. 911(Salisb. 43), fol.1v-55.	866-900 年頃	南西ドイツ
1265	ウィーン、国立図書館、Cod. 1335(Lunael. Q 114), fol. 167r-168v.	14-15 世紀	モントゼー修道院(シトー会系)
1272	ウィーン、国立図書館、Cod. 4308(Theol. 443), fol.123r-125r.	1410-1412 年	記述なし
1276	ヴィルヘルミング、修道院図書館、Cod. 101, fol.113r-120r.	15 世紀	ヴィルヘルミング修道院(シトー会系)
1325	ツヴェットウル、修道院、Hs. 86, fol.1r-41r.	12 世紀	ツヴェットウル修道院(シトー会系)

出典：Kottje, Raymund, *Verzeichnis der Handschriften mit Werken des Hrabanus Maurus*. Hannover 2012.







出典：Müller, Hans-Georg, *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis. Studien zur Überlieferung und Geistesgeschichte mit dem Faksimile Textabdruck aus Codex Reg. Lat. 124 der Vatikanischen Bibliothek*. Ratingen 1973, pp.61-111. なお、第2章1節で言及した写本は太い枠線で囲んだ。破線で繋がれているのは、系統関係の裏付けが十分でないが類似性がある写本である。

図版リスト

- 図 1 『聖十字架礼讃』写本 fol.3r (アミアン、市立図書館、Cod.223)
デジタル版 URL : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8452181v.image>
- 図 2 『聖十字架礼讃』写本 fol.2v (アミアン、市立図書館、Cod.223)
デジタル版 URL : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8452181v.image>
- 図 3 『聖十字架礼讃』写本冒頭 (ケンブリッジ、トリニティ・カレッジ、Cod.Libr.B 16.3)
デジタル版 URL : <https://mss-cat.trin.cam.ac.uk/Manuscript/B.16.3/UV>
- 図 4 『聖十字架礼讃』写本 fol.1r (パリ、国立図書館、Ms.lat.2422)
デジタル版 URL : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8490076p/f9.item.zoom#>
- 図 5 『聖十字架礼讃』写本 p.10 (ウィーン、オーストリア国立図書館、Cod.652)
デジタル版 URL :
https://digital.onb.ac.at/RepViewer/viewer.faces?doc=DTL_7223619&order=1&view=SINGLE
- 図 6 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本 fol.2v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 7 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本 fol.3v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 8 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本 fol.4v-5r (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 9 『シュトゥットガルト詩篇』 fol.150v (シュトゥットガルト、ヴェルテンベルク州立図書館、Cod. Bibl. Fol.23)
デジタル版 URL : https://digital.wlb-stuttgart.de/sammlungen/sammlungliste/werksansicht?id=6&tx_dlf%5Border%5D=title&tx_dlf%5Bid%5D=8680&tx_dlf%5Bpage%5D=1
- 図 10 プルデンティウス『プシコマキア』写本 fol.59r (パリ、国立図書館、Ms.lat.8085)
デジタル版 URL : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b600032n/fl.planchecontact.r=latin%208085>
- 図 11 プルデンティウス『プシコマキア』写本 fol.55r (パリ、国立図書館、Ms.lat.8318)
デジタル版 URL : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84238395>
- 図 12 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本 fol.7r (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 13 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本 fol.7v-8r (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 14 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本 fol.8v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 15 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本 fol.10v-11r (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 16 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本 fol.10v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 17 『聖十字架礼讃』ヴァティカン本 fol.11v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)

- デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 37 『聖十字架礼讃』 ヴァティカン本 fol.31v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 38 『聖十字架礼讃』 ヴァティカン本 fol.32v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 39 『聖十字架礼讃』 ヴァティカン本 fol.33v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 40 『聖十字架礼讃』 ヴァティカン本 fol.34v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 41 『聖十字架礼讃』 ヴァティカン本 fol.35v (ローマ、ヴァティカン図書館、Cod.Reg.lat.124)
デジタル版 URL : https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124
- 図 42 ポルフィリウス第 26 詩
出典 : Squire, M. and Wienand, J., *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, p.49.
- 図 43 ポルフィリウス第 27 詩
出典 : Squire, M. and Wienand, J., *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, p.50.
- 図 44 ポルフィリウス第 3 詩
出典 : Squire, M. and Wienand, J., *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, p.29.
- 図 45 ポルフィリウス第 6 詩
出典 : Squire, M. and Wienand, J., *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, p.31.
- 図 46 ポルフィリウス第 8 詩
出典 : Squire, M. and Wienand, J., *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, p.33.
- 図 47 ポルフィリウス第 14 詩
出典 : Squire, M. and Wienand, J., *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, p.39.
- 図 48 フォルトゥナートゥス「聖十字架のしるしについて」(ザンクトガレン修道院附属図書館、Cod.Sang.196、p.36)
デジタル版 URL : <https://www.e-codices.unifr.ch/en/csg/0196/2>
- 図 49 フォルトゥナートゥス 未完成の十字架詩 (ザンクトガレン修道院附属図書館、Cod.Sang.196、p.37)
デジタル版 URL : <https://www.e-codices.unifr.ch/en/csg/0196/2>
- 図 50 フォルトゥナートゥス 司教シアグリウス宛の形象詩 (ザンクトガレン修道院附属図書館、Cod.Sang.196、p.147.)
- 図 51 ボニファティウスの形象詩 (ヴェルツブルク大学図書館、M.p.th.f.29、 fol.44r)

- デジタル版 URL : <http://vb.uni-wuerzburg.de/ub/mpthf29/ueber.html>
- 図 52 アルクインの形象詩「地上の飾り/栄光たる十字架 (Crux decus es mundi)」(MGH, Poetae Latini aevi Carolini (I) , p.225.)
- 図 53 アルクインによるカール大帝の頌詩 (MGH, Poetae Latini aevi Carolini (I) , p.227.)
- 図 54 ポルフィリウス第 2 詩
出典 : Squire, M. and Wienand, J., Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine, Paderborn, 2017, p.28.
- 図 55 ヨセフス・スコトゥス第 1 詩 (MGH, Poetae Latini aevi Carolini (I) , p.153.)
- 図 56 ヨセフス・スコトゥス第 2 詩 (MGH, Poetae Latini aevi Carolini (I) , p.155.)
- 図 57 ヨセフス・スコトゥス第 3 詩 (MGH, Poetae Latini aevi Carolini (I) , p.157.)
- 図 58 ヨセフス・スコトゥス第 4 詩 (MGH, Poetae Latini aevi Carolini (I) , p.159.)
- 図 59 カール大帝のモノグラム
URL : https://en.wikipedia.org/wiki/Signum_manus#/media/File:Signum_manus_of_Charlemagne.svg
- 図 60 カール大帝の硬貨 (793/794-813) (ベルリン、ボーデ博物館、コイン・キャビネット No.18245145)
デジタル版 URL : <https://ikmk.smb.museum/object?id=18245145>
- 図 61 カール大帝の硬貨 (812-814 年頃) (ベルリン、ボーデ博物館、コイン・キャビネット No.18202746)
デジタル版 URL : <https://ikmk.smb.museum/object?lang=de&id=18202746>
- 図 62 『ゴデスカルクの福音書』 fol.3v (パリ、フランス国立図書館、Nouv. Acq. Lat. 1203)
デジタル版 URL : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b6000718s>
- 図 63 『サン・マルタン・デュ・シャンの福音書』 fol.58r (パリ、フランス国立図書館、アーセナル図書館、Ms.599)
デジタル版 URL : <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84559055>
- 図 64 『アダ福音書』福音書対観表最初の見開き (トリアー、市立図書館、Hs.22)
デジタル版 URL : <https://www.stadtbibliothek-weberbach.de/wissenschaftliche-bibliothek/digitalisate/broker.jsp?uMen=8c320c67-b2c6-be61-5296-ca50146a43ca&uCon=25c65b67-c46b-e615-296c-a50146a43ca0&uTem=63f7089a-29fc-6c31-e777-d8b132ead2aa>
- 図 65 『アダ福音書』表紙 (トリアー、市立図書館、Hs.22)
デジタル版 URL : <https://www.stadtbibliothek-weberbach.de/wissenschaftliche-bibliothek/digitalisate/broker.jsp?uMen=8c320c67-b2c6-be61-5296-ca50146a43ca&uCon=25c65b67-c46b-e615-296c-a50146a43ca0&uTem=63f7089a-29fc-6c31-e777-d8b132ead2aa>
- 図 66 『リンドーの福音書』表紙 (ニューヨーク、モルガン・ライブラリー、MS M1)
デジタル版 URL : <https://www.themorgan.org/collection/lindau-gospels>
- 図 67 ルートヴィヒ敬虔帝のモノグラム (823 年) (シュトゥットガルト、バーデン=ヴュルテンベルク州立公文書館、本館、H51 U 371)
デジタル版 URL : <https://www.deutsche-digitale-bibliothek.de/item/WKHV7QD3Q74NVWACHL6VCKSSSAKBQNLPL>

- 図 68 ルートヴィヒ敬虔帝の硬貨（814 年以降）（ベルリン、ボーデ博物館、コイン・キャビネット、No.18202801）
デジタル版 URL：<https://ikmk.smb.museum/object?lang=de&id=18202801>
- 図 69 ルートヴィヒ敬虔帝の硬貨（814-819 年）（ベルリン、ボーデ博物館、コイン・キャビネット、No.18202760）
デジタル版 URL：<https://ikmk.smb.museum/object?lang=de&id=18202760>
- 図 70 ルートヴィヒ敬虔帝の硬貨（822-840 年）（ベルリン、ボーデ博物館、コイン・キャビネット、No.18202815）
デジタル版 URL：<https://ikmk.smb.museum/object?lang=de&id=18202815>
- 図 71 ルートヴィヒ敬虔帝の硬貨（827-840 年、教皇庁から発行）（ベルリン、ボーデ博物館、コイン・キャビネット、No.18214164）
デジタル版 URL：<https://ikmk.smb.museum/object?lang=de&id=18214164>
- 図 72 『シュトゥットガルト詩篇』 fol.27r（シュトゥットガルト、ヴュルテンベルク州立図書館、Cod.bibl.fol.23）
デジタル版 URL：https://digital.wlb-stuttgart.de/sammlungen/sammlungsliste/werksansicht?id=6&tx_dlf%5Border%5D=title&tx_dlf%5Bid%5D=8680&tx_dlf%5Bpage%5D=1
- 図 73 『ユトレヒト詩篇』 fol.56v、右上に磔刑に処されたキリストが描かれている。（ユトレヒト大学図書館、MS Bibl. Rhenotraiectinae I Nr 32）
デジタル版 URL：<https://psalter.library.uu.nl/page/1>
- 図 74 『ルートヴィヒドイツ人王の福音書』 fol.120r（ベルリン、州立図書館、Ms. theol. lat. fol. 58）
デジタル版 URL：<https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht/?PPN=PPN687490065#!>
- 図 75 『エボの福音書』 fol.19r（エペルネー市立図書館、Ms.1）
デジタル版 URL：<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8458375p.image>
- 図 76 キエーティ周辺で制作された集合写本 fol.140v（カールスルーエ、バーデン州立図書館、Aug.Perg.229）
デジタル版 URL：<https://digital.blb-karlsruhe.de/blbhs/content/thumbview/17187>
- 図 77 アインハルトの凱旋門型十字架台の 17 世紀のスケッチ（パリ、国立図書館、Français 10440 (2)）
デジタル版 URL：<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52503878w/f8.image>
- 図 78 『エボの福音書』福音書記者マルコ像とそれに対されたイニシャル（エペルネー市立図書館、Ms.1、fol.60v-61r）
- 図 79 『シュトゥットガルト詩篇』 fol.29v（シュトゥットガルト、ヴュルテンベルク州立図書館、Cod.bibl.fol.23）
デジタル版 URL：https://digital.wlb-stuttgart.de/sammlungen/sammlungsliste/werksansicht?id=6&tx_dlf%5Border%5D=title&tx_dlf%5Bid%5D=8680&tx_dlf%5Bpage%5D=1
- 図 80 ボドリアン図書館所蔵の象牙板（オックスフォード、ボドリアン図書館、Ms.Douce 176）
デジタル版 URL：<https://digital.bodleian.ox.ac.uk/objects/e3408f3e-42e5-48ea-88fa-3f4da7765ecf/>

参考文献目錄

(1) 刊行史料

1. Gregory of Tours, *The History of the Franks Vol.2*, Trans.by Dalton, O.M., Oxford, 1927.
2. *Le Liber pontificalis I*. Ed. Duchense, L., Paris, 1886.
3. MGH, *Capitula* Bd.1, ed. Boretius, A., Hannover, 1883, pp.53-61(Admonitio Generalis, 789. Mart.23).
4. MGH, *Diplomata*, DD Karol. Bd.1. ed. Michael Tangle, Hannover, 1906, Nos.13, 21, 63,106, 127, 139, 140, 145.
5. MGH, *Epistolae*, Bd.3, ed. Ernst Dümmler. Berlin,1892, p.257, 269, pp.293-294, pp.298-302, p.367-369, (S. Bonifatii et Lulli epistolae), pp.539-540(Codex Carolinus 33).
6. —, *Epistolae*, Bd.4, ed. Ernst Dümmler. Berlin, 1895, p.221, 336, (Alcuini Epistolae), p.611(Claudii Taurinensis Episcopi Epistolae).
7. —, *Epistolae*, Bd.5, ed. Ernst Dümmler. Berlin, 1899, pp.146-149. (Appendix. Einharti quaestio de adoranda crucis.), pp.379-533(Hrabani Mauri Epistolae),
8. —, LL. nat. Germ. Bd. 4.2, *Lex Salica*, ed. Eckhard, K.A. Hannover, 1969.
9. —, *Leges, Conc.2 Suppl.1*, ed. Freeman, A. Hannover, 1998(*Opus Caroli regis contra synodrum*).
10. —, *Leges, Conc.2, 2*, ed. Werminghoff, A., Hannover,1908, pp.473-551(*Conc. Parisiense a. 825*).
11. —, *Poetae*, Bd.1, ed. Ernst Dümmler, Berlin, 1881, pp.380-381(*De conversione Saxonum*), pp.490-493(*Theodulfi Carmina*).
12. —, *Poetae*, Bd.2, ed. Ernst Dümmler, Berlin, 1884, p.154, 162, 196, 206, (Hrabani Mauri Carmina).
13. —, *Scriptores*, SS rer. Germ. Bd. 25, ed. Pertz, G.H.& Waitz, G., Hannover, 1911(*Einhardi Vita Karoli Magni*).
14. —, *Scriptores*, SS rer. Germ. Bd.64, ed. Tremp, E., Hannover, 1995 (*Thegan, Die Taten Kaiser Ludwigs; Astronomus, Das Leben Kaiser Ludwigs*).
15. —, *Scriptores*, SS, Bd.1, ed. Pertz, G.H, Hannover, 1826, pp.135-218 (*Einhardi Annales regni a.741-829*).
16. —, *Scriptores*, SS, Bd.13, ed. Waitz, G., Hannover, 1881, pp.272-273(*Catalogus Abbatum Fuldensium*).
17. —, *Scriptores*, SS, Bd.15,1, ed. Pertz, G.H.& Waitz, G., Hannover, 1887, p.118-131(*Vita Leobae abbatissae Biscofesheimensis auctore Rudolfo Fuldensi*), pp.151-163(*Ermanrici Sermo De Vita S. Sualonis dicti Soli*), p.221-233(*Candidi Vita Eigilis Abbatis Fuldenses*).
18. —, *Scriptores*, SS, Bd.2, ed. Pertz, G. H., Hannover, 1829, pp.365-377(*Eigils Vita Sancti Sturmii*).
19. Migne, J.P. *Patrologia Latina* 19, Paris, 1846, Spp.393-394(*Epistola Constantini ad Porphyrium*).
20. —. *Patrologia Latina* 22, Paris, 1842(1845), Spp.878-906(*Epistola CVIII Ad Eustochium Virginem. Epitaphium Paulae matris*).
21. —. *Patrologia Latina* 27, Paris, 1846, Spp.553-652(*Appendix ad Eusebii Chronicon: Samuelis Summari Temporum Pars II*).
22. —. *Patrologia Latina* 34, Paris, 1845, Sp.222-223(*Liber Imperfectus de genesi ad Litteram*).
23. —. *Patrologia Latina* 83, Paris, 1850(1862), Spp.179-200(*Sancti Isidori Hispalensis episcopi Liber Numerorum qui in sanctis scripturis occurrunt*).
24. — *Patrologia Latina* 90, 1850, Spp.293-598(*De Temporum Ratione*).
25. —. *Patrologia Latina* 100, Paris, 1851(1863), Spp.89-120(*Flacci Alcuini Vita ex Vetusto codice ms. S. Mariae Rhemensis primum a D. Andrea Quercetano edita*), Spp.733-1006(*Commentaria in sancti Joannis Evangelium*).
26. —. *Patrologia Latina* 102, Paris, 1851(1865), Spp.931-970 (*Via Regia ad Ludovicum Pium*).
27. —. *Patrologia Latina* 104, Paris, 1851(1864) Spp.979-1331A (*Ludoivici I cognomento pius. Diplomata Ecclesiastica-Epistolae*).
28. —. *Patrologia Latina* 105, Paris, 1851(1864), Spp.457-528(*Dungali Reclusi Liber Adversus Claudium Taurinensem*).
29. —. *Patrologia Latina* 106, Paris, 1851(1864) Paris, Sp.16(*Aeropagitica sive Sancti Dionysii Vita Jussu Ludovici Pii ab Hilduino scripta*), 303-386(*Jonas Aurelianensis Episcopus De cultu imaginum libri tres ad Carolum regem*).
30. —. *Patrologia Latina* 107, Paris, 1851(1864), Spp.39-66(B. Rabani Mauri Vita, auctore Rudolfo Scholastico, ejus discipulo),67-104(B. Rabani Mauri Vita altera, auctore Trithemio.), 293-418(*De clericorum institutione ad Haistulphum libri tres*), 669-726(*Liber de Computo*), 727-1154(*Comentariorum in Matthaem*).
31. Perrin, M. *Rabani Mauri In honorem Sanctae Crucis*, Turnhout, 1997.
32. Stengel, E. *Urkundenbuch des Klosters Fulda: 1, Die Zeit der Äbte Sturmii und Baugulf; 2, Die Zeit des Abtes Baugulf / bearb. von Edmund E. Stengel (Veröffentlichungen der Historischen Kommission für Hessen und Waldeck; 10,1,2)*, Marburg 1956.
33. 秋山学『『カロリング文書』(Libri Carolini)』、『西洋美術研究』No.6、三元社、2001年、pp.155-159.
34. 旧約聖書翻訳委員会『旧約聖書 III 預言書』、2005年B。
35. 旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IV 諸書』岩波書店、2005年A。

36. 旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 VII イザヤ書』岩波書店、2007年
37. 旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 IX エゼキエル書』岩波書店、1999年。
38. 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2004年。

(2) 辞典・書誌

39. Depreux, P. *Prosopographie de l'Entourage de Louis le Pieux (781-840)*, Sigmaringen, 1997.
40. Encyclopaedia Britannica, Vol.13, Cambridge, 1911.
41. Kottje, R. *Verzeichnis der Handschriften mit den Werken des Hrabanus Maurus*, Hannover 2012.
42. Lexikon des Mittelalters, CD-ROM- Ausgabe, Verlag J.B. Metzler, 2000.

(3) 研究文献 (欧語)

43. Alter, W. Mutterstadt und Muther in Karolingischer Zeit. in; *Mitteilungen des Historischen Vereins der Pfalz*, 99. Band. Speyer, 2001. pp.7-61.
44. Beuckers, K. G. *Kreuzeslob. Frühmittelalterliche Bildgedichte von Hrabanus Maurus. Kunsthistorischer Kommentar zur Faksimile-Edition der Handschrift aus der Bibliotheca Apostolica Vaticana Reginensis latinus 124*, Stuttgart, 2014.
45. Bigott, B. Politische und Ideologische Positionen Hrabans unter Ludwig dem Frommen und seinen Söhnen., in; *Raban Maur et son temps*, Turnhout, 2010.
46. Brennan, B. The Image of the Frankish Kings in the Poetry of Venantius Fortunatus, in; *Journal of Medieval History* 10, Amsterdam 1984, pp.1-11.
47. Brunhölzl, F. Zur geistigen Bedeutung des Hrabanus Maurus, in; Kottje, R, Zimmerman, H. (Publ.) *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*, Wiesbaden, 1982, pp.1-17.
48. Büttner, H. Herkunft und Familie von Hrabanus Maurus, in; *Mainzer Altnach*, Mainz 1957, pp.51-56.
49. Cabaniss, A. *Charlemagne's cousins: contemporary lives of Adalard and Wala*, California, 1967.
50. Chazelle, C. *The Crucified God in the Carolingian Era: Theology and Art of Christ's Passion*, Cambridge, 2001.
51. Colish, L.M. Carolingian Debates over Nihil and Tenebrae: A Study in Theological Method, in; *Speculum*, vol.59, Cambridge, 1984, pp.757-795.
52. Curtius, E.R. *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Tübingen und Basel, 1948.
53. Dahl, K. *Rabanus Maurus, Erst Abt Zu Fulda, Dann Erzbischof Zu Mainz*, Darmstadt, 1828.
54. Depreux, P., Lebecq, S., Perrin, M., Syerwiniack, O., *Raban Maur et son Temps*, Turnhout, 2011.
55. Djurslev, C. T. Hrabanus Maurus Post-Patristic Renovation of 1 Maccabees 11–8. in; *Open Theology*, Vol.7, DeGruyter, 2021, pp.271-288.
56. Dreyer, M. Alkuin und Hrabanus Maurus; Wozu Wissen? in; *Hrabanus Maurus: Gelehrter, Abt von Fulda und Erzbischof von Mainz*. Mainz, 2006, pp.35-49.
57. Dümmler, E. *Rabanusstudien, Sitzungsberichte d. Berliner Akad.* 1898, pp.24-42.
58. Eckhart, J. G. *Commentarii de rebus Franciae orientalis et episcopatus Wirceburgensis I*, Würzburg 1729, pp. 729-731.
59. Enno Friedrich, M.A. Das Christliche Weltgewebe des Venantius Fortunatus – Weltbeziehungen und die Carmina, Unveröffentlichte Doktordissertation, Karl-Franzens-Universität Graz, 2020.
60. Ernst, U. (Hrsg). *Visuelle Poesie: Historische Dokumentation Theoretischer Zeugnisse, Band1: Von der Antike bis zum Barock*, Berlin, 2017.
61. —. *Carmen Figuratum. Geschichte des Figurengedichts von den antiken Ursprüngen bis zum Ausgang des Mittelalters*, Köln 1991.
62. —. Die Kreuzgedichte des Hrabanus Maurus als multimediales Kunstwerk. Textualität-Ikonizität-Numeralität, in; Schmitz, U. (Publ.) *Wissen und Neue Medien: Bilder und Zeichen von 800 bis 2000*, Berlin, 2003, pp.13-37.
63. Ferrari, M. C. Hrabonica. Hrabans De laudibus sanctae crucis im Spiegel der Neueren Forschung, in; *Kloster Fulda in der Welt der Karolinger und Ottonen*, Frankfurt am Main, 1996, pp.493-526.
64. Freise, E. Zum Geburtsjahr des Hrabanus Maurus, in; *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*, Wiesbaden, 1982, pp.18-80.
65. Frolow, A. *La relique de la vraie Croix: recherches sur le développement d'un culte*, Paris, 1961.
66. Garipzanov, I. *Graphic Signs of Authority in Late Antiquity and the Early Middle Ages, 300-900.*, Oxford, 2018.
67. —. *The Symbolic Language of Authority in the Carolingian World (c. 751-877)*, Leiden, 2008.
68. Haarländer, S. *Rabanus Maurus zum Kennenlernen- Ein Lesebuch mit tiner Einführung in sein Leben und Werk*, Mainz 2006.
69. Hartmann, W. Die Mainzer Synoden des Hrabanus Maurus, in; *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*, Wiesbaden, 1982.

70. Homburger, O. *Die illustrierten Handschriften der Burgerbibliothek Bern*. Bd. 1. Bern 1962. S. 85–86, 162–163. Redigiert und ergänzt von Florian Mittenhuber, Februar 2019.
71. Jong, M.D. *In Samuel's Image: Child Oblation in the Early Medieval West*, Leiden/ New York/ Köln, 1996.
72. Jun, J. N. The Letter of Fredegisus of Tours on Nothingness and Shadow: A New Translation and Commentary, in; *Comitatus. A journal of medieval and renaissance studies*, Bd 34, Los Angeles, California, 2003, pp.150-169.
73. Kantorowicz, E.H. *Laudes regiae; a study in liturgical acclamations and mediaeval ruler worship*, New York, 1974.
74. Kessler, H.L. *Spiritual Seeing, Picturing God's Invisibility in Medieval Art*, Pennsylvania, 2000.
75. Klein, H. Eastern Objects and Western Desires: Relics and Reliquaries between Byzantium and the West, in: *Dumbarton Oaks Papers*, Bd.58, 2004, pp.283-314.
76. Körfer, A.L., Lector Ludens: Spiel und Rätsel in Optatian Panegyrik, in; *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, pp.191-226.
77. Kottje, R. (19) Hrabanus Maurus - "Praeceptor Germaniae"?, in; *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* Bd. 31, Köln, 1975, pp.534-545.
78. Kottje, R. Die Handschriftliche Überlieferung der Bibelkommentare des Hrabanus Maurus, in; *Raban Maur et son temps. Collection Haut Moyen Âge / 9*. Turnhout (2010), pp.259-274.
79. Kottje, R. Rezension zu H.-G. Müller: Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis. Studien zur Überlieferung und Geistesgeschichte mit dem Faksimile Textabdruck aus Codex Reg. Lat. 124 der Vatikanischen Bibliothek(1973) in; *Rheinische Vierteljahrsblätter* 40, Bonn, 1976, pp.278-280.
80. —.& Zimmermann, H. *Hrabanus Maurus. Lehrer, Abt und Bischof*, Wiesbaden 1982.
81. Kunstmann, F. *Rabanus Magnentius Maurus. Eine Historische Monographie*. Mainz 1841.
82. Kwapisz, J. Optatian and the Order of Court Riddlers, in; *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, pp.165-190.
83. Laistner, M.L.W. *Thought and letters in Western Europe A. D. 500 to 900*, London, 1957.
84. Lapidge, M. *Hilduin of Saint-Denis: The Passio S. Dionysii in Prose and Verse*, Leiden, 2017.
85. Lehmann, P. Die alte Klosterbibliothek Fulda und ihre Bedeutung, in; *Erforschung des Mittelalters 1*, Stuttgart, 1959.
86. —. *Fuldaer Studien*, München, 1925.
87. Levison, W. *England and the Continent in the Eighth Century*, Oxford, 1946(1998).
88. Lowe, E. A. *Codices Latini Antiquiores. A Paleographical Guide to Latin Manuscripts Prior to the ninth Century*, Bd. VII, Oxford, 1956.
89. Manitius, M. *Geschichte der lateinischen Literatur des Mittelalters. Erster Band. Von Justinian bis zur Mitte des zehnten Jahrhunderts (Handbuch der Altertumswissenschaft IX. Abt., II.1)*, München 1911.
90. Meyer, H.& Suntrup, R. *Lexikon der mittelalterlichen Zahlenbedeutungen*, München, 1987.
91. Moreton, B. *The Eighth Century Gelasian Sacramentary: A Study in Tradition*, London, 1976.
92. Müller, H.G. *Hrabanus Maurus-De laudibus sanctae crucis. Studien zur Überlieferung und Geistesgeschichte mit dem Faksimile Textabdruck aus Codex Reg. Lat. 124 der Vatikanischen Bibliothek*, Ratingen, 1973.
93. Mütterich, F. *Studies in Carolingian Manuscript Illumination*, Pindar, 2004.
94. Newman, B. God and the Goddesses: Vision, Poetry, and Belief in the Middle Ages. in; *Poetry and Philosophy in the Middle Ages: A Festschrift for Peter Dronke*. Leiden, 2001, pp.173-196.
95. Noble, F.X.T. *Images, Iconoclasm, and the Carolingians*, Philadelphia, 2009.
96. Patzold, S., Hraban, Gottschalk und der Traktat De Oblatione Puerorum, in; *Raban Maur et son temps*, Turnhout, 2010, pp.105-118
97. Raaijmakers, J.E. *The Making of the Monastic Community of Fulda, c.744-c.900*. Cambridge, 2012.
98. Rädle, F. *Studien zu Smaragd von Saint-Mihiel*, München, 1974.
99. Rand, E.K., *A Survey of the Manuscripts of Tours*, Cambridge, 1929.
100. Reuter, T. *The Annales of Fulda: Ninth Century Histories, Vol. II*, Manchester/ New York, 1992, pp.22-23.
101. Rühl, M. Vielschichtige Palimpseste: Optatian Gedichte und die Möglichkeiten individueller Lektüren, in; *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, pp.227-256.
102. Rutger, K. *Rethinking Authority in the Carolingian Era: Ideals and Expectations during the Reign of Louis the Pious (813-828)*, Amsterdam, 2019.
103. Schaller, D. Der junge "Rabe" am Hof Karls des Großen(Theodulf. carm. 27), in; Authenticht, J., Brunhölzl, F.(Hrsg.) *Festschrift Bernhard Bischoff. Zu seinem 65. Geburtstag dargebracht von Freunden, Kollegen und Schülern*, Stuttgart 1971.
104. Schaller, D. Die Karolingischen Figurengedichte des Cod. Bern. 212. in; *Medium aevum vivum: Festschrift für Walther Bulst*, Heidelberg, 1961. pp.22-47.
105. Schieffer, T. Hrabanus Maurus. Zum 1100. Todestag am 4. Februar 1956, in; *Archiv für mittelrheinische Kirchengeschichte* Bd. 8, Mainz, 1956.

106. Schierl, P.& Lämmle, C. S. Herrscherbilder: Optatian und die Strukturen des Panegyrischen, in; *Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine*, Paderborn, 2017, pp.283-318.
107. Schrör, M. Aufstieg und Fall des Erzbischofs Ebo von Reims, in; *Streit am Hof im frühen Mittelalter*, Göttingen, 2011, pp.203-222.
108. Schulz, M. Der codierte Christus Figuration als Bild Text Dynamik im De laudibus sanctae crucis des Hrabanus Maurus, in; *Zeitschrift für Kunstgeschichte*, Bd.79, H. 1, München, 2016, pp. 10-43.
109. Sciacca, C.D. *Finding the Right Words: Isidore's Synonyma in Anglo Saxon England*, Toronto, 2008.
110. Sears, E. Louis the Pious as *Miles Christi*, in; Godman, P. and Collins, R. (Edit.) *Charlemagne's Heir: New Perspectives on the Reign of Louis the Pious (814-840)*, Oxford, 1990, pp.605-628.
111. Simon, B. *Jahrbücher des Fränkischen Reichs unter Ludwig dem Frommen*, Bd.2, Berlin, 1876.
112. Spilling, H. *Opus Magnentii Hrabani Mauri in honorem sanctae crucis conditum. Hrabans Beziehung zu seinem Werk*, Frankfurt am Main 1992.
113. Staab, F. Rabanus Maurus und Mainz, in; *Rabanus Maurus in seiner Zeit 780-1980*. Mainz, 1980, pp.9-17.
114. Staab, F. Wann wurde Hrabanus Maurus Mönch in Fulda? - Beobachtungen zur Anteilnahme seiner Familie an den Anfängen seiner Laufbahn, in; *Hrabanus Maurus-Lehrer, Abt und Bischof*, Wiesbaden, 1982, pp.76-101.
115. Taeger, B. *Zahlensymbolik bei Hraban, bei Hincmar- und im "Heliand"?* Studien zur Zahlensymbolik im Frühmittelalter, Wiesbaden, 1970.
116. Tongeren, L.V., *Exaltation of the Cross: Toward the Origin of the Feast of the Cross and the Meaning of the Cross in Early Medieval Liturgy*, Leuven, Paris, Sterling, Virginia, 2000.
117. Wapnewski, P. *Deutsche Literatur des Mittelalters: Ein Abriß von den Anfängen bis zum Ende der Blütezeit*, Göttingen, 1990.
118. Ward, G. The Sense of an Ending in the Histories of Frechulf of Lisieux, in; *Historiography and Identity III: Carolingian Approaches*, Turnhout, 2021, pp.291-318.
119. Wilhelmy, W. (Ed.), Kotzur, H.J. (Publ.) *Hrabanus Maurus: Auf den Spuren eines Karolingischen Gelehrten; [Katalog zur Ausstellung im Bischöflichen Dom- und Diözesanmuseum Mainz 2006]*, Mainz, 2006.

(4) 研究文献 (邦語)

120. アウグスティヌス 著/ 赤木善光・泉治典・金子晴勇 共編『アウグスティヌス著作集 23』教文館、1993年。
121. 五十嵐修『王国・教会・帝国—カール大帝期の王権と国家』知泉書館、2010年。
122. 五十嵐修「帝国理念の交錯—カール戴冠再考—」、『人文・社会科学論集』19号、東洋英和女学院大学、2001年、19-49頁。
123. 岩村清太著『ヨーロッパ中世の自由学芸と教育』、知泉書館、2007年。
124. 岩村清太『カロリング帝国の統一と分割—『ニタルトの歴史四巻』』知泉書院、2016年。
125. オイゲン・エーヴィヒ著『カロリング帝国とキリスト教会』瀬原義生訳、文理閣、2017年。
126. 川中なほ子「聖アウグスチヌスの『エンキリディオン』」『中世思想研究』第2号、1959年、116~127頁。
127. クリスチャン・エック「見る、それとも読む?—中世写本彩色における画中テキスト」『「宗教美術におけるイメージとテキスト」21世紀 COE プログラム「総合テキスト科学の構築」第5回国際研究集会報告書』、名古屋大学大学院文学研究科、2005年、87-104頁。
128. 佐藤彰一著『フランク史 III カロリング朝の達成』名古屋大学出版会、2023年。
129. 佐藤彰一著『贖罪のヨーロッパ—中止修道院の祈りと書物』中公新書、2016年。
130. 上智大学中世思想研究所『中世思想原典集成 6 カロリング・ルネサンス』平凡社、1992年。
131. 辻佐保子『ロマネスク美術とその周辺』岩波書店、2007年。
132. 鼓みどり「カロリング朝写本彩色における観念的図式について」『美学美術史研究論集』、第22号、2007年、1-13頁。
133. 長澤咲耶「カロリング期の説教—ラバヌス・マウルスの説教集の分析を通して—」『クリオ』35・36号、2020-2021年、83-97頁。
134. 西脇純「グレゴリオ聖歌研究 (4)」『南山神学』35号、2012年、111-133頁。
135. ピエール・リシェ著『中世における教育・文化』岩村清太訳東洋館出版社、1988年。

(5) ウェブサイト

136. Halsall, P. *Willibald: The Life of St. Boniface*, Fordham University, Medieval Sourcebook. 2000.09.01, Retrieved 27. Aug. 2023 (<https://sourcebooks.fordham.edu/basis/willibald-boniface.asp>).
137. Halsall, P. *The Correspondence of St. Boniface*, Fordham University, Medieval Sourcebook. 2000.10.24. Retrieved 03. Sep. 2023 (<https://sourcebooks.fordham.edu/basis/boniface-letters.asp>)
138. Halsall, P. *Eigil: Life of Sturm, early 9th Century*, Fordham University, Medieval Sourcebook. 2000. 10.01. Retrieved 04. Sep. 2023 (<https://sourcebooks.fordham.edu/basis/sturm.asp>)
139. *The Catholic Encyclopedia*. New York: Robert Appleton Company from New Advent: (<http://www.newadvent.org/cathen/02656a.htm>).
140. Halsall, P. *Charlemagne: Letter to Baugulf of Fulda, c.780-800*, Fordham University, Medieval Sourcebook. 1996. Jan. Retrieved 05. Sep. 2023 (<https://sourcebooks.fordham.edu/source/carol-baugulf.asp>)
141. Gallica, Rabanus Maurus, *De laudibus sanctae Crucis*, III (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9078151c/f8.item>)
142. [Alvin - De laudibus Sanctae Crucis \(alvin-portal.org\)](#) Retrieved on 26. Sep. 2023.
143. Ars Grammatica, in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, 2021.01.03, Retrieved on 1. Jan. 2024. (<https://www.geschichtsquellen.de/werk/670> Bearbeitungsstand: 22.11.2023)
144. Hilduinus abba S. Dionysii Parisiensis”, in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*. Retrieved on 11. Dec. 2023. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/2883> Bearbeitungsstand: 15.04.2021)
145. Ermoldus Nigellus, in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, Retrieved on 13. Dec. 2023 (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/2188?mark=%28%3Fis%29%28ermoldus%5C%20nigellus%29>, Bearbeitungsstand: 28.09.2022)
146. Walafridus Strabo, in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, Retrieved on 13.Dec.2023. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/5070>, Bearbeitungsstand: 02.11.2023)
147. Dicuil Hibernicus, in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, Retrieved on 13.Dec.2023. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/1932> , Bearbeitungsstand: 17.07.2023)
148. Agobardus archiepiscopus Lugdunensis in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, Retrieved on 29. Dec.2023. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/147> Bearbeitungsstand: 15.03.2021)
149. Theodulfus episcopus Aurelianensis (Theodulf von Orléans), in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, Retrieved on 13. Dec.2023. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/4903> Bearbeitungsstand: 13.09.2023)
150. Paulus Diaconus, in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, Retrieved on 11. Dec. 2023. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/4242> Bearbeitungsstand: 09.06.2023)
151. Paulinus patriarcha Aquileiensis, in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, Retrieved on 13. Dec. 2023. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/4226> Bearbeitungsstand: 22.05.2023)
152. Angilbertus abbas S. Richarii, in; *Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters*, Retrieved on 13. Dec. 2023. (<https://www.geschichtsquellen.de/autor/576> Bearbeitungsstand: 10.09.2019)
153. ALCVIN. *Carm*, Oxford University, CLASP: A Consolidated Library of Anglo Saxon Poetry, Retrieved on 08. Nov.2023 (<https://clasp.ell.ox.ac.uk/db-latest/poem/ALCVIN.Carm>).
154. Translated by W.H. Fremantle, G. Lewis and W.G. Martley. From *Nicene and Post-Nicene Fathers*, Second Series, Vol. 6. Edited by Philip Schaff and Henry Wace. (Buffalo, NY: Christian Literature Publishing Co., 1893.) Revised and edited for New Advent by Kevin Knight. (<http://www.newadvent.org/fathers/3001108.htm>).
155. Geschichtsquellen des deutschen Mittelalters,([Geschichtsquellen: Start](#))
156. Halsal, P. Internet Medieval Sourcebook, (<https://sourcebooks.fordham.edu/sbook.asp>),ed.

(6) 画像史料

157. 『アダ福音書』 トリアー、市立図書館、Hs.22 (<https://www.stadtbibliothek-weberbach.de/wissenschaftliche-bibliothek/digitalisate/broker.jsp?uMen=8c320c67-b2c6-be61-5296-ca50146a43ca&uCon=25c65b67-c46b-e615-296c-a50146a43ca0&uTem=63f7089a-29fc-6c31-e777-d8b132ead2aa>)
158. 『エボの福音書』 エベルネー市立図書館、Ms.1 (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8458375p.image>)
159. 『ゴデスカルクの福音書』 パリ、国立図書館、NAL1203 (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b6000718s>)
160. 『サン・マルタン・デュ・シャンの福音書』 パリ、アーセナル図書館、Ms.599 (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84559055>)
161. 『シュトゥットガルト詩篇』 ヴュルテンベルク州立図書館、Cod. Bibl. fol. 23 (https://digital.wlb-stuttgart.de/sammlungen/sammlungsliste/werksansicht?id=6&tx_dlf%5Border%5D=title&tx_dlf%5Bid%5D=8680&tx_dlf%5Bpage%5D=1)

162. 『ユトレヒト詩篇』ユトレヒト大学図書館、MS Bibl. Rhenotraiectinae I Nr 32
(<https://psalter.library.uu.nl/page/1>)
163. 『リンドーの福音書』モーガン図書館、MS M. 1 (<https://www.themorgan.org/collection/lindau-gospels>)
164. 『ルートヴィヒドイツ人王の福音書』ベルリン州立図書館 Ms. theol. lat. fol. 58
(<https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht/?PPN=PPN687490065#!>)
165. アインハルトの凱旋門型十字架台 Français 10440 (2)
(<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52503878w/f8.image>)
166. アミアン、市立図書館 (Cod.223) (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8452181v.image>)
167. アルクインの形象詩 MGH, Poetae, Bd.1, pp.225-227.
168. ヴァティカン本『聖十字架礼賛』Reg.lat.124 (https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124)
169. ウィーン、オーストリア国立図書館、Cod.652
(https://digital.onb.ac.at/RepViewer/viewer.faces?doc=DTL_7223619&order=1&view=SINGLE)
170. オックスフォード、ボドリアン図書館、Ms. Douce 12 (<https://digital.bodleian.ox.ac.uk/objects/e3408f3e-42e5-48ea-88fa-3f4da7765ecf/>)
171. カールスルーエ、バーデン州立図書館、Aug.Perg.229
(<https://digital.blb-karlsruhe.de/blbhs/content/thumbview/17187>)
172. カール大帝モノグラム
(https://en.wikipedia.org/wiki/Signum_manus#/media/File:Signum_manus_of_Charlemagne.svg)
173. カール大帝硬貨、ルートヴィヒ敬虔帝硬貨 (<https://ikmk.smb.museum/home>)
174. ザンクトガレン修道院附属図書館、Cod.Sang.196 (<https://www.e-codices.unifr.ch/en/csg/0196/2>)
175. トリニティ・カレッジ、Cod.Libr.B 16.3 (<https://mss-cat.trin.cam.ac.uk/Manuscript/B.16.3/UV>)
176. パリ、国立図書館、Ms.lat.2422 (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8490076p/f9.item.zoom#>)
177. パリ、国立図書館、Ms.lat.8085
(<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b6000032n/fl.planchecontact.r=latin%208085>)
178. パリ、国立図書館、Ms.lat.8318 (<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b84238395>)
179. ボニファティウスの形象詩、M.p.th.f.29 (<http://vb.uni-wuerzburg.de/ub/mpthf29/ueber.html>)
180. ポルフィリウスの形象詩第 2,3,6,8,14,26,27 詩 Squire, M. and Wienand, J., Morphogrammata / The lettered Art of Optatian: Figuring Cultural Transformations in the Age of Constantine, Paderborn, 2017.
181. ヨセフス・スコトゥスの形象詩第 1-3 詩 MGH, Bd.1, pp.153-159.
182. ルートヴィヒ敬虔帝のモノグラム (<https://www.deutsche-digitale-bibliothek.de/item/WKHV7QD3Q74NVWACHL6VCKSSSAKBQNLP>)